明治卅六年十一月十五日定期増刊(毎月一回五日發行)
明治三十年十二月廿五日第三種郵便物認可

女學世界定期増刊
第三巻第十五号

# 玉あられ

博文館發行




地方よりの御註文は御手紙にて
御申越被下候はゞ小包郵便にて
發送仕る可く候尚ほ註文御
案内書は御一報次第御送り
可申上候
一切の商品は店内一
面に陳列致し置候に
付き御立寄り御
縦覧被下候樣奉
希上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋二丁目

# 女學世界定期増刊 玉あられ目次

十一月十五日發行

# 大日本地誌

理學士山崎直方　理學士佐藤傳藏兩君共編

## 全部拾卷

●大日本地誌は産業部に於て農業工業商業鑛業林業水産の六部に分類して各地の特業を記述し更に鐵道汽船電信電話郵便道路等の交通機關は素より各地の名勝古蹟神社佛閣の精査は最新の材料に依れり

●大日本地誌は其卷册の浩瀚なる其敍述の愉快なる其製本の堅美なる其印刷の鮮明なる毫も間然する所なし殊に毎册著名都市の彩色地圖と名勝各地の寫眞銅版は斯業各名手に成り精巧紙上に光彩を放つ

●大日本地誌は全く在來の地誌と其目的方針を異にし地文人天の關係を說くや極めて詳密極めて明徹なり其體式は一に歐洲最新の地理書を斟酌し美麗なる精密地圖を挿入し本邦大地理書の一偉觀を呈す

●大日本地誌は各地方に於ける山系水系海灣港灣の形勢及び氣象の梗概を詳らかにし又た各地の史蹟を地理的に描寫して古今盛衰興亡の沿革を敍述せしめ其他行政司法の區劃關係及海陸軍事の狀勢を詳載せり

## 第壹卷　關東

正價貳圓五拾錢
小包送料六百匁

## 續刊

第貳卷　奧羽
第參卷　中部
第四卷　近畿
第五卷　北陸
第六卷　中國
第七卷　四國
第八卷　九州
第九卷　北海道
第拾卷　琉球臺灣

**裝幀**　脊皮金文字入極美本
紙數全部約七千餘頁

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

貴婦人小集（愛國婦人會名譽會員）



前列中央閑院宮御息所、右方鍋島侯夫人、千家男夫人、三輪田刀自

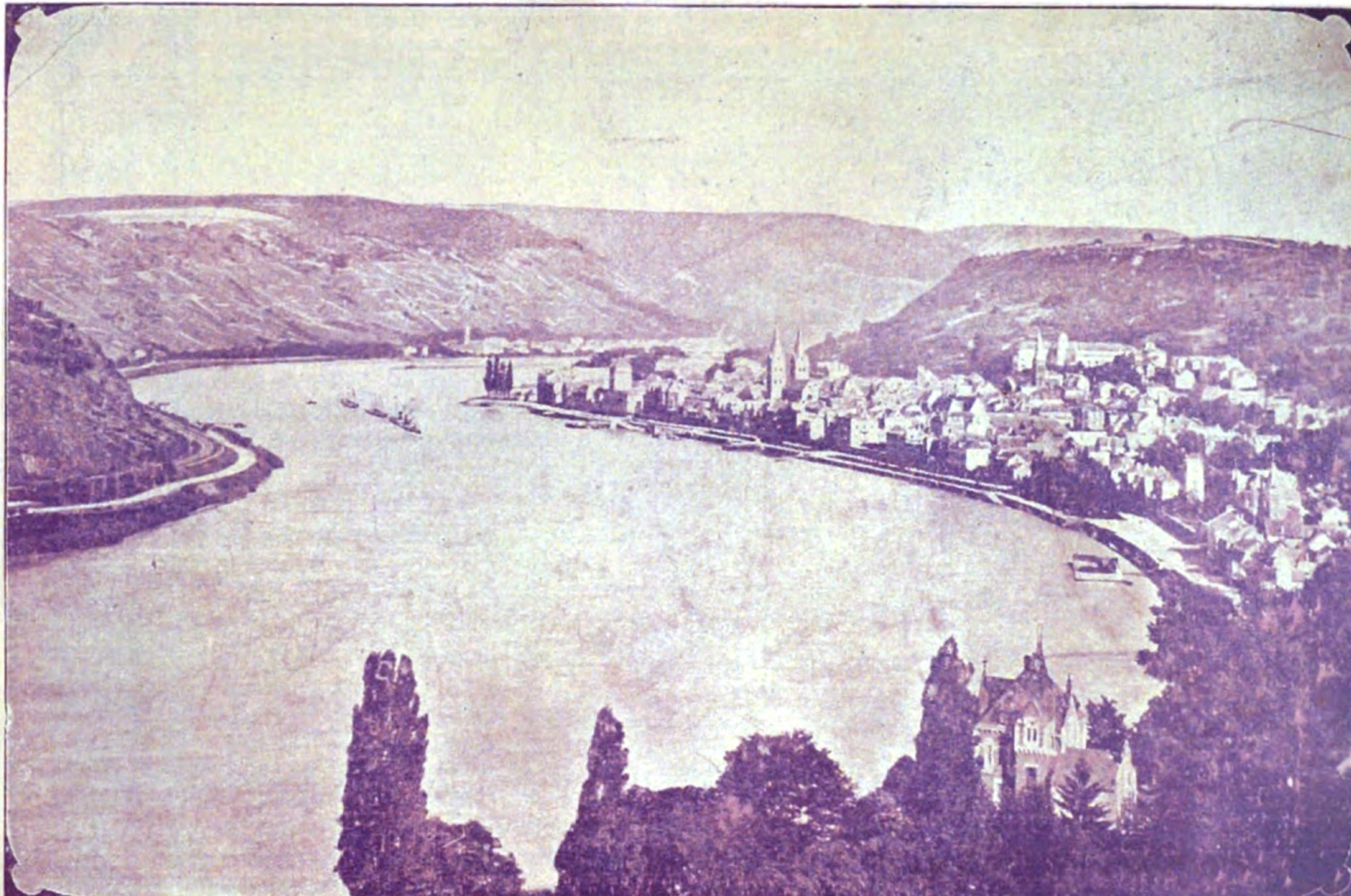
前列御息所左方毛利公母堂、山脇夫人、濱尾夫人



（大阪 小西榮一氏撮影）

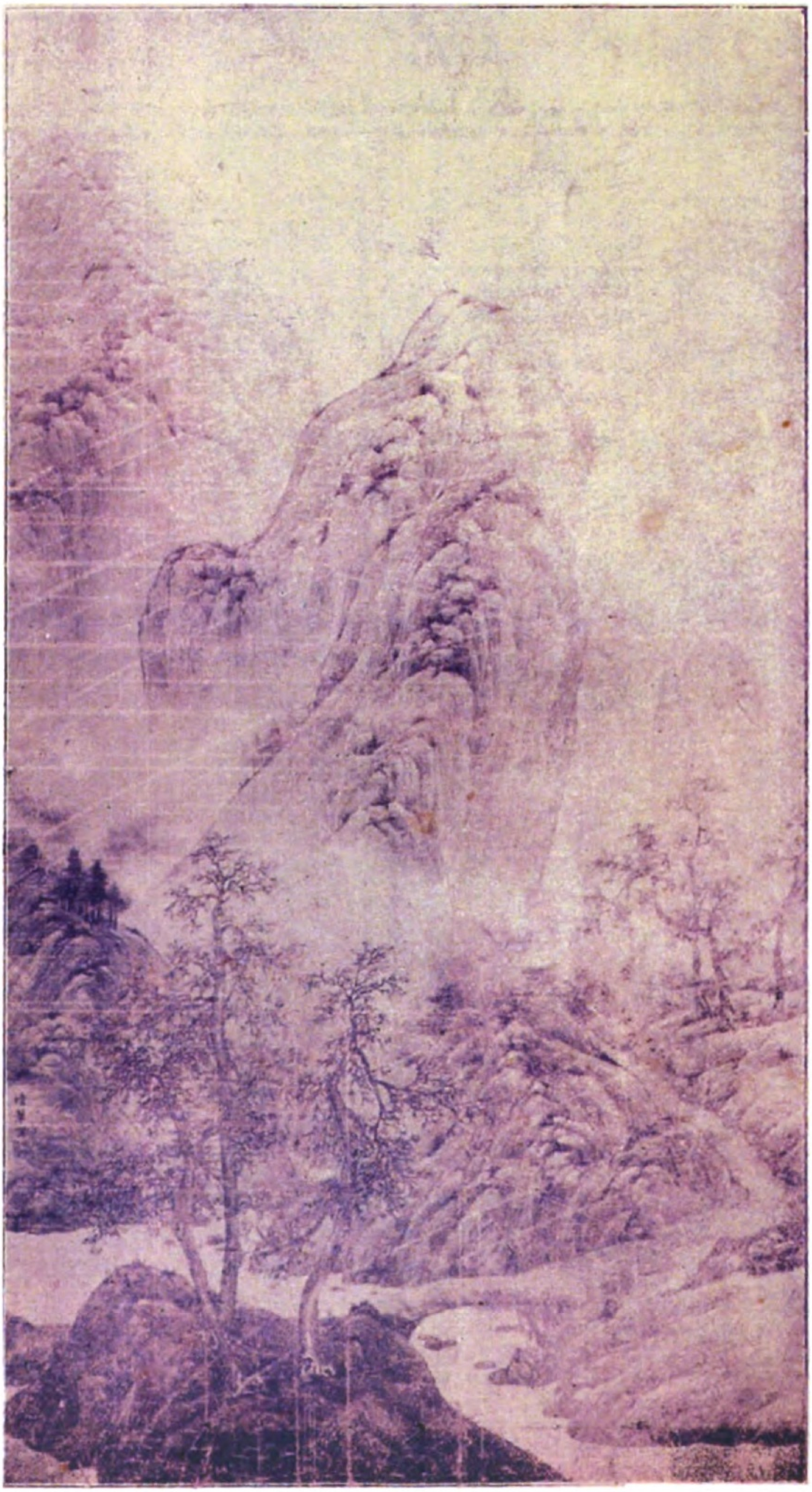
初冬の山村

# 歐洲風物



獨乙萊因河畔ボッパード市街

晚秋山水



奥原晴黎女史筆

（博進社工場印行）

最も高評ある
最も正確なる
最も便利なる
最も經驗ある

卅七年
博文館 當用日記
懷中日記

發賣廣告（各種共製本既成）

# 明治三十七年 當用日記

◉紙數 中形大形共各五百五拾餘頁 小形五百卅餘頁

大形 菊判 上製（舶來洋紙總クロース金字入）◉正價金五拾錢 郵税拾四錢

中形 四六判 特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）◉正價金五拾錢 郵税拾二錢

中形 四六判 上製（舶來洋紙總クロース金字入）◉正價金三拾五錢 郵税拾錢

小形 菊判半截 上製（舶來洋紙總クロース金字入）◉正價金三拾錢 郵税八錢

## 特色

用紙（何レモ海外製紙會社ヘ特ニ注文漉製セシ特別上等紙ヲ用ユ）

印刷（秀英舍新規鑄造セシ活字ヲ以テ注意印刷ス頗ル鮮明ナリ）

製本（弊館ガ特ニ歐洲ヨリ輸入セシ新機械ヲ以テ堅牢美麗ニ製本ス）

趣向（當用日記）日々欄ニハ過去同月日ノ重要歴史、七曜、支干等ヲ錄シ天氣、寒暖、受信、發信等ヲ記入スベキ欄ヲ設ケ、普通記入部ニハ細罫ヲ附シ秩序アル記錄タラシムルニ適セリ」附錄トシテハ紙數十二頁の補遺金錢出納

（甲の二）

# 明治三十七年 懷中日記

**新形**（卅七年創製）（船來洋紙頗美本總クロース金文字入細長形携帶至便）●正價金貳拾錢 郵税四錢

**上製**（船來洋紙頗美本總クロース金文字入紙數三百餘頁）●正價金拾八錢 郵税四錢

**並製**（船來洋紙總クロース表紙金文字入紙數三百餘頁）●正價金拾貳錢 郵税四錢

**體裁**

表、收支一覽表、友人住所錄、最新重要統計及日常必須ノ諸規則ヲ網羅セリ

（懷中日記）每月ノ初ニ當月ノ行事、食品月令、遊覽案內、陰曆氣節等ヲ揭ケ日々欄ニ過去同月日ノ歷史、七曜、支干、天氣、寒暖ヲ記スル等當用日記ノ如ク、卷末ニハ金錢出納錄アリ又日常有用ノ事項諸稅則及最新重要ノ統計表ヲ附セリ

弊館出版の懷中當用日記の正確堅牢にして實用に適するは玆に喋々の要なし今回用紙印刷體裁製本に至るまで尙一層の改善を加へ殊に本年創製の新形懷中日記はポケット挿入に至極便利にて附錄には重要規則類あり又名刺代用の切取線付の白紙あり、又當用日記は舊に倍して一層優美に裝釘し尙趣向の改良を加へて記入の便を計り小形外の四種には農學博士橫井時敬君の農家年中行事及中央氣象臺技師和田雄治君の調査に成る全國氣候一斑を揭け尙は最新の統計及座右必需の重要諸規則は漏らさず收めて網羅せり之を舊年の日記に比すれば材料愈よ豐富記事愈よ精確にして江湖坊間の日記と同視すべからざるや論なし請ふ續々御愛購あらんことを

◉賣捌所は全國各地（書籍雜誌店及紙類文具店等）到る處にあり

◉取次望みの方は種類部數等御申込次第精々御便利に御相談可仕候

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 **博文館**

釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平次

# 第五回內國勸業博覽會 名譽銀牌受領

其他內外博覽會金銀賞牌受領

## 最上醬油

萬

第五回內國勸業博覽會に於て名譽銀牌を受領したる本印醬油は夙に大方の御好評を辱し年一年御愛用を增し高需に相充て兼候處曩に釀造塲增築と共に石數增加し漸く出荷出來の運に立至り候間今回出荷の分に限り名譽受領の御披露旁三井呉服店にて製作せる**美術帛紗一枚樽毎**に相添へ進呈仕候間倍舊の御愛顧を以て便宜御最寄賣捌店へ御用命奉希候

東京 荷受問屋

京橋區富島町 中井半三郎
日本橋西河岸 國分勘兵衛
日本橋伊勢町 中條瀬兵衛
神田區松住町 增田商店
日本橋小網町 中野長兵衛
日本橋小網町 高梨仁三郎

神田區松住町 高崎長左衛門
日本橋小網町 高崎為藏
日本橋蠣殼町 升本喜三郎
京橋區南新堀 森六郎
京橋區新南堀 蜂須賀與平
日本橋小網町 岡田商店

（甲の四）

暮ゆく秋

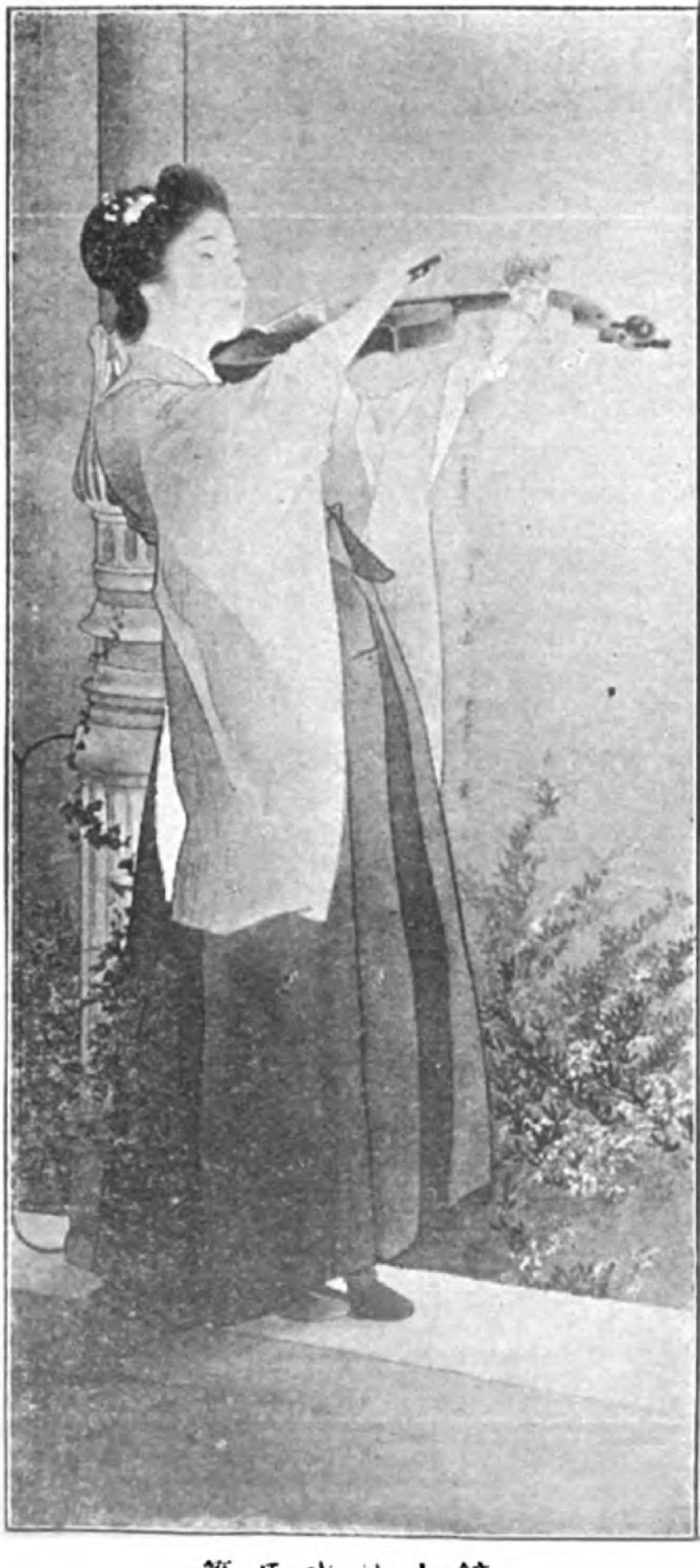


たま



石井天風氏筆

秋宵



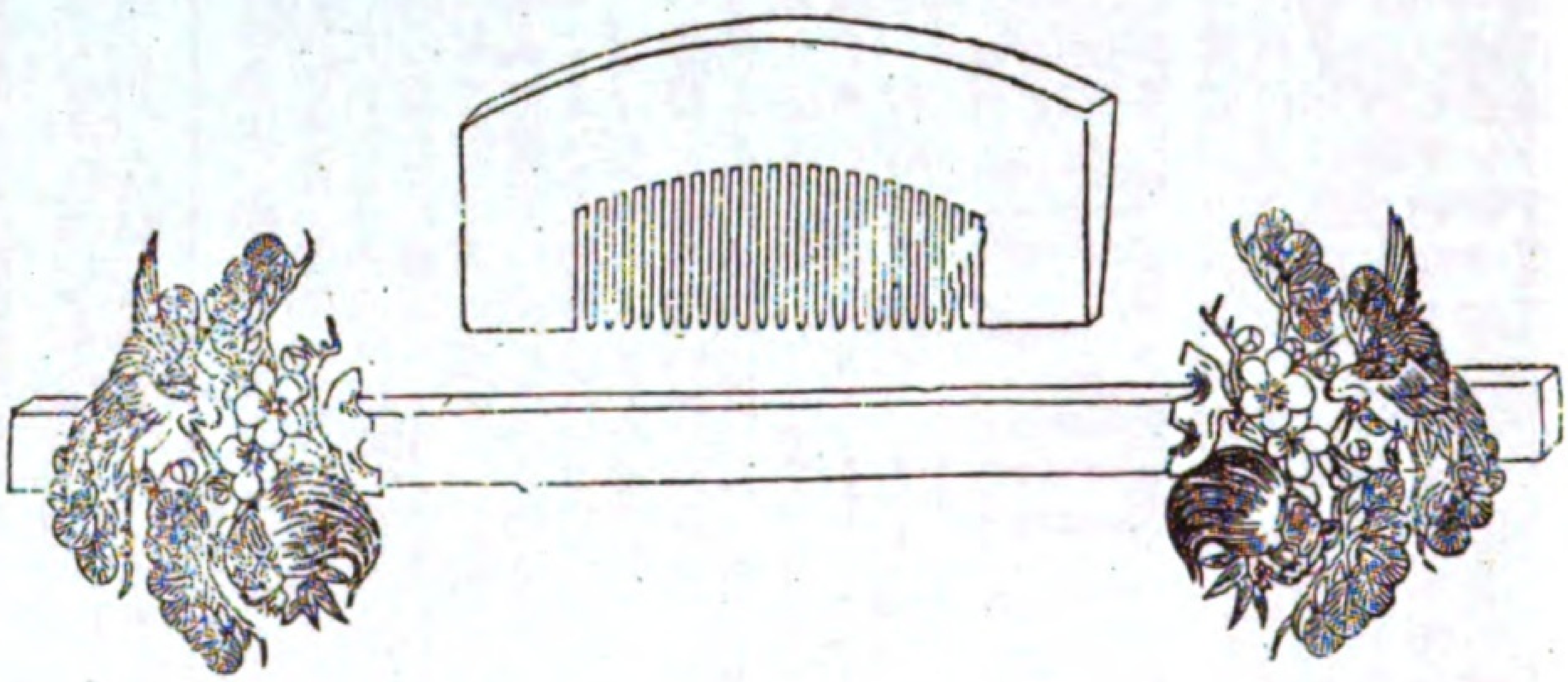
鏑木清方氏筆

たり穂



（京都 關嘉十郎氏撮影）

# 儀式用御櫛笄



上圖櫛笄の材料は鼈甲を以て随一となせど鼈甲の中にも品質の佳からざる物少からず此品は鼈甲中の最良質を精選して良き工の手に成りたる物なれば透明にして狂を生ぜず浮を出さず幾久しく御道具となるべき逸品なり

○本甲製　一組價
二十五圓　三十五圓
五十圓　七十五圓
一百圓　百五十圓
二百圓　二百五十圓

○甲張製　一組價
十圓　十二圓　十五圓
十八圓　廿圓　廿五圓
三十圓　三十五圓

# 寶石入指環




一號　ダイヤモンド一個入五十圓七十五圓一百圓百五十圓二百圓寶石の大成もの五百圓以上

二號　ダイヤモンドと眞珠入六十圓八十圓一百圓ルビーと眞珠入十五圓二十圓三十五圓以上

三號　ダイヤモンドとルビー二個入四十圓六十圓八十圓ルビーとサフハヤ入八圓十圓十五圓

四號　チパールと眞珠入り十二圓十五圓二十五圓或はチパール一個入八圓十圓十五圓二十圓

五號　サフハヤと眞珠或はトパースと眞珠三個入八圓十二圓十五圓廿五圓三十五圓まで各種

六號　ルビー或はサフハヤ一個入六圓八圓十二圓寶石の良質にして大なるもの五十圓一百圓


東京市京橋區尾張町
白牡丹本店
松田幸治郎
電話特新橋五百五十一番


(乙の一)

# 肺病

千葉縣安房國北條町

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券封入にて御照會あれ

川名助次郎

---

# 簡復寫インキ

器械不要

蒟蒻版寒天版及び其他の印刷又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに文書圖畫數十百枚を印刷し得べし本品はすでに諸官衙及び郡區町村役場等の御用品たり

●定價（ニオンス堅裝罐詰送料共）金四十錢

（郵券代用壹割増）

東京神田末廣町卅八

中村屋商店

---

# 治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵券三錢封入申込者に無代施本致すべし

東京下谷上根岸町百十一

（電話下谷二二五九番）

藥學得業士 金澤巖

---

渡邊産科婦人科醫院長 渡邊光次先生講述

# 衛生講話 婦人の友

一名設兒安産の秘訣

談話体裁總振假名付美本紙數三百三十頁正價金五十五錢郵税六錢

●本書は嘗て普通姙娠論を著して好評嘖々たる著者が多年の實驗に基き婦人の平生姙娠時出産時産後の養生育兒法並に出産取扱法等に就て懇切丁寧俗人に通じ易く講述せられしものにして苟も衛生を重んぜらるゝ家庭は勿論産婆看護婦諸姉は必ず一本を座右に備へ置かるゝ要あるべし希くは續々高覧の榮を賜らんことを

發行所 東京市本郷區龍岡町三十四 吐鳳堂

---

文學博士建部遯吾先生述 原田道寛君編（製本既成）

# 歐洲學生乃生活

全一冊

袖珍洋裝正價貳拾錢 郵便税四錢 郵券壹割増

本書は博士が嘗つて歐洲に遊び各國の學風を歷觀し其の見聞せる所を詳述論評したるものなれば讀者は親しく歐洲各國の學校に遊び且各國の青年學生と相談するの感あるべし

---

營綠蔭先生著

◉父母と子供 價三拾錢 郵税四錢

大内德亮先生編

◉旅行の友 實價拾六錢 郵税二錢

發兌元 東京小石川指ヶ谷町百卅三 （秀才文壇發行本局） 文光堂

賣捌東京堂、北隆館、東海堂、名古屋川瀨外全國書店

# 歐洲風物



伊太利ヴェニス府の景





明朝の舞姫（是は現今の婦人に明代の服を着用せしめたるものなり）



歐風室內裝飾(食堂の設備)

# 明治少年節用

發兌元 博文館

十一月中旬發兌
紙數七百頁內外
挿繪約數百個
總クロース美本
定價七十五錢郵稅拾貳錢

學習院長公爵 近衞篤麿君題字
帝國大學名譽教授文學博士男爵 加藤弘之君序文

巖谷小波君
武田櫻桃君
木村小舟君 共編

明治少年節用は出でたりこの書口繪には東宮全妃兩殿下をはじめ奉り兩皇孫殿下の御尊影をかゝげ我が各訂盟國々旗及び日本勳章の等級陸海軍服制等すべて精巧無比なる彩色石版を以て印刷したるもの内容にいたりては鼇頭にお伽噺二十四題、日本歷史、西洋歷史、日本立志談、西洋英雄傳、等を收めまた本文には教育勅語を始め、天文、地文、地理、物理、化學、動物、植物、鑛物、農業、工業、商業、体操、遊戲、數學、音樂、軍事、國文、漢文、英語、作歌、作文、俳句、內外事物起原、格言集、福引、考へ物、座敷手品、骨牌法、少年吟誦用詩歌、笑話、養魚法、昆虫採集法、救急療法、學校案內、旅行案內、郵便案內、遊學案內、皇室一覽、皇族一覽、皇統略圖、日本形勢要覽、萬國形勢要覽、和漢洋對照年表、年齡早見表あり日本少年座右の寶典とは即ちこの書の謂也

（丙の一）

発兌元

# 新案福引種本

石橋思案序　加野孤雁編

附録　一ト口噺

正價　拾五錢
郵稅　四錢

サア〳〵笑ふ門には福が來る、福引種本の新版がいよいよ來る十一月の中旬から出版になります。これは今まで世間にありふれたものとは事かはり、編者が苦心に苦心を重ねて、その材料を百人首やら發句やら、地理やら歴史やら、みんなお爲になるものばかりから取り集めましたので、どこまでも上品なのは申すまでもなく、天下此上なしに面白くつて、可笑くつて、そして附録のおまけに、珍無類軽口の短編落語が数十種添へてありますから讀んで罪がなく、買つて損のないこと受合、胸が開けてお座興になつてそして値段が安いといふ三拍子揃つた上、製本までがヅツと凝つた當世流行のハイカラ式、歳暮の配物や新年のお年玉には、それこそ持つてこいの珍本、品切れにならぬ内早く御買求めの程永當〳〵。隅から隅までづらりづらりづうと願ひあアげ奉りまアす!!! 評判!評判!

東京　博文館

(丙の二)

# 少年世界定期增刊

大町桂月君著
中川蘆舟君畫

# 日本少年傳

十一月十五日發行
定價金拾錢
郵稅壹錢五厘

大町桂月君獨特の快腕を振つて、茲に一篇の日本少年傳を著す君が麗筆に染め出されし十箇の英雄豪傑は少年諸君に向つて如何に勇壯活潑なる逸事を談ぜんとかする加ふるに武者畫の名手中川蘆舟君が健筆になる口繪八頁はよく本文の妙處を發揮して讀者をして血躍り肉振ふの慨あらしむ噫青燈の影親しむべき時此好書に接す讀め天下の少年諸君！　見よ日本少年傳！

**春若丸**

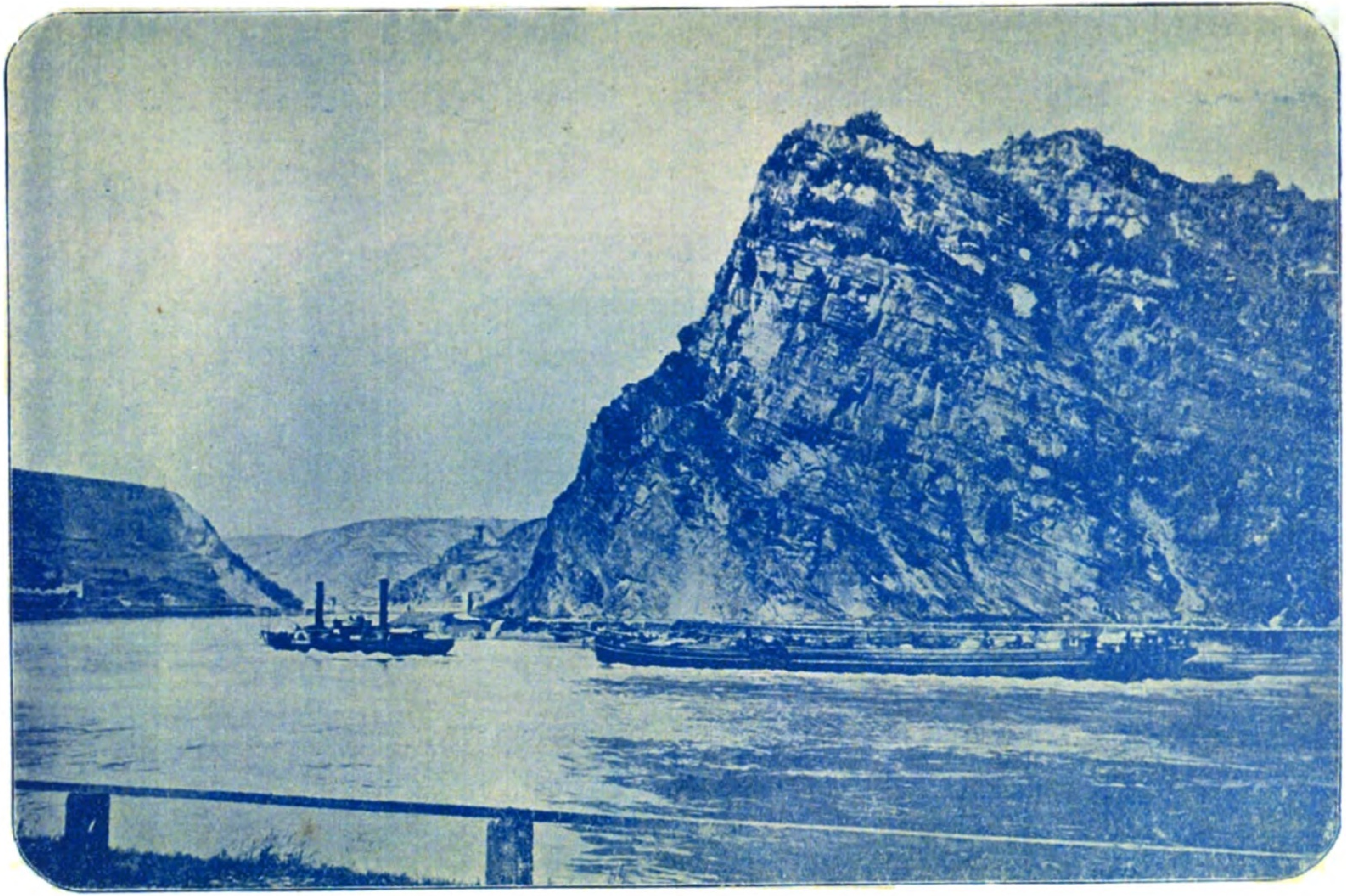
**海陸大王**

**暑中大探檢**

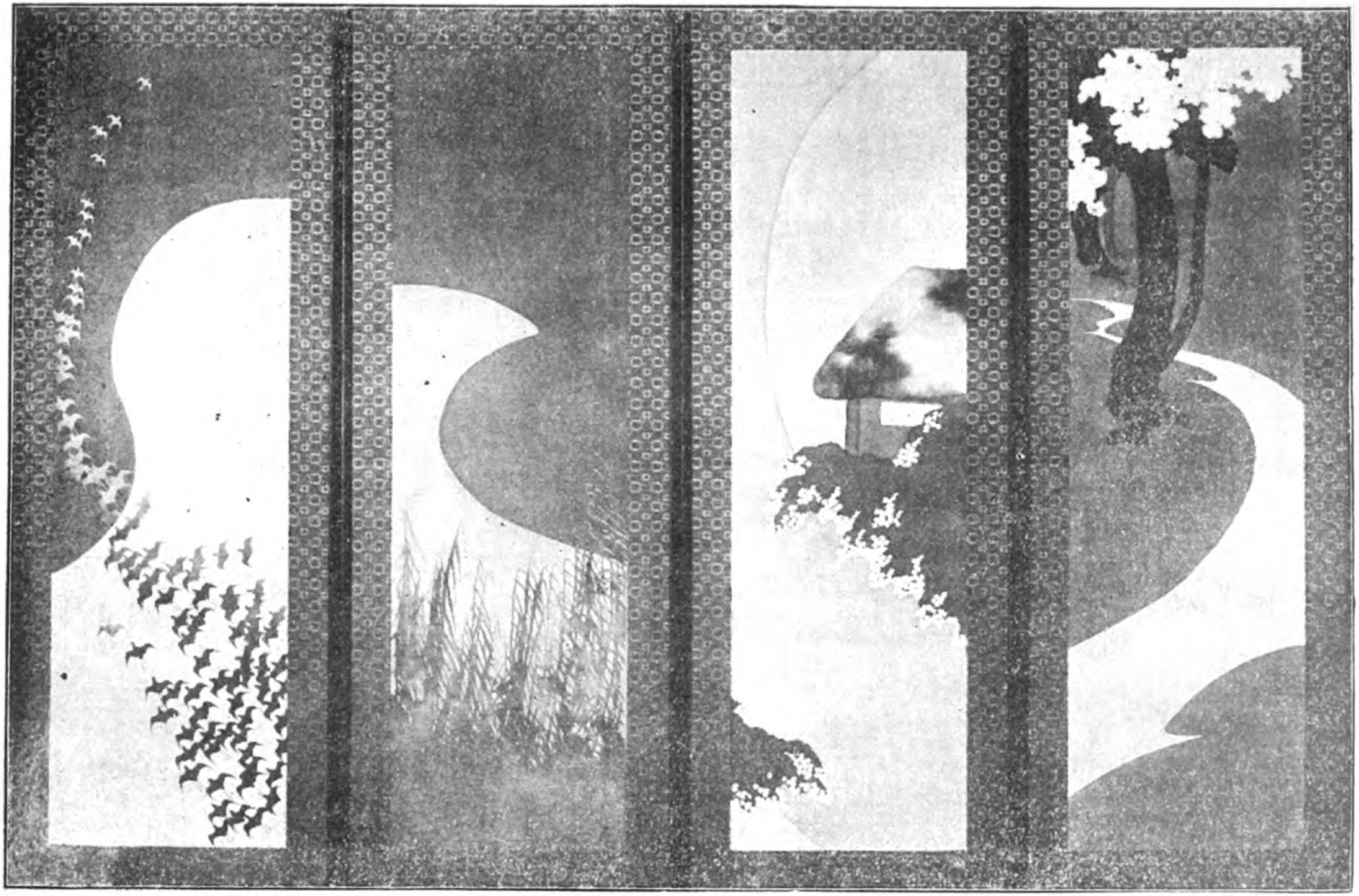
正價各冊拾錢郵稅壹錢五厘

東京日本橋 **博文館發行** 本町三丁目

(丙の三)



獨逸ラインン河畔ローレリイの巖



（京都　西村治兵衛氏製）

光琳式四季の屏風

(丁の二)

林吾一先生題字
中島義式先生著
(訂正再版)

# 新撰女子作法書

全壹册

木版彫刻圖畫五十餘圖挿入　正價金廿五錢　郵稅四錢

禮式を說きたる書極めて多し然れとも多くは舊式に泥み徒らに形式的のみ、本書の著者は東京府女子師範學校其他の數校に於て多年實地に教授せられたる教授案を高等女學校禮法教授要目に照し削正し各種心得を丁寧懇切に緻密なる挿畫もて說明を加へたるものなれば師範學校高等女學校、の禮法教科書として、はた家庭に於て作法を修めんとする婦女子の必用缺くからざるの要書なり

---

飼鳥大家川口清五郎翁著

# 實地活用 諸鳥飼養全書

定價未定

諸鳥實色石版色刷拾貳葉木版圖數個入

此書の特色は記事の正確にあり、書中片言隻語たりとも不確實なるなきは勿論著者は宮內省動物園に於てはた土耳古帝室內動物園に於て、多年之を擔任實驗せしものなれば、以て本書の價値を想知すべきなりされば書中挿入圖畫の如き、何れも實物の寫生彩色畫を用ひ、以てその正價を併行せしめたり、殊に附錄として鳥類の捕獵法をも添へたれば幸に本書を繙くものは、悉くの鳥類飼養法を知るのみならず春、秋野に之を捕獵する事をも修得せしむる、寔に斯道の良師たる有益の珍書たるべし。

小川文雄先生著(近刊)

# 新案圖解 玉突術

定價未定

木版彫刻圖畫九十餘圖挿入美製本

發兌元　東京日本橋區本町　博文館
發兌元　東京神田表神保町　東京堂

(丁の二)

女學世界定期增刊

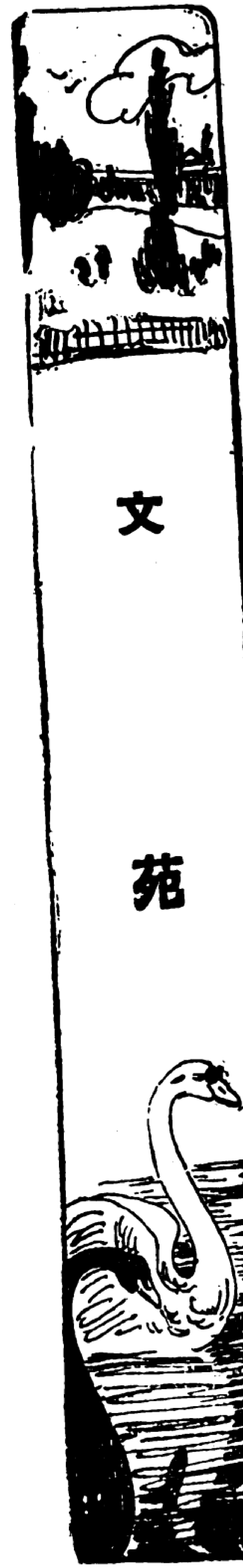
玉あられ

第參卷第拾五號

# 秋と自然美

太陽地平線上に沒せんとして彩光四射、以て雲を染め、水を染め、以て山を染め、海を染む、天造の大意匠、何人かよくこの萬一を摸擬し得るものぞ、晩秋、初冬の景物またこのごとし、綠葉紅を潮して千樹萬樹の梢頭錦繡を披き、天地一時に改造の恩を荷ふがごとし、何人かよくこれに對して陶然たらざるものあらん、陶然として醉ひ、醉ふて自然の懷に入る實はくは以て詩人たり得べし。

春の日は人をして懊惱せしむ、懊惱は以て麗詩を生む、秋の日は人をして蕭殺せしむ、蕭殺は以て哀歌を生む、秋は即ち哀歌の勢力範圍なるかな。




# 玉の説

内親王御用掛　小川直子

大凡世の人を見渡すに、珠玉を尊ばざる者萬人に一人もあらずとこそおもほゆれ、其尊ぶ心人皆同じといへども、是を用ふるにさま〴〵有て、大家高樓の床飾として稀人に誇り、あるはたをやめがかざしの玉とめづるもあり、はた指環にちりばめ襟飾ともしつゝ翫ぶ事大方ならず、其尊ばるゝ玉種々ありて數へがたし、色に紅白あり形に大小ありて、いづれもとり〴〵に見所多くうるはしければ、かれを劣れりともこれを勝れりとも定めがたかるべし、是を好める人も亦おのがひき〴〵我好む所の物を得て喜ぶなりけり、彼の吉田の法師こそ黄金は山に捨て玉は淵に投ぐべしとはいへれ、おのれも玉を愛づる性質ありて上なき寶とはすなり、されど偏に價の尊き物をのみ好むにあらず、只其色の眞白にして透き通りたる物を好めり、されば水晶の玉を購ひ求めて床の置物とし座右の銘に換ふ、其意は此玉よ如何にして斯く尊ばるゝものとはなりしかと考ふるに、始は氣疎き奥山のごゝ敷岩がねの中にひそみて、日の光をだにあふぐを得ず埋れてのみ年經しを、ひと度坑夫に掘出だされて世に出でしより、これぞ寶の玉なりといはれける、されど其時露計の光もなく形甚だ角多くて愛すべ



き物にもわらざりつるを、玉磨の手にみがゝれてかゝる光もいで來しなりけり、其磨れたりける理のさまを思ふに、玉磨の心のまに〳〵爰の角を切りたゝれ、かしこの限を削られて、荒々敷砥石にあてられ、朝に夕にすられ〳〵て漸々丸くなりもて來つるも、未だ曇りのあれはとて、今ひときはこまやかなる砥にかけてすらるる事、日數積り月重なりて、爰に始て輝き渡るうるはしき玉とはなりけるなり、あはれ此玉てふ物をつく〴〵見るにいとも〳〵まろらかなれば、見る目なつかしう目に障る所もなく、手にとるにはたなめらかなれば撫づるに心ちよし、まろばすに轉々止まる事もなく、物に障らで走りゆくさま人の命令に隨ひていそしむに似たり又は床の飾として居ゑ置けば重りかにして動きなく、輝きみちてしかもすが〳〵しう透き通りたり、さるからに玉は月の精なり柔和善順慈悲の本源なりと北畠准后も記し置き給へり、くすしからずや尊ふとからずや、されぱおのれも常にこれをめでゝ心を磨く鏡とし、心の底のすが〳〵しう此玉のごと潔からん事を願ひ、世の人に交るに慈悲の心を本として柔和善順角なく愛敬を旨とし、人の勤むべき道を得むものとこれをもて座右の銘とぞしたりける、あはれ我敎子達もおなじ心にこれを尊び、此玉のごと淸くなり給はむ事の願はしければいさゝか拙き言のはもて書しるしぬ。

# 國の華、月の花

玉あられ（四）

本田増次郎

**▲英吉利　薔薇（バラ）**　極昔しから薔薇は培養して裝飾に用ゐたもので、その美しさと芳香との爲めに花中の主位を占めて、通常「花の女王」（Queen of flowers）といふ名で分つて居た。古代の人は薔薇をキユピットとヴイーナス二神の花としたもので、歡びと愛と響慾の標號となつて居た。それから特に開かんとする蕾は無邪氣、純潔の意を表はす爲めに能く詩歌に謳はれたものである。凡そ西洋の詩歌の中に薔薇ほど屢々引合ひに出される花はあるまい。野生が五十種ほどあつて、人の養ふ分は一千種以上もある。

薔薇はずつと以前から英國の徽號と見なされたもので、ヴイクトリヤ女皇の治世の初めには、まだお年が若いので「英國の薔薇」（The Rose of England）といふ奇麗な名が付いて居た。それから又女皇の第一の姫宮が普魯西のフレデリツク公と結婚された時分には、此御かたにも「英國の薔薇」といふ名が付いた。

英國王家の爭ひに「薔薇の役」といふ長い戰爭があつたが、これは相爭ふたヨーク家とランカスター家とが白と赤との薔薇を家じるしとして居たからで、ヘンリー七世とヨーク家のエリザベスとの結婚によつて、兩家が和合した時から、赤い花瓣に白い線の這入つた一種の薔薇にヨーク、ランカスターばらといふ名が付いた。

大英國の紋章は薔薇（バラ）と薊（アザミ）と酢漿草（かたばみさう）と三種の花が一本の莖から生じたやうになつて居るが、これは英（イングランド）國、蘇（スコットランド）國、愛（アイルランド）國の三國が合併して一國となつた心を表はしたもので、三人の姉妹が此三種の花を手に持つて相擁して居る畫なども同じ意味である。

**▲蘇格蘭士　薊（アザミ）**　薊には色々種類があれど、どれでも構はず蘇人は之を尊敬する。其の由來は斯うである。一般の言傳へに據ると、深夜デイン人がスコツト人を攻めに來て、一人の間諜が薊を踏んで痛さに驚いて聲を揚げた。油斷して居たスコツト人が之に目を醒して急に敵を伐ち全勝を得た。それで成効を愛して蘇格蘭士薊といふ名をつけた。此花を蘇國の徽章とする事は、ウヰームス三世王の財產目錄に用ゐたのが一番古いが、これは王家の警語が「防禦」（In Defence）といふのであるから、薊（アザミ）が刺を以て自衞して居るのは丁度之に相當すると思ひついたのであらう。警語といふは當らぬ譯字かも知らぬが、英語の Motto のことで、歐羅巴の王族や貴人は家々の紋所があるのみならず、一家の警語といふものがあるそれの事である。

▲愛蘭士　酸醤草（カタバミ）　此酸醤草といふは一種に限るわけでなく、何んでも三葉草であれば愛蘭土の徽章になるのである。先づ苜蓿が一番能く愛蘭土の酸醤草に似て居るだらう。其の起源は、此國の守り本尊となつて居る聖パトリックといふ高僧が、三位一體の神を説明するに此三葉草を用ゐた事からで、此本尊の祭日には愛人は必ず酸醤草を飾るのである。

▲ウエールス　韮（ニラ）　此草は多分東洋産のものであらう、埃及で遠い昔のファラオの時代に作つたといふ事實があるから。ウエールス人が之を徽章に用ゐるに至つた起源は分らぬが、何んでも古代戰跡の紀念に着け始めたものらしい。矢張り此國の守り本尊聖ダビデの日には帽子を青い韮で飾る風習があつた。

▲佛蘭西　百合　庭の白百合が此徽章の根本であるか或は形も色も杜若（カキツバタ）の方に能く似て居るからそれから出たものか、學者間に異説があつて判然しない。佛人の祖先たるフランク人は、國王の即位式に王を楯の上に立たせて、手に笏を持たせないで花の開いた杜若を持たせる慣例があつたさうだ。太昔から佛蘭西國王の紋は青地に、金色の百合の花三つで、此三つといふは矢張り三位一體を形どつたものである。

▲獨逸　やぐるま菊　獨逸では之を「みかど花」（Kaiserblume）といふて自然生の可愛らしい花である。米國では此花を庭に作つて「獨身者の釦」といふ名をつけてある。青、白、淡紅など幾通りもあつて、有名な賢婦人普魯西のルイザ皇后が非常に寵愛されたので、皇后を紀念する心で今日までブランデンボルグ家が此花を最貴にさるゝのである。

▲北米合衆國　橄欖（カンラン）　水百合　おだまき、玉蜀黍など色々候補の花を擧げた所で、擧國一致で國華と認められて居るものはまだない。第一國華となるべきものは各州に多く産するものでなくてはならず、第二男女長幼都鄙雅俗みんな知つてるものでなくてはならず、第三他國民が既に用ゐたものではいかず、第四晝夜四季を通じて裝飾に用ゐられる花でなくては叶はず、第五純然たる米國産のもので米國人の歴史を表現し即ち勤倹、堅固、實用等に關聯して居なくてはならぬから、今日のところ以上五個の條件を備へたものがないのである。合衆國のやうな大國では隨分むづかしい注文であらう。

▲埃及　蓮　或は埃及の水百合ともいふが、水から幾尺も上に莖を出して咲く白い花である。亞弗利加北部の川々に澤山ある花で、詩人は能く「蓮の邑」うつたナイル河と形容する。蓮は埃及の薔薇とも謂ふべきもので、成る程正式に之を國華と定めたといふ證據はないが、兎も角深く此古代の國民に愛せられて、其の感化を色々の點から埃及の文化に及ぼした根跡がある。神話の中には蓮が神様となつて居る、象形文字の中にも蓮が這入つて居る、美術の作品にも能

く蜜が現はれて居る。又埃及の墓窟や圓柱に、白色青色の蓮を幾種類も彫刻してある。今日では日本見たやうに上手に此花を植ゐ作つて居る。

▲支那 茶 茶は支那の國產で、日本語のちや、英語のティー、佛蘭語のテーなど皆な支那語を輸入した名であるが、千五百年以上も支那に作り來つたもので、先づ支那の國華と見て好からうとは西洋人の說であるが、實際清國人に聞いて見たら多分異說があらうと思はれる。

▲印度 罌粟 古代の印度人は、罌粟を穀物收穫の神の花として尊んだもので、彼の阿片を採るのは白罌粟からばかりである。

▲波斯 鬱金香 此花は原と地中海東岸の產であつたが、三百五十年程前にコンスタンチノープルに移したのが初めで、それから盛んに歐洲全体に擴がつたのである。和蘭では十七世紀の鬱貴金が大流行で、今日でも盛んに行はれて居るが、和蘭ばかりでなく歐洲諸國に此花の持てはやされた事は、恰も我邦の萬年青の流行に能く似て居る。

▲希臘 橄欖 これは希臘人が智慧の神アセナの樹としたもので、極昔しから平和の徽號となつて居た。戰爭に負けて和を請ひに來る者は必ず手に橄欖の枝を携ねたもので、又橄欖の小枝で編んで造つた冠は、人民が國家に盡した最高の 功勞を表彰する至大の名譽、オリムピヤの競技の第一等賞品であつた。

▲伊太利 雛菊 西洋の騎士制度の時代には、此花を愛情の誓らぬしるしとしたもので。比武即ち武藝仕合のある時は武人も貴女も此花を能くかざして出たものである。伊太利で此花を國華と定めたは、教育あり愛嬌に富んで非常に人扱ひの 巧みであつた、マーガレット皇后が人民に深く敬愛崇拜された紀念かも知らぬ。此花の又の名をマーガレットともいふ。

▲西班牙 蜜柑 希臘人や羅馬人は蜜柑を知らなかつたらしいから、多分亞弗利加から後世歐洲に這入つたものであらう。全体蜜柑の花は形といひ香といひ上品なもので、今日でも歐米では婚禮の時此花を用ゐる風習がある。

▲秘露 向日葵 西班人が秘露を攻めた時何處へ行つても金が澤山あつたので、國中到る處にある金色の向日葵を見てこれも黃金かと謳ふたといふ話がある。かく西班牙人は此花に騙されながら、自分では此花を信仰のしるしに 用ゐたとは妙であるが、兎も角向日葵は秘露の國華といふて宜しい。又此花はマラリヤ熱の豫防になるといふので、低い濕地に之を植ゐる者もある。

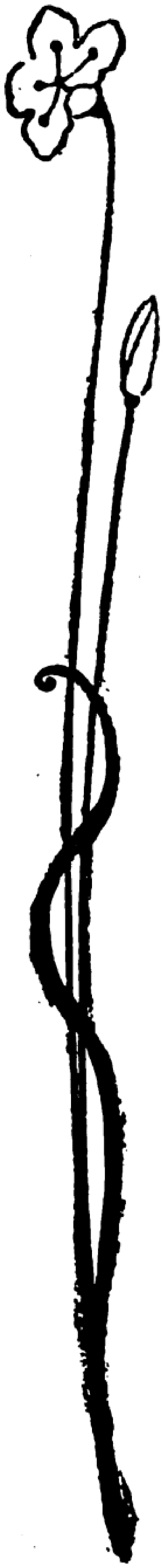
▲日本 櫻 日本の事は却つて外國人の觀察を聞くが面白いが、菊、水仙、紅葉、牡丹、藤、櫻などは日本といふ花園の名花で、梅、獅子花、蜜なども大に尊敬を受けて居るが、しかし國華といへば先づ櫻であらうと斯う評して 居る。學生の制服や制帽のボタン、巡査や軍隊の徽章、殿樹の意匠、ポートレースの裝飾模樣などに櫻の多く用ゐてあるのも能く外國人の 目に著くらしい。しかし櫻は日本國民の花で、皇室の花は菊である

と謂つて居る。

西洋には花語(はなことば)といふがあつて、種々の花を取合せて贈ればそれで此方の心を先方に傳へる事が出來るが、それ等は古昔の話として更に此月々の花と其の花の意味とを擧げやう、月の花は國の花と違つて先づ歐米共通と見て宜しからう。

〇一月　スノードロップといふ水仙の一種(節操、希望、純潔)
〇二月　蔵華花(さくらきう)(誠實、若年)
〇三月　菫(忠實、愛、謙遜)
〇四月　雛菊(無邪氣、忍耐、平和)
〇五月　ホーソーンといふ薔薇の一種(希望、幸福なる家庭生活)
〇六月　忍冬(節操、愛、闊俠)
〇七月　水百合(純潔なる心情、信仰)
〇八月　罌粟(慰籍)
〇九月　牽牛花(虚飾、靜安)
〇十月　唐花草(ホツプ)(希望)
〇十一月　菊(節操、愛)
〇十二月　狗骨木(ひらぎ)(家庭の幸福、先見)

これを日本の月々の花と對照して見ると多少の興味なきにしもあらずで、殊に西洋人がどんな花を好むか、花にどんな意味を付けてるかを研究するのも面白い事である。



# 風景談

玉あられ　（八）

大町桂月

## 一　不幸の民

折角自然の美、世界に秀絶せる日本に生れいでながら、芝居を看るの眼ありて、山水を看るの眼なく、衣服のよしあしは知れども、名所はとても知らず、女人堂てぼだれたるも、山にのぼらうともせず、船に乗れば、直に酔ひ、五里の路だに歩けず、自然界の美、一に男子の獨占に歸せしむる日本の女子は、世にも不幸の民なる哉。

## 二　日の出の美

海邊、もしくば高山の上にて、日の出か、日の入りを見たるものにあらずんば、造化の妙を語る能はざるべし、太陽の光が雲を射、水にうつりて、彩り出せる自然の大丹青、燦然たり、爛然たり、雲變動して止ざるにつれて、色彩も千變万化し、雄麗にして、瑰奇を極む。日本人は、たゞ月を賞するを知つて、日の出を賞するを知らず。憫むべき哉。

## 三　雲霧の美

雲霧ひくゝ地に粘して、乾坤を一幅の墨繪にするも、亦幽趣あり。霧の中に艪聲を聞いて、舟を見ず、霧、寺堂を罩めて、塔尖を露はすなど、いづれか詩趣あらざる。石見の國、三瓶山の高原のはづれ、志學温泉といふ處に、霧の海とて、朝霧の眺、いと面白し。霧、脚下に充ち、群峯をつゝみて、わづかに其峯尖をあらはすなほ群島の海上に漂ふが如し。大抵毎朝、この眺あり。これ江の川の水蒸氣凝りて現出せる光景也。

## 四　花木の美

濱邊ならば松原、敦賀の千本松原、丹後の天の橋立。祠の前ならば、杉の並木、日光九里の道中、すべて杉の並木也。吉野の櫻、月が瀬の梅は、言はずもがな。東京の附近にては、櫻は小金井、花の隧道を作る。梅は多摩川上流の吉野村、一村みな梅也。秋の野にては薄、一望すべて白茅、風に靡きて、月を招き出す。深山の紅葉、花よりも壯麗也。東京のちかくならば、碓氷、日光、鹽原を見て、はじめて紅葉の美を言ふべし。

## 五　海岸の美

海と並行して、白砂靑松の美觀を呈す。須磨明石の如きこれ也。

長洲海に突出す、筑前の海の中道、長さ三里、幅二三町乃至十町。伯耆の夜見が濱、幅半里内外長さ五里。丹後の天の橋立、幅數十間、長さ一里。之に對して、夜見が濱を大天橋と稱す。駿河の三穂の松原は、言ふに足らず。今の世の羽衣の松は、幾代目にか當るらむ、これも見るに足らず。

斷崖もしくは群巖、或は壯大に、或は奇怪に、直に海に接して、怒濤と相鬪ふ。東京に近き處にて、この觀の壯なるは、下總の大若岬、銚子より一里あまり、犬吠岬の近傍也。陸前の金華山、羽後の雄鹿半島、薩摩の坊の津、伊豫の佐田岬、土佐の龍串、紀伊の友の島、志摩の海岸、越後の親不知。臺灣の東海岸に、七千尺の斷崖直ちに海に臨める處あり。壯觀世界無双と稱せらる。

## 六　山上の眺望

だら〳〵垂る〻汗を拭ひもあへず、一歩一喘、岩根を踏み、羊腸の險をたどりて、漸く山頂に達して、脚下に千山万岳の朝するを見下したる時の心持は何にか譬へむ。日本の高山中、眼界の最もひろきは、越中の立山也。山高きが故に、必ずしも眺望よからず、一町ばかりの高さにても、眺望の非常によき處あり。志摩の日和山、出雲の島根半島の鷹尾山、羽後の雄鹿半島の寒風山、松島の宮戸島の大高森。東京附近にては、上總の鹿

野山也。東京より木更津まで蒸氣船あり。木更津より山頂まで四里餘り、人力車を通す。山頂に旅館あり。旅館の椽先より、東京灣をへだて、關八州の山野を見下す。後には、九十九谷とて上總安房間の山々谷々を見下す。關東第一の眺望也。

## 七　峠の茶屋

夏の熱き日、山坂をのぼりて、峠の茶屋に清水を飲みたる人にして、人間の涼味といふことを解すべし。又水の味を解すべし。

峠とは、山路の登りつくしたる處をいふ。山の頂とは、必ずしも同しからず。頂とは、山の最も高き處をいへど、人は成るべく越ゆるに樂な處をとて、低い處をねらうて路をつける故、峠は多く頂より低い處にあり。支那には、この意味をあらはす文字なし。峠とは、日本にて作りたる面白き字也。而して日本語の峠は、何といふ意味かといふに、手向といふ也。「たむけ」が音便にて「たうげ」となりたる也。「戀しく」が「戀しう」となり、「讀みて」が「讀うで」となるも、これに同じ。手向とは、神(佛)に幣帛などをさゝぐることにて、むかしは、山坂の登りつめたる處を通れば、幣帛とて、小さく切つた布帛をまき散して山の神にさゝげたるもの也。菅公の歌に、「この旅は幣帛も取り敢へず手向山、紅葉の錦神のまに〳〵」とあり。峠にて、神樣にまきちらすべき幣帛を忘れて來りしが、丁度幸ひ紅葉が散りて錦のきれ〳〵のやうに見ゆるから、これを幣帛ともおぼしめして受けられよとの意にて、一向下らぬ歌なれど、峠の意味はこれにてよくわかる也。即ち山路の登りつめたる處にて、山の神に幣帛をたむけし故、そこをたむけと云ひ、終に峠となりたる也。

何處にても峠の茶屋には、名物の力餅を賣るが常也。餅食ひて、力をつけるとの意味なるべし。名物にうまいものなしとは、實際の話なれど、山坂をのぼり來りて、誰も腹が非常に減つて居れば、力餅大に味あるを覺

ゆる也。われ曾て峠の茶屋といふ題にて、俗謠の出來そこなひみたやうな新體詩をつくりたるとあり、馬子などの心をよみたるつもり也。

今日も休もか、峠の茶屋で。茶屋にや冷い水が湧く●風が凉しい、娘がござる。娘十七、名はお花。にッと笑うて愛想を添へて、可愛や娘餅を賣る。

## 八　瀑布

瀧は熊野の那智の瀧八十四丈、信濃の米子の瀧九十丈、下野の日光の華嚴の瀧七十五丈、越中の立山の稱名瀧百丈、更に高くしては、飛彈の國、平瀨村、白山山中より落つる白水の瀧、長さ二百十六丈と稱せらる。實際十丈あれば看るに足る。三十丈以上あれば、まづ大瀑也。

水の活動の美をつくせるものを瀑となす。一落千丈 又万丈、滾々寫下するさまは、終日相對してあかず、夏みるに、最もよし。一たび爆に對すれば、人間、夏あるを知らず。朝日に映じて、虹霓を現ずるも奇也。崖畔の樹木、霜を帶びて、紅葉すれば、觀更に奇也。

瀑に懸崖を直下するものあり、日光の華嚴瀑の如し。斜に崖を傳ふものあり、日光の湯瀑の如し。二三段以上に折れたるものあり、立山の稱名瀧の如し。日光七十二瀑、華嚴ひとり傑出す。雄偉壯大の觀を縱にす。されど、たゞ高くして、幅は三四間に過ぎず。富士の西麓の白糸の瀑、高さはわづかに六丈なれど、幅は百八間と稱せらる。華嚴は高さを見るべくして雄大也。白糸は幅を見るべくして、纖麗也。關東附近にて、華嚴と白糸とを見たるものは、先づ以て瀑を語るに足るべし。

## 九　溪流

木曾の寢覺の床、陸中の五串、激して奇也。紀州の瀞八町、靜まりて奇也。まだ世間にはひろく知られされ

と、石見の断魚溪、底一枚の石、幅數十間、長さ五六町に亘り、平らかにして千疊敷となり、聳え起りて、駒の頭となり、甕が淵となり、水は藍を流して、川床よりも下を飛び、躍り、跳ね、走り、徐歩す。この奇観は寫眞には取れず。山陰の僻地にありて、往いて見る人すくなし。惜むべき哉。

### 十　急流

肥後の球磨川、駿河の富士川、羽後の最上川、日本の三急流と稱せらる。千里の江陵一日に還りて、水走り山飛ぶ、水の激するさま、岩のたてる様、奇怪を極む。舟にて下るに、恐しき心地すれど、痛快也。丹波の保津川、信濃、遠江の天龍川、信濃、美濃の木曾川、いづれも急流、舟にて下るべし。

### 十一　白帆の美

日本の川や海に、一種の美を添ふるものは、白帆也。品川灣頭、白帆充て、白鷗のむらがるに似たる、汽船の烟は、折角の美景を惡了す。水天彷彿の間、一帆天をつんざいて來れる、荒川、利根川など、平原の中に之の字の形をなし、川は桑麻の中に沒すれども、白帆一々川の來路を示せる美観なる哉。

### 十二　日本の高山

富士山第一、白山第二、立山第三と云ひたりしは、測量の不完全なりし時の事也。今や日本第一の高山は、臺灣の新高山、一萬四千尺。之より二千尺下りて富士山。更に二千尺ばかり下りて、甲斐の白峯、赤石、駒が嶽、信濃の御嶽、乘鞍、槍が嶽、常念、大天井、いづれも一萬尺以上也。一萬尺に少し足らぬものは、越中の立山、大蓮華山、甲斐の鳳凰、仙丈が嶽など也。信濃の八が嶽、立科山、淺間山、戸隠山、甲斐の金峯山、下野の日光山、越後の妙高山、加賀の白山など、八千尺以上あれば、まづ日本の高山と稱して可也。凡そ日本の高山は、甲斐信濃附近にあつまれり。東北地方の高山、岩手山、鳥海山、四國第一の高山たる伊豫の石槌山、

九州第一の高山たる肥後日向豐後の界の祖母山、山陰山陽第一の高山たる伯耆の大山など、いづれも七千尺内外以下也。

これらの高山の中にて、最も上りやすきは、富士山也。暴風雨を除けば、上るに何等の危險もなし。路も頂上に近き處が少し險しきのみにて、女でも、小兒でも、のぼれる山也。足の弱き女は、剛力（案内者）におぶしてもらつてものぼれる也。頂上に石室のやどや數十あり。登る路にも、二三十町毎に休宿にあつべき旅舍あれば、登るに不便を感せず。たゞ山上には、うまきものなし。空氣うすければ、飯もよく出來ず。食物は用意してゆくをよしとす。登路は、五つ六つあれど、東京よりゆくには、御殿場の停車場にて汽車を下りて、御殿場口より上るが便也。腦病、肺病、脚氣病などにかゝれる人は、のぼるべからず。かゝる病なくば、誰でも、たやすくのぼらるゝ也。山上に一宿して、その日の中に東京に歸ると容易なり。

## 十三　神社佛閣

夏は富士山、木曾の御嶽、加賀の白山、越中の立山、日光の男體山、羽前の月山、羽後の鳥海山など、白衣の道者、おほく列をなしてゆく。この爲めに、山もひらけたり、交通も便になれり。平地もしくは山といふも地の瘤に過ぎたる處にて、參詣者の多きは、伊勢の大廟、出雲の大社、讃岐の金平、京都の本願寺、甲州の身延山、三河の豐川稻荷、東京の淺草寺、成田の不動、武藏の御嶽、信州の善光寺、陸前の金華山。建築の美なるは、日光の東照宮、陸中の中尊寺。千年以上の寺あるは、奈良也。

すべて神社佛閣は、風景に一種の意味を加ふるもの也。その立派なるもよし。柱かたむき、屋根やぶれて、すたれたるに、無量の雅趣あり。古き大木は社寺になくてはならぬもの也。

## 十四　溫泉

九州にては、肥前の武雄、筑後の船小屋、豊後の別府、四國にては、伊豫の道後、山陰山陽にては、但馬の城崎、畿内にては、攝津の有馬、北陸にては、加賀の山中、山城、能登の和倉、關東附近にては、伊豆の熱海相摸の箱根、上野の伊香保、草津、磯部、下野の塩原、那須、東北地方にては、會津の東山、岩代の飯坂、陸前の青根、陸奥の淺蟲。温泉の種類は大凡そ五つ。曰く單純泉、箱根の湯本、堂が島などこれ也。曰く、塩類泉、塩原これなり。曰く、炭酸泉、磯部これなり。曰く、酸性泉、箱根の小涌谷これなり。曰く、硫黄泉、草津これ也。間歇泉とて、一日の中、時を定めて、湯を吹きいだすものあり。日本にては、熱海と、陸前の吹上との二箇處あり。熱海は東京に近ければ、その湯の噴出するさまを見し人すくなからざるべし。されど、吹上の方が、もつと壯觀也。吹上は、陸前の鬼首村にある諸温泉の一にて、路が不便也。弘法不動の二穴より噴出す。はじめ弘法穴より熱泉を噴出し、高さ一丈に達して噴きやみ、不動穴之に代りて噴き出し、高さ三四丈に及ぶ。此の如きこと、日に數度、響、殷雷の如く、壯觀にして奇觀也。

東京の近くにて、熱海、修善寺、伊香保、草津などは、効能あり。紳士のよくゆく箱根の湯本、塔の澤、宮の下などは、單純泉、もしくは塩類泉の極よわきものにて、殆んど温泉の効能なし。されど、立派なるは宮の下の温泉宿也。宿屋と云はむよりも、むしろ山中の宮殿といふべき也。

## 十五　岩石の奇

岩代の材木巖、越後の七釜、土佐の龍串、備中の豪溪、河内の岩船、上野榛名山の葛籠岩、越前濱坂の泥柱越中礪波郡の天柱石、など、いづれも岩の奇なるもの也。巖が橋の形をなせるもの、羽前の山寺の石橋、三河の河合の石橋、河内の久米の石橋、備後の帝釋の鬼橋などあり。門をなせるもの、上野の妙義山に多し。山全體が岩にして、奇妙怪異の形を呈出せるは、妙義山最も奇にして怪也。下野の庚申山、甲州の昇仙峡、豊前の

耶馬溪、讃岐小豆島の寒霞溪、就中、耶馬溪は本溪の外、五支溪を有して、區域最もひろし。

## 十六　洞窟

多摩川上流の日原の鐘乳洞をはじめとし、大にして深き洞窟少なからず。されど、たゞ奇にして怪なるのみ二三町も深く入りゆけば、美感よりも、むしろ一種いやな感じを生ず。たゞ伊豆の彌陀窟、但馬の玄武洞、出雲の加賀浦の潜戸、筑前芥屋の大門などの如きは、奇にして壯なり。自然美を愛するものは、一見せざるべからず。

## 十七　湖水

湖水の最も大なるは、琵琶湖。あとはずつと小さくなりて、出雲の宍道湖、遠江の濱名湖、常陸下總間の霞が浦、岩代の猪苗代湖など、可成、大なる方也。

山上にあるものは、とりわけて幽靜閑雅を極む。箱根の蘆の湖、富士北麓の山中、明見、川口、西、精進、本栖、四尾連の七湖（これに駿河の浮島が沼を合せて、富士八湖と稱す）日光の中禪寺湖、陸奥の十和田湖なとこれ也。立山に上りたるものにして、はじめて天地の大を知るべく、華嚴の如き大瀑、金華山の如き巨巖と大海と相闘ふ處を見て、はじめて天地の壯を知るべく、山上の湖に對して、はじめて天地の靜味を知るべし。一動、一靜、天地多樣なる哉。

## 十八　島

日本にて、島の最も多き處は、小にしては、陸前の松島、大にしては、四國と中國との間なる瀬戸内海なり瀬戸内海は、大なる松島也。松島は小なる瀬戸内海なり。松島には、塩釜にて汽車を下り、そこより小舟にてゆくべし。塩釜に塩釜神社あり。東北地方第一のやしろ也。こゝの安產の守札、天下に珍重せらる。その一枚

の價わづかに十錢、紙の價より云へば、貴けれど、それで安産が出來るものならば、やすいもの也。塩釜より松島に赴く間に、松を戴ける多くの島を見るを得べけれども、なほ舟をやとひて、宮戸島にいたり、そこにある大高森といふ尖りたる小山にのぼれば、松島の所謂八百八島を一目の下に見るを得べし。舟にのるがいやならば、松島停車場にて汽車を下り、そこより一里ゆけば、松島につくべし。途中、新富山にのぼれば、松島灣を見下すを得べし。

瀬戸内海は神戸より馬關まで汽船にのれば、見つくすを得べし。なほ鞆の津より眺め、小豆島の寒霞溪、嚴島の彌山にのぼりて眺むれば、まづ十分也。

瀬戸内海の口なる大鳴門、小鳴門に、潮のうづまく樣見れば、瀬戸内海に忠實なるものにして、かねて自然美に忠實なるもの也。

## 十九　日本三景

松島、天の橋立、嚴島を日本三景とするとは、誰が言ひはじめけむ、この三處、風景佳ならざるにあらねどこれのみを三景とは、餘りに他の勝地を馬鹿にしたるもの也。

就中、松島は、日本の風景のすぐれたるもの也。おだやかにして奇なる景色也。金華山も松島の一部と云はば云ふべし、金華山にのぼらば、壯にして怪なる景色をも並せ得て、東北第一の風景なり。

天の橋立に至りては、到底、松島の比にあらず。成相山の傘松より橋立を見下すよりも、出雲の鷹尾山にのぼりて、夜見が濱を見下したる景色が數等上にありて、これならば、松島とならぶことを得べし。山陰道中、風光の最も見るべきは、實にこの處也。尖れる頂上、四方、眼を遮ぎるものなし。後は日本海渺漫として、隱岐の島山、長鯨の如く横はり。前は、脚下に四五町の海峽をへだてゝ、夜見が濱五里の長洲のび來れり。長洲

の後方には、伯耆富士といはれて、中國第一の高山なる伯耆の大山、左右に裾野をひかへて聳立す。なほその左右には、中國山脈長くつゞきて、その盡くる處を知らず。夜見が濱の右には、周圍十五六里なる中の海あり、左には美穗の灣あり。天の橋立には、この半分の景色もなき也。

嚴島は、橋立の奇もなし。彌山の上の眺望は、成相山にまされど、鷹尾山には如かず、且つこのやうな處は、到る處にあり。どうして三景の中に數へられしかと、怪まるゝ也。

## 二十　裾野

富士山、伯耆の大山、石見の三瓶山、信濃の八ヶ嶽など、舊噴火山は、多く裾野をひかへたり。裾野の特長は、脚下には、平野村落を見下し、上には、尖れる山を見あぐるにあり。富士山は、西麓の裾野、尤もよし。即ち源頼朝が卷狩せし處也。

## 二十一　日本山水の標本

日本にて、山水の集美をあはせ得たる處は、日光なるべし。俗諺に、日光を見ざれば、結構をいふなかれといへり。これ東照宮の事也。即ち建築彫刻などの美をさしたる也。

日光の美は、ひとり建築のみに非ず。春の花こそなけれ、秋の紅葉の觀は、天下有數也。杉の並木は、東照祠畔にはじまりて、宇都宮まで九里の間相つらなれり。山は、男體、女貌、大眞子、小眞子、赤薙、太郎、白根など、數里にわたり、女貌の上には、劍が峯の奇にして險なる處あり。十八谷に跨れりといふ蔓延松あり。太郎山のうへには、異草奇卉錦をのべたるが如き御花畑あり。白根は突兀として骨立し、男體は巍然として中禪寺湖に俯す。高さは、いづれも八千尺以外、この諸峯をながめた處は、あまり格好よからず。たゞ中禪寺湖上より男體山をのぞめば、滿山樹木鬱蒼、形、富士山に似て、勾配急に、堂々として雄偉也。中禪寺より足

尾銅山に赴く峠の上より眺むれば、更によし。後に下野上野の諸山溪谷を見下して、前に男體山を仰ぐを以て男體山益々たかく見え、すぐれて見ゆる也。これらの諸山にはのぼらずとも、東照宮より湯本温泉まで六里、徒歩しても樂なり、肩輿にのりても、人力車にのりても行かる。この六里の路をゆけば、山水の變化多くして、つぶさに、その美をつくせり。東照祠前より、路は大谷川に沿ふ。含滿の淵、深澤のわたり、溪流の奇をきはむ。かねて岩石の奇もあり。山を少しのぼれば、華嚴の瀧あり。その上には、南北一里、東西三里の中禪寺湖あり。なほ進めば、瀑と湍との合ひの子ともいふべき龍頭瀧あり。さつと一里四方ばかりなる高原あり。戰場が原と稱す。華嚴についで大なる瀑、斜めにかゝる。これ湯瀑也。その上に湯の湖あり。四面山にとりかこまれて、幽邃この上もなし。湖畔に、人家十數軒相並ぶ。これ即ち湯本也。こゝまでに、原あり、溪流あり、山路あり、二つの湖水あり、三つの大瀑あり、太郎、男體、女貌諸山を仰ぐ。斷じてこれ日本中、山水の美をあつめつくせる處なりと云ふべき也。

## 二十二　海水浴

夏海水浴に赴きて、皮膚をかたくすれば、冬風邪をひかざるのみならず、すべて健康上大に益あり。その代りに、顔の色は少しはくろくなるべし。されば、婦人は、海水浴をいやがるものあれど、大なる麥藁帽子をかぶり、單衣のまゝにて海に入れば、知らぬ人が想像する如くには黑くならざるもの也。よしや少しくろくなりたりとも、二月ぐらゐたてば、またもとの色にかへるもの也。海邊の女に、くろんぼばかりもあらず、色白き美人もある也。更に一歩下りて、少し色が黑くなるとも、海風すゞしき處に暑をさけ、新鮮なる空氣を吸ひて肺を强壯にし、氣をはらし、體をよくする快樂と利益とには、かへらるべくもあらず。

東京に近き處の海水浴は、房州の北條館山あたりがよし。蒸氣船毎日數度東京の靈岸島より往復す。旅費廉

也、旅館も廉也、借す家も多くして廉也。海は遠淺にして毫も危險なく、波清く、景色もよし。われは大磯鎌倉わたりを取らず。

## 二十三　旅行

以上、日の出、雲霧、花木、穩かなる海岸、荒き海岸、山上の眺望、瀑布、溪流、急流、白帆、社寺、岩石、洞窟、湖水、島、高原など、山水の美、はゞ說きつくしぬ。われは世の紳士の旅行を好むやうにならむことを望む。紳士の單騎旅行のみならず、妻をつれ、子女をつれて旅行し、女子をもして、自然の美に接せしめむことを望む。旅行するに、先づ携へゆくべきは、滊車滊船の時間表也。每月庚寅社の發行にかゝる旅行案內がよし。次に携ふべきは、地圖。これは參謀本部輯製にかゝれる二十萬分一の地圖、一枚に二十里四方の土地あり。七八十枚あれば、日本全國の圖がまとまるべし。されど、これは一時に買ひ集むるを要せず。ゆく場所によりて、一二枚もしくは四五枚買へば間に合ふべし。次に携ふべきは、地誌。これは野崎左文の日本名勝地誌もしくは坪谷水哉の日本漫遊案內あれば十分也。以上の三者あれば、滊車の中にても、旅館にても、退屈することなかるべし。



▲都の友に▼

一雨毎に秋深うなりゆきて垣根にすだく虫の音も哀に細りて、そゞろ淋しき今日此頃、君には如何にか過し給へろ、思へば實に早きものに候よ彼の爛漫たる櫻花の下にあかぬ袂を分ちてより玆に六月、今や天高く氣清き此候、都の秋の光景如何に候や、噂に聞きにし團子阪の菊、隅田の月、まして學びの庭の敎草、定めし御樂しき事のみならんと御察し申候、此地山深き田舍の事とて暁れ行く秋のいとゞ淋しく、訪ふものとては松の嵐か、下行く水のそればかり、何彼につけて去年の秋のしのばれ候、されど此寂莫なる天地にも亦云ひしらぬ趣の候ひて、われら心なき身にも面白く感ぜられ候、眺なき庭には候へど、萩女郎花殊に此春送り給はりし彼コスモスピアリダスとか、美く咲き揃ひ村人の賞観一方ならず裏の山にに茸も生ひ出で栗も實り候、わけて見渡す限りの稲田は、たり穗豐に全村平和の光にみち／＼て候、實に田舍住の心安く候事よ、柿一籠庭前に實り候もの今朝の滊車して送り申候、折ふし御自愛あらん事を祈り上候。（靜波女）






# 婦人演說會評判記

二十三階堂

有志婦人大演說會は――月――日を以て帝國中央女學院第一講堂に於て開會せり、來會者無慮二千名、特に別席には某公爵夫人、某伯爵夫人、某々子爵夫人を始めとして歷々の貴婦人、並に外國公使夫人、令孃、日本觀光の某國女史等數十名の列席あり、これと相對せる來賓席には某々大臣、某政治家、某々會長を始めとして各婦人團体代表者、各女學校長、新聞記者、敎員、某々會員等數十名の列席あり、會は午後一時婦人音樂會寄贈の奏樂を以て簡單なる開會の式を行ひ、次で幹事の挨拶ありたり。

## 開會の辭

品のよき束髮に薔薇の挿頭、凜しき扮裝せる二八ばかりの少女は、滿堂破るゝばかりの喝采に迎へられつゝ、臆する色なく演壇に登りぬ。これぞ今日の幹事ならんとは、皆々一驚を喫せしなるべし、少女は徐ろに聽衆を見渡しつゝ、玲瓏たる音聲もて一と通り開會の趣意を述べたり。

紳士諸君並に淑女諸君、本日は此の雪天にも拘らずよくこそ御來會下されまして我々幹事一同甚だ滿足に

存じ上ます。豫て趣意書にも申し上ましたる通り本會は社交上、家事上その他一般我々婦人に關する事柄に就きまして諸君の御意見のある處を伺ひまして相互ひに別樣の思想を交換し、別樣の智識を廣め趣味を涵養するの目的であります、偖本日はその發會式でいろ〳〵と御演說をなされる方々も御座りますが、今後成可くは毎月一回づゝ此の會を開きまして、會員諸君は如何なる御地位、如何なる御職業、又如何なる御身分に拘らず、御意見のある方々は遠慮なくその演壇に御立下さたて、伏臟なく所見を御陳述わらん事を希望いたしまする、即ち本日豫定の演題並に辯士の氏名は掲示の通りでござりまする。猶又演說につきましては十分批評の餘地を遺したいと考へまするで御異論のある方々は其都度幹事へ御通告下さいまして遠慮なく御討論下さらん事を偏に希望いたしまする。

少女は臆する色なく、爽快なる辯舌もて會の旨趣を述べ了り、又喝采に送られつゝ徐かに壇を下れり、本日の演題と辯士の氏名は左の如し

第一席　婦人の新天地……………………萩原豐子
第二席　貴婦人とは何者ぞ………………葛城珠子
第三席　花嫁の資格………………………筑紫波江
第四席　割烹黑白の說……………………瑞穗稻子
第五席　下婢放逐論………………………霧島つゝじ
第六席　新婦懺悔談………………………淡海琵琶子
第七席　片輪娘の一生……………………玉津島子
第八席　演題未定…………………………松浦佐代子
第九席　演題未定…………………………筑波峯子

第十席　演題未定……………………和田津龍子
第十一席　演題未定…………………任那高麗子

## 婦人の新天地

二十世紀主筆　葦原豊子

辯士は年齢十八九歳、脊すらりとして面細く、明眸涼やかにして怜悧の相を顯はし雲霞の如き聽衆の喝采に迎へられて演壇に登るや嫣然一笑して塲内を見渡し、少しく面を斜めにして蝦茶袴の脇に右手をさし入れ、默思すること三十秒ばかり軈て向き直りて徐かに嬌舌を弄し始めぬ。

來會の紳士、並に淑女諸君。こゝに年少未熟の私が老成練達なる皆様方の面前に於きまして不束なる御話を致すことは甚だ以て恐縮且つ赤面の至りでござりまする。併しながら不肖なる私も今日我國の婦人に就ては大に感ずる點がありまするに依て、身分を顧みず、聊か茲に一言を申し上る次第でござりまする。皆さん、婦人の天地は廣漠たるものでござりまする。婦人の生涯は不朽でありまする。皆様我か日本の婦人はこれまでの如く決して四疊半に跼蹐すべきものではありません。又決して百年の苦樂を他人に寄すべきものではありません。皆様は婦人で獨立すべきものでありまする獨歩すべきものでありまする自主自營、苟しくも二十世紀の婦人たるものは、他人に寄らず、男子の手を借らず自から奮發して自から着眼し大に運命を開くの手段を取らねばなりません。御覽なさい。皆様の體内には恐れ多くも三韓を御征伐なされた神功皇后の御血脉が通うて居るではありませんか。皆様の精神には此の八大洲を開拓なされた天照大神の御魂が宿つて居るではござりませぬか。皆様はこのあらたかき太神の神魂を精神に受嗣ぎ、この英武なる太后の御血筋を體内に受嗣ぎながら、何を苦しんで身を墓なみ、何を苦しんで世を憂ひ、又何を苦しんで一

生を日蔭の境界に置かうとはなさるゝぞ。皆樣は太神の御魂を何處にお忘れ遊ばしたぞ。皆樣は太后の御形身を何樣遊ばしましたぞ。志だに御忘れなくば、皆樣は世界に向つて大なる功蹟を遺すことも出來まする。志だに御忘れなくば皆樣は千載の後に猶その生命を活かす事も出來るのであります。然るに何故あつて今の婦人は斯く女々しきぞ皆樣は曾て豐太閤や相撲太郎を生んだ日本婦人の一人ではありませぬか。皆樣はむかし親鸞上人、日蓮大士を生んだ日本婦人の一人ではありませぬか。皆樣は王政維新を造つた國の母親ではないか。十五萬の常備軍、二十八萬噸の船艦を造つた國の母親ではありませぬか。日本小なりと雖も皆樣の心一つで二六時中太陽の沒する時なき廣き版圖を世界に造る事も得られるのであります。然るに何故あつて當時の婦人は斯く女々しくありますか、泣くべからざるに泣き、笑ふべからざるに笑ひ、目前の事に悲しみ、目前の事に患ひ、涙の一滴よりも猶小さき眞珠の玉のかんざしが買へぬと言つては一生の不幸に陷りしほどの思ひに身を墓なむ方もある樣です、又鼻糞よりも猶價なきダイヤモンドの指環が得られぬと言つては、神や佛に見捨られたる如くに心を惱ます方もあるとやら、繻珍の帶の一筋、風通の小袖のお襲ね、その得失の如何によつて喜憂を異にし、哀樂を二つにするといふ樣な御方今は世間に少くないとの事、アゝその樣な小さなお志では、皆樣の將來は甚だ歎かわしい事と存じまする。皆樣は帶や着物が魂ですか、皆樣の魂が帶や着物でありますか、帶や着物に皆樣の魂を代へて仕舞はふと仰るのですか、帶や着物にどれほどの價があつて斯くまで御慕い遊ばすのか百圓ですか千圓ですか、さすればあなた方の値打は百圓か千圓なものでせうか。アゝ今の婦人が往々百圓や千圓でその精神もその肉體も併せて買はれる樣な場合があるのも無理ならぬ事でせう。嗚呼何と歎かわしい事ではありませんか。むかし〳〵そのむかし皆樣が我が國照らす太神より受嗣なされたその御魂はまあ如何なされた事でせうと私は不思議に堪へら

れません。申すも實以て心苦しい次第でありまする。皆樣は眼前塵の如き彼の金錢や財寶に心を奪われて一領の衣裳に百年の憂苦を定むるとはまア何事でせうか。それでは皆樣の身の價は僅かに一筋の帶、一襲ねの小袖に代へべきものですか。嗚呼頼み少ない事ではありませんか。かくても皆樣はむかしの人に愧づる處はないと思召すか、今後百年二百年の子孫の世に合はすべき顔があると思し召すか。アヽそれとも又私しの言ふ處を無理と思召す方がありますか。無理ならば無理と仰せらるべき御意見をゆるゝと承つて見たいのでござりまする。

男氣凜々、威風堂々、辯じ來り、辯じ去るその舌鋒、誠に雄壯活潑にして、眞に神將の妖魔を攘ふがごとし、殊に論旨の雄大、壯烈なる處、時に大河の決するが如く又怒濤の礁へるが如く、時に熱湯の迸ばしるが如く又天馬の空を行くが如く、聽衆をして思はず兩把の汗を握らしめたり。この妙齡婦人にして此の辯舌あり、眞に後世恐るべしなと傍聽席の一隅に賞讃の聲嘖々たりき。

## 貴婦人とは何者ぞ

社會新報記者　葛城珠子

辯士は年齡三十有餘、丈高く首長く、色白く　而して肉瘦せ、骨立ち、眼陷り、一見人をしてその風貌の奇異なるに驚かしむ、女史が聽衆の間に立ちて左顧右眄する時、記者は思はず慄然として恰も枯野に徘徊する狼を見るの思ひをなしたり。聽衆はこの奇怪なる女史の口頭より果して如何なる珍説の出づるかを疑ひ、多大の好奇心を以て迎へたるもの丶如し、果せる哉、女史は當時社交上の一大疑問たりし貴婦人の名望に就て、險怪詭譎の辯論を試みたり。

諸君、私は社會平等論者であります。貧富貴賤無差別の主義を抱くものであります。故に平等の敵たる

貴人は大嫌ひであります。斯く申せば感情に走つて道理を失ふた言であります。けれども平等の世界には貴賤の差別を許しません。されば同じ人間に向つて上流社會の人とか、貴婦人とか、令孃とか、お姫樣とか、種々なる尊稱をつけて一般の社會から區別する事を絶對的に排斥いたします、諸君どうでせう今日の社會の狀態は、同じ人間であるべきものを、少しく物質的に成功したといふだけで、直ぐに貴婦人などゝ自から尊稱を專領して人を見下すのは實に言語道斷沙汰の限りといはなければならぬ、諸君、諸君はよくその活眼を開いて世の眞相を御覽なさい、諸君が貴婦人と仰ぐ處の人々の中には、賣淫婦の如き心術の下劣なるものがありますぞ、否、賣淫婦その者の形を變じて貴婦人となつたものも澤山ありますぞ。諸君は斯る劣等なる婦人を社會の上流に置いて自ら其の下風に立つを甘ずるのでありますか。實に今日の社會は咄々怪事と言はなければなりません。——

劈頭第一此の露骨なる女史の言辭は特別席に對して甚だしく禮を失したるものにて心ある聽衆の多數はいづれも慚愧して面を赧め、演説の意味を解せざる無邪氣なる少女を除くの外、概ね皆頭を低れ、呼吸を凝らし、片唾を呑んで默聽し敢て仰ぎ見るものなかりしは流石に淑德ある婦人の態度なりし。而かも記者は女史が如何なる點まで斯る怪氣焔を逞ふして淑女の心を驚かしむるかと、手に汗を握つて聞き居たり。女史は更らに論緒を嗣ぎぬ、

諸君、品性の劣等なる婦人が社會の上流に跋扈してゐる事は諸君のよく知らるゝ通りで、今日殊更に私が惡辯を費やすまでもないから深くは申しませんが、一體こういふ風になつたのは世の中の批評が間違ふてゐるからぢやと私はおもいます。タトヘバ貴婦人といへば恰も人種の異つたものゝ樣に尊敬して貴婦人の組織した事は何でも蚊でも有益で、博愛で、慈善で、献身的なものであると信じてゐる是れが抑も大間違

の種である。それは彼等の地位が不斷細民を虐げて榮耀をし、下民を絞つて贅澤をしたその罪滅しに思ひ付いた位の事で決して世間で思ふてる様な慈善でも博愛でも、公益でも何でもないのである、又諸君は、不斷貴婦人社會の爲で居る事は何でも敎でも善い事の様に思ふてそれを萬事の標準にして一言一行を眞似たがる風がある、是れが又そも〳〵不都合千萬、心得違の種である。御覧なさい、彼等は財に飽かせて事をする、金錢を費して贅澤をする。それ故何でも思ふ存分な事は出來ます。併しながら其の地位に居らず、其の富のない者が、それを眞似たらばどうでせう。忽ちにして一身一家の破滅を招くではありませんか。やれ家庭の改良がどうであるの、やれ風俗の改良がどうであるの、甚だしきは衣食住を改良して生活を愉快にし、幸福を増進せしむるなどいふ事は屢々聞く處でありますが、それは彼等如き贅澤に飽き足つて居る人間が猶も慾を縱まゝにせんと欲して考へ企てた事で、一般の人民にそういふ生活上の餘裕のないのは知れた事でせう、若しも一般人民が彼等の平常の幾分を眞似やうとしたならば、大なる負債人になつて早晩高利貸から肉を削がれるか、又は法律上の犯罪人となつて獄窓に繋がれなければなりますまい。飛でもない改良沙汰に隨喜して衣食住の慾望を滿たしたが最後、五十年活きる壽命も三十年で命を斷たねばならぬ様な結果に陷るのです。それをも知らずして淺墓な人間は兎角貴婦人流に迷ひ込みます。眞似たがります、その結果を想像すると實に身の毛も立はとです、故に彼等の贅澤沙汰は實に一般人民の堅固なる意志を誘惑する處の惡魔であると言はねばならぬ。（場外よりヒヤ〳〵と言ふものあり）それ故に私は彼の大厦高樓森に聳ゆる處の巍然たる洋館、黒塗の馬車、鳥獸の毛を以て飾り立てた處の服裝、金の指環、珠の簪、三井白木屋の挑發的、刺激的、陳列塲。園遊會。珍味の會食。香芬の漲ぎり渡る庖厨、こんな物は皆淸淨無垢なる世の人々を犯罪に陷いれる處の惡魔の手であると私は憚りなく申します。（ヒヤ〳〵、ノウ〳〵の聲

會場の外にあり）

前回の演說に於て數々拍手し、數々喝釆し、笑聲湧き、讃辭起りたる傍聽席は、今回に至つて一同申し合せたる如く、一人の拍手するものなく、一人の褒貶するものなく場内恰も水を打ちたる如く、寂々默として滿堂の聽衆さながら木佛に化したるもの丶如し。

是れ何故ぞ。女史の論旨の高尚深遠にして普通人の耳に入らざるに因るか、或は平々凡々にして驕奢に何等の感想をも與へざるに因るか、否々、思ふに是れ女史の辯舌の頗る過激にして、臆病なる婦人の聽衆をして全く氣絶せしめたるによるものならん。聽衆は實にこの女史の爲めにその心魂を攫はれたるなり。殊に傍聽席の一隅にありたる記者は今日の演壇に斯く無遠慮なる演說を聞かさるべしとはほと〳〵思ひ懸けなく、女史か鋭どき舌鋒の焦點たりし特別席の氣合如何ならんかと、一言一句にも虎の尾を踏むごとき心地されて、脊に冷汗を搔きつ丶聽き居たり。されど列席の貴婦人は遉かに貴婦人たるの態度なりし。始終平然として更らに意に介する處なきもの丶如く、女史の辛烈なる演說に對して大象の脊に蠅の止りし程にも感せざりしかと思はしめたり。女史は猶大いに言はんと欲するもの丶如く、態度を改めて更らに聽衆に臨めり。

諸君、私は私の信ずる處を論ずるので少しも忌避は致しません。隨つて甚だ無遠慮です。けれども實際をいへばその通りです。齒に絹を衣せる事は私大嫌いです。婉曲の辭を弄するなどは心に弱味のある者の取る手段です。私は心に何の疚しい處もありませんから。婉曲の辭を弄する必要はありません。私は事實有の儘を飾りなく申します。それで諸君の腹に思ふてゐる處と、私の言ふ處と、其の間に何れ丈の相違があらうか。私は今沈默してゐる諸君の腹の中のメートルとなつて此の演說をして居る事と信じて居ります。

諸君、諸君は近頃新聞紙上に持て囃されて居る多くの貴婦人の生活といふ事を御覽になつたでせう。其の

生活談中に顯はれてゐる事柄を一々御吟味して御覧になりますか、どうか、私はあれを讀む度毎に實に一種の不愉快の感を起さぬ事はありません。言ふてある事はいつも極りきつてゐる。某々婦人は實に當時有數の賢婦人である。仁愛に富んだ方である。公共心のある方である。規則的の生活を實行して居られる。西洋風である。雇人の待遇を御注意である、小兒の教育に力を盡されてある。美術思想に富んでをられる。家事の整理が行屆てゐる。其外萬事に就て悉く賞讃の辭を以て飾られてあるのです。殊に私が不愉快に感じましたのは婦人の私德に就て口を極めて賞讃した事柄です。某々貴婦人は經濟思想に富まれて絹布の着物を不斷に着用されない。お好な料理も高價な品は毎日召上らない。避暑避寒にも度々は行かれない。某々婦人は實に今の世の婦人の摸範である。天下の女子たるものはよろしく此の貴婦人の爪の垢でも煎じて呑むがよろしい。とまづかやうな記事です。私はこれを讀んでグッと癪に障りました。マア考へて御覧なさい、世間は不景氣の頂上で、職業を求むる貧書生や、志ある人々が、一行幾何の廣告料を拂つて紹介を賴むその貴重な紙面に無代價で以て二頁も三頁も貴婦人の廣告をしてゐる、諸君新聞紙の亂暴な事、不見識な事はこの通りです。併し新聞の不見識は不見識とした處ろで、こんな記事を讀んで嬉しがつてゐる天下の讀者の氣が知れません。一體その貴婦人といふのは何物です、私が申すまでもなく尋常の人間ではありませんか、人間が朝起きて晩に寢るのは當然の事ではないか、三度の食事を規則正しく食ふからとて、それに何の不思議がありませう。小供の養育、來客の取扱ひ、そんな事は裏店のお神さんも心得てゐる事です。賢明、賢明と大變に持ちあげたものですが、何處が賢明だか私には薩張り分りません。家事を整へるのが賢明か。ヘン憚りながら貧乏世帯を張り通してやつて來たものゝ眞似は彼等に出來ますまい。西洋料理を扣へたからとて何が不思議です、私共は生れて以來まだそんなものゝ匂も嗅いだ事はありま

せんぞ。けれども世間では私共の事は何とも言つて呉れ手はない。又絹布の夜具を不斷に着ないからとてそれがどれ程珍らしいのです私共は毎晩繼だらぼうしの布團にくるまつて寢てゐます、けれども誰すら感心な御婦人樣だとて褒めて呉れ手は一人もない、財產があつて、身分があつて暇があれば人間どんな眞似でも出來やうぢやありませんか。やれ家事の整理がうまいの、子供の躾がよいのと言つた處ろが、これは論になりません。元々腰元から仲働き小間使、お針、飯炊まで加へて五人七人の奉公人を使つて居てそれで家が治まらなければ餘程何かしてるのでせう。夫を又御大層らしく讃め立るとは何たる了簡違な記者でせう。夫よりはお隣の張三の細君や、お向ふの李四のお神さんの方が遙かに賢婦人の資格があると私は思ひます、安い月給で人手も借らず子供の五人も育てゝ行くには並大抵な働らきでは出來ませんぞ。御亭主がいくぢなしでお神さんが內職をして家の活計を立てゝ行つても年寄や小供に垢のついた物は着せません。そんな方こそ正札付の賢婦良妻で。世の中の婦人の手本にもなるべきものだらうと思ひます。爪の垢を煎じて呑めとは眞實にこんな人達の事を褒めたものでせう。それを記者先生はどう間違へたものかダイヤモンドの三つも箝めた白魚手したものや、朝夕奉公人を顋で使つて不斷絹布にくるまつてゐるやうな人ばかりを持ちあげて、やれ貴婦人、それ賢婦人と囃し立てるとは、一體全體了簡の程がわからない。笑止千萬。片腹痛いとはこんな事をいふのでせう。まづ私の思ふ處ろを遠慮なく申して見れば。今の貴婦人に對して取るべき態度はまづかうですが。諸君は一體どう御思ひですか、御意見のある處ろを腹臟なくうかゞひ度いものです。私の此の卒直なる無禮の言に對して必らずこの御席から一場の御反駁あるべき事と信じまする。

演じ終つて女史は壇を下れり。痛快淋漓と言はんよりは寧ろ毒舌漫罵を逞うしたるものといふべし。其の言に

同情少なかりしを以て天晴れの好問題も徒らに聽衆が苦笑の種となりて。千言萬語終に人をして信服し能はざらしめたるは遺憾至極なりと記者は思ひぬ。果せるかな。女史が演壇を下ると均しく、傍聽席の一隅より數名の婦人起立して大聲幹事を呼べり幹事來る、席はやゝ動搖し始めたり。起立せし婦人は何事か幹事に向つて請求する處あるものゝ如く。双方の間に暫時交渉ありて後、軈て一個の婦人、聽衆の中より身を起し。靜かに歩を運ばせて演壇に進めり。是れ何人。將たその辯ずる處ろは又何等の好題目ぞ。動搖せる傍聽席は稍く靜まりて、聽衆の眼は一齊にこの新辯客の上に注げり。

## 貴婦人の地位と名望

協和會顧問　伊勢濱荻

辯士年齡三十五六。溫和の容貌謙遜の態度。面姿美ならずと雖も愛嬌に富み、擧止閑雅にして自から高尚の品采を備へ、聽衆を見て嫣然一笑、未だ口を開かざるに早く既に場内春風の駘蕩たるを感ぜしめたり。即ち彼れよく前回の風雨を收めてこゝに日光の雲霧を開きたるがごとし。

御列席の方々、私は本日の演壇に罷り出づべき約束ではござりません唯今能辯なる葛城珠子女史から、御發明なる御演説を拜聽いたしまして、一方ならずよい學問を致しました。それにつきまして聊か手前共の存じ寄もございまするので、先刻幹事の方に願ひまして今日の席順を變更して頂きまして茲に暫らくの御耳を拜借いたす事に相成りました。元より未熟ものゝ事ゆえ、言葉に申し誤りもございましたらば幾重にも御用捨を願ひませう。扨先刻の御議論、一應は有理に感じました。併しながら。辯士はまだ楯の一面しか御覽にならない御方と失禮ながら存じまする。勿論論旨につきまして一々御反駁を申し上る事は出來兼まするが。唯前辯士が尤も痛切に論ぜられました一節、即ち張三李四のお神さんと貴婦人との比例に就き

まして一應の存じ寄を申し上げて御列席の御批評を乞ふつもりでござりまする。(謹聽) 成程前辯士の仰せられました通り、張三李四のお神さんと今日の貴婦人と比較して人類學上の價値には大なる差はありますまい。(聽衆大笑) いや事によれば李四張三の細君の方が寧ろ健康體であつて一個人の働らきは遙かに貴婦人の上にあるかも知れません、併しながら此の世の中には地位、身分といふ事のある事をよく御承知下さい。地位には富貴の地位、名譽の地位、榮爵の地位、いろ〳〵ありまする。譬へ人爵にまれ、天爵にまれ、又自力にまれ、他力にまれ、兎に角、地位名望といふものがあつて、水平以上に置かれて居るのでありまする。既にその地位あるとすれば萬人の眼はその地位に向つて注ぐべきものなる事は前辯士も十二分に御承知の事と信じまする。そこで貴婦人その人が、前世の果報拙からで、此の世の時めく御自分とならせられては天下萬人の眼は必らすその御身分の上に集注するのは自然の勢でござりまする。皆様、御覽なさい高山の頂は何處からでもよく見へるではありませんか。又高い樹木は常に暴い風を受けまする。貴婦人も丁度さういふ樣なものでござりまする。私はこゝで多言をして論旨の要領を沒する事を恐れまするから極めて簡單に申しまするが、私の信ずる處によりますればまづ張三李四のお神さんと貴婦人とは社交上に於て相體的の相違ある事と考へまする、爰に其の相違する處ろの一例を申して見ませう。

アノ近頃では社會改良やら、風俗改良やら、樣々と私人の行儀について理窟をいふ世の中となつて參りましたが、若し此の際歴々の貴婦人が避暑にでも參りまする節、上等汽車の中で、暑いからとて肌をぬいで團扇でもお使ひ遊ばしたと假定めませう。世人はこれを見て何と評しませうか。それこそ天變地異も物數ならず、翌日の新聞には屹度太い見出で澤山の記事が麗々と、出るでせう然かもオマケに色が黑いの、白いの、乳首が大きいの小いのと散々な事が出るのは請合です。若しこれが張三李四のお神さんであつて

御覧、世間の人はこれを當然の事として一向齒牙にかけぬではありませんか。同じ人間に生れて來て、一方は貴婦人といふ丈で新聞に惡口され、一方は何にも言はれなくて濟みまする。皆樣是れは事實の極めて解り易い一例でござりまするが。貴婦人と普通の婦人と社會上に地位を異にしてゐる事は是れでその一斑が解るのでありませんか。(聽衆一齊喝采す)

譬喩飴の如し、前提既に此の佳鑑あり。以てこの難題を說破す。未だ本論に入らず既にまづ聽衆の疑惑を解き了んぬ。

それ故、若し貴婦人にして不器量であつたらば世人は何と申しませう。あの方は御身分に似合はぬ事だと笑はれなくてはならぬ。若しこれが張三李四のお神であつたとすればどうでせう。マサカ世間の人がそのお神さんに向つておまへは不器量ぢやと側から御世話を燒くものもありますまい。同じ人間でありながら、一方は無器量を笑はれ一方は笑はれずに濟みます。貴婦人の方から申せば、タトヱどんなに不器量であらうと、鼻が缺けてゐやうと眼がつぶれて居やうと大きに御世話と申すべきだが、世間ではそれを許さないのでありまする。智識學問の有無を別にしても唯外面に顯はれた丈で既に世人の問題とならねばなりませぬ。(謹聽々々)

唯一點の行儀作法唯一の容貌だけで既に問題を引き起しまする、況んや學問智識が足りないとなり、身の素性がふつゝかとなり。言葉遣がお粗末となり。身たしなみが惡いとなり、何につけ、彼につけ、一擧一動について緣もゆかりもない他人からいろ〳〵の批評を蒙らねばならぬ、何とこの位割に合はぬものはありますまい。(聽衆喝采)

諸君、張三李四のお神さんは湯もじ一つで井戶端へ出ても傍の者は何とも申しません、けれども貴婦人は

大口開いて笑ふ事すら愼まなければならぬ。貴婦人たるもの又難い哉と私は申しまする。

それから一家の責任といふ點から少し申しませう。貴婦人も經濟を亂暴にすれば家が忽ち破滅しまする身代を棒にふれば、あの財産をどうしたかと預けたものを無したやうに人に言はれる。閨中不取締なれば無論新聞に謠はれる。子供に愚物が出來れば、いよ〳〵以て萬人の物笑ひとなりまする。萬一家に騷動が起れば號外までも發せられて世の中を擾がします。兎角は針ほどの事を棒ほどに見られて。一家一門さながら世の中の顯微鏡の下に置かれてゐるやうな心持がするでせう。然るにこれを張三李四の身の上に致しますると。家計の不如意は有内の事と却て世人の同情が深くなる。閨中の不取締、これも何かの事情があらう。子供の無教育。これも强ち咎むべきものではないと萬事大目に見られるのはどうしたものでせう。同じ人間に生れて、同じ社會に生き同等の罪を犯しながら一方は究屈至極な法律に問はれ一方は無罪放免とは世上の裁判甚だ以て不公平ではありませんか。私はこの點からして今の貴婦人に頗る同情を致すのであります。

對照絶妙、論理明晰、巾幗婦人にして此の如き世事に通曉す。辯士はそも何人の令夫人にして將た如何なる敎育を受けたる人なるか、記者不敏にしてその閱歷を詳かにせずと雖も、思ふに是れ尋常一樣の凡婦にあらずして。平素何等かの硏磋を積みし底の人なるべしと。

斯樣に申しあぐれば聰明なる皆樣の御批評眼も自然定まる事と信じまする。そこで私の論據は、若し貴婦人が、惡事に就て世の中から針小の事を棒大に攻擊さるゝ義務があるとすれば、善事に就ても又針小の事を棒大に稱贊さるゝ權利があるものとせねばなるまい。

女史の演說爰に至つて拍手喝采、一齊に湧くがごとく。論に波瀾あり重疊、頽れんとして而かも頽れず、擒縱

活殺よく其の體を得たりといふべし。

これでもう私しの申す事は澤山だらうと存じまする。成程前辯士の御議論にも一と理窟ないでもありませんが、お說の通りに致しまするとヽ貴婦人たるものはいくら善い事をしても褒められないで、唯いさゝか惡事をすると大層に毀られる。それでは差引勘定が立ますまい。前辯士は貴婦人が躓ひた時には大いに笑ふてやらう。併し重荷を負ふて坂を登る時には何にもいふ勿と仰やるのか。それは殘忍至極かと存じまする。されば今日の貴婦人がタトヘ人に勝れた才智學問はなくとも、タトヘ張三李四同様の價値であらうと唯苟しくも貴婦人といふその地位に居らるゝ丈で十分世間から褒められる權利あるものと信じまする。況んや家風よろしく、身の愼みありて多少人の摸範となるべき資格があらば、口を極めて賞賛いたし、以て萬一の失態の塲合に對する攻擊の埋合となすべき事と信じまする。

論旨明亮、事理適切、說き得て遺憾なく辯舌縱橫、例證歷然として微を穿ち、細に入り。況んや言に同情の厚きを以てす、聽衆信服、蓋し當日第一の高論なりしとば十目の視る處ろなるべし。

## 花嫁への注文

家政研究會員　筑紫波江

年齡五十七八、頭は半白の老刀自、膽太くして氣逞ましげなる容貌、眼光炯々として深夜の星の如く人を射、とことなく背かぬ氣の面に顯れて恐ろしく、世故の艱難額上に刻まれて物に動せぬところ一と廉の女將軍とは見受けられたり。

皆さん私は舊弊の婆でござりまする。當世の事は何も知らない時代後れの生殘りでござりまして中々皆樣方の前で演說など申す四角張ッた事は出來そうにもございませんが、先刻幹事の御方から强ての御勸め

でございまして何でも宜しいからとの御言葉に餘義なくこの席に引出される事となりました。誠にはや一生にない事でございまして、御愧かしいやら恐いやらでございます、そのお羞かしいと申すは丁度三十年前嫁入いたした節、婚禮の席に引出されました時と同じ樣な心持がいたしまする(此時聽衆笑ふ)又恐いと申し上げるのは私も最う少し致しますると軈て閻魔の廳から御迎へが參るかも知れません。その節大王の前に引出されましたら丁度又唯今のやうな心持が致すのでせう。此の世から、斯かる恐ろしい處ろへ引出されましたのは、前世によく〳〵惡事でも致したものかと胸が悸々して堪りません。よつてまづお冷を一杯頂きませう。

と老刀自は笑ひながら卓上のコップに水を注いで飲む。聽衆大に笑ふ。中々場熟れたお婆さんですね。とうして海に千年、川に千年の功勞ものでせうよ、アノ脊中を見ると甲に牡蠣の殼でも附着て居るだらうなど、場の一隅に冷評する者もありたり。老刀自はその滑稽なる前言を水にて打消し、更に一段眞面目の容貌を以て聽衆を睥睨しつゝ演壇に直立せり。

皆樣、私は皆樣の御嫌ひ遊ばす處ろの姑でござりまする、否、姑の地位に居るものでありますから。何事も皆その地位から割り出した理窟を申し上げて、今日は存分若い方々の油を取る考へでござります。(聽衆大いに笑ふ)いや決して笑ひ事ではありません極くまじめな事です、ですから少々心苦しい事をも遠慮なく申し上げやうと思ひます。アの世間でよく申します嫁と姑の諍ひとか衝突とかいふ事ですが、私に言はせると凡そ一家の内にそんな馬鹿氣た事のあるべき理はないのです、衝突する位ならばてんで一所にならぬがよろしい。察する處ろ、これは嫁姑いづれかの方に人情の解らぬものがあるに違ひなからう。人情の解らぬものは人間并の心のないもので、いくら濟度しても駄目です、日日諍ひをしてゐるよりも早くきりわ

げて別れた方が双方のお爲です。嫁の方が解らねばていつは家の爲にならぬものですから早く逐ひ出してお仕舞ひなさい、又姑が解らずやであるならば。そんな處ろに居たとても幸福な家庭の作られやう筈はないのですから颯々と見切をつけて出て行くのがよろしい。とてう私にはちやんと理窟が立つてゐます併しドチラかといへば姑の方には永い年月經營慘憺を致して一と廉の功績を遺したものである、けれと嫁の方にはその家に就て功績といふやうなものは何一つもないのみならず、姑の遺したものをそつくりと譲り受けるといふ地位に立つものですから是れを法律上の言葉で申しますると、一方は權利者で一方は義務者といふやうな事になりまする。人の金を借りれば抵當も出さねばならぬ、利息も拂はねばならぬ、又期限が來れば催促も受けねばならぬ、彼れ是いたして債務者といふものは大抵いつも金主に頭の上らないものです。甚だ割の悪いものである、これが今日世間一般の約束でありますから、致し方はない、一家の内でも金主の地位に立つてゐる姑が借主の嫁に對していろ〳〵の干渉をいたすのも是れも當然の理かと考へまする。大抵な塲合に於きまして姑は命令者、嫁は服從者、これが姑嫁間の原則であります。萬事この原則によつて事をすれば間違はないのでありまするが、世間普通の嫁御寮には此の處まで考への届いた方はまづ少いのでありまする。たとへば一つ事をさせても姑の經驗ある眼から見ると嫁のする事は手ぬるい。廻りくどい。不束である、不熟練である。損が多い。無駄が多い。手がかゝる、暇が費へる、氣がきかぬ仕事がまとまらない。不出來である。不始末である。ですからどうも安心して萬事を打任せるといふ事が出來ないであります。

人間年を取ると世事が厭さくなつて參りますから一日も早く世を譲り渡して安樂をしやうと思ふのでありますが、樂をしやうにもされないのは。安心させて呉れる丈のものがなければ據なく自分で遣らねばな

らぬ。これは實に難義至極な次第と言はねばなりません、しかし嫁も又年を經て世故に馴れて參れば姑の地位になるのでありますから。世の中は廻り持ち決して片手落の議論ではありません。皆樣の家には姑が家に頑張つてゐる間はその家が安體です、さすれば嫁の閉口はその家の安全瓣であると言つてもよろしいのです。（拍手）

斯樣に申しあげるとどうやら嫁をいびりに此の席上へ罷り出ました樣な次第で甚だ以て心苦しうござりまするが、中々以てそういふ譯合ではござりません、實は心に叶ふた嫁が欲しさに、今日皆樣方に御引合せを願ふつもりで居りまする、併しながら、物のタトヘにも申す通り、この世の中に婿の氣に入つた嫁は澤山あつても姑の心に叶ふたのは鐵の草鞋を穿いて捜し廻ッても中々見當るものではないといふことです、成程嫁は婿に伴添ふものであるから婿の氣にさへ入ればそれで澤山だらう、何も姑が舊弊な規矩に當て丶撰擇をするにも及ぶまいと仰やる方もありませうが併し、そこが大に論ずべき所です舊弊〱と世間では仰せられるが私共には不幸にして舊弊から持てたへた家といふものと、其の家に附屬した財產といふ厄介なものがチヨッピリ御ざいますので、（聽衆大に笑）世間で仰しやるやうに、そう無造作には參りません。殊に年寄は先の短い者です、翌日の日も知れぬ命でございますから命のある内に此の財產といふ厄介物の始末をして置かねばなりません。萬一この財產といふものが世の中の尊い物、神聖なものであつたとすれば何も我が家に殘さずとも、立派に政府へでも寄附して公共の爲にも致しませうが、何を申すにも財產は汚れたものでございます。（滿場大笑）殊に近頃社會主義とかいふ側の御議論を承はりまするにも、個人の財產といふものは不義の塊である。不德の品物である。汚れた物である、一般人間の膏血を絞つた不淨物であるといふ御話も段々と承つて如何にも尤も至極な事と私共大いに感服をいたしました。

説き來つて此の處に至るや一齊に聽衆の沈默を破つて滿堂の笑聲湧くがごとし、されど老刀自の面上一點の懈怠なく眞面目の態度を一層森嚴に搆へ、席の四隅を睥睨しつゝ語を次げり。

斯くの如く財產といふものは不潔尾籠なものでありまする。この不潔なものを多少に拘らず、人樣にさし上るといふ事は如何にも失禮千萬な事であらうと考へまする、それ故、どうにかして我々老夫婦の跡を嗣ぐべきものを見出し、これに讓り渡して後の祟りを免れやうと考へるのでありまする。いづれにせよ多年不心得を以て貯へました不義の塊でありまするから、それを脊負ふて立うといふには隨分共に骨の折れたものでございます。同じ汚ないものでも肥桶を擔ぎますには骨節の逞ましい田舍女で澤山です、けれども、私共の所持いたす不淨物は不幸にして。金銀といふ重量のある物。家屋土藏、地面、公債證書など巾す品物で、小形な商船に積みましても三艘や五艘では積み切れぬほどの厄介物でござりまするから是れを擔がせられる相棒の嫁御寮は巴御前や板額以上でなくては務まり兼ねやうかと存じまする。

さア斯うなつて參りまするすと嫁といふものは唯、婿の氣に入つた丈では滿足がなりますまい、婿の氣に入る入らぬは第二の問題で、第一にまづ私共の希望する資格が必要となります。どうです、貴孃は當時日の出の女學校を卒業なされた御方そうな、いかゞでござる私共の造つたこの不義の塊、不淨の御荷物を擔いて下さる御勇氣がありますか。(聽衆大笑)イエ笑ひ事ではありませんぞ。これが擔けると思召すなら擔いで御覽なさい。と其處で私が篤と立合ふて試驗をいたしまする。さアその試驗です、成程此の人は學問もあり、才智もあり、品行も確かであるが、何分にも不義の塊を脊負つて立つほどの力量は疑はしいと見ましたのが澤山、それから次は文字もあり技藝も手に入つてゐる、優美しとやかで縱橫完備した淑女でありまするが、浮世の不淨物といふ財產の中に埋り込んで一家を持ちこたへて行くといふ辛棒力は是又疑

はしいものです。餘の事は兎に角これはかりは智惠や才能、學問や人品では安心がならない、まづ一と口に申せば豪氣大膽にして世上の譏譽褒貶に頓着しない、又濁世に處して濁世の事を行ふに適當なる度量の必が欲しいのであります。高尚とか、優美とか、理想とか、神聖とかいふやうな理窟がつた事をいふ雛樣では私共の希望には叶ひませぬ。といふ樣な譯で兎角帶には短かし、襷には長し、今日まで取調べました中にまだ是ぞと思はれるのが一人もありません。そこで私御願申上るのは、どうか今日女子敎育も進んだ世の中、唯學問智識、技藝、道德を敎へるばかりでなく、少しはこの世の中の不義の塊をも脊負つて呉れるほどの技倆のある御嫁を養成する方法を與へて戴きたいものでござりまする。今日此の席上には、私と同じ地位に居て、私と同じ不義の塊を脊負つて隨分當惑して居らるゝ御方もござりませう、皆樣の御考は如何、是れ決して串戲と御聞捨なからんことを偏に希望いたすのでござりまする。

滔々として辯じ去り辯じ來る數千言、警語、縱横にして毒舌骨を刺すものあり。時に諷諭、諧謔を弄して巧みに人頤を解くの技倆、老功の人にあらざれば得て這般の妙境には達し難かるべし。

## 筑紫老刀自の演說に就て

家事講習會監督　霧島つゝじ

辯士は年齡五十餘、家事講習會の監督として多年その職に從事し、經驗才能双ながら兼ね備へ、辯舌よりは德行を重ずる方にして言論は不得意なれとも操行堅實にして敎育家として世間の實際に役立つ婦人を養成するを以て其任とし、萬事實行主義の敎育家として知られたる人なり、前辯士の嫁の資格說について何か大に感ずる處ありしといふを以て幹事に席順の變更を要求して玆に登壇したるものなり。

皆樣、御存じの通り私は家事專門の者でござりまして家事の外には別段智識を持ちません。隨つて御話し

申上げる事も極めて鄙近な事ばかりで、迚も斯る御席上で皆様へ御滿足を與へる樣なお話は出來ません。これだけは豫め御承知を願ふて置かねばなりません。つきましては唯今筑紫夫人より不義の塊の御話を拜聽いたしまして大いに感じました流石は海にも川にも御經驗を持たれたほど種々な御境遇を經過られてあらゆる、御辛酸を嘗め盡された御言葉で私共未熟の輩に置きましては唯恐れ入るばかりで御ざりまするけれども筑紫夫人の仰せらるゝ樣な特別の資格を要するやうなお嫁さんは今日の教育ではまづ容易に出ますまいと存じまする。それよりも私はまづ普通一般如何なる家に向けても大なる差支ない丈の婦人を養成するのが今日の急務かと存じまする御說の如き財產を讓り受けて失態を來すやうな者はそれは其人の資格の足りないのではなくて、婦人に常識のない故であります、婦人に普通の常識さい備はつて居ましたならば跡はその身の境遇に因つてどうでもなるものであります世の大人豪傑を御覽なさい赤坊の時から決して大人豪傑ではありません多くはその人の境遇と周圍の事情が然らしめたものでせう。して見れば若い嫁も始め一年二年はいろ〳〵申分もありませうが、天性愚物でない限りは其の境遇と周圍の關係からして自然にそれに備はる資格は附いて來るものでタトエば人品が上つてから資格がつくのでなくて、資格がついてから自然と人品も備はつて來る樣なものでありますから前辨士の御心配は寧ろ杞憂に屬するものと申してもよからうと存じます。そこで私は常識教育を尊びまして嫁たるの資格を左の通り定めました

家を愛する事
良人を重んずる事
子孫の行末を深く慮る事

この三個條が女德の根元であります。第一家を愛するものに國を愛せぬものはありません。家を愛して社會に

及ぼし私より公に及ぶ徳の本であります。又良人を重んずる者に姑舅を疎外する者はありません。己れの良人を尊んで姑舅の身に及ぼす、これが女の美徳の第一であります。それから子孫は己れの後身であります。我が後身を慮からぬものは我が身の前身を輕んずるもので、人類たるの價値がないと申してもよろしいのです。併し斯樣な事柄は道徳上の資格でいろ／＼に解釋がつきますから一と口に斷定する譯には行きませぬから大体を申して置いて直ぐに實務の問題に入りませう。まづ

萬事に注意の行屆く事
方針を定めて働らく事
仕事に秩序のある事
時間を無益に費さゝる事
節儉の心掛ある事

この五個條が家事の要訣です、第一家の政を執つて注意が淺ければ眼の見へぬ所ろに莫大なる損失がありまして何程氣を急ても家は治まつて行きません。それから一定の方針を定めて仕事をせねば、如何ほど働らいても骨折損となる事が多いのであります。次に秩序の觀念がなければ家事を整理する事は出來ません、例令ば食物と衣類と同じ室に放つて置くやうなものであります。衣服は汚れる、食物は腐敗する。亂暴狼藉といふは即ち不秩序の結果であります。又時間は生命の一部分であります。尊い人間の壽命の一片はこの時間で人世の一代は時間の連續したものでありますから、時間は金錢よりも尊いものとして惜まなければなりません、それを無益に過すものに古來家を榮へしめた試しがありません。それから節儉といふものは家を持ちてたへる柱、又家を建てる土臺の石です。よしや花崗石の礎は碎ける事はあらうとも又、堅の大黒柱は頽く事のあらうとも

この節儉の上に建てられた家は、如何なる風波に、遭ふても決して傾むくものではありません。且つ何々は、一枚の紙片を惜み、一縷の糸を疎末にせぬのが道ですから世の中では至極蔑視されて居りますけれども一枚の紙一縷の糸は節儉の終りでなくて節儉の端緒でありますから。その注意が萬事萬般に行渡つた結果は實に驚くべきものとなるのであります。家を經營する婦人にこの心掛がなかつたならば、百年經つても決してその家から光の生ずる事はありません。西洋の格言に一滴の水は以て小舟を行るに足らずと雖も十萬の滴流相集れば即ち一小川となり、數多の小川相合して大河となり大河の水流大海をなし、是に至りて怒濤激浪を起し造物主の外之を制するもののなきに至るといふ言があります。輕蔑のならぬものは節儉の德であります。以上の大本五個條が具足したならばまづ完全として宜しい。それからは枝葉に入つていろ／＼あります。其重なるものはまづ

風流文詞に深からずともまづ手紙だけは滿足に書くべき事
諸藝に通達せずともよし唯裁縫丈は乾度心得べき事
交際は上手ならずもよし唯應對の明亮なるべき事
學問深からずもよし唯一と通りの道理を心得べき事
智識廣からずもよし、唯人に欺かれざる丈の心構へあるべき事
慈善公益は餘計な事まづ、己れの一身を立て他人に迷惑を懸けざる事
常に淸潔を守るべき事
常に克己すべき事
朝夕の事なるべく人手を借らざる事
家事萬般手早く處置すべき事

以上擧げました丈で今日の女子が人の家を治むるに必要な資格は澤山でせう。その以上を望むのはまづ無理な注文と言はなければなりませんけれども、これが中々出來難い事だらうと私は信じまするまあ甚だつまらぬ事を申し述べまして、赤面の至りでござります。

諄々として老婆の言の如く、平凡にして他の奇なくも、言中自から教訓あり、説諭あり、辨舌に工を求めずして又自から工あり、譬へば平坂の山を登るがごとし途中に絶壁懸崖人を驚かすの、奇景はなくも登りつむれば眼界自から濶大にして萬樣の風色一目の下に指點し得るがごとく誠に得易からざる思想家なりといふべし。

## 老婦の懺悔

任那高麗子

年齡五十歳餘り態度沈鬱にして、風采揚らず、されと何處となく美人の面影殘りてこれもむかしは嘸かしと思はるゝ飾なきにあらず。粗服をまとひ鄙賤なる出立聽衆に注視さるゝを内に顧て密かに羞らふ風情、演壇に登るや暫時悄然として口邊に手を置き、容易くは口を開かざりき

皆樣、私の演題は爰に掲げてございません。それは一身の懺悔をこゝで申上げるのでございまするから別段表題など取極める必要はなからうと先刻申上げたことでございます。扨て、各樣方の今日の御演説段段と承りまして不心得なる私共には一々胸に五寸釘を打たれるやうな心持がいたしました。これまで御話になりました方々はいづれも皆御覺悟のあつた方々でございまするから斯樣に御榮へ遊ばされて、いろいろと將來に向つて御希望の御言葉を開かるゝ方でござりまするがそれに反しましてこの私は一心の不覺悟な爲め、斯樣に零落を致して誠に御恥かしい次第でござりまするが、恥を言はねば理が聞えぬと申す譬へにつきまして今日は存分私の身の上を申上げて、皆樣の御笑に預からうかと存じまする。私は唯今

こそ斯樣見へまするが、これでも元は然るべき大家の育ちでござりました。十七八まで惠み深き父母の温かき懷ろに育ちまして世の荒い風を知らずに成長いたしましたが。緣あつてこれも親里には劣らぬ物持の家へ嫁入りました。折りしも家の全盛を極めた際でありましたから、嫁入仕度と申してはなか〳〵大層な譯で、迚も今日の世から想像する事は出來ませんが、私が娘心に覺えて居ただけでも箪笥十七棹、長持七棹その外のござ〳〵はとんと記憶に殘つて居りません。お姫樣の輿入でも小大名の身代ではあれほど立派には出來まいかとの取沙汰でございました、その時慈悲ある母親の申しまするには、そなたはこの家に一人娘として生れて來たのであるから、これほどの嫁入をして戴いたのでせう。世にそなたほどの果報ものはあるまいが、人の身代は永く續くものでないから年寄つて困まぬ樣、若い内から心掛、諸藝を身に着けて置くがよからう。人は藝さいあれば何處へ行つても困らぬもの、よしや家藏は火に燒けても、何萬の財產人に奪られても、身についた藝は燒もせず、奪られもしない、一生を托して安全なのは身についた藝であると懇々說諭を受けましたから娘心にも成程と合點して、それから、名ある師匠を通はせて。諸藝のあらん限りを稽古いたしました。其節世間での噂では、私共が讓り受くべき身代は地面家作から上つて行くだけでも一生は安樂に暮して行けます。有金の利子だけでも二三十人の家族は活計は出來ます。それから又、取引上で殘る金を加へましたら、此の身代百年二百年經つても容易に傾くものとも見へませんでしたが。それが十年經たぬうちに大家の礎の動き始めましたのも不思議のやうで更に不思議ではありません、當時良人が私非常用意の株劵を暫時借用したいと申しますので心易く融通しますと、軈てそれが現金で返ッて參りました、すると間もなくその現金を復た借用といふ事で、用立ますとそれが元の儘で返らないで。いろ〳〵に形を變へて出たり入たり する 間に一兩年經つて遂には消て仕舞ふといふやうな事に

なりましたが、それでもまだ私は自分の持參金などに心を置くほど小心ではありませんでした。その中貸借上の事から私の親里と良人の家との間に事件が起りそれが段々面倒に赴いて、遂に私は離縁といふ事にありました、その時もう慈悲深い兩親はこの世に居りません。のみならず、有りし昔時の身代は夢の如く消へ失せて朝夕の營みが急しいといふ誠に情ない境界になりましたが、まだしも私が持つて參つた嫁入衣裳の大部分がそつくり殘つてゐただけに當座はそれほど悲しくも思ひませんでしたが。兄弟の好みで一枚づゝ貸しては何かの役に立てゝ置きましたのがこれも僅か一年ほどの間に十棹以上簞笥は空つぽになッて仕舞ッて、襦袢一枚、帶一筋、殘らなくなりました。まア皆さん私は實に馬鹿な性質で眉毛に火が付くやうになるまでは、世帯の心配をとんと知らなかつたのであります。さアこうなつて參りますと、母親の遺言が乾度身に染て感せられましたが、さらばと申して長年果報で居ました我が身が急に藝を看版にして身を助けるといふ事は第一心の辛さが先に立つて中々憤發が出來ません、又憤發をしたところが、むかし／＼お孃樣で覺へた藝がこの世智辛い世の中に今日のお役に立たう筈がありません。それ故私は憖じいに藝など賣ッて身の恥を曝さうよりは。人樣の衣でも洗ッて今日の命を繋いだ方がまだ／＼心易いのでありまする、で、私は今つく／＼と思ひ當りました、藝を習ふたよりは世事を知りました方が女の一身に取りましてどれほど役に立つかといふ事が合點されたのであります誠にこのお立派な席上へあられもない事など申上げて皆樣方の御氣色を損じましたのはかへすがへすも罪深い奴でござりまする。

閨中の少婦愁を知らず、春日粧を凝らして翠樓に上る、忽ち陌頭楊柳の色を見て悔ゆらくは夫婿をして封候を覓めしめんことを、とは、唐詩の名句なり。夫婿の愚にして財産を蕩盡すると、奮發心ありて封候を覓めんとするとは全くの相違なれども彼の少女が閨中の愁を知らずして春日粧を凝して翠樓に上るの境界は同じ事

なり、彼れは陌頭楊柳の色を見て始めて驚ろいて後悔の臍を嚙みしが、これは秋風落莫身の秋を感じ始めて浮世の辛酸無情を覩ずるに至れり。人事多忙の世の中に處する婦人の道は、專ら實務の用捨にあることとこの老婦人の懺悔によりて記者は一層の分別を確めたりき。

## 下婢放逐論

松浦佐代子

辯士は活潑なる女書生風、紅顔豐肥、眼圓にして鼻は高からず福相にして愛嬌に富み、演題の突梯なるに加へて辯舌に北國訛ありて更らに一しほの興を添へたり。

皆樣に申上ます、私の演題は下婢放逐論ですョ隨分亂暴な題でございましようネ、決して薪雜棒なんか持つておさんどんの臀を撲つのぢや御ざいませんョ。(聽衆哄笑) イエお笑ひ事ぢやございません。まア斯樣申しては如何でせうが、今日日本の下婢といふものは眞誠に下婢たるの職務を心得たもの一人もないですねえ第一無學ですョ、(聽衆笑ふ) イエ私も無學ですがこれでも下婢に比べますと少しはあります。まアそんな無學なものですから經濟といふ事や責任といふ事をちつとも解しません。それから德義がありません、德義心がないから一家の秘密を保つ事が能ません、それから秩序といふ事を知りません、秩序を知らないから仕事を整理して行く事が出來ません。朝から晩まで日がな一日、唯ばた〳〵して日を暮して行く丈けで、使はれる其身も多忙で一寸の暇もありませんが、使ふ奥樣も小言だら〳〵で家の内は不愉快です。これでは實に仕樣がないではありませんか。それも小家族で一人位の下婢ならばまだしもよいですがね小供も大勢あり老人もある家で少しゆつくり仕樣と思へば上下三人の下婢は是非入用ですョ、現に私共の知合で七八人の家内で下婢の三人も使ふて居る家は澤山見受ますがね。唯今の處ろ何處もかして頭數

ばかり揃ふて居て役に立つやうな下婢は一人もありませんヨ。それで經費は隨分かゝります、まア一人前少くも拾圓は入りませう三人居ると月に三拾圓ですヨ。中等社會の三十圓は決して少額ではありますまいねそれに對して何程の仕事を下女がしあげるかといへば。唯一日ばたばたして無駄に日を暮して居るのが多いですね、而して又目に見へない處ろに不經濟が多いです、主婦が自から手を下せば十圓で濟む處ろも雇人任せにした爲めに十五圓も入事がありますす計算を立てゝ見ますと月に餘程の濫費になりますが。これでも多數の家族になりますと、どうしても人手を借りなければ日々の務めを完うして行く事が出來ませんからイヤイヤ乍ら不經濟な下婢を置かねばなりません。何と困つた次第ぢやありませんか。家政に御盡力なさる奥樣方によろしくこの御研究を願つて、もう少し何とか經濟に行く工夫がして頂きたいと存じます失敬。(哄笑)

卒直にして無邪氣なる口吻。聽衆が是非の評論を下す遑もなく、いと簡單に演べ了りて壇を下れば、年輩の一婦人さし代りて壇上に現はれ出でたり。

## 人遣ひの工夫

和田津龍子

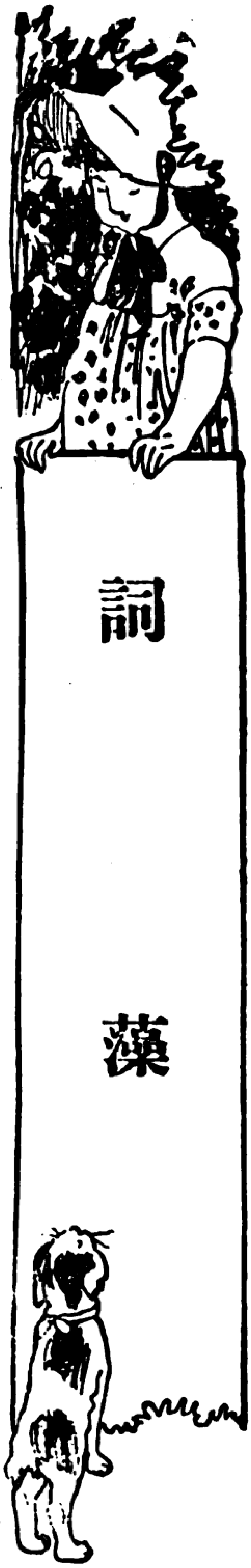
皆樣私しは唯今の御演說につきまして私しの知り得る限り御答へを致しまする、前辯士の御言は誠に有理。の御說でござりまするが併し私考へまするのにそれは下婢その者の惡いのではなくて寧ろ使ふ者の惡いのだらうと思ひます、否これまでの日本家庭の習慣が甚だよろしくないかと存じまする。それに就てはまづ待遇と報酬から取極てかゝらねばなりません。一體日本の習慣は下婢として追ひ使ふばかりで、肝腎な家政の補助者といふ立派な待遇がしてありません。そして給金なるものが至つて少いかと考へまする、今日の世の中は政府の役人より製造所の職工に至るまですべて金錢を以て人の勞力を買ふ世の中でせう。この法則に脊いて事を仕樣といふのは甚だ無理な事で双方の間が永續する譯はありません。それゆへ下婢

とても又給料を裕かにせねば、十分の働らきをさせる事は出來なからうと存じます、金を澤山に出して身體の健康な、精力の強い、常識の發達した人間を雇い入れて、さうして一家の臺所を打任せて。これに十分の責任を負はせる事としたならば、今日三人使ふ處ろは一人で澤山だらうと私は考へまする。大勢の頭數が臺所をして朝から晩まで一日ばた〳〵して日を暮して物入が嵩むから見れば一人で萬事を切り廻して行く方がどれ丈家の爲になるか知れません。唯今の處ろでは多くの家には飯を食ふ不用人がごろ〳〵してゐるばかりで勝手元の整理といふ事は更に出來てゐません各々方で下婢を飾り物としてお置きなさるならばいざ知らず、苟しくも生た人間を使ふてその働らきをお取りになるといふ主趣であつたならば。まづ給料を今日の三増倍にもして、もそつと間に合ふ人を遣ふやうにするのが一番利方であります。私の御答はまづこれ丈です。それから序ながら今下婢の德義といふ事に就て一言申述べませう。先刻松浦女史も申されたる通り、日本の習慣は、下婢を一季半季の奉公人として追ひ使ふのでありますから、今日の處ろは唯主婦に八釜敷言はるゝばかりで、實際の仕事の上り樣がありません。歐米の家庭のやうに一定の規律があるとか又は十分に其人を信任して萬事に責任を負はすといふ事がありません、そこで、主婦は毎日氣を遣ふのが仕事です、下婢は唯目の前で骨を折るのが御役目です。一方は無益に氣を遣ひ、一方は無益に骨を折るといふ樣なわけで双方の損失を永年の間積つて見たらば少からぬ事でせう。一體世の中の事は何に限らず手を下す人に實際の責任を持たすといふ事が一番よい事で又手を下した人が責任を守る考へでなくては萬事が整ふものではありません。縱へて申さばお洗濯です。今日天氣がよいからこれを洗つて呉れと奥樣から御命令が下る。下女は臺所で何か仕事をしてゐる。併し言付られた事ですから仕かけた仕事を抛り散けて置てその方にかゝると急に湯を沸さねばならぬ、彼是する内に晝の仕度にかゝらねばならぬ、洗ひ物がまだ濟まないのに早日が傾いて仕舞ひ、肝腎な干物が翌日に廻されて雨に遭ふといふ樣な事では下婢の働らきは家政の補助者とはなりません、けれども苟くも一家の臺所を脊負のて立つ位な下婢であれば。洗濯の都合位は自分で責任を守ッて大抵仕事の手順を考へねばなりませぬ。家族が多ければ多い丈に汚れ

物も澤山出來る。すると翌日の天氣を前夜に見屆けて置いて有丈の汚れ物を一と纒めにして下げて貰ふて夜の内に大半揉みあげて置いて朝日の出ると同時に棹に干す丈けの手順を取るやうでなければ責任のある働きとは言はれません。尤も今日の處ろ左樣に參りませんのは第一下女たるものゝ教育がなく隨て地位が低いから自然責任の何たるを解せぬから、萬事に信任が置けないのでせう。又一つには主人の方で兎角下女を輕蔑して責任といふ事を少しも了會させないからでありまう、それから又今日下女を使ふて損失が多いといふのは例を申さば、下女が皿一ッ破しますと、御主人樣から眼の玉の飛び出るほど叱られます、下婢はそれが恐さに破した事を默ッて言はずに於て內證で新らしいのを買ッて來てそつとして置くのですけれどもそのお錢は何處から出たかといふと、これは買物の節くすねて置いた金であッたといふ、まことに馬鹿らしい事ですけれども、さうすれば下婢もお眼玉頂載せずに濟むのですから。今後破れ物のあつた節はいつでもこの皿を破ッた時の樣に默ッて買ひ足して置くといふ事に定める、これは實に親切餘ッて涙が溢れます、けれども之を糺せばこれは強ち下女の不忠實ばかりではありません。矢張主人の方の使ひ方の巧拙によるのです、ですからかういふ時には皿何人前、庖厨の器具幾種、これは下婢が其家に雇はれてゐる間下婢の財產として一切の責任を打任せた方がよろしいのです。下婢も自分の財產とおもへば自然取扱を鄭重にするのは當然です。一体何事に限らず、自分の物として遣ふ物は他人の物として遣ふ三倍四倍も自愛心のかゝるものですから、金錢の上でも時間の上でも、又物品の上でも決して我が物と思ふたらば、疎末には心得ぬものであります。で私の主意はつゞめて申せば相當に教育のある女を優遇してこれに十分の責任を持たせて、萬事その人の働らきに一任する方がよからうと考へまする、それに就ては今日のやうな無教育な下婢では無論駄目でせう、また俸給の如きも今日の三四倍出す考へでなくてはよい女を遣ふ譯にはまいり兼まする。

言に氣焔なく論に抱負なく、演說として何の警策なく諄々としてその說く處ろは日常の茶談なれども平凡の中に眞理ありて家事に任ずるもの、眷々服膺して以て、庖厨に銘すべきものなるべし。

(完)



# 詞藻

## 釣床

松江 岸崎濤子

植込の梅櫻の半黄ばみて散り敷く落葉堆く、青き／＼松の葉越しに紅葉したる楓美はしき小丘のほとり、小さきハンモック釣りて愛らしき稚兒の夢安らかにねぶれる。

麗らかなる秋の日和の恰然春の如、淡き／＼陽炎立ち迷ひつ、午後三時頃の日は、弱く暖き光をば眠れる稚兒の顔に與へつ。

實に愛らしの兒や、美はしの寐顏や。年は二つか。雪の如き白フランネルの衣に包まれて、配合よきとき色レースの滋掛の中に眠る靜なる其かほよ。

女といひしも人は怪しまざるべし。されど何處やらに見ゆる凛たるけはひよ。我は正しく男の兒と見し。ふくよかなる羽二重の如き双の頰は、林檎の如く紅く彩りつ。閉ぢたる眼、小羊の如く和きまなざしをや包むらむ。雪の中に匂へる紅梅の一花、それにも似たる愛らしの口よりもるゝ寐息靜に、今にも笑ひ出さんけはひ。

傳りする人は何地行きけんあたりに人のけはひもなし。松の根方に眠りし毛色美はしき一疋の洋犬、我足音に褐色の長き耳引立てゝ靜に歩みよりつ。じつと我をば熟視する事暫し。よくこそ主を守れるよと頭撫でやれば、安心せし如く我邊を一めぐり。幼き主の寐顏を靜に見やりて、再び岩の傍に耳を垂れ、目を閉ぢたる顏をば前足に乘せつ。ねぶれるか醒めたるか。

翅弱き白蝶一つ、散り殘れる白萩のあたり彷徨ひしが、いつしかヒラ／＼と飛び來つ、ましろきショールに包まれたる胸のほとりにとまりぬ。さながら神の命をさゝやき降ふるが如くに――

何を夢見てか、微かなるゑみほのかに浮びつ。

小春の空の晴れ渡りて、澄みたる色の若く青く、飛び交ふ雀折々せはしげに鳴く聲に、洋犬はいと物憂げに微かに眼を開き耳をそばだつ。

げに靜なる秋の日よ。四邊寂々亦聲無く、靜なる寐息、木の葉を亘る風さや／＼と、落葉する音いと淋しげに……

風さと起りぬ、淋しき梢を揺がして落葉の音雨の如く。燃ゆるが如き深紅の紅葉、無心の寐顏に二ツ三ツ！

すや〳〵と眠れりし稚兒の蕾の如きに僅に動きぬ。つゞきて身を一ゆすり。持ちたるおもちや手をすべりてカラ〳〵と音しつ。蝶は驚きて飛び去りぬ。犬はれふり醒まされて立ち上りぬ。無心の寐顔尙平かに、宛然聖き美はしき神のやどりますごとく……

（甲賞）評曰。文思共に高く、殆ど天籟の響あり。何等の妙想ぞ。何等の妙文ぞ。

# 紅葉狩の記

大阪　岡崎かつ子

昨日今日時雨るゝ空に山々の木々や染め勝るらむと思ふ折柄親しき方より使して我思ひのつぼを云ひこし給ふに、いかでかいなまむさそくに同じ心のよし返り言きこへあげて明日てふ定めの日さへ百夜の心地して待ち侘びられぬ、宵の程よりわりごなどしつらへ設きたれば今朝はさのみひまとらで身仕度調へ伴なふ君がり訪ひて倶に停車場に至り又例の赤切符買ひ求めてやう〳〵乘り移りぬ、げに一瞬千里とは誰がいひけむ、束の間に心あての池田にと着きたれば此所にて降りいざこれよりは健脚のためし時よと互ひにたすけ合ひてなれぬ山路を事ともせで昇りつ降りつ進み行く程にこのあたりは蜜柑の産地とて山一面に黄金色なせる間を過るなれば程好く色づきしオーレンジに思ひを寄する者も少なからぬらし細き山路をあふるゝ計り蜜柑盛りたる籠を麓の方へ運び行く男子、一[illegible]生ひたる麥畑の四方の黄色なる中にひとり青々たるがわらぐろの影のみ霜のとけ殘りてぬぎ捨てしわらじの上に半ば日のあたりたるがいと興あるなど語り交す折柄、あやしき笛の音するにふり返れば箕面に通ふ馬車の進み來るなり。畑耕せるひな人のくわの手止めてとり〴〵の評し合へるい[illegible]し、牛に路傍の草食はせながら引き行く童の何見付てや手綱打捨て馳せ行くにわれらは牛の恐ろしさにしばし立ちとまりたるを見て彼等いたく笑ひぬ、二里計りにて箕面山にとたどりつけば、つかれし足もいさゝか勇みて又も登り行けばはや此あたりの楢は一面の紅葉にて黄、小豆、紅、半青半紅など種々に染めなして何所ともなくひゞき來る布織る音にそゞろ山奥の樣など偲ばれてきよらなる心地す、瀧安寺にいこひてかたみに立田姫のくすしき御わざをたゝへつゝひろげしたゝめ終りそが下を流るゝ溪川に渡せる赤きをはしまによりて眺むれば、眼に映るもの皆紅ひならざるなく、しづ心なくちる頭上の紅葉の袖に帶にちりかゝりてヒラ〳〵と波に紅ひの斑點を宿して流れ去る樣云ひ知らず美し、こゝなる瀧は那智に亞ぐものとかやつかれたれども其を探るも一興と、又々徑をたどり行くに峯も尾も盡く紅葉もて包まれたる中に松杉檜などの所々に打まじりたるが太陽の照り映つていと美しさに底の眞砂の數も知らるゝ計りの谷川にうつりたる樣さながら友染など晒せる如くみやこの鴨川もかく迄やはと思ふ計りになむ。

やがて唐人戻の巖よぎるに、去年の秋ものせし時は西の國なる師の君に此岩の由來語りしにわれは戻らじなど宣ひし事とも思ひ浮べて何となう懐かしき心地す、やう〳〵瀧のもとにいたりつけばげに勇ましき瀑布の樣や見上ぐれば高さ六七丈もあらむと思ふ上より山も谷も裂けむ計りのひゞきしてとゞろき落る大瀧の底に至りて又逆上すあたりに飛び散るしふきは人の衣をうるほして何となうはたへつめたく覺へぬ、瀧つぼよりあふれ出づる水の岩に碎けては流れ行くに道すがら拾ひてし紅葉の束れ投げ入るれば忽ち糸切れて滴き水の面からくれなひに初めなしたる美しとも美し、觀客の中には瀧にむかひて大聲に唐詩吟ずるみやび男、いきご傾くる翁など多かる中に友の君達にも赤きハゼの葉にやまと歌かき

て流しなどしふに戯れも倦れじとやうくに腰折れ一ッせかれつゝ猶流れ行く谷川の水の面染むる峯の紅葉はとかきて入るれば姿のみ岩にかゝりたる憎らしさよ、はや日も暮も暮れ初めければいざとて元來し方に歸り行く、麓には待ち搆へて土産物強ふる茶店の女の聲いと喧し、こゝに



てふ衣（紅葉を油にてあげし物）花かんざし瀧のうつし糸など買ひ求め父君へのいへづとに蜜柑少し計りハンカチーフに包みて傘の先に結び付打かたけたるに友だちいたく笑ひ給ひぬ、小高き堤にさしかゝりし頃は穂に出でゝ招ぐ尾花のみ白う見へて彼方に燈火の影二ッ三ッ輝く折柄ハンテイング姿の二人の紳士さのみ勇ましからぬ足どりにて麓の方へ行き給ふすれ違ひ様そと伺へば腰なる網袋はさまでふくよかならぬらし

かりくらし歸り路急ぐますらをのと云ひ出でたるに氣輕なる溟子の君のねしの輕くてみわし來げやと貫ふさる言のたまひそと云ひながら共にほゝゑまれぬやう／＼ステーションに辿りつきてさきの如く四ッの膝を過ぎ鐵橋など渡りて間もなく驛夫は大阪々々と呼びたてぬ車中には日れもすのつかれに夜舟漕ぎ給ふ君もありぬ

(別項甲賞)評曰、叙景畫のごとし何等の妙筆ぞ

# 秋の懷

赤阪 鎮目留子

## (一)

行きゆく水の流れの如、すぎにし年もはや積つ。月やげに花や實に趣深かりける秋もこゝに復り來つれど、あゝわれ思ひ出多き故郷の湖の汀に再び立たむよすがとても非ざるか。げに花萎び花歸る幾春秋の人や、事や、さながらの幻影痕なく消ぬて、今こゝ塵紅なるてふ都の空にさすろふも、身は稚子髻結ひし昔に馳せて、なつかゝりし繪卷物のみぞ朧ろ氣乍らわが破れし心の裡にくり返さるゝ。嗚呼！わが父ゆきましぬ。わが母逝きましぬ。この世始まりて花や幾度の春ぞ。月や幾度の秋ぞ。花と月とは長へに姿を變へねど、無常はわが世の姿、別離は人の世の常。人は日々に墓を築きて、限りなき時の力はいつ迄續かんとすらん。夕おとづれし秋風に吹き落されて笑みつゝ根に歸る木の實は、やがて秋去り冬行かん時、温かき春の、光に會ひて再び榮ねの喫を盡さんを樂しむなる可し。さるにても人は如何に、一たび永へに天つみ空に召されては、又何の時にか、雲行き水流れ花粧ひ鳥謳ふ地球の春に會ひ得可き。夢なきは人の運命よ。大いなるは神の力よ。

## (二)

今われ故さとの湖畔に立つ。

乙女が心とも見可き霜にあきたる紅葉は、闇き池の面に朱をつゞり、夕月影冷やかに水に落ちて、静かなる秋の夕は、常春の國なる天の河原に相逢ふ星のさゞめ言もきゝ得可し。わが頬の紅は飛び、わが昨日の夜は今日早も相瞻はじよ。さらば戀ひに戀ひける故山メイムの流れ徒らに早う、宛も風に急ぐ白帆の影に似て、の湖の汀に立ちつゝ、貪欄へある我身の終の運命やいかならむ。

夜はいたくも更けぬ。湖をめぐれる楠は馨ばしき香を放ち、擴ごり行く夜の帳の凝りてか、白露しきりに葉末をすべりて、音もなく苔にじみ行く我が心いとゞ惱ましき。

きらめき初めし金星の色こき光りは、わが足下にさゝやく水の面にちら／＼と碎けぬ。その奇しき光には、天つ御神の啓示深く籠りたらん樣覺ねて、わが額は自からたれぬる。

汀に伏して神に祈らなむ。光遙かに背に受けて星の宮居を仰げば、彩美はしき絹帷より讚美の歌聲ゆるくもれて、神の聖旨ぞ慕はしけれ。かゝ

ろ時われ神が白衣のみ裳裾に平伏さば、われは小さき羊となりぬ可し。端なく流れし星の後にひきし紫金の一線我懐に入ると見て夢さめぬ。わが胸は今沙漠の中にオーシスの影望みたらんが如き思ひぞみつる。

(乙芸)評曰、宛として一篇無韻の詩。清麗秀新、春風春月の如し。

# 絲萩日記

下谷 嵯峨淑子

「この頃如何に候ふぞ、朝夕俄かにひえ〳〵しきをいかならむかと案じ候ふ。兎角時々思ひこます、心永う養生して健かのもとの身に返る様心掛けなさるべく、薄衣して風など引かぬやう願ひ候ふ。羽織は、荒き縞織の方、最早似合はしからぬ故あれば君子に譲りて、先日仕立てさせしこの銘仙、常着になさるべく、猶又不自由の物は申越され度候ふ。菓子は君子より。姉様お好きの物なればとて。呉々養生大切になさる事をいのり居り候ふ。まづは」小包にそへて母君が慈愛こもれる文。

何とはなう悲しうなりて、斯る身をも子と思せばこそと涙さへぞ催さるゝ。心弱うもなりにけりと、乱るゝ胸に冷たき諸手くみて、謹みし瞳さながら庭に移せば、絲萩衰れ雨にやせて、紅流れたる寂しさ。果敢なさ脆さは、何れ劣らぬ我身の占もかうやと、淋しう覚ねては、あゝ、紛れむ方なき秋のうれひかな。

小包開けば、心づくしのそはいつぞや、母君のみ供して陳列場に購ひし紫矢絣。一針一針、短き針目にも籠る恵みよ、縫込められし温き愛には初秋風も辛からざらめと打返し眺む。夕暮より稍風立つ、小萩の上しづ心なう。

* * * * * * * * *

「人しれず身にしむる夕風よ、いかなればこの失意の子にすさまじうも吹騒ぐらむ物か。昨日は、一昨日は、雨わび暮らしつ。御里居の秋風やいかに。み便りゆかしうこそ候へ。」秋海棠やさしき繪葉書に、鎌倉なる友の筆のあと。

* * * * * * * * *

ひもとき居たりし海雲の巻投げつ、瞳に迫る夕の色うら淋しう。美しき人の淋しげなる俤、つと目睫の間に現すらむ様にもゆるは。……あゝ、まぼろし。……さりとも。そのみ姿、やつれゆきし絲萩の庭にはふさはじな。

* * * * * * * * *

雨しとゞなる小園窓。やめる身の淋しさに。さては又物となき秋の愁ひに。小さき胸はたへず。あさましうゝつろひすぎし絲萩のもろさにも刹き惑ひはさすが。中につゝ美しき紅一ひら、つみて歌反古に包みて友に。

* * * * * * * * *

水澤の香いみじき蘢なり、空美しうすみて、日の光平和な地になぐ。京よりの文あらず。さりとて我又筆はとらず。

萩萩。今は、今は、果敢なう崩れぬ。さらば。萩よ。さらば。こむ年とは契らじな。（鳳栞の里にてすみ子記）

（丙賞）評日。想清く、筆麗に、情趣長し。

## 琴の音

東京　市川美知子

「……書を捨て、おのれを捨てゝ、宇宙間、又、觀るものなき今、如何なればかくも涙は出で候ふらむ、女々しと笑ひ玉ふな、恨めしき都も今は捨て難く候ふ、さらでも憂愁に胸閉されて、あゝ如何すべき、われながら、御あたり、わけて思ひ出でらるゝ夕けしきかな、例の何となく物思ひ玉へる樣の御瞼、さては或物を求むらむ樣なる凝りたる御瞳を何にか注ぎ玉へる、すがれの秋か、果敢なの露か、望むべくばわれも露になりたく草になりたし、「友にならむ、さて、はらからか、年上なれば姉ぞ、心強う物せよ、我れもはらからなき身のあはれさも深し」と君おぼせ甘き情知らぬ身の、み情は胸に沁みて、遙かに洩れくる爪琴の音床かしのみ聲に誘はれて、涙おちしや幾度、末の松山を誓ひ玉へる、何に契りの緣なるらむ、樂しかりし昨日や、恨めしきけふや、歡樂の後の涙、つらきは浮世なるかな、かくて、怪しき、物の囁きにおん門のあたり、そそろ佇む瀬川夜、さりとも御愛犬のヂヤツクは忘れで纏り候ふ、松籟に和する爪音の、幽かに響く折々、其夜の夢は圓かなるに候ふ、床かしきみ音を心に印して、あすは、遠く去らむとす、切めては、舊交を忍して、わが爲の玉琴を奏で玉はずや、よそながら……かくて、……」。情濃やかの我が友、今は忘れ難き人の情よ、假初のあはれさに友とこそ契りしか、忘れじな、追朧の雨細き夕べ、珍らしや取り出す小琴、塵拂ひて、奏づるに、咲いたりな、甘き香は、それよ木犀の、軒のむれ、途絶ねては落ちぬ、彈きさして、例ながらあやしき思ひに耽る折、しばし此家を塒にしたきよしの若人の願ひと姉の云ひたる、好ましからねば云ひ含めてやりつ。立ちてそと覗ふに、丈高き後手の卑しからねど、衣のあやしげなる、すぼめたる肩の云ひしらずあはれなり、齢は二十ばかりにやあらむ、さば我れにも劣れるを、如何なる宿世やもたる　あはれと……。

嫁いての朝知らぬ人より文得つ、端麗なる字句の先づ目をひきぬ、悲哀の言に涙濡れて、われは世に薄幸のおの子一人を得つ、友と云ひはらからと約しつるも唯哀れなる其が半生に同情せしに外ならざりしを……。母君宣ふまゝに然るべきたつき得わが稱下したる愛は、涙のつらかひによりて大樹となりぬ、あはれとこそ思へ、ゆめ……厭はしさも混りて、厚き情受くまじく受けがたきすくさせつ、ゆめ恨むまじきぞ、人の情受くまじき運命のわれ、無情とな恨みぞ、要はおのづから知る由あらむ、せこそつらけれ。」

うらさびしき折々はいつも琴によりて慰めつる此頃をあはれなる人の上の切めてよ此宵、心ゆくばかりの爪琴におのづからなる思ひは通ひてむ、

さらばよ。

やがて聞ゆる琴の音、彈くは松づくしの曲。

評曰。情景悲に、意哀長し。眞に人生の悲事なる哉。

## 薄命の友

備後　靜波女

思へば三年の夢なりしよ數ならぬ我身を妹と愛み給ふに我もまた 便少き身の兄君と慕ひて春の朝の菫つみ秋の夕の紅葉狩互に誘ひつ誘はれつ鎮守の杜の椎の下蔭が池畔の芝生の上さては 君が御庭の綠陰や我庭の面の雪景色共に眺め共に語りし日も屢なりき君の詩吟に我唱歌唱ひては雲雀と笑ひ鶯と誇り理想を語りてはさすが眞面目に我も 亦來ん春には上京せんやがて幾年の後には錦を着て會はましと君のゝたまへば我もまたゝとひ女なりとてなど片田舍に埋れなん君見給へや幾年の後の我をとさゝろを 然世とは誰が云ひそめけん我も運命の神にもてあそばれ身は敢果なくも病の床にふしぬ君はまた實に圖らざりき或田舍の素封家の令孃と婚し給はんとはしかもそは 養子なりき我は驚きてされど日出度き事のきわみなれば祝文おくりしに深山里の語らんに友もなく訪ふものとては松の嵐のそればかり希望も光明も葬られて淋しき境遇に陷りたれば度々と消息してと返し文ありたりそれよりは折ふし訪ひ來る友も彼の君の噂して行くに 彼此考ふればいぶかしき事の多く或秘密のこもれる樣思はれて君の性質を知れる我はそをいと思ひ煩ひたり然るに如何はし給ひしこゝ數十日はさの音信もなしいぶかしくて

とかたりしが如何なる感にかせまりし友は さめざめと泣き入りぬやがて其細き手に我手を取りて君よ我は希望も捨てたり名譽も求めじ我が病は肺結核なり最早世にあらん日も少なし我なき後に彼の人に傳へてよ我は薄命の女なりきとたゞそれだけ……友はそと嘆息しぬ

月は高く澄みて友の顔を照しぬ麗しかりし姿はやせて凄きまで蒼白く眼には涙のやどれりあはれ友よ其小さき胸に如何なる思やひそめる

評曰。春在二東風一原是夢。生非二薄命一不レ爲レ花。

## 我身の秋

本郷　清水玉露

冬衣とく繕へとすだくなる虫の音草葉に細り行き孤燈小暗き晩秋の 夜友戀しく人戀しくて思ひ案じ不治の病に悶ふる妾あはれかくて果つる身かや下髮の昔春風かほる花のかげ學期に「幸ある乙女」歌ひしは夢よ紅のリボンなびかして無心に微笑みつゝラッケット持ちしは夢よ 嗚はんとせば吐く血潮笑はんとせば落つる涙歸るに如かじとか鍋を暗くらむ幽鳥の 聲はそともに……つと立ちて扉あくれば空はたゞ暗黒濁りし夜氣は肌を鋭ひさと吹く秋風胸をぞ冷やすしはぶきこらへて 眼閉づればあふれんとする熱涙の中になつかしや浮ぶおもかげ……母上よまちたまへ十七年の晝土産に一詩作らば妾も死なむ露を命の人の身は夕をまたで散るべきにましてや病める我身なるに何惜しからむよろこびて母の御そばに行かなんと思へどあはれ甲斐なしやはかなくにぶる我心浮世の戀や何物と嘲りたるをにくしとか 深くもさせるキュピットの金箭胸に苦しくて詩も成らず死もやらずたへがたやとて見返ればいよいよ細き燈に消ゆづみ映る我姿此世の物か此やつれ我身の秋と嘆き深し。

玉 あ ら れ



評曰。眞に血を吐く聲なるべし。殘菊秋瘦せて夢より淡きもの歟。

## 笛の音

神戸 契 子

萬籟寂として三更の月は獨り中天に高し、啾々たりし虫の音も今は、はたと止みて天地は幽寂として眠るが如き小夜、我一人文机に向へば過にし事ども忍ばれいと憐れに心狂はんばかりなり、折しも寂寞をやぶりて、微に聞ゆる横笛の音、こは誰が暮行く秋の床さむみ、眠られぬまゝの、すさびならむ。

吁、吾が兄君にはあらざるか、あらず、兄君は去年の秋夜毎に鳴る虫の音と共に秋の露とぞ消へ給ひしにはあらざるか。

あはれ兄君は笛とり、我は琴とりし夕べの、樂しかりし事よ。

音じなく〳〵。如何に思へども逝きし人は再び歸らず、只斷腸の念を増すのみ。

強いて此の想を止めんとすれども、なか〳〵になかしかりし節、樂しかりし節、賤のおだまきくり返し昔戀しう、兄君戀しう、はては同じ音に吹く、あだし人の上迄も戀しう。

其君の面影なりともと、淚片手に欄によれば、四邊には人の影もなく笛の音微か……

君は何にむせび給てか、笛は音も低し。我が闇を知りてか……非か……

眞に秘密をこめし音よと、茫然と聞き居れば、暫にて笛聲はたと止み、只片破月は我が影をうら淋しく照らす。

折しも、はらからにや、連れけむ、將た友にや棄てられけむ。隻形煢々として雲井遙にむせぶ雁の一聲。

評曰。語短く情長く、怨むが如く、訴ふるが如く、嫋々として餘韻あり。

## 紅葉狩に友を誘ふ文

伊勢 丹羽さく子

ふりみふらずみ、定かならぬ時雨に、庭の木の葉も黄ばみ染め、遠近の山の木の葉も、色づき侍りぬ。さるからに、名にしおふ高雄山の紅葉は、きのふけふの時雨にて、一入色深くもそめいで、さながら立田姫の織りなしけむ、錦かと思はるゝばかり、織りはへて、見る目もあやに美はしく、殊に夕ばへの景色など、いはん方なしとか、風のたよりにきゝ侍り候を、まして今朝ほど其地の叔母より、今盛りなり必ず來よと、紅葉一片、封じこみ入れてのふみ參り候。幸ひ明日は日曜日、その翌日は新嘗祭にしあれば、此休日を、しなに君にもいかでもろともに、御出で給はずや、宿元は叔母方にて候へば、旅心のうきもなく、夢も安く結ばれ候、今此よき折を過し侍りて、紅の錦の色あせ、夜半の嵐にふきちらされたらんには、惜みても猶あまりある

ことに候へば、障り給ふ御用もおはしまさずば、妹子様方つれさせ給ひて、御出のほどひたすらに、れがはまほしく存じ參ろ。參すく〜此の宵の葉、色淡くは侍れど、むげに流してみくづとなし給ふなよ、君禰となりて止め、御出の心に定めたまふ、色よき返事まち侍りぬ。かしこ

## いのち

小石川 岡 みち子

げに、心こそあやしきものにはありて、かれては惜しからず思へる命も、今を生死のわかれと、われ病院の手術室に亞鉛作りのそが楽の上に此身を横たへられし時は、たゞ恐ろしう、さわ立つ胸を僅に押へて、覺束なくも觀念の眼をとぢ、神の御名をぞ偏へに念じ居たりしにこそ。さても其時よ、コロヽホルムの一滴〳〵に魂は遙かに〳〵闇に迷ひゆく心地、數字は幾つ迄をか數へけん、やがてはそれも何も覺えず。ふと眼を開らきし時、傍に母上の御顔、みち子よ心つきしか、とその御聲も僅に耳には入り乍らも、心はなほ無何有の境をさまよひ居りて、全くの正氣に返へりしははや燈火もつきたる頃、見れば身はいつかもとの病室にベットの上に置かれて有り。父上も母上も兄上もみな我が枕邊を圍みておはしぬ。痲藥の故とや熱度頓に上りて、われはいとゞ渇を覺ゆるにも看護婦は一滴の水をも禁めてゆるさず、ついには堪へかねて、ひそかに母上にせめ參らせ、いとさゝやかなる氷の一片を含みたりしに、忽ち催す嘔吐は胸を衝きて、思はずも苦しさの身を悶ゆければ咽管の傷は破れ颯と迸る血しほは口を溢れ出でゝ、シーツの上はさながらに牡丹の花を亂せしが如くに。あなやと人々の驚き、わけても母上などは御顔の色をも失はせ給ふ、看護婦ひとりさわがず、たゞちに立ちて室隅に裝置しある鈴を押して醫員宿直室に通じをきつ、應急の手當ても何くれと、やがて醫師も來りて、程なく出血も止みたりしが、後にてその看護婦に、あれ程にお禁め申上げをきしを何故にはとて、涙さへ含みつゝ怨じられしこそいと面目なう、われは答もなし得ざりしが。さるにても、われ手術中夢中にて、亡き君の御名幾度も呼びまゐらせしとか、かつは彼の事ありてよりはや三周年にもちかゝらんとする今日なほ和女はさまでに亡き人のこと忘れかれてあるにやと、母上の御心有りげにわが顔見守らせ給ひつゝ仰せられしこそ、仲々に御恨めしう、思はず涙もこぼれてしよ、さればわれ一生を獨り住みの果敢なき願ひも、或は父上母上の御心には如何思召させ給ふにやあらん、何も儘ならぬ女の身こそ返す〳〵も口惜しう、今はたかく健かなる身にもかへれば、なまじひなる命、何故彼の時にはとも嘆かるゝぞかし、さりとは彼の世の人のみ戀しくて。

## 秋祭

大坂 田中瑜瑤子

「何が嬉しいといつて此秋祭程一年中に樂しいものはない都の人達がやれ温泉よ海水浴よとのらくら遊で居られる夏の眞盛に汗水たらして眞黑になつて湯のやうな田の中へ入て草取をしたり水掛をしたりして働いたのも何の爲め皆此祭が樂しみで集りくる蚊を事ともせず繩をなつたり糸

玉あられ

な訪いだりしたのも今日の祭に着飾る帶や簪がほしい計り……

おやもう太鼓の音が聞ねて居るまあ早く久しぶりでお湯なつかつて大坂の叔母さんからもらつた國の花とやらのお白粉でもつけませう、まうじて簪は何がよからう菊か紅葉かいつその事あの山茶花に着物は糸織に帶はメリンス。お里さんはどんな風なして行かれるであらう。お春さんは今朝程島田に結て通られたが宜い格好であつた今頃はもう皆いつもの杉並木の森へ集て居られるであらう……おや誰かゞ誘ひにこられたやうだ。」

瀬戸口で今迄獨言を云て居つた長屋の娘は下駄のおとがカラコロとそう〳〵しう家の内へはいつてしまつた。あとには秋の胡蝶の羽おもたげに二つ三つ垣豆の花にとまつたかとおもふと亦かた〳〵の菊の香に誘はれてひら〳〵。

太鼓の音はだん〳〵近くなるやうだ、自分も昔は樂しかつた。友も多かつた。が今は友なき身の淋しさ自分は垣のうちより只胡蝶の行へやいつことまばたきもせずに見まもつて居た。

評曰。田家秋祭の插畫圖。

## 神秘のかげ

神戸 山下とめ

我が家に近く水清き小川の流れあり。そが傍には庭に出でて招く尾花に、すかる撫子はなやかなる色の女郎花、こゝかしこにゆかりの色やさしき野菊の畔の水にうつれる姿、清き乙女のそれに似て、いと愛らし。さては桔梗の花の數少なきもうらみなれど、萩の花早くもうつろひて、たまらぬ露のほろほろと、こぼるゝいといと哀れ深き。

或る日妾は問ひぬ。やよ、花よ、汝がほこり、汝が盛り、例へば下葉に置ける露の生命の、それに似たるに、何を賴み、何を喜びて、よそほへる、」

折から風のまにまに、花は答へぬ、

「やよ君よ、我れ等が臣に、くすしき神秘の含まれあるを知り玉はずや。

神は今日野にありて、明日爐に投げ入れらるゝ草等なも、かくよそはせ給へるを。

あゝ、何を望み何を煩ふ、罪の子の哀れさよ。」

折しも一むら薄風にうなづきて、流れゆく水の聲笑ひさゞめくが如し。

# 坊つちやん

坊ッちやんは頭の大い眼のぐり〳〵した可愛らしい強い子である。

東京　よし子



お父さんもお母さんも、お部屋に入つてしまつたのに、廣いお庭で、大きな安樂椅子に、頭も足も一所になりさうに小さくちゞまつて居た。
あゝきれいだと思ふ間に、三日月は早や磯山のあちらへ入つてしまつて、星がいくつとはなしにきら〳〵と光つて居る。直ぐ外の岸邊をうつ

玉あられ

波の音は今日は風があるせいか、なか〳〵すさまじい。

坊ッちやんはたゞ一人先刻から例の大きな眼をぐりつかせて、怪物の様な沖の島を見つめて居るのだ。

「あのお山には仙人が居るか知ら、僕は仙人に劍術を敎へて貰ひたいな、牛若の様に……。仙人に敎へて貰つたらどんなに面白いだらう、静なお山の中で……。あゝほんとに仙人や神さんはもう居ないか知ら……」。といつもの様に今夜も同じ事を考へて居る。何がをかしいか、はれたり笑つたりし出した。

こんな事考へるのが坊ちやんの無上の樂みであるのだが、いつの間にやら、とろ〳〵と眠むつてしまつた。

天では流星が二三度飛んだ。黒雲がむら〳〵と、さ丶波つたる空の片隅にあらはれて、非常の速力で走つたが遂に山のかなたへかくれてしまつて、相變らず星どもはきら〳〵と光つて居る。沖の方では漁船がとほつたと見ゐて、人魂の様に燈火が空をかけて島かげにかくれて行つた。

風は寒くなつて坊ちやんの顔を幾度もこすつた。だが坊ちやんは仙人に遇つた夢でも見て居るか、なかなか眼のさめる景色はない。ちよこんとうづくまつて笑顔をつくつて居る。

# 千代ちゃん

滋賀　三浦糸子

垂髪にリボン靡めかせて踊り來れるは千代ちやんにお友達のふーちやん也。八つに七つ「やあ姉さんが歸つた――」縋りついてにつこり。千代ちやんより四つ年下の弟、義雄さんといふのが。

「母様お菓子頂戴な。」

生憎に唯た二つしか殘りがなし。頭の黒い鼠や漁りたるらし。

「是きりないよ。」母樣の御言葉。

「さう？」ちよと頸をかしげて、

「いゝわ、それだけで」紙包におし頂いてまゝ事の室に至れり。

カステーラの一つを弟に與へて、他の一つを二分して、大きい方をふーちやんに與へたり。

「何とはなく我涙にこぼれつゝ、つと入りて、

「なぜ義ちやんに小さいのを與らないの？」

「でも、でも義雄さんは小さい坊ちやんだもの！」

# 歸省の一日

越前　宮川清子

指折り數へて待ちし歸省の日は來りぬ、午前十一時に妾は新橋發下り列車中の人となりて、一夜を乘り明したる日の午前九時には、我下車すべき停車場に着きぬ、此處より我村迄は三里の行程、車を命じて打乘れば、車夫はだら〳〵と流るゝ汗拭ひもあへず勇ましげに走りぬ我家を蔽ふ霧は一重づゝ取除かれ、久しく夢路にのみ通ひし故郷の山は親しく前に顯はれぬ、はや我村端れの一軒茶屋も見ゐて、其處には三人の小供らしき妾の我方を指しては何か話し居る樣子も見ゐしが、車の近きたりし時、三人は手を高く擧げて一聲に「姉さん〳〵」と二聲まで呼びし迎ふる者より迎へらるゝ者の嬉しさ今も猶忘れずありぬ

車の我家に着するや、父母は笑顏もて迎へられ、妾の無事の歸途を喜ばれぬ、其眼には涙を湛へて慈愛はこもり、其言葉は飾られど熱情溢れて五とせ近く都の塵の汚れを浴びて、人の心の冷かなるをうらめる身には、快感の度を高めて感謝の涙は堪ゐず、はら〳〵とこぼれぬ、妹も今は可愛の乙女姿となり、腕白なりし弟等も、今はをとなしう共に微笑みつゝ、物珍しげに、我傍を去らずありしが、都にて、求めし土產物など分ち與へければ、いとうれしげにいづこへか去りし

樂しき喜ばしき笑は一家に滿ちて、長閑なる春とも思はれ、塵多き都の空の何となうおそろしう覺ゐき、折から幼馴染の友も、隣の翁も向ひの翁も、親類も音づれきて無事の歸鄕を祝され、鄕の話、村の變遷など、問ひつ答へつ、笑ひ興じて長途の汽車路の疲さへ忘れ果てぬ、嗚呼平和なる此里、圓滿なる我家、温なる舊知の人の心よ、思ひ出づる五とせのむかし、燃ゆるか如き功名の念に驅られて、父母のいなませ給ふをもきかで、此平和なる仙境を辭し、都大路に、あくがれ出し心の、今更に口惜しく、思ふも涙の種なりき、はや日は山の端に春つき、沈み行く餘波の美はしく我家の大檐を彩り、田の面を渡る風のそよ〳〵と心地よく、小川のせゝらきに耳も澄み、牛曳き歸る童の、ふし面白き鄙歌も興多く夕靄こむる山々の景色など實に千金にも値すべく感ぜられぬ、やがて訪れし人々も皆歸られ、母君が心盡しの調理に、一家團欒の樂しき夕餉しすみて、父君には年頃嗜みの謠曲さへ久々にて樂しう聞かれ、妹は琴取り出して其調べの上達したるを、ほこり顏なる等、如何に樂しきけふの我身よ、こよひの夢や如何ならん

評曰。還鄕の情味掬すべきものあり。術も其情にして異ならば、文は好を求めずして好。

# 筆のすさび

長門　杉上よし子

朝顏となむいへる花は、朝は艶よくさくめれど。夕には早や何ともなく、萎むものなるを。これに倣ふ人の心こそ、げにうたてきことなれ。世に風見となむいへるもの、屋根の上にたつるあり。げに今の世の風を量らむには、一定の主義目的なき學生を見るこそよからむめる。常に衣食のはでをつくして、餘財を厭はざるはあしゝ。されど、また、みだりにものおしみして、義理人情を顧みざるは、一しほあしきことに

こそ。つまり人の人たるは、奢らずむさぼらざるにぞありける。

ものしれる様するほど憎きはなしと。昔の人も言ひけるか。おはりに正體見あらはされて、耻さらすを知らである人こそ。げに〳〵惡なるきはみにこそ。

物事におくするこゝろある人は、何事もなし得られぬものぞかし。まいて心にもなく、つとめて、さあらぬ様するは、をかしとも、またあはれなり。

人といさかひして。おのれあしと思はで、人のみあしゝと思ふはあやまれり。おのれあしければこそ。いさかひもおこるものなれ。

緑色なる眼鏡にて物を見れは、ものみな緑りに見ゆるなれは、正しき眼もて物見るこそ、いと尊きことなれ。

おみなは、みめかたち、いかやうにもあれ、心ばせすなほにて、正しからむには、こよなき美人なり。櫻なす頬に、一双のくぼみをたゞへて、愛の漣をおこし。富士なすひたへに、雲のよそほひをこらし、春がすみほのめき渡るなむど、いかにゆかしくとも、外見の美、何の甲斐かあらむ。されは、世の少女たるもの、みめかたちのうつくしきをのみ、ほこらず。おのが心の、霧とおこり、霧と消ゆる事なく。白菊の露にやつれず、霜に枯れず操つくして、咲き出てたらむこそ、いとれがはしけれ。

評曰。好教訓

# 磯の夕

弘前　三宅亮子

あゝ行くて限りなき海原よ、われは今梢にかよふ松風に軽く袂吹かせつゝ、白花咲き匂ふ岩頭に立ちてなつかしき此景色を眺めつゝあり。やゝ紅帶びたる夕陽は、しづけき夕なぎの海原に、その影をおとして、かなたより我足下まで、金色にまばゆく輝ける、太き橋をかけぬ、ゆらゆらとゆらめきてさながら浮べる如くに。山の端に近づくに隨ひ、いよゝ大きくなりまさり、やう〳〵其光を收め、ます〳〵色は紅にそまり行くめり、海の面の光り行く色くさぐさに、麗しとも麗し。

光線全くをさまりて、紅玉ともうたがはるゝ、火の珠の如き夕陽は、今かくれ初めぬ。浮橋いつしか、くだけ散りぬ。あゝ美なるかな、この景色自然の神の、微妙なる筆もて画がき給ひてし一幅の絵畫とも見て、我が心をなぐさめむ、いつまでも長くあれと祈りつゝ、獨りながめ入る程に夕日いつしか西の空に餘紅をとゞめて、沈み果しぬ。

水と天と接したる所、けぢめ漸くわかずなりて、暮烟たちそめぬ、刻一刻ひろごり來りて、早や我が世をつゝみ了んぬ。帆淡く、漁歌遠し、移り行く西のそら、波の色、霞の光、あゝ今しばらくもがな。

萬象はやがて漆黒色にそめられつ、夜の神は、我が世を治めそめけり、そがまとへる烏羽玉のやみの衣を、かざらんとてか、今さめ出でし星のまたゝき、八日の月、淡く光を放ちそめぬ。

あゝ、この清き光を仰ぎ見しとき、夕榮の景色に醉ゐ居し我れは、始めてさめし心地せり。あはれ、我れは未だ此處にありしか、家にいませる母上は、さぞや待ち佗び居たまふらむ、されど、されど、我れは、この靜けき美しきながめをすてゝ歸るに忍びず。



あなあはれ、今まで幾たびか、思ひ出づることに、涙にさそはれて悲しみなきしことの、いまゝたもや思ひ出でられて、いつしか、我れは泣けるなり。大波小波に、自然の鼓うたせては、梢にかよふ松風に、琴のしらべもあるなれど

第参巻第拾五號　王あれら

おゝ父上よ、母上よ、兄上姉上よ、はては弟妹よ、我はしらずさけびしとき遥かに我が名をよぶ聲をきゝぬ。驚きて耳そばだつれば、まさしく姉君なり。あゝ我れ知らざりき。許し給はれ姉君よ、いざ我れかへらんさらば、さらば、海よ、波よ。覺えず天を仰げば、淸き光のまさり行く月、輝く星、何となう心ありげに。

評曰。濱の夕景色描き得て眞に迫る。

# 信濃の秋

信濃　山峯ふみ

朝からシト〳〵雨の降り續いて早や午后の三時をきいたが未だやみそうにもないドッカ頭の重くなる樣なイヤな氣がして來たので讀かけの書物を、其まゝに西の窓を開けたケレド雨はまだやみそうにもしない、一少さな築山の楓は今紅葉し初めてそれを洗ふ雨、落ちこ露のそれらには又た一入ほ光がまして見へる。今まで何處にか餌を拾つてゐる雌雄三羽の鷄は雨を避け樣として皆首を短かくしながら早足に木の下へと集まつた時今しも葉をたれた一滴が一羽の雌の頭に落ちたのでブリュッと一とふるひ抹だのよろけたをかしさ思はず一笑を催ふしフト古歌の浮かんで「……たのむかげとてたちよれば尙ほ袖ぬらす松の下露と藤房朝臣の故事も忍ばれて襟を正した。遠くは雨のために見へねど、二三日前霜の強かつた爲め一段の紅葉をました山野の草木が雨に打たれてしほれた、けれど田家の秋の自然のパノラマは亦一種云ふに云はれぬ快感を起こさぬでもない。返つて床の間を見やれば一昨日生けた藤袴は相手をなくして一人淋し相に見へるかすかに銀笛が軒より落つる雨だれと拍子が揃つてきこへると懷さしき聲で古來山河の秀でたる國は偉人のあるならい、聲に耳かたむけて憶ひを昔にかへせばかけ橋や命をからむ蔦かづらと俳聖の恐れし木曾の谷間にも旭將軍は出で天正の頃龍虎の威せし千曲の河邊にも幕末の偉人佐久間象山は出でしよ嗚呼信濃なる山中も亦愛すべきぞと思ひへば心ばかりは君のあなたに走れども身はなす業もなし。夕べの雲の美くしく朝たの空の涼しさに獨り友とす女學世界を繙けば開卷まづ君のあなたに貴婦人ありて

# 繪葉書集

## 一、東京の姉へ

北海　川島たか子

達これはお隣りの靜ちやんが眠つてゐる所であります、今年漸く三つですが、眞實に可愛らしい子ですよ、二重瞼のパッチりした目、眞珠のやうな歯、紅葉のやうな手、足のさきから頭の上迄みんな愛らしいので、毎日姿しキッスします、頰の邊がをかしく出來ましたが、是れでも大骨を折つたですよホヽヽ其れから濟みませんがれ姉さん、美麗な繪草紙を四五枚送つて頂戴な願ひ上げます。

## 二、兄の許へ

随分北海道は寒い所です、丁度一昨日でした天は鍋墨を塗つたやうにかき曇つて、肌を劈くやうな寒風が颯々と吹くのです、まあ一雪でも降るのかしらと思つてる内何うです六つの花がチラ〳〵とやつて来ました、一時間も経ちません内に野も山も畑も家も、見渡す限り白銀の世界になりました、これが今年の初雪です。

## 三、東京の友へ

これは私の飼つて置く金魚であります、目のさめる程赤い魚鱗と雪のやうに白い、ぶちの三ツ尾で、真實に可愛らしいですよ、卵の茹たのや麩のちぎつたのをやるとパッ〳〵と云ひながら小さい口で食べます、其れが可哀想に隣りの猫に喰れてしまひました、口惜しくつて悲しくつて妾泣きました。あと一疋しか居ませんが、一人りでは淋しいでしやうね。

## 四、前橋の從姉へ

この愛らしい兎、昨夜隣家に生れました、一度に八疋産んだのです、驚いたでしやう、始めは丸で白い鼠のやうに小さいのが一ト晩のうちに大分大きくなりました、雪の如く白い絹のやうな毛、耳の長い口の面白い、愛らしい目をギヨロ〳〵させて、ちツと人を見るのが實に滑稽ですよ私も二匹貰ひました。繪が下手に出來て兎に見ゑないでしやう。

# 窓の二十分

伊勢　河原なでしこ

小春日和の暖かい光線が、斜に書斎の小窓からさし込むで、今読みさしたワオルヅワオルスの詩集から、陽炎でもたちさうな、それは〳〵何とも言へぬ程心持ちの好い光景なので、夢からさめかゝつた様に、四邊の何物かを見回して居た。と見ると、廣濶な野面には、農家の烟が薄霞の様に棚曳て居る、紅葉の散り残つてる櫟の梢には、あるかなきかに狂花が匂ふて居る、ほかり〳〵と氣の浮き立つ小荘松原、其處には里の童男童女が面白い唄を謡つてる、鶯も啼きさう柳も散りかゝつた枝から新らしい緑を吹き出しさうに思はれる、誠に感情的な、愛らしい配合が、水にも、木にも、山にも、農家にも、美の神の筆で塑捧されて居る、鳶の輪も長閑で、稲雀の囀りも音楽のやうに聞きとられる、豊かな野の空、豊かな里の様、如何見ても感情的である、詩的である、我は此光景の中に、牧童の牛に騎つて來るのを喜び迎へた、籾を積むだ肥馬を白手拭冠つた少女の曳て行くのを喜び送つた、一筋白き水の邊りには、紫色の花も咲て居る、紅の花も匂ふて居る、神秘、色彩、美術、瑞氣どうも飽かない活畫なのである。

其清い美しい、神秘な野に、我は一點の汚れを見出して、窃かに不快の感にうたれた、手にとるやうな醜態、あり〳〵と聞ゆる痴話。一個は女學生、一個は中學生。夫れが世間を憚らずに……。これは強ち我が僻目のみでは無かつたであらうあゝ、腐落！我は思はず地に唾して、再び其不快な影を追はうとはしなかつた。

時しも、彼方の小高い山の中腹から、色々に彩どつた紙旗を數十本、どッと揚げた吶喊の聲と共に、風を起し、雲を喚むで、馳け登り行く、里の子の軍遊び、山上には何時か敵の大勢が楯籠つて居て、矢報吶喊の聲を揚げて居る、木の間、岩の狹間を猿のやうに働いて居る子等のけなげさあなやと見る程に攻め登つた軍勢は山上の敵を何の苦もなく追散らして、意氣揚々の大音聲に、大日本帝國萬歳を三唱した、これは露兵を敗つたのであらう、かくて悠々隊を正して、勇ましい戰勝の歌を謡ひ乍ら、山を下りて往つた。あゝ、幾卅數日本男兒よ、近き未來には活潑な軍人となつて、陛下の爲、國家の爲、命を捧げ、誠を盡して、偉功を奏し、國威を八倹に輝かさなければならぬ、第二の日本軍人たる子等よ、第二の忠臣たる子等よ、長くも、陛下は汝等の成長を楽しみに、常に御心を汝等の上に注がせ給ふことは、既に難有教育勅語で承はつて居るであらう、克く其聖旨を承はつて、先天的の義務を盡さなければならぬ、祖先の遺訓を遵奉しなければならぬ、夫れは必定盡すことゝ信じて居る我は、子等の行衛を眺りつゝあつたが、或一種の電氣にうたれたやう、世のあらゆる不平を忘れて了つて、思はず愉快と、絶叫した。

鳥が一羽、柹の梢に来て珠玉のやうなのを啄まうとしたが、嘴をあてるや、否や、柹は忽ち地に墜ちて了つた、鳥はうつとりして嘴をあいたまゝ

自轉車隊の一行が通過した。

# 河畔の夕

備後　保持やす子

夕暮の景色の美しきまゝに何心なくうす紫に色どられし野菊の露そぼちつゝ馬洗川の邊にさまよひいでぬ

今朝隣の翁の遠き村祭の夜より雨なし實に久しき事よと物語りしものをかく川の水量まされるはさては水上の　時雨にか尾崎の山のみどりいと美しく影を落して里の童の投げやりけむ白き萩の花束あるは高くあるは低く浮きつ沈みつ　流れゆく後より夕日をあびたる岸の櫨紅葉二片三片ひらひらと舞ひ下りておひゆけりいかに面白き眺よ

今しも夕陽は中禿げかゝりたる山の後に沈み清めし如き青空にぱつと紅の雲を流せるが。　やがてばら色オレンヂ色とうすれゆき果ては此處の谷彼處の山のあはひより天女の帶引ける如き夕靄ひろごりゆき南天の山の麓をぼかし初め網もすゝみて　今迄彼方の岸より白らなる樹橋をなして夕風にそよ〳〵となびける巴の松も炭賣る翁の影と共に消ねてあたり一面の霧の海となり馬洗の流れのみ白く何事をかさゝやけり

あゝ靜けき夕よとつぶやく折しも遠寺の鐘霞をつらぬきて餘韻長く長く傍の眞綿の薄風なきにゆらめきぬ

# 水のすさび

小石川　春海潮子

自然の造化のいと靈妙なるはさるをながら、水のすがたのこよなう清淨にして趣深きは、げにめでたき極みになむ。かぎろひの春たちて、四方にうす紫の霞たなびく頃となりぬれば、いさゝ川の流る水は、鈴の音いとやさしく、春の女神の慰藉の啓示を囁くに似たらむかし。戀にやつれし乙女子が、つみてし菫の花束に限りなき想をこめたるを、君がほとりにはこび行く、春の水こそいと優しけれ。佐保姫の霞の衣やう〳〵綻びそめて、つれなき風に任せつゝ三つ四つ二つ散る花の、行く水の面に點じては、翅ものうげなる蝴蝶の羽休め處となるぞ云ひ知らずあはれなる。炎威金をとろかす三伏の日、渺茫かぎりなき沙漠を旅するものゝ、たま〳〵椰子の樹蔭に潺湲として湧き出る泉をみいだし、傾け盡す三四杯の水は、げに渴を癒するの清涼劑にこそあむめれ。桐の一葉に龍田姫のおとづれたまへば、水の音もそゞろに閑寂の趣を添へ、千早振る神代も知らぬ龍田の流、から紅に水くゞるてふ幽趣をぞ示すなる。冴ねゆく月影に小萩の花の上における露のしら玉は、あはれに鳴き渡る雁がねの涙かとあやしまれて、いとゞ秋の哀の身にしむ心地ぞせらるゝや。

さはれ水の趣深きはその變幻百出にして、應接に暇あらざるにこそあるなれ。雨霧雲露霜さては雪など、皆水の變態ならざらめやは。まだ眉にこもりたる柳の絲、烟らむ許りに春雨のそゝぎたる、恰ら南薔の幽雅なる態を呈せるを見るが如し。早稻とる頃取りおひし雲の峰の碎けく〳〵て、忽ち一天墨を流したらむが如くかき曇り、一陣の風を魁に豆大の巨雨驟然として襲ひ來り、須臾にしてまたもとの如く、この世は恰ら濯りたらむがごと、杲々として天の惠に浴せるぞめでたき。秋の夕蟲の音さへいと淋しきに、しと〳〵と降りそゝぐ秋雨は、諸行無常の鐘の音に和して、いとゞ淋しさをまし、遊子をしてすゞろに故郷の空を想ひおこさしむるぞ果敢なき。あるは霧となりては朝夕の風色に無限の趣をそへ、露となりてこの世をおほひては、恰ら太古にも似たらむが如き鷄の音にこよなう悠久の味をこめ、霜となりて現しては木々の梢をから紅にそめなし、雪と降りては冬枯の梢に時ならぬ六花をつくるなど、其折々の移りかはりにつけ、其すがたも亦變りて永劫にその趣をぞ添へたる。あはれ水は惠みある天の神の賜し給へる慰藉のエンゼルなるよ。

# 山家の悲しみ

函館　木島武子

世に淋しく心細きはげに山里の侘居かな、あはれ知る人もなき詫住居、なつかしき母様とたゞ二人、今年も又涙のうちに春も過ぎ秋もいつしか暮れ行きて庭の破れ垣霜白く、咲亂れし白菊もおく白霜になかされて、昨日一片今日二片と散り失せ、今は名殘なく枯葉のみとはなりにける、かゝる淋しき詫住居なれば、訪れ一人音のふ人もなく、朝な夕な軒端を音する、木枯のいと心細し、枯葉を落す嵐の音に夜半の夢路幾度か驚されつ、一昨年の秋父君が逝れし後は、母様にもいたく衰へさせられて、雨そぼふる夕べなど、折々昔のことども思出されて今の境涯の果敢なきを嘆ぜられ、はては妾のことにまで及ぼして、あとはいつも涙にむせび給ふなり、その度ごとに妾の胸のなやみ針さゝるゝよりもなほつらく、

母様には此頃の夜寒にも御厭ひなく己が冬のきものつゞくらんとのたまひて、妾の止むるをも耳にせられず小夜更くるまで臥せやらず、傍に讀書に餘念なき妾にむかひ、もはや夜もいたく更けたりはやくいれられよとおほせられて、老の身の冷へ給ふも心せられず、妾のことを思召さるる御心根身にしみ／＼とありがたく、いつも笑にまぎらして涙をさふる母様の恩、思へばなか／＼におろかには思へぬことぞかし

今宵は母様の珍らしくも常より早く臥床に入り給ひたればなんとなう心安して一入讀書に餘念なき折柄、日頃親しみ深き都なる友垣より一通の玉章は届きぬ、未だ封おしきらざるになんとなうなつかしく、友垣にはさぞやすこやかに學びの途に怠りなく、江戸川のほとりに樂しき月日を送らせ給ふことならむと、封をしひらき文讀めば、何ぞはからん友垣には故郷におはす母君の突然に病の床に臥せられて命旦夕にせまれりとの悲しき報に接したれば、とるものもとりあへず今より旅立して舟路遥かに佐渡が島根の母君の御許に歸らんとす細々のことは何れあとより申上げん、なよ君よ今日此悲しみをになひて故里の空に立ち歸らんとする妾の心察し給ひてよと亂れがちなる筆の跡、妾はしばし涙も出でず玉章手にしたるまゝたゞ茫然たりしが漸く我にかへりて文机に向ひ、いざこれより我が心の奥をしたゝめて悲しみまどう友垣の許に送らんと影ほの暗き燈かひなぜて筆とりなほせば、一陣の夜風颯々として雨戸をおそひ、隙もる風のひとしほ身にしみぬ

## 鐘の音

河内　大矢たね子

◎物靜かなる山寺の鐘樓に、美しき夕映の色を眺めて、茫然と佇み居りし一人の僧、俄に思ひ出したるものゝごとく、つか／＼と歩み寄りて、そが痩せ衰へたる細き腕に撞木の綱を取るや、一おもひに力込めて撞き出したる夕暮の鐘、霞を破りて陰々と四方に廣がり行き、やがてその音のかすかに消ねなんとする時、散り殘りたる紅葉二三片、風無きにひら／＼と僧が墨染の袖にかゝるを、知るや知らずや、口の中にてかすかに念佛を誦しつゝまたも一撞き、あはれこの鐘の音よ、林に、森に野に山に、やがては人の里にひゞきゆきて、如何なるおもひをひくらむ

◎夫の棺さびしく出したる夕、佛前の新しき戒名の前には、香の煙ほそ／＼と邊りをさまよふほとりに、まだうら若き妾の、五つ許りなる小兒を抱きながら、袖もて顔を蔽ひて俯面き居たるが、何思ひけむ、頭上くる折しもあれ、陰々として響き來れるは程近き檀那寺の鐘の聲なり。母樣あれ入相が、と母の顔打まもれる小兒を、猶もしかと抱きしめつ、おゝ鐘が、父樣も今頃は土の下にて、あの鐘の聲をきゝ給ひ、極樂淨土へ到着し給ふぞや、と許りにてわれをわすれて泣きくつほれぬ、あはれ鐘や、無情。

◎ある名高き寺にて、しばしが程のうちは定りつる住持とてあらざりしが、こたび徳高き僧の居座らせ給ひぬ。今日こそその說敎あればとて、村中の男女、老も若きも、それを聞きまつらんと美しき衣着飾りて先程より撞き出したる報せの鐘の聲をたのしと聞きつゝ皆喜びて行きぬ。今しも我が門前を過ぎゆく一人の老婆あり、皺だらけの手に水晶の小さき珠數もちたるが、傍への人に、「われはかく片足を棺桶の中にふみ入れたる身の、何時死するやも計られれば、おぼつかなくともせめては世に在るうちに一度は有り難き御僧の說敎を聞きまつりたく思ひ居たりしに、今かくおのが村に徳高き御僧の來給ひしは、嬉れしき極みとぞ思ひはべることにてその僧の居ます御寺はおのが骸を埋めらるべき寺なれば、一し

ほうれし、あなわが幸深きとよ」と語りつゝ顔には、いふ許なく希望の光、ほのめきぬ。

## 眠れる兒

横濱　名木山勝子

柴垣よりもるゝ守唄の聲のさも美しき、しばしありて唄の主は見ゐぬ。十を二つ三つ計りなるが、目元口つき何處となく愛嬌つきて、其背に負へる兒、これはまた罪なき幼な兒、小首傾けていと心地よげに眠れるさま、いとらうたし。はらからにもやあるらむ。少女は例の美しき聲もて徐に歌ひつゝ、赤き毛絲もて編めるは帽子か巾着か。小さきやさしき肩の上、豊にふくやかなる其頬、林檎のやうに赤みさしたるが、閉ぢたるよ愛らしの眼は。紅薔薇の蕾にも似たる小さき脣綻ばして、片言まれ居しはいつぞ。今や華胥の國に遊びて、そもいかなる夢や結ぶらむ。あゝ餅の如き清き兒。左の小さき拳は、固く緊く握られて、少女の肩に、殆かも枕のごと置きつ。右手はおのがつぶ〳〵に肉つきたる足のほとりにさげて、なかばはや打しほれたる萩の花枝、しかも落さで持たる愛たさ。頂の髮のいと濃きを、蛇の目とやらにそりのこせしは、齢いまだ二つ計りにやあらむ。

少女はやがて唄をやめて、編物の手は尙動かしつゝ、柴垣の横手に入りぬ。秋の孤蝶羽もたゆげにあなたより來て、そのあとや追ふ……そもいづこに。

## 茸狩に誘はれしに

伊勢　生川てつ

今朝花賣の、持ちまゐりし、ねずみあし、しめじ茸などを見て、ふと去年の茸狩の事を、思ひ出で候。こゝ二三日の雨天にて、くさ〳〵の木の子、さだめし、多く生ひ候事と思ひやられ候、付ては幸ひ明日は、日曜日に候まゝ、天氣よろしく候はゞ、さゝやかなる、割籠などをたづさへて、垂坂山へんへ、木の子がりにまゐりたく思ひ、兩親に乞ひたり候處、よき道づれあらばまゐられよとの、言葉を受け居り候、折から御ふみ下され、誠にうれしく存じ候、心あひの友と、松の樹蔭を、あちらこちらとさまよひ、茸狩いたし候は、誠に私の好ましき、あそびにていと〳〵面白く存ぜられ候、御言葉にすがり、何にもすておき、御辭退なく參じ申すべく候、なほ申上げたき事、やま〳〵に候へども、あまりうれしく候て、筆も思ふ樣に、まはりかね候間、のこる御話は、道すがらにとゆづり、先づは御うけまで。あら〳〵かしこ

## あゝ愛兒

河内　櫻井喜子

つゞら折なる谷の細路を、薪背に汗あびて、家路を急ぐなりはひの苦も、夕日うするゝ柴の戸に待ちわびて、紅葉の如き手を擧げ、父よ歸り

給ひしかと、笑美しく迎ふる吾か見らの優しさに跡なく消ゐうせて、飢と疲とに惱みし顏も、覺ゐずのびやかにうち笑まるゝ

○早蕨に似たる双手を、千守の背よりさしのべて、今しも野より歸り來し母に、乳房を求むる兒の可憐さ、あはれ塵にまみれ汗にぬれし袖に我か兒を抱きしめ、淡紅薔薇の如き面わに頰ずりする母の優しさ。

○なれぬ男の子守唄、涙まじりのふし哀れに、泣きしきる乳兒慰めて、寒き月夜に垣根さすらひ行く乳賈こそ、いたはしの限なれ、泣く兒より泣かるゝ人の心の底やいかならん、いとし兒をあとに殘して、長へに眠りし慈母地下の夢、穩なりや。

○障子にのころ小さき指あとながめては、物づたひに覺束なく歩みし姿思ひ出で、孤衾冷かに夢就らさる夜半には、乳房さぐりし面わ浮ひ出で聞し頃擧げし人の兒の、草履の紅緒可愛げに、跳せ歩むさまを見てはゐ耐ゐす泣き咽ぶ、あはれ兒を失ひし人。

# 秋の夜

大和　上田すゑ

園の公孫樹がいつも御月樣の御相手申しあげ、どのくらゐ嬉しうござりませう　凌霄花は枯れた樹の枝に匐ひ上りまして、いたう見ようなりました殊更今宵は晴れ〳〵としたよい天氣でありまして僅に白鷺のみの毛のやうな雲が一二片ちらついてゐる許り茶釜の音がしん〳〵と、たちかけたころ黒塚の松の梢のお月樣がゆつとお昇りなされましたあたりの草や木も鳴りを鎭めておむかへ申すかのやう、そゞろ衿正すやうな心もちが致します銀！青！白！一たい何といふた色なのでせう、　まあ冴え澄ました明鏡に燈火のはねてゐるやうなとでも申しませうか澤山の星も今は、おひかねなされました

目眩ゆぐるしい庭さきも今宵は全く繪の樣に見ゐます祖父上が　聽泉亭とおつけ遊ばした茶の間は樹立をもれて夢のやう筧はやはり朽ちたまゝで古めかしい滴々の音を絶ちません

今は八角金盤の葉を辷つて秋海棠の茂みへ落ち込んだのは蝸牛でしよう、　左樣「かたつむり角ふりわけよ須磨明石」と云ふ句を思ひ出しますと一昨年の今宵が偲ばれます丁度須磨の客舍に浪の音を聞きつゝ此夜を語りあかした日であります、　お隣りのみさを樣もやはり此月を御覽じてかお上手のバイオリンが聞ゐてまゐりました兩樣が冷ゐ〳〵としてまゐりましたので　此の間に這入りました月影は斜めに机の上迄、冷やかな氣は室一ぱいに滿ちてゐます

兄上は御自慢の篠笛を、わたくしは唱歌を

月はます〳〵澄みわたりまして夜はいよ〳〵神々しうなりました、兄樣今宵は何となく氣が崇いやうに思ひまして　別の世界に住居してゐるやうに感じますと申上ましたら、さう　月ば美の極致だ月夜の深更は殆ど仙境だからの、――と、仰しやつて何だか六かしい事をお話しかけに、なりましたので、それは止めて歌か詩のお話でもと申しますとしばしお考ゐのすゑこんな歌をお示しになりました今の新派とやら云ふものだそうでございます

皆ならば胸のいたみの消えぬべきか

霧深き野の月夜戀の譜

また兄上の戀のお歌いやですよとからかふも則に深き意味のあるのではござりませぬ

評曰。情竹可掬。

## 寫眞送られし友へ返し

豐後　小栗栖光子

秋高く馬肥ゆ、人の心も自ら引しまる此頃、野菊さく野に、親しき友と遊びくらしたら、どんなに面白いでしよー。今お盆の御飯いたゞいて、婦女が間に目をさらしてたとこに、下女の郵便でと持て來たのは、おなつかしい、貴女のお寫眞なのよ。うれしくつて、すぐにお目もじ致しましたの、まあお可愛らしい、鈴のやうな御目元、凛としまつた御口付、もう〳〵うれしくつて、じつと見つめてゐると、御目元御口元に、笑があらはれてゝ、まるで、私に何か云つていらつしやるやう、うれしさに、家中とびまはつて、母樣に叱られてよ、だつてうれしいものれ、其から仕舞ては出し〳〵して、其日はお仕事も手につかず、始終東れ樣〳〵つて、いひくらしました、ほんとにどうした、やさしいお方でしようと申すと、何だかお世辞めいてきますが、私の數あるお友達の中、貴姉程、理想に叶つた方はないのよ、母樣にもそういつて、自慢しました、貴姉、此頃のお天氣に、可愛いゝお妹樣、おつれになつて、面白い秋の野を散歩なさるでしよー、後生だから、記事など聞して頂戴な、私は御承知の川柳なものですよ、どうぞれ、御見捨なく末長く、可愛がつて頂戴な、まだいろ〳〵申したいけども、今日はこれで、失禮します、さよなら、

## 田家の秋の朝

信濃　小林森子

消え殘る燈火の影かすかに照し、あたゝかく抱き寢し幼子の圓き笑顏可愛らしく、昨日の遊びの勞れにや、御心地よげにすや〳〵と眠るなり、そも如何なる夢をや結ぶらむ。未だ目醒ぬ間にと身仕度もそこ〳〵に、鐵よ鎌よと手取りつゝ、今朝も嬉しく小田の稻苅に出でゆくめり。門べまで出でしが尚幼子に心や殘さらむ幾度となく首傾むけて顧みつゝ、夢な驚きで踝冷へなさせそ。とつぶやきつゝも、草鞋穿ちて出で行きぬ。殘んの星影三つ四つ森の上にまたゝき、二十日餘りの月いと青白う木間よりもれ、四方はまだ明けやらず霧深う立ち罩て、近きわたりの木立小暗く、遠ち方は見え分かずして夢心地するに、棲温く眠れる小鳥もまだ目覺めぬにや、千代よぶ聲もなし。やがて田圃に至ればいと豐かに實りたる千穗の頭うなだれて、いとも重げなるに、淺く置きそふ霜さへ降りて、いと堪へがたく見えけるが黄金色なるも白金色に變じ、星の光を浴し心の底までも爽さを覺ゆる樣なり。やがて目の當りより、鎌にまかせて苅る音のサク〳〵といとも嬉し、漸く豐坂のぼる朝日の光きら〳〵と

東の方に顯れ、黄、絳、紅などとりどりの妙なる色、天津神の配合になる、黄田は限どられて見え、其の間に散點する人家立ち登る朝げの煙のしげく豐かなるは、榮え行く御世のしるしにやいとうれし。苅りたる稻もいと多し、いさ歸らんと矢筈のものは、稻束を背負ひつゝいそぎ家に歸りぬるは、朝けの仕度が成るは幼子の身上に心掛りてかならむ。
母は歸りぬ鍬も鎌もなげ置きて、草鞋とく手も遲しと洗足のまゝにて這ひ上り、幼子如何にと覗うに、おぼつかなき足のひよろひよろと、椽先に出でゝ朝より勇ましくも喇叭片手に、進軍唱歌めきたるものなど小聲に歌ひ居たる、いとも嬉しや無邪氣に遊び居たりし幼子の、母の一聲に驚かされて振り向くや、楓に似たる双の手を上げつゝ走りより、抱きつきて張りつめし乳房を我物顔に含みつゝ、他の一つの乳房は小さき手にてかたく持ちたるなどげにもあどけなし。母は抱きながら朝げの用意もそこそこに調へ、夫と向ひ膳にて食事を樂しくをへ、やがて定めの子守の來るがまゝに背負はせて、再び鍬鎌を取りて出で行かんとせしが、又も幼子の傍により、美く柔かなる頬に接吻し、頭をさすりて二歩ばかり行きしが又一目見返りて、泣くな可愛子晝けまで、其時は新らしきこの乳を、と殊更に笑顔して見する時、夫に聲かけられて、驚きて走り行きけるこそをかしけれ。

## 一ヶ月間の歸省

松江くら子

余は常に謂へらく、世に姑と嫁の中らひの面白からぬは、なげかはし、そは何れかゞ邪慳なるによることならん、されど我だに誠の道を盡さんに、姑御とて何の事かあるへき、と我縁談のありし時、舅姑の猶若く、剩へ女公等の多きをもて、少からず躊躇ひたりき、されど、余は未來の夫さへ頼母敷ものなりとせは、財産の多少、身分の高下何かあらん、況て兩親及兄弟あるは、なかなかに、心づよく、何をするも骨折がひのある事と、充分滿足して、此に縁談は調ひ、目出度結婚の式も擧けぬ、舅姑につかへ、小姐とめに、親しまんこと、かれての望なりければ、一日も早く對面せんと願ふものから、鐵道の便もなく、人力車さへ通はぬ故郷なれば、汽車の通る迄はと五年がほどはすぎぬ、葉の行くさ、雁のかへるさ、につけてかきかはす文のおとつれも、いといとなつかしう、花のねまひ、霜の夜寒につけても、故郷を思ふ種ならぬはなかりし、去年の冬頃か暇ある身となり、又汽車の便も出來たれば、此の機こそと、切に良人に乞ひて、漸く事をきめ、師走末の八日に、東京の地を出て立ちて其翌廿年頃夢にのみ見しなつかしの地に參りつきぬ、今は積年の願もかなひ、孝養を盡し親睦を謀らんこと心のまゝなり、舅姑の君何れも情深なるお方なる御方々なり、余を待ちたまへること、勿体なきばかり、弟や妹達皆やさしく、愛すべき方々なりけり、されば余は唯そのいはるゝまゝに從ひて、親類への披露、墓參、年始のいそぎなどにて、知らずしらず半月はかりを過して後は、子守りの隙には、何くれとあらんかぎりの手はつくし、たゞ直の一家族として、隔意もなく昔の物語なと承りて、共に涙ぐむことも折々なりしかゝりし程に、我が夫は遠つ縣へ赴任すへければ、とて余をむかへ給ひければ、其の意にしたがひ、余は二月のはしめ、暇乞して、まかることゝはなりぬ、我はよき姑をもちて世の人のかたしといふなる坂をもつゝみなく打こえぬ、と喜びしはそもあやまりなりけり、都にかへりし後、余は夫よりいふも恐しきこと耳に入

れられしこそ是非なけれ、そは母君や妹よりおこせたる文のいつれも余に對する不滿足をもらしたまひて、是も全く我が夫が余に對して甘きよりかゝりしもの、と恨みたまへるなりける。余のむれははりさけん斗りにて、口惜しなんどいふべくもあらず詫び申さん言の葉もわかず、あゝ余がほどに、父君母君を慕ひて、逢々歸省せしは、何の爲なりしか、いはずもあれ。余はわが忠實なる眞心を親兄弟にかたりあかし、互の心中を明にし双方の間を一層親密にして、一家の圓滿を謀りたゞに兩親を安し奉るのみならず、祖先の御威嚴をも輝かし來らん、との一念の外はあらざりしなり、然るに心と行とかくも懸隔して、余の本心をあらはすによしなく、かゝる不興を蒙りしが、返す〲も口惜しさ遣る方なし、今は夫に對しても心おかれて、恥しく、今一度、歸郷して、先の不孝を詫ひたしと願へど、さる事もかなはで遂に今日に至りぬ、余は始めて義理といふものゝ難きをさとりぬ、余はあまりに正直すぎしなり、お上手なかりしなり、余は舅姑は尊きもの大切なるものとは思へど、心をまげて從はんとはせざりしなり、余は嫁してより主婦として、不及なから家政をとる事すでに五年、子供もあり、もはや花嫁の時期はすごしたり、從て萬事に、家の爲、人の爲を思ひこそすれ、「嬌羞を帶ひてうひ〱しげなる」などいふ點はかけるなるべし、猶余は小しうとめに就ての注意を誤れりし、こたびはからすも、某賢女史の「姑に事へる秘訣」てふ文學をよみて、あゝかくも務むべかりしが、と一々身にしみて過し事を今更悔ゆれど及ばじ、あはれ之を歸郷の前に於て見るを得たらんにはかゝる悔もなからましを、六日の菖蒲なるこそ口惜しけれ、余は實に惜しきことしてけり、一度損せし御氣色また取りかへさんは中々容易の事ならず、我こそはと始めより心かけし抱負を、全く水泡に歸せしめしこそ本意なけれ、されど幸にして、余の姑は之を他にもらしたまへるにもあらず、たゞわが身の前途を憂ひたまひて、殊更いひかたきをいひて、注意を促したまひしなり、余は大に感謝せざるべからず、今後舅姑女公等に仕ふる機なほ多し、既往を鑒みて未來を慮るは、最も肝要の事なり、といまはたゞ罪ふかき身をも打忘れて、偏に御心の和かん樣に祈るはかりなりけり、こゝに余が經驗したりし事の一ツ二ツを擧けて、今より舅姑に見えたまふ娘達に、告げ參らすになん

平生いか程やさしき舅姑なりとも、嫁となりては、最も言行を謹み、かりにも侮るごとき擧動あるべからず、都會の方は、さのみならねど、田舍に引籠る老人達は、たとひ此方より侮る心地なくとも、自ら若き、ことに、學校の教育を受けしものなどに對しては、別して遠慮せらるゝ氣味のあるに、こちらよりも其心して、何事も下より出でゝ、大なる故障のなき限りは、舅姑のさしづに從ふがよし、我が考へしことたとひ正しきとても、賢しら立つと思はれては、骨折損なり、まして考へ違ひすることなきにしもあらぬをや

嫁の小しうと小しうとめに對する扱は、くれ〱も最も意を用ふべし、某香女史の說したまへる如く、女公等とて鬼にあらず、實はやさしきが多し、されど女公等は、皆これわが命にもかへたまふべき最愛の人なるが故に、其信用も嫁に對するものよりも、厚きは當然の理なり、其の愛は、我が身が父母より受くる時は、さほどには感せぬものなれども、實に豫想の外にあるものなり、さるを女公等のひが事などありたらん折、心なくそを嫁の口より姑の耳に入るゝがごとき事あらば、姑は我が子を信じたまふとの厚さの餘り、之を喜ひたまはぬのみならず、嫁の身にとてかゝる違もあるものを、と、とんでもなき不興を蒙り、苟且の事よりして、不和を來すこと多し、女公等に惡しき事あらば、眞實を盡して直接

にさとすはよけれど、舅姑には決して忠言かましきこといふへからず、眞に血緣あるにもあらず、嫁たる身なければ、疎せらるゝは當然のこと
なれば、我身を忘れて女公等を眞實に親愛すべし、此の他親戚及出入るものに對しても注意すへきこと樣々なるへけれどたゞ其主なるもののみ
を擧けて此に筆を擱く。

## 妹の上京を止む

東京　市川美知子

いつはりの世かざりの世、血なく涙なき、これぞ又の名を都と申し候ふ、ゆめ都戀しとは思すな、いとはしき名よ、汚れの世は香餌を垂れて、清き御身を釣らむとする恐ろしき名に候ふぞや、再びは都とも思すな、神は美しき御身に幸ひし玉ふべく、仍は暖かき愛の樂園に消きうまいなつゞけ玉へかし。

ありとある世の、若きを苦めたる身の、顧みれば都といふ字に憧れし、われもひとりの、さなり怪しうも淡き田舍少女の胸を亂して、前後無差別に走りけむ、昔思へば夢の夢に候ふ、儘ならぬ世とは申せ、これは又あまりなる違ひにも候ふかな、多くは聞ねじ――、空想の幻影は敢なく消えて、悔の八千度、殘るものは涙、儚なき蜉蝣の夢を辿りし、昨日と思ふに、淺ましく又しても通ふ夢路や、なつかしき故山の水、美しき野邊摘みし若草や、追ひし螢や、涙なかりし昔戀しきかも、樂しきまとゐ捨てゝ、われから育なく、宿世なるべし泣かじとは思へども、しかすがに夜中の寢ざめ苦しき時も候ひき。

追憶の甲斐なき身ば、切めて〳〵可憐しき御身の、同じ樣なる苦が味ひ玉はもなと、見るがつらく候ふ、殊に望ませ玉ふ看護婦、女子の天職――實に美しくも候はめ、白衣の裝羅、長う引きて、さながら女神の像の如き姿も、爾て裏面を窺ひ玉はゞ、思ひ半ばに過ぐるものある亦な、申進じ候ふ、終りに一言申聞ね候ふ、罪なく汚れなき自然の山水に一致して、清く美しき世を過し玉はむ亦な。

## 病院より

下谷　嵯峨淑子

きのふ別れ參らせてのけさ、すぐ又君戀ひしうて。
わりなのあやし心かな、さりともと、強ひて抑ふれど、あゝ、ねたへず候ふ。
多くは、多くは、申し上げじ、あはれ、今一度、おん暇の夕べを。かならずよ、まち上げ候ふ、なつかしの姉君よ。
これも心幼き妹もち給ひし御不幸とゆるさせ給へや。淋しき夕ざり、今一時もと、み手に縋りても、おん止めせまほしの胸、からくも鎮めて、階まで上り來し淚含みて、さらばとて靜かに、扉あけて立出で給ふ御後影、見送りしわれの心。おもひやらせ給へかし。何となうすさまじうて痛き頭さながら、枕に俯してきけば、御健げなる輕草履の音。――それも暫し。――忙しげなる廊のゆきゝに消ねさり候ひし。淋しう淋しうて

荒涼たる感に、あやなう亂れつゝ。仄暗き行燈の下に、廊のわたり、白衣の君が四人みたり、人種々の浮世語り、なかしげに打興ぜるに、いささかの慰めはねたれど。あゝ。ようべ、そは、追憶のなか〳〵なりし。み物語の有りし。其誓しにこそは、人の世の辛さも、病の惱みも、忘れはて候ふな再とはあまり。唯々今一度よ。近きに必ず渡らせ給へかし。るな。今七度。あゝ。必ずよ。戀ひしの君。

## 磯の夕暮

山口　平川糸子

夕日の樹なき山にかくれんとして名殘惜しとか風なき海の面に赤き光をなげて銀の浮橋をかたちづくりしを始めにて淋しの糸もておまれし夜の綱はわが立てれる磯をもあまさで何れよりともなく掩ひ果てぬ

松生ひたてる島がくれ眞乳の少し西南にふくれて靜かに〳〵藍縮の知き平に且つ物音たねたる海をすべり行く棧云ひしらぬ神々しさを覚ねつ遠き近き禿山深山さては賤が伏屋の軒かたむきしも白壁の門構せるも等しくまどかなる夢を結ぶべく眠りにつき濃き淡き炊ぎの烟は此の眠りを破らざらんとてか忍びやかに立ちあがれるも折とて一入思ひ入れ深くかく死せるが如き天地にしげくなりまさりたる鈴虫松虫の音のみは活きていとあきらかに嘯きのゆすりの節々も妙に我にもあらず眼は海のあなた何を見んともなく只にそゝぎて磯にたゝずむ折靜まりかへりたる街をひた走りに縫ひ來れる遠寺の鐘の長き餘韻に驚かされ我に歸れば彼も驚かされてか巣の戸に急ぐ夕鴉のかなたに乘り捨てられし小舟をかすめて低く飛ぶもあはれに潮汲むと設けられし磯のはれつるべに片われ月のかげなほ淋し

## 秋の半日

紀伊　池水ふみ子

春かすみ、かすみて去にしかりがねも、早や秋霧の上に鳴きわたるきのふけふ、春の眺にも劣るまじきを、いかで仇にすごすべき、夕つ方より何地ともなく立ち出でぬ、道の傍には名も知らぬ草咲き亂れ、ゆかりも深ききちこうの花、すゞ頼もしき撫子の花、たがぬきかけし藤袴など、とりどりに匂ひ出で、うしろめ高からぬさまして女郎花のそこかしこに交れる様實はん方なき眺にて、げにやどりはすべき野べの景色かなとつぶやきぬ、見渡せば田の面には黄金色なる稻穗は實り、多き重さに堪へで打ふしたるは、千里の波の打ちたらん樣なるにこゝかしこ男女打突りて豐年と呼び豐作とのゝしりつゝ、かり取るさま、よそ目にもうれし、田舍の秋のかゝるさまは都人の夢にだも知り得まじき事になん、全くかり取られたる田の中に、一つの案山子幾度も雨にうたれし如く、今にも倒れんとするさまいと哀れなり、歩を進めけるに賤家の軒端近く、百年も經しかと思ふ計りの丈高き木に澁柿のみの、うみたるが美くしく見ゆるに、鳥の三四羽宿れるもいとをかし、其家のうしろに見ゆる五六本の紅葉、花やかなる夕日に輝きてまばゆきばかりなる夕暮の空と美をきそひたる一入見ばねあり、いづくともなく歩みはこべば危うげにかゝれる

[illegible]に至りぬ、折りしも幽かに聞ゆる夕暮の鐘の音、絵額は細く長く川づらを流れ行く、軒傾きし賤が家の端近う糸をしめて影うすき夕月なよすがにつゞりものせる媼の手許の覺束なげなる似るものなう憐れなり、あらゆる萬物を黄金色に染めつゝありし夕陽は今將に沈まんとして入相の鐘に彩られ、木の間飛びかふ鳥々は夕べの別れを歌ひつ、野山もる黄金の征矢それさへ消えうせて四方はうす絹を張りたらん様に次第々々にくれゆき、鈴音豐に、追分節面白う歸りゆく、馬子の姿も聲も幽かに……、夕暮の空色つきたる木の葉の四ひら五ひら落つるも哀れ埒に念ぐむら鳥の聲も騷しく松虫鈴虫の聲をつくせるに競ひてさう〳〵しさ言はん方なし、やがて地は青黑うくれ家々の障子に燈火紅に見ねそめ、折り〳〵樂しげなる笑聲聞ゆ、今やこのあたりの村は自然の胸に靜けき夢を結ぶにやあらん、妾は此の佳致夜の幕に被れんとするを惜めども甲斐なしや、妾は歸れり、盡きせぬ名殘を後にして……。

# 秋の野邊

伊勢　丹羽さく

秋もやう〳〵深うなり行くまゝに、人々のいざもみぢがりに、やよ菊見にと、いそがはしきを、よそに隔つる竹垣のもとなる、一間に、一日文机に向ひて、書どもひもときをりしに、日頃より心合ひの友。三人四人訪ひ來て、一間に籠り物學びするも、何となうものうとく、去りとて一人にてはと、誘ひて立ち寄りぬ。麗うらゝかなる小春日和を、いかであだにすごすべきかは、いでこれより心すが〳〵しき、野遊びをなさばやと、云ふに、同じ心の友垣なれば隔つる心もなく、皆手を打ち連れて家を出でぬ。斯くて、かたみに語ひつゝ進みけるに、彼方にて風になびける、尾花の我等を招ぐやうにも、みゆければ、いそぎて行く程に、はやくも廣き野に出でたり。

人里はなれし地の、心やすさに、唱歌などうたひあひつゝ、小路を、あちらこちらとさまよひぬれば、赤、黄、さては紫色に染めいでし、千種の花、或は濃く、或は淡く、さきみだれて、流れかすかなる小川にしづめる、自然のすがた、たをやめのかたちつくろはぬに似て、いと憐れに面白し。

されど一と時雨ふり、木枯の風ふきすさびなば、昨日、今日にかはりて、あはれにも、千種の花はさらなり、緑或は紅と、眺め美はしき、木の葉まで散りしきて、徐ろに心むすぼるものなるに、其か中に菊てふ花の、冷き霜にも、色うつろはで、百草の枯れ果つる頃、獨時を得顔に、まがきのかたへに咲き匂へる、心ばねをたゞへんあまりの、心やりに、咲きつる野菊一本、根こぎに堀り採り、日頃師の君より、教をうけし、白菊の唱歌を、くりかへし〳〵うたふ心の、すが〳〵しさに、しばし時のすぐるも知らざりき。

暮るゝに早き秋の日とて、はや日は、山の端近くなりければ、いざかへらんと、友をうながし、ふりよき枝を一ツ二ツ手折りて、家づとにし、招ぐ尾花に引かるゝ心を、あとに殘し、ふりかへり〳〵つゝ、もときし道をたどり、家路をさしてかへりぬ。

# 古寺

福井　蒲生なほ

はるばるとふみ分けたる蹊路も人の行きかよふはいと稀にておほかたはなき人の旅路なり吹きすさぶ嵐の音も別れをおしみて今はせんすべなしとなげくはらからのなくれなりあなあはれ堂の後數多の石碑の中にあなは[illegible]でにけんと思ふばかりに花木そなへたるもあれば或は苔むし傾きかたばかりなる石の木だちの間よりかくれがくれに見ゆるもありあはれ此の石をいたゞく人もむかしは月花に此の世を過しゝことあらむ又遺知りたる丈夫婦人などのいみじき家をも果しあへず限りなきうらみを地下にのみし人もありなんよし其の縁ある人の忍びつゝそのかみのみは絶ゑず詣でなんも漸々年歴ては思ひ出づる人だになく心なき草のみ生ひ茂りしるしの石碑もうもれはてゝ遂には知る人なきに至りぬべしたゞ朝のあらしに木の葉を拂ひ夕の雨に苔をあらふのみ跡とひがほなるはまたなくあはれなり猶遠き末にはこの古寺もあとたえて人なきに所得てあさましきものゝすみかともなりぬべしあなあはれあはれなどさまざまに思ひつゞくる程にいと心さびしき事のみいやまさりぬされど老法師の日毎朝とく起き出で燈そなへ抹香くゆらしいとかしこき經文のこゑかれの音にうちまじりて聞ゆるばかりぞなき人のため上なきたよりと思ふなるべしあなあはれあなあはれ。

# 農家の秋

渡邊つた子

花は吉野嵐山或るは墨堤と杖曳く人の多き春の日も草木もしぼれ玉なすあせは肌をうるほし身もこげなんほどの夏の日も己が田わざに怠りなくつとめしかひの現れて今日ぞたのしき秋とはなりぬ四方の眺めは黄金の世界の如く美しさねも云はれず此の時睦じき家内殘らず野らに出で我劣らじとつとめきそふぞ農家の秋の樣なるかしこもこゝもひな聲高く稻かるもありこぐもあり肩に荷ふもあり或るは車もてひくもありかなたには三人四人ともに白き手ぬぐひかうぶり赤き紫などのたすきゆひたる小娘のなにやらん語らひつゝ急ぎ行くのいそがしさ此方には老婆の孫と共に辨當持ちはこぶのおかしさ實にかゝるせはしきもたのしきに打ち忘れてうれしくおもしろく働く人の床しさいとたのもしさても秋の日の暮れやすくていつしか日は西の山の端にかくれたりいざや歸らんとともどもにいそがはしくとゝのへて幼きもおひたるもふし面白く小歌うたひつゝ家路にとたどりぬ今は日全く暮れ行きてさしもにぎやひたる野邊に一人の影もなくたゞかゞしのみ立てるもあはれなり折しもみそらはるかに友に後れし雁の一こゑ

評曰。農家の秋景見るが如し。

# 秋の夕

備中　柚木ます

花やかなりし千草も名殘なう散りはてゝ秋風すさび夏草ぬ庭の尾花怪しうも、うつろひて問ひの樹木の梢あらはるゝ秋の姿いとをかし雀は頻り

# 王　あ　ら　れ

第參卷　第拾五號

に鳴きて物凄しが秋の夕暮日は落ちて夕やけ赤う深へるあたり雑黒き雲のむらがりたる恰も墨畫の松の如く世は次第に夜の幕に覆う蔽はれて空には星影うすく、やがて月は雲を破りて東天に出でぬ

妾は一夕ランほぢ限ぎりなき海原を前にひかへ清い行く夕暮の雲を望みまたゝく新星の影を仰ぎてより心に限りなき幽微の感覺を印せられ潮の音波の響何となうなつかしき想して清麗なる風景片時も我が心底を去らずやがて燈明臺のもとに彳みながら幽陰の海底に向はゞ清麗なる風は微しげに向ひの島より遠けき海原を渡りて妾が袖をひるがへし遠くかすかにむせびかへる波は足下に碎けて白き潮の花を散らせり

西空は紅のすそ長くひき紫の帷幔深くたれて暮れ行く空に別れを告げ給ふ日の女神がその光を落して海面を紅と黄金に染め給ふ又白き羽をひるがへせるかもめあちこちに三つ四つ群れをなしてとびかへるは運幸の御車を早め給ふ女神が影を送るにも似たりげにゆたかなる景色のどかなる秋のくれまさしく春には劣るまじ

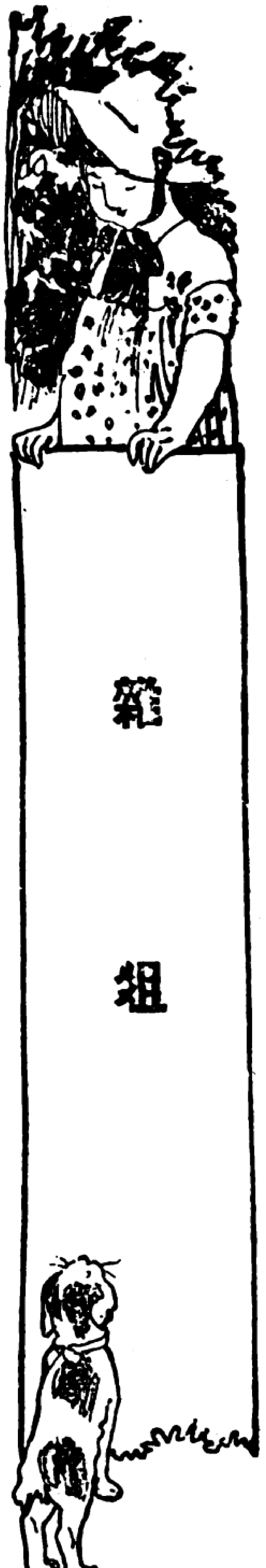
戰ひ飽きし霞によへる心地して折しも昔のことの忍ばれて過にし月日靜岡へ出で來る時母はもとより龍世君迄も出でたゝせられ汝よく學の道を勉め無事にて冬休みには歸れよとの箴言を別れとし住みなれし故郷をあとにしたりしよ思へば胸もせまり涙は目を遮るばかりされど野を見渡せば小稲の香高き野邊に姉君の好み給ふ野菊早や笑ひかたむきて待てる今は姉君何かに此花めで給らふん折しもいとゞあはれ催すなる秋の風とはいへ、四方の山々立田姫の織りなせる錦をきかざる樣見れば心うき立たぬにもあらぬ秋のくれ

やがて歸り寢間に伏すされど想は千々にに亂れ月はさゆ

さらぬだに淋しきものを颶颻の
聲に更けゆく秋の夜の月
月や虫只古里ぞ偲ばする
ひとり旅路に迷ふわが身は

など思ひいで床邊に落つる涙繁く折しも庭の草葉にすだく虫の聲々そばだちて哀はいや増さゝる






# 亞米利加流の家庭

櫻田節瀰夫人談
中村鈴子記

夫人は明治五年二月を以て伊豫長濱の松井氏に生れ、同十一年小學校に入學し、同十六年小學校を卒業し、裁縫家政等を修むること數年、同二十一年大阪に出て櫻井ちか子女史の設立せる一致女學校に入學し、明治二十三年出京して明治女學校に入り、同二十五年同校普通科を卒業し、續て高等科を修め、卒業後專ら和漢英の文學を研究し、明治二十七年より米國ペンシルベニヤ州に赴き、貴婦人養成の目的を以て設立せられたるオガンツスクールに留學すること三年有餘、音樂文學を專攻し、業卒へて後上流社會の家庭を初とし幼稚園より大學に至る諸教育を觀察して歸國、翌年の晩秋伊豫宇和島の人櫻田助作氏と結婚してより、一男一女を擧ぐ。夫人天性敏活、夙に修むる所の學術技藝を應用して文明的家庭を作り、上流社會に英語を教授するの傍、善く良人に仕へ兩兒を保育し、婢女を教養し、一家の規律宛然一國の憲法の如く、一日を一月とし一月を一年と積み整然として毫も亂れざるは、此家に出入する者の歎美して措かざる所なり。記者頃日夫人に面晤して、其家庭談を聽かんことを請ひしに、夫人一見舊知の如く、悉く其蘊蓄を吐露せらる、其大要を錄記すれば——

▲起床● 女中(二十一歳)、小間使(十六歳)、乳母(二十九歳)の起きますのは、五時半から六時までの間ですが、其時分女の子(生後十三個月)が必ず目を醒ますから、私は直に小間使に渡し眼と口中を洗はせ且衣服を更めさせます。長男(三歳)は乳母と子供の部屋に寢かしますが、矢張六時に起し眼と口中を洗はせます。此眼と口中を洗ふとは、生れて直ぐ慣らして置いて、一朝も缺かしません。私は女の子を小間使に渡してから、とろッと致すこともあり、其儘眠らずに居ることもありますが、兎に角七時に床を離れます、主人も同時に起きます。七時半までに主人の



毎日持て行く鞄など整理してチヤント机の上に載せて置きます

▲朝食と新聞閲覽　七時半から八時までに朝食を濟ませます、朝食の部屋は茶室で、主人と兩人だけで給仕を使ひません。八時から三十分間、矢張茶室で新聞を讀みます、今日の出來事を見て、交際上必要の用事の出來ることがありますから……。

▲主人の出勤　車夫は直ぐ側に家を持つて居りますが、七時半から宅へ參つて、庭の掃除や靴磨など手傳ひ、八時半になつて靴を揃へに來るのですが、車夫が玄關の格子を開けると、其音を合圖に主人は洋服に着更へます。子供も其音を聞くと兩人共父を見送る爲に玄關へ出て待つて居りますが、長男は自分で其立て居る場所を定めて居ります、それは丁度父の車上の姿が眞正面に見える位置なので、先頃から自分で擇んだのです

▲夫人の勉强時間　主人を送り出してから九時まで二十分間は、脫ぎ捨てた日本服を疊みなぞして、それから十一時までを私の勉强時間と定めて居ります。私は佛蘭西語が未熟ですから、一週に二度二葉會へ研究に參りますが、それも此時間の中です、或社會へ英語教授に出ますのも此時間の中、其他勉强に關する事は、殘らず此時間の中と定めてあります。

▲晝飯と哺乳　十一時になると長男に食事をさせ、女子に乳を飮ませます。ハイ牛乳は午前九時と午後六時（湯浴の後）に飮ませますだけで、午前二時に目を醒した時、午前五時に起きました時、それから此十一時と午後三時に私の乳を飮ませます。子供は兩人とも午後六時湯浴させた後、牛乳を飮ませますが、牛乳を飮むと直に床に入いることに定めてありますから、子供も直に寢付きまして二時までは目を醒しません（病氣の時は別ですが）、十三箇月の兒にしては珍らしく大人しいと申されます。

▲正午より五時迄　十二時には小間使、乳母、召使と一處に食堂で晝飯を食べます。それから一時まで臺所見廻りを致し、一時から四時まで雜用を執るので

す。其間には日本の書物も讀んだり、子供と遊戯を致したり、針仕事も致したり、種々の事を致します。四時からは、四時半にチャント歸宅する主人を待つ爲に、座敷を清潔に片付け、又夕飯の仕度に取掛るのです。

▲晩食　五時から六時までは晩食の時間として、矢張茶室で兩人だけで食べます。それで御客を呼ぶときは、此時間に招いて一處に御飯を食べる事に致します。主人は御承知の通り銀行員で、度々御客を連れて參りますが、前以つて知らせて置くこともあり、突然連れ歸ることもありますので、何時も晩食には、御客膳を一つ備へて置きますから、遽かに狼狽くやうな事はありません。

▲夫婦散步　六時から三十分間、近邊へ運動に出掛けます、大抵三四丁から五丁までの處で、買物なども其時に調へます、此時は主人と兩人だけで、子供は決して連れません、夜分の空氣は子供の爲に宜しくありませんし、感冒なども多く夜分から引起す樣ですから……。主人は決して獨りで散步に出掛けません、何時も私と一處でなければ。

▲一同の勉强時間　七時から十時までは、家内一同の勉强時間と致して居ります。主人は佛學の方で英語に馴れませんし、私は佛蘭西語が出來ませんから、互に交換し合つて研究致して居ります。小間使、乳母、下女にも、あちらの間でそれ〴〵自分の勉强を致させます。

▲睡眠時間　私は睡眠時間は充分に取つた方が宜いと存じて、八時間は缺かしません。これが足りないと晝寢をしたり、召使がツイ坐睡をしたり、種々弊害が起るので、他家より夜眠の時間は長いのです。

▲一週間の日割　月曜から木曜迄は、前に申上げました通りの時間割に日を暮しますが、金曜は應接日で皆樣に尋ねて頂きます。土曜日は半日大掃除で、午後からは思ひ〳〵に樂み、日曜日が好天氣なれば、主人や小兒と田舍へ散步に參ります。

▲召使の食物　私の家では別に奢つた食物は拵へま

せん、爾うして主從少しも違ひが御座いません、三度の副食は申すに及ばず、チヨツト瓜揉一つ拵へても、召使達へも公平に分けて遣ります、魚の切身も私達のと大小ないやうに致します。但主人の晩食だけには、主人の好きな品を別に一皿拵へて膳に上せますのです。其他到來の菓子果物に至るまで、悉皆平等に分けまして縦令お饅頭一つでも同じ寸法に斷ち割つて主從で食べると云ふ風に定めてありますから、此點は召使も喜んで居ります。餘り規帳面な事は、召使共が窮窟に思ふで御座いませうが、併し他日一家を持つ樣になれば、有り難く感じませうと想ひます。能く世間では女中が抓み食ひをするのに困ると云ふ方がありますが、私の家では、決して其樣な事は御座いません、畢竟平常食物に滿足して居る故かと思ひます。

▲召使の呼び方　小間使と乳母は、幾分か私の血を引いて居る者ですからでも御座いますが、後日彼達が如何樣家へ緣付きますか知れませんから、其時急に呼び方を改めるのも可笑しいと存じ、サンを付けて呼びますし、他の言葉も成るべく他家より叮嚀に致して居ります。

▲小間使の教育　小間使には毎晩私が英學を教へて遣りますが、漢學の先生を一週に二回づゝ一個月五圓の月謝で迎へて、小間使に學ばせて居ります。此月謝は小間使の爲にはチト高いやうですが、從來の習慣として月謝は廉いものと思ひ、兎角紅白粉の代で勉強が出來ると見做す所から、自然先生を輕んじ又學問を重んじない弊があると考へまして、月謝はウンと張込んで遣ります、尤も先生の方では一時に多人を教へるも一人を教へるも御骨折が違ひませんから、割の惡い方で御座いましやう。さて月謝の仕拂は小間使に渡して、彼自身で先生へ出す手順に致してありますから、こ彼も勿躰ない事だと思ふ故か、一層主家の爲めに勵んで與れます。

▲乳母には裁縫教師　乳母は年を取つて居りますから、日本裁縫だけを充分に仕込みたいと存じて、昨年中渡邊學校の高等課を卒業した教師を聘んで學ばせま

した。一週間に月水木と定めて三箇月聘びましたが、日本服は一通り袴まで覺え込みました。これも三箇月で三十六圓ほどの月謝を拂ひましたから、一週三度一個月十二度……一度に割り當てますと、一回の月謝が一圓に當ります。チヨツト馬鹿げた金を用つた樣ですが、私も却々考へる方で決して損でないのです。乳母を學校へ出しますには、毎日〳〵通はせて二年もかゝりますと、ザツと七十圓餘の月謝高です、尙は遲くなつた時には遠方ですから車にも乘せなければならず、却々支出が多くなります、それに雛形物が多いので、原料が厄介でなりません。それを宅へ聘びますと私も側で見て爲になります、尤も私の鄕國では裁縫を重んじる風ですので、小學卒業後は一心に稽古致しまして、十四の時には白無垢緋無垢も縫ひましたけれども、鄕國風はチヨツト違ひますし、又當節の進步した裁縫法を習つて置くのも便利と存じて側で覺えました。それに材料は大抵宅の品を用ゐて之が爲めに仕事がスツカリ片付きました。尤も材料の下拵へには隨分骨が折れまして、丁度私の姙娠中でしたが、夏中熱心に下拵へを致しました。斯樣な次第で高い月謝の樣でも、種々計算致しますと、決して損ではありません、勿論其修業中乳母は終日坐らせて置きましたから、他の召使には乳母が覺えたら皆に敎えると申し聞かせ、皆も樂んで用事を致しました。小間使はチヨイ〳〵見て居て大抵覺えました。

●●●●●●

▲女中部屋の夜學　夜分子供が睡眠みますと、女中部屋で一同種々の課目を勉强致します、出來る者は出來ない者に敎える樣に致して……。御飯焚は昨年までいろはも解らぬ者でしたが、小間使に敎えて貰つて少しは解る樣に爲り、先達も宿下に田舍へ參つた時、汽車の切符が讀めたと申して、歸つてから喜んで話して居りました。私共兩人が毎日勉强に時を過すを樂んで居りましても、召使にも致させなければ氣の毒だと存じて、成るたけ其時間を與へます。人樣が如何して家事の餘裕が其樣にあるのかと申されますが、全く私共夫妻が心を揃へて時間の規則を正しく守る爲め

に用事も自然捗取るのだらうと存じます」

▲子供は側へ置かぬ　子供を始終側へ置くと、用事が出來ないばかりでなく、子供も親の側でない方が大人しい樣で御座います、偶に一處に遊んで遣れば、喜ぶ事も餘計で、却つて親みが深いと思ひます。勿論注意は少しも怠せに出來ません、併し私宅の小間使も乳母も誠に善く子供の世話を致しまして、責任として保護して呉れます。其上御飯焚も割合朝の仕舞を早く濟ませて、大抵一日に四時間か五時間は子守の手代りを致しますから、其間に他の者が針仕事を致す便利があります。ハイ朝八時半に御飯を仕舞つてから後片付、それから洗濯の七枚位は十時迄に悉皆仕舞ふのです。

▲車夫も勉學　一週に二度車夫を數學と簿記の稽古に遣はせます。これは自然夜遊びなぞの惡弊を防ぐに有益なるのみならず、私處の主義は、召使いの男女に必ず何か勉學の便を與へたいと云ふに在るのです、それで夜分主從共に机を並べて勉强して居る有樣が、宛然寺小屋のやうだと皆樣が仰しやいます。

▲法律と經濟學の研究　米國の婦人が法律を一通り辨へることを大切に致して居るのを見て感じましたので、歸國後は法律の專門家に就て、ザッと調べて置きました、又此家へ參つてから、經濟學の方も一通り聞いて研究して居りますが、何れも一家を理むるに必要と感じます。

▲他出に着物を改めぬ　私は獨身時代より家に居る時と他出の際に精粗甚しき變更をするのは好みませんでして、平常着にチヨット淸鮮なのを着て居り外出の時にも其儘出掛けると云ふ主義でありましたが、唯今でも矢張其通りに實行して居ります。家に居る時にはチヨット不經濟のやうですが、少し擧動に心掛ければ格別損じもありませんし、又散步などには美服を着するの必要を感じませんし、主人がサア直に出掛けやうと申す時、其儘で應ずるとが出來て便利であります。

▲日記の精勵　日記は主人も私も精しく認める習慣



で、英佛和三樣に附けます。召使にも各自に日記を渡して御座いまして、毎晩附けさせて居ます。

夫人の日記に忠實なること斯の如く、兩兒女出產當日より三十日間の日記は、自身の躰容、感情より生兒の發育に至るまで細大漏さず悉く記臆して三十日後に記入ありしと。尤も御主人が三十日間の日記、多大の參考となりしとの事なり。尙ほ兒女方の寫眞は、何れも一個月、二個月、それより四、七、十個月、飛んで一年、一年半と云ふ如き順序を以て撮影され、大なる手帳に貼付けて傍に躰量及び發育上特別の事情、旅中の紀念等を書かれ、夫人の發句和歌をも加へられてあり。誕生日其他の紀念日には、之を床の間に飾り且つ披閱して相樂まると云ふ。嘗て令息が滿一個年の祝ひとして知己に送られし帛紗は、御夫婦の共案に係り、意匠の豐富優雅なる、到底凡筆の描寫し得る所に非ず。

尙ほ感服すべき家庭談多けれども、今回は唯だ其一斑を紹介するに止め、次號には桃の夭々たる結婚談を紹介すべし。

# 南洋婦人の風俗

大島居古城

茲に南洋といふのは、濠太利亞洲の本土を除いて、其の他の太平洋諸島を指すのである。一體に太平洋諸島の人民は未開野蠻で、その生活の狀態が甚だ劣等であるから、彼等の間に行はるゝ風俗も極めて珍奇不思議なものがあるのは勿論のことゝ謂はればならぬ。今其のうちで特に婦人に關した主なる事柄を少しく紹介しやうと思ふ。

太平洋上に散在してゐる島嶼の數は實に幾百を以て數へられぬほどの多數で、それが凡そ十數の群島に分れてゐる。此等の島の中の重なるものはトンガ島、サモア島、社會島、サンド井ッチ島、フイジー島、ニユーギニー島、ビスマルク島、アドミラルチー島、ソロモン島、ニユーヘブライド島、ニユーカレドニア島、及びニユージーランド等である。而して此等の諸島に生活して居る人種はパプアン人及びポリ子シヤ人の二で、パプアン人は主として中部以西の島嶼に住み、ポリ子シヤ人は多くその東方に分布されてをるが、實際は殆ど兩者相混同してをつて、地理上から此等二人種の區別を定むることは出來ない。

トンガ島の人口は約一萬七千五百人程あつて、一にこれを友愛島といひ、いづれも頗る義に強い性質を有してをる。隨つて其の島の王などに對する尊敬の念も甚だ深いやうである。又サモア島の人口は凡そ三萬六千で、歐洲人の在留せるものも三百人以上に達して居る。此の島の人民の第一の美德は正直といふ點なので、女子がその良人に對する貞操も愛情も極めて深く、一體の氣風は沈着にして、然も其の擧動は敏捷且つ熱心の趣が見える。

社會島はすべて十一の群島から成立つてゐて、其の中ではタヒチー島といふのが最も大きい。今日では社會島は佛蘭西の領有してをる所であつて、種々の奇異な風習がある。一體此の島の人民は男女とも體格が立派で、殊に女子は歐羅巴人の眼から見ても頗る美麗な容貌を有してゐるとのことである。近來では基督教が傳道されて、昔古から固有の娛樂を禁ぜられ、そのために飲酒の弊が盛んになつて大に全島民の美質を傷けた

が、又一方には多く野蠻人間に行はるゝ文身を施すことなどは早く廢れて來た。此の酒といふのは蜜柑の汁を醸造したもので、女子も兒童も非常に嗜むのである一般に此の島人は自由不羈を愛して居るに拘はらず、女子は頗る嚴しい制裁に束縛されてゐるらしい。女子が妙齡に達すると殆ど皆家外との交通を絶たれて家の内でも高い臺の上に靜坐してをるばかりである。偶々外出を許さるゝことがあつても、其の時には必ず兩親の何れか一人が同行する。實にその監督の方法は甚だ嚴重なものである。

結婚の風俗は前に述べたサモア島で行はれてゐるのが頗る面白い。先づ結婚の約束が成立つと、花聟の方でも花嫁の方でも、その親類達がお互に必要な衣服や食料や調度のやうなものを集め求めるのに長い日數を費す。婚姻の式場は上流社會では公けの儀式の場所に充てられる空地で行ふのであつて、その當日になると、大勢の來客が其處へ集つて、一同が圓形を作つて坐つて居る。すると花嫁は其の場所に接近してをる家まで來て控へて居り、それから式場へ達するまでの通路には土産に持參した布の敷物が敷詰めてある。その敷物の最終に當る處には既に花聟が待設けて、萬端の準備が整うて居る。やがて花嫁は花環や南京珠や貝類の甲で飾り立て、腰の周圍には奇麗な蓆で作つた帶を纏うて、徐々と其の席へ進んで來る。その後には彼の侍女が大勢で花嫁の持參品たる蓆を捧げて持運び、それを花聟の前に置いて又元の場所へ戻り、其處に調へられてある限の——時としては二百枚も三百枚もある——蓆を幾度となく運んで行く。その間に花嫁は花聟の傍へ坐を占め、やがて立上つて周圍に集れる來客の讃美を受ける。それが濟むと今度は花聟が自分の富を示すべき番で、同じやうに澤山の品物が其處へ持出される而して又同じく來客の讃美を受ける。

サモア島の女子は殆ど皆兩親の指揮に從うて緣組するのである、で折々駈落といふことが行はれる。酋長のやうな人が若し或る家の娘を娶らうとして拒絶された時には、その娘を誘拐したり、或はそれと一所に逃走

する。するとその人の友人達が夕刻に相集つて、彼の讃美を唱へながら、その名と娘の名とを呼んで探し歩く。それから後には、大抵兩親もその結婚に同意を表して仕舞ふのである。

サモア島の附近なるヘルペイ島では婚禮の時に花嫁が式場へ出て來るのに、その路へ布の蓆を敷く位では滿足しない。若しその女が長女でゝもあらうなら、花聟の同族の人々が地上へ平たく列をなして打伏し、花嫁は輕くその人々の背の上を歩んで行く、これは土語でアラ、タンガタと云つて、花嫁の家から花聟の家まで續くことがある。若しその間の距離が遠くして通路の全體を充すだけの人數が足らない時には、一旦花嫁の通り越した方の人が急いで前の方へ驅けて行つて、又其處へ打伏し、而してその不足の人數を補ふ。此の儀式は婚姻後二三日間引續いて行はれ、婚禮の當日には花聟も花嫁の同族で作られた人の路を同樣に歩む。此の際、その友人達は路の兩側を手を叩いたり、讃美の歌を謳つたりして通るのである。

サンドホッチ島は今日では人口が凡そ四萬程ある。以前クックといふ船長が此の島を發見した時には三十萬人程も居たとのことで、斯く急激に著く人口の減じたのは、多くは生活の狀態の過度の激變と政治の苛刻とに基いてゐるらしい。首府をホノルルと云つて、島の名も布哇として世界に知られてゐる。玆には別に詳しいことを說かぬ。

フイジー島といふのは南太平洋諸島中の中央にある二百有餘の群島で、千八百五十九年には人口が二十萬もあつたとのことであるが、これも歐洲人が文明を傳へてから漸次減少して、今日では十萬人位に過ぎぬとのことである。一般の服裝としては、薄い木の皮で製した織物を腰卷のやうに身體に纏うて居るが、女子は別に矢張木の皮の纖絲で造つた奇麗な彩色の廣い帶を締め、その周圍には一體に總のやうなものが垂下げられて居る。その總の長さは處女は短く、結婚後の者は長くして膝と腰との中程までもある。子を生んだ女は又膝から下へも届く程の長い前掛を着けてゐる。以前は

女子は多く文身を施してゐたが。大抵は帯や前掛で隠れて外に現はれてゐる部分は指先や口の邊のみに過ぎない。

フイジー人は今日では頗る開明に進んでゐるが、尙甚しい野蠻な風習が尠くない。第一驚くべきは人間の肉を喰ふことで生きながら人間を殺してそれを料理し、宴會の御馳走などにする。又フイジー人は一向死を怖れない性質を有して居て、老衰者などは我子の手に懸つて殺されるを名譽と考へ、又子供等も老衰した親を早く殺して浮世の苦痛を免れしめるのを大なる孝行と心得て居る。まだそれよりも甚しいことには、生ながら葬式を營んで貰つて、土中に埋められて死ぬのを喜んでゐるものさへあるとのことである。少し頭立つた人の妻や妾が良人の死に殉じて人手に縊殺されるのは普通で、若し良人の死後に其のまゝ生存して居れば、世間から非常な侮辱と排斥とをうけ、其の上來世でも地獄の苛責を免れぬと信ぜられて居る。全體にフイジーの女子は男子の奴隷のやうなもので、頗る勞働に耐へ、特に結婚の如きは殆ど壓制に行はれて、多くは幼少の時から許婚の良人が定まつてゐる。これは實に女子にとつて不幸な次第であるが其の他の島々即ちニユーギニー（オウストラリアに次いでの南洋の大島）などでは、女子は皆立派な品物で買はれるのであるから、一層不幸なものと思はれる。が又ニユーギニーでは女子が概して不貞操で、且つ頗るお轉婆で、男子の行爲や公の用向などにも嘴を入れ、戰爭や掠奪などを盛んに煽動したりする。つまり斯樣な弊害は野蠻民の生活に共通で、止むを得ぬことなのである。

ニユーギニーは大島だけに人種も混合してゐる、地方によりて其の所屬や生活の狀態を異にしてゐる。海岸の住民は水中に杙を建てゝその上に家を構へ、又處々には、陸上の高い大きな樹の上に家屋を設けて住んで居るものもある。中には又多數の家族が集つて、共同で大きな家を造つて生活して居るものも尠くない。此の島では女子が非常に豚を愛して、恰も小猫のやうに

抱かゝへたり、我兒と同じやうに乳を吸はせたりすることもある。妙齢の女子は身體に文身を施してゐるが、結婚すると顔にも亦これを加へる。服裝は大抵總のついた腰卷や草で編んだ短い小上着などを纏ふが、男子でもパプアン人種のものは殆ど全身裸體で外出するのが多い。

ニユーギニーの稍東方にある獨逸領のビスマルク島では結婚の風俗が殊に奇態で、婚禮の席上に種々の演戯が催され、花嫁が盛んに踊つたりする。中にも可笑しいのはまだ生れない前から結婚の約束を結ぶことで、これは普通にはないが、少し重立つた身分のもの丶間に折々行はれるさうである。若し胎内の兒が男であればその約束は取消され、女であれば相當の年齢に逹するまで兩親の下に育てられ、而してその約婚の家に嫁がされるのである。女子の結婚後はその良人は殆ど主たり君たる權力を有してゐて、假設その生命を奪はれても致方がない。曾て一酋長の妻が良人の命令に服しなかつた時に、その良人は非常に激怒して忽ち槍を以



て妻を突殺し、その身體の肉を料理して、友人などを招き盛んに酒宴を催したとのことがある。何と殘忍悲慘なことではないか。

又ニユーアイルランドといふ島では娘が七八歳になると大抵結婚の約束が出來て、其の後は棕櫚の葉で作つた籃の中にのみ入れられ、始終老婦人が之れを監督してゐて、外出は勿論、家内でも僅に一日に一回しか其の籃から出ることを許されぬとのことである。斯樣な蠻風は此等諸島に數へきれぬ程澤山で、到底一々これを掲げることは出來ぬ。

アドミラルチー島では女子はあまり裝飾品を用ひないが、文身は男子よりも盛んで、顔面や又は身體の上半身に多く施される。ソロモン島でも裝飾は女子よりも男子に行はれ、殊に結婚の時期に女子は必ず文身を加ふることゝなつて居る。此の文身の儀式は甚だ複雜なものがあつて、本人に取つては頗る苦痛でもあり笑止にも感ぜられる。のみならずソロモン島の女子は身分の立派な者程そを娶らんとするに多くの代價を貪るの

で、それが爲めに、酋長の娘などは却つて折角の婚期を徒に買手無しに過すことがある。

今一層奇妙なのはニユーヘブライドの結婚の風習で、その多く女子は幼年の時に約束の良人の許へ送られ、その妹の如くにして育てられる。その婚禮の際には、一通り儀式が濟んでから花聟の一族と花嫁の一族との間に擬戰が行はれ、假設實際はその良人に嫁ぐことを好んで居ても、無理に厭々連れて行かれるやうな風を演ずるのである。此の島は全地域が五千方哩にも亘る火山群島で、人口七萬を有し、今日は英佛兩國の太平洋艦隊の共同支配に屬して居る。

最後に、ニユージーランドはニユーギニーに次での大島で、此の島で有名なのはその人民の顏面の文身である。それは殊に男子が立派で、一時その首が歐洲人との間に賣買された。土人はこれをマオリー種と稱へて、六七十年前までは十二萬人程もゐたが、其の後急劇な減少を來して今は四萬人に足らぬ少數である。此の原因は、畢竟衣服の用方の不良と濕地に居住してをるとに歸する。マオリー人の娘は其の他の諸島に於けるよりも非常に自由で、結婚後の女子は貞操の標本である。此の島にも奇習は尠くないが、あまり繁雜に渉れるから以上概略に止めて置く。

（完）

# 東洋の小亞米利加

茨木藤葉

### △古鄉の思出

我東の都から一晝夜汽車に乘て扨又十二三時間嫌な嫌な船も漸くに漕ぎ拔けて、やがて上陸してホッと一息ついた處は何處、夢の間も忘れがたき懷しい樂しい東洋の小亞米利加我古鄉の北海道である。

懷しいものは古里、樂しいものは我永く住みなれた土地、一寸一足行けば直ぐ町はづれに出る樣な狹い處でも、古里となれば云ふに云はれぬ懷しさがする。まして東洋の小米國と迄云はれて居る我古鄉の山、河、さ

ては四時の變遷又今更に懐しい思へば去年の夏休みに歸つたのが早や永久の別れとなつたのである。我を勵まし慰めた北海の天地ももはや親しく雪草ふみわけて尋ねる折はないのである。斯うと知つて居たならせめてはあの南に聳ゆる噴火山や麓を流れる潔い活潑な流れに、一言の暇乞をして來たものを今頃は定めし恨んで居る事だらう、あの山、あの流れ。

忘れぬうちにいざ去らば草深き北の國も住みなれては花の都、思ひ出でたる節々を後の語り草もと、こゝに記しつ。初めて鐵道の敷かれた時に此邊我物顔に住で居た熊殿が恰も侮辱されたとでも思つたのか、爪をならして怒りつゝ驀然猛進して來た汽車の行手に立塞がつて、兩手をレールに掛けるや否や力まかせに捻ぢ上げたと云ふ話も、今では殆ど人から忘れられて、何哩つゞく平野に悠々と青草食む野馬の如何にも平和を表はして居るのを見るばかり、野に咲くものは何？、れんげやすみれに引かへて六尺の男も隠れる程の葭が果てもなく生い茂つて、其間をやさしくも姫百合がちらほらと咲て居る、又は雪がそろ／＼融け出して來る下には早や福壽草が、其頭を上げて樂しい春を今か／＼と待つて居る、一朝雪は只谷の隅々に殘るのみで、温和な旭がうら／＼と照す朝には、滿山皆花、黄金の毛氈敷きつめた様、東京の植木商人に見せたなら徒に海山萬里の彼處なるを恨む事で有ふと思ふ様な山もある。

春の魁の此花が咲てからは、我も／＼と名も知らぬ花や草が後れ先だつて芽を出す、併し三月になつても梅も櫻も咲かぬ、漸く四月の半より末になつてから皆思ひ出した様に、一時に咲き揃ふと云ふた處で、東京の様に今日は銀世界の梅見よ、明日は上野のお花見よと浮れ騒ぐ人は少しもない、又夫程行く處もない、只圓山に近く植ゑられたのが僅に春色を告ぐるのみ、夫れとてもわざ／＼行つて一日を花の下に費す人は少なく、多くは人知れず咲て人知れず散つて仕舞ふのである、自分の家は此處から一里半も有たから付て行て見た事は無かつた併し心を慰める春の友は決して少な

くない。
低い庭の墻根越に我邸内に植てあるリンゴの花は櫻にも增して美しい蕾の内は赤くて恰で海棠の樣だが、花盛りになると皆にかゝれる白雲に旭の映つたるそれの樣、櫻（日本の）では人に悦ばれる樣な實を結ばないが、其處へ來るとリンゴは又格別で、此ホープを持つて美しく咲き出でたる花、如何に櫻に勝る事數倍よ、朝の散歩に、夕方の運動に、只花見と云ふ外に云はれぬ樂しみがある。

夫から西洋苺の花、西洋櫻の花、グスベリーカーレンズの花とか皆各々に咲き出でゝ轉未來の樂しみを思はしむるのである、此頃は一年の内で最愉快な時で、何處へ行ても廣々として居て東京の樣に、一寸出ればすぐ鼻をつく樣な高い塀を廻らした處は無く、西洋の風を直接に輸入した處だけあつて、洋行した人が來て見て恰も西洋の小都會に行つた樣な氣がするとは、屢々聞く處である、實に平和を歌ふ牧塲の彼處、靜なる水に移る森の木蔭に見ゆる洋風の建物、鵞鳥家鴨の悠々たる樣、或は幾棟續く煉瓦の大建物の内に、天を突く煙突の幾本、宛然一幅の油繪を見る樣な。

斯くて春はのどかに子供達は土筆摘みに打連れだちて、今迄の膚を刺す樣な風も寒さも忘れた樣に和しい日光の惠みを沐びて、終日歌ひ暮す百姓は蒔付に忙がしく、流石之のみは何處も同じの野良歌うたひながら、畑に行て行く。

## ▲夏の祭

六月の十三日より三日間は札幌神社の大祭である、此時の服裝程種々なものはない、何しろ一年に一度の祭りだから人の出る事非常で、丁度春から夏に移る頃なので日中は可成に暑くなるけれど、朝は未だ〱寒い。處で在の百姓達は朝早く出るのにまさか單衣を着て行くわけにも行かないから、娘達は一年中の賣だめで買つて貰つた一張羅の綿入やら、袷やらを重ねて頭にも身體にも赤やら青やら例のくど〱と飾りたてる爺も負けぬ氣で、布子の上に是は先祖傳來の寶物と

云ひ度い樣なべら〳〵とした羽織を引掛けて、近處の神さん隣の婆さんとお互に誘ひ合つて出て來る、市内の人はそんなに朝早く出る人もなし又出たとしても暑くなれば着かへる事が出來る。

其處でだん〳〵に日中になると夫は稍々單衣着て團扇片手に行く人もあり頓行して汗を流しつゝ見世物の看板を眺る人もあり、氷水屋のお客は大抵冬裝束のもの計り、實に奇觀だ。

此祭に出るものは見世物と飲食物計り、實にくだらない俗なお祭り騷ぎであるが、子供や田舍の人は之を最上の樂しみとして、三日間は餘念なく飲めよ歌へと騷ぐのである。

扨此祭りも濟むと次第に暑くなり初める、之からは少時果物の世界先づ先に苺や櫻果がそろ〳〵熟する自分の家には櫻果は少なかつたが苺は邪魔になる程有つたので、毎日弟や妹と草の上に寢ころんで罪もない事語り乍赤い汁の滴りそうな實を飽まで貪つた事も有つた、併し此樂しいまとひの中に自分の最愛の弟が居なかつた事だけいつも悲しく物たりなく感じて居た、少し餘事に渡る樣だが數へれば今から七八年前は彼と一所にたのしく遊び暮したのであるが、折にふれては根もなき事に腹を立て、彼の可愛らしいくり〳〵と太つた坊五ッ六ッ力まかせにはり飛ばした事も有た可愛そうにあの鈴の樣な目からぼろ〳〵と涙をこぼして半日計り泣て居たが、寧い氣味と見向きもしなかつた。彼は定めし悲しくもあつたらう痛くもあつたらう如斯な事は決して一度や二度では無く、總領の我儘で常にいぢめて居た。之が姉たるもの丶仕業で有ふか、漸く氣が付て可愛さうな事をしたと云ふ心にせめられては、人なき處に泣た而も此時は弟と遠く隔れて居たからせめて逢た時に悦ばしてやらうと自分の貰つたものも大事に仕舞て置て只逢ひたい〳〵と夫ばかり思つて居た。之が所謂虫が知らしたとでも云ふので有らうふとした事から病氣になつたと云ふ電報で大急ぎで祖母と一所に遙々家に歸つた時は最う彼は此世を去つて仕舞た後で、奥の一間に寢かしてある弟の

死顏。三年計り見ぬ間に見違へる程大きくなつて我弟としては惜しい程の美しさ、色こそ變つて居るが今にも眠りから醒めさうな。自分は思はず冷え切つた手を握りしめて冷たい頰に熱涙をそゝいだ。あゝもう彼の靈は已に天國に飛び去つて仕舞た愛に輝く心の窓も閉ぢ果て聲も言葉も再び通はぬ。如何に小さな時とは云へ情なく當つた此姉を定めし恨んで死だ事で有う僅か七ッ迄しか壽命の無い可憐の弟になせ酷い事したらう通夜の燈は仄の暗き弟の枕もとに淚は溢るゝに任せて悄然と坐つて居ると過去の自分が判然と表はれて平和の滿ちて居るエンゼルの樣な死顏正面に見る事が出來なかつた。

あゝ最愛の弟はもう幾ら可愛がらうと思つても如何に暖き愛の手に抱き占め樣と思つても所詮屆かぬ遠い處に行つて仕舞た、外に弟も妹もある勿論之も可愛いが併し之は之彼は彼逝た彼は猶更に可愛い夕方皆揃つて樂しく御飯を食べる時に彼の小さな赤塗の膳の無いのを見ては泣き。裏の畑で葡萄やらリンゴやら食べつゝもあゝ彼が居たらと思はぬ時は無つた。墓場はつい近くの高い森の下に有たが責めてもの心やりに好なお菓子やら果物、他で貰たもの迄も半分はきつと持て行てやつたが雨風の激しい夕雪の積た朝近くに暖き母の懷がありながら寂しい木蔭に知らぬ人と居るかと思つては寢られぬ夜半に枕紙濡らした事は一度や二度では無つた。

今一ッつらい事は七夕の時であつた、國では之も一ッの子供の樂しみで五日も前から皆近處の子供達が團体を組で何處からか荷車の樣なものを借りて來て踊り屋臺の樣なものを拵へ提灯を澤山に燈したりこゝには竹と云ふものが無いから、河原で大きな柳を何本も切て來て五色の紙を付けたり面やら太皷やら持寄て一生懸命に支度をする死だ弟も其晩だけは許されて有たので夕方になると何時も家から出す大きな太皷を重さうに持つて威勢よく馳け出して行く。

いよ／＼夜になると平生お祭りなどで見て來た馬鹿踊りの眞似の上手な者が其車に乘せて貰ふのである、處

で弟は何時の間に覺えたのか此躍が得意なので何日も眞先に乘て大勢の子供が車を引たり萬燈を持たりして口々に「竹に短冊七夕祭りよおゝいやいやよ蠟燭出せ出せよ出さねばかつちやくぞ」と譯も分らぬ事をはやしながら戸毎に大きな家でも小さい家でも引込んで其晩點す蠟燭を一本なり二本なり貰ふので澤山貰つた處では例の踊り人が汗を流して踊るのだ如斯な團体が彼處からも此處からも出て太鼓や石油鑵の音が遠く近く聞る、星は降る程有ても暗夜の眞黑な木の間を澤山の提灯が見へつ隠れつ縫ふて行く。子供の囃し聲が風の間に〱聞て來る自分や母は何時も門に立て林檎や梨をやるのが一番樂しみで有たので　弟が死でからも生前は仲よく遊で呉た友達とて例年よりも澤山にやるが其踊人はもう　弟ではなくて氣の故でも有うが前程面白くない一通り踊て手に〱貰た獲物嬉しげに勇ましく囃して歸り行く後影見送つて母ははろ〱涙を溢して居た。

▲秋のくだもの

夫は夫として置て内地の人が暑い〱と脂汗を流して喘ぎ〱暮して居る時に此處は實に涼しい、朝夕は勿論羽織を着るし日中でも汗の出る事などはせつせと働く外には殆どない、從つて避暑に來る人も多くて夏は賑だ中にも西洋人が多くて何處に行つても一人や二人必ず逢ふリンゴも早稲から晩稲と次第に色付いて來る。

リンゴと云へば皆一種類の樣に思ふて居る人が多いが實際は中々左樣でない實に幾百からの種類が有つて自分の家にわるの計りでも中々澤山でリンゴ時になると終日リンゴの木の下に暮すので都では一ッ五錢も六錢もする樣なのを惜氣もなく一日に十も十五も食べる。其内で十四號など云ふのは可成早く出來て味は極く淡白で先づ此頃出來る物の内で上等な方だが之は永く貯て置く事は出來ない四十八號四十九號六號などは十月の末頃に收獲して之は翌年の四月頃迄は少しも味の變らないもので之がそろ〱赤くなり出す頃には凡ての收獲は終つて仕舞て取殘されの豆殼や麥殼の上に

霜が白く降り斯うなると何となくさびしくなつて流石活潑な子供もしよげ返りて懐に手を入れたま丶今年の裏の見納めよと常には餘り出ない母迄を引張り出して見にゆくと今迄の綠の色は跡もなく木の葉も草も皆一樣に黃色く黑く變つて踏む度にがさ〳〵と音がする萎びた葉の下の葡萄の皮に皺の寄る程熟したのを見つけては今更の樣に珍らしがつて爭ふて食べる時の甘さ玉蜀黍の中を分けて行つては葉は皆落ちて眞赤になつた實計り鈴なりになつて居る丹波酸漿の二三本を見つけては此上なく嬉しく千金の獲物の樣に思つて家に持て歸る。年寄は冬籠の退屈を潘しながら早や炬燵の用意を初める。

▲雪とみぞれ

北風がヒユー〳〵吹て空は一面灰色に曇て今日は何して如斯に寒いのだらうと皆云ひ合さねと何となく萎れて話合つて居る間に音もなくちらほらと白いものが降て來る裏の小作人は夫れ大變と收穫ものを形付ける、干てあつた洗濯ものは風の爲に凍てピンとしたま丶彼方此方と飛ばされて情ない樣な悲しい樣な何とも云はれぬ感情が起る、寂しい秋の空は無情な冬の空と變つて日に〳〵寒く雪は益々積る計り之から一番可愛さうな者は學校に行く子供逹だ元勞働を目的として寄集つた人々の事故比較的富者は少なくいくら雪が降たからとて車で送り向ひせらる丶子供は殆ど無い、自分も小學校に行く頃は此處に居たのだ隨分辛い思をした事もある、自宅から學校迄は一寸二十五六丁有た大人なら何の事は無いが僅十一二歲の子供には二三里もある樣な氣がする雪が降るからとて東京の樣に傘をさせば到底重くて堪られないから、男の着る外套の樣なものを着て頭巾を冠つたゞけで出かける、夫も只雪だけなら良いが、雨交りの霙と來た日には夫こそ大變雪水は容赦なく衿から流れ込で其氣持の惡るさ寒さは寒し終には目と云はず口と云はず吹き込で泣き〳〵行た事もある。

學校の稽古も漸く濟で歸る頃は雪が降らなければ風が

吹く細かい雪の降た後に風が吹くと何時も吹溜りが出來て自分等を困らして呉れる、自分の家の隣は明地になつて居たので風は一目散に其處を通つて丁度家の門へと吹付けて大きな山を拵へる、誰か來た時に入る事が出來ないからと日に幾度となく道を開けますが一度強い風が吹くと直に出來ると云ふ厄介もの處で自分は早く家に歸つて暖い炬燵に潜り込まうと冷たさも寒さも只其希望に忘れて歸つた時に何時も泣かせる張つめた氣も緩で仕舞て雪の中に思はずへたばつて仕舞た事も有たもう今頃は歸りさうなものと母がよこす向ひの下女に少し許り道をわけて貰つて漸くに這入るのが常であつた。

### ▲冬の學校通ひ

又時々は一晩の内に三四尺も降て朝早くで道も無い處を一人とぼ〳〵行く事もある、何處が道か分らないから宜い加減に歩いて居ると、つい溝の處などにはまつて半身埋まつて 柔い雪の中で幾ら出樣としても中々出られない、其内に膚の暖まりで雪がだん〳〵に融けて着物はびしよぬれになる漸の事で道らしい處に出て二三丁も行く頃は身を切られる樣な北風に濡れた着物は其儘凍て仕舞ふ夫でも學校に遲れては大變だと云ふ氣は少しも去らず、之に勵まされてかぢけて覺えの無い手に包みを持つて日々如斯な事を繰り返し繰り返し一日も休だ事は無つた、夫でも流石正月の休みは嬉しく、祖母君を正座に家内皆寄合つて雜煮を祝ふのが何より樂しみで有た、併したこを上げたり羽子をついたりする事は少しも出來ない、少し市から離れて居る處は何處を正月の風が吹くかと云ふ樣な實に寂しいもので、ストーブを盛に燃さなければ指先が冷めたくてかるた取る事も出來ない仕末まあ炬燵にもぐり込で取て措きのリンゴやお餅を食べる位の事である。

五日には畑の小作人を呼ぶのが家の例の樣になつて居たが此時のみは賑で面白い百姓達も此日を待つて居るので膳に山海の珍味は無くとも飽く迄飲み飽迄食ふのが彼等の樂しみで一里餘もある山道を事ともせず

朝早くから三々五々詰めかけて來る見る〳〵可成に廣い庭も直徑二尺も有うと思はれる藁靴で充されて仕舞ふ。

臺所では今日は天氣が惡いからキット皆遲いだらうと油斷をして居た處當が外れて手傳いに來た婆さん迄天挺舞、座敷では初めの内こそ窮屈そうに畏つて身巾の合はぬ膝頭を頻に氣にして居るが終には堪へ切れなくなつて、否忘れて仕舞て、遊り憚らぬ銅羅聲で何やらくど〳〵とのゝしつて果はドッと笑つて噺したてる賑さ、漸く酒が廻つて來るとさわ〳〵皆何か隠し藝をやれ〳〵と父も一杯機嫌で云ふと、待兼て居たと云ふ樣に小作人の取締りをして居る奴が何日もお定まりの魚盡しの祭文をさも得意らしう首振り立て語り出すやがて、夫が濟むと彼處の隅からちよんがれ節を歌ふ此處からは無樣な手付で何やら譯の分らぬ歌うたひつつ、並べられた膳の上にパッパと塵のかゝるのも一切お搆い無しで、千鳥足の拍子おかしく踊り狂ふ樣俗と言へばいやしき俗なれど理想の低き彼等が一年中の苦しみを忘れて悦び歌ふ無邪氣さ加減、家に待て居る妻や子に約束して來たので有ふ、食ひ殘りの料理を紙に包み込む愛らしさ年中只慾の爲にのみあくせくして自分の利益の爲には人を蹴倒しても搆はず妻子には目も吳れず自分のしたい儘する輕薄紳士に比べたら顏は日に燒けて黑光りとなり、眼はドンヨリと光りなく締りのない彼が幾層倍貴いだらう我も事情が許すならばとは何時も思た事である。

朝からぶつ通しの大騷ぎに聊くたびれておらア、今日ほど面白かつた事は無いと、一人が云ふと一方ではおらはまだ歸り度く無いと、德利の底を叩いて駄々をこねる併し一人歸り二人かへりだん〳〵日が暮れて來るのでしぶ〳〵乍ら之も歸つて仕舞ふ。後は恰で大水の引た樣座敷は落花狼籍。

### ▲春の廣野

之が自分の家の正月で後にも先にも只一度の大騷ぎで、之が濟めば又元の寂寞、戸外では相も變らず物凄

い風のヒューヒューと電信柱や高い木にわたる音と雪がいやが上にも積る計り併し此雪の内に活潑な忍耐深い兒童が養成せられるので有て、決して家にのみ引込で居ない此頃の第一の運動は氷辷りで重に男の子では有るが下駄や靴の裏に辷金を嵌めて雪道を辷る其輕妙なる事初めて見る人はびつくりして仕舞ふ、併し其頃はまだ道の付て居る處しか辷られないが二月頃になつてだん〳〵に日光の力も増して來るに從つて五尺も六尺も積た雪の表面も少しづゝ融けて來る併し夕方からはまだ〳〵寒いので、折角融けた水も又其儘氷つて何の事は無い雪を氷で閉ぢた樣な物だから、上に乘ても少しも埋まらない見渡した處家々の屋根を除けては木の梢のみが少し雪の表面から出て居るだけで實に果もない廣野原、五間巾の河も底の知れない池も平氣で何處迄も何處迄も行く事が出來る地面の高低に依て坂になつた處を子供等は小さい橇に乘て辷り落ちるやら寢轉んだまゝごろ〳〵と轉がるやら俄に世界が廣くなつた氣で、無暗に飛び廻る此面白さはとても暖國の人の



夢にも知る事の出來ない者である、併し少し日の照る迄も夢中になつて居るとサー大變、大地は俄に柔になつてぼ〳〵と埋まつて今迄の面白さに引代へて泣き乍ら歸る事も珍らしくない。

そろ〳〵と表の通りを二尺立方もある樣な河の氷を橇に付けて通る頃は人々は永い眠から醒めた樣に活氣付て名計りの春とは云ひ乍ら、何となくのどかで鶯こそ鳴かね梅こそ咲かね人の心が引立て、さしも猛威を振ふて居た吹雪も寒さも一日は一日より一雨は一雨より融けて少なく終に三月の半から終りにかけて雪融の惡路を最後として果なく消て仕舞ふ斯て永い〳〵幽鬱な冬は去つて再び樂しい春となるのである。

ざつと之が五六年前住みなれし札幌の町はづれなる我家の廻りの四季の有樣である。

# 和歌

塚越停春撰

（天）月前の雁　東京　京極とき

吹きしをるみやまおろしにさそはれて
月を横ぎる雁の一列

評日。月の如き、雁の如き、優しき材を取合せ、横播一陣の深山颪を加味して、忽ちに此の高邁飄逸の句をなし、餘韻雲に入るの概あり。調高く意雄に、而して其辭の含蓄餘情あるは、則ち此の詩の好所なるへし。

（地）山村秋雨　東京　佐々木まさ子

のぼり行く馬子の鄙歌雲に入りて
麓七村雨に暮れ行く

評日。有聲の山村秋雨の圖。

（人）冬月　秋田　佐藤千代能子

猿もうかれ出づべき心地して
冴えに冴えたる冬の夜の月

評日。猿もうかれ出づへしとは、形容し得て何等の奇警ぞ。一誦人をして冴ゆに冴ゆたる冬凍月の凄き光を仰ぐが如き想あらしむ。

## 秀逸

虫　神戸　今村竹子

城あとの石垣崩れ草生ひて二十萬石只虫の聲

二十萬石只蟲聲とは、何等勁拔の句ぞ。勁拔の句は、必ずしも辭旨の古拙を忌ます。

初冬海　秋田　佐藤千代能子

限りなき大海原に月冴えて雁金寒し沖つ島山

海上月夜の光景、描き來て睹るか如し。

山紅葉　美濃　建部鈴子

敷島の大和錦やこれならむ立田の姫の織りしもみぢ葉

たけ高きを以て勝る。感服、感服し

秋　美濃　なでし子

君を秋をゆふべ渡頭に送りはてゝ佇む袖に蘆の花散る

秋晩人に別るゝの悲愁、言外に顯著たり。

秋風　京都　古川かつ

群雀羽音せはしく立ち行きて鳴子に殘る秋の風かな

「鳴子に殘る秋の風」の一句、造り得て凡ならず。

同　福岡　淡月

白雲を吹く秋風に拂はせて千里を照す望の夜の月

意象高邁。

砧　青森　白戸まさ子

松風の音だにあはれさびしきを衣擣つなり秋しのゝ里

情切に、句品も優也。

秋　島根　初子

月に虫に嬉しかりしを紅葉狩樂しかりしを去年の此頃

「かりしを」の語を覆用して、限りなき趣致を生す。

寄紅葉述懐　上野　矢島さと子

初時雨かゝらざりせば紅葉の赤き心を誰か知らまし

權山霊のかゝるは月のゐの今樣と其意を同ふす。

惜秋　磐城　作山美子

たのみてし十九の秋はゆかんとすうらぶれ姿其儘にして

十九の秋眞に可惜。

秋　京都　鈴木能子

たちこめし野邊の秋霧其儘に雨と變りて日は暮れにけり

眞に秋雨日暮の光景。

野路萩　岡山　立神政子

そのまゝを家づとにせかすべもがな露をかざしの野路の綵萩

句中敎訓あり。

秋　東京　丸木久良子

笘はねて月に笛吹く人やたれ秋は最中の船の上にして

海上月明の景浮ふか如し。「もなか」の語秋の最中と海上の最中との兩樣に響く。

蘆花　伊勢　間島磐子

わたし舟岸を離れて夕暮の江の風寒く蘆の花散る

江風芦花秋蕭瑟。

雪の朝　駿河　津野多うめ子

きのふより積りし雪に朝日さして化粧窓に雀むつるゝ

一幅の小油繪。

暮秋の曉　東京　北澤愛子

有明の影を辿れば淺茅原蟀踏むばかりこほろぎの鳴く

「蟀踏む」の一句斬新。

秋　周防　紅林豐子

繰返へし賤が小田呑長き夜を誰が爲いそぐ砧なるらむ

「急ぐ」を以て「長き夜」に對す、情思自ら長し。

冬季雜題　琴浦　登枝

旅僧の夢やいづこにさゆるらむ木枯むせぶ古寺の軒
哀れを直寫せずして、夢のさゆるを說く妙。

仲秋月　播州　粟飯原米子
今宵とて月やは影のかはらじを待つ心よりさやかなるらむ
句中訓誨あり。

折にふれて　長野　春子
紅葉散る峯の大寺日は斜寂寞として經の音もなし
眞に山寺の景也。

月　博多　磯野いち
蘆の上を音なふ風に池の面のよれてぞ浮ぶ十六日の月
「よれて浮ぶ」とは何等の妙想ぞ。声の風、十六日の月、亦取合せ得て好し。

秋の歌の中に　肥前　萩原道子
虫鳴きていざを鹿鳴きて雁鳴きて今宵も物を思はせやせん
趣致「鳴きて」の重用によりて生ず。

折にふれて　茨城　榊はる子
亡き友を忍ぶ涙のでの夜半を誰が母ならん砧うつなり
清適。

秋　大坂　鶴子
蔦かづらかつ〳〵殘るやれ垣に夕日斜にあまつ飛ぶなり
好箇秋景。

暮秋　東京　安藤よし枝
たくましき傳染病も衰へて十戸の村の秋暮んとす
「十戸村の秋暮」無量の感慨を見る。

關路落葉　和歌山　和田俊
絶間なき時雨にまたも逢坂の關の清水に紅葉散るなり
流暢。

紅葉　和歌山　今村浪子
世の人の心々をうつしてや濃き薄きあるもみぢ葉の色
着想面白し。

秋雨　東京　佐々木富江子
軍やぶれ亡びし都草生ひて帝陵寒く秋の雨降る
下句力あり。

秋晩　武州　佐野さき子
杉くらき山邊に白う蕎麥の咲きて賤が藁屋に夕月のぼる
如畫。

遠征を思ひて　備中　大西政代子
るすもると駒は肥せど背子はまだ歸り來まさず秋高くして
眞に夫思の妻平淚なき所則ち深悲ある所。

暮秋　河内　大矢たね子
人知れず思ひは遠き西にはせてひとり枯野に秋の雲見る
無難なる歌也。

秋　河内　櫻井喜子
うつくしく燈火映えて琴の音の洩るゝ柴籬萩の露散る

清麗。

演習　滋賀　望月雪

秋霧にはつゝの響き遠くして蹄の音の近うなり來る

巧に寫されたるもの。

霰　仙臺　村田さく子

矢叫びの野に臥す夫の音づれをまつ夜庇に降る霰かな

悲壯。

冬の月　日向　厚地和歌子

親は老ひ妻子飢え泣く武夫の軒端寒むけき冬の夜の月

悲慘。

## 佳調

折にふれて　越後　和歌山初

殘りなく木の葉は散りて山かげに殘るも寒き冬の夜の月

秋　前橋　齋藤靜子

さびしさの限りなりけり秋の夜の寐覺の空に小雨そぼ降る

同　山城　古川よれ子

大原女が菊賣る聲のうら寒く都六路に秋暮むとす

同　大坂　田中瑜璉子

夜やふけぬ虫の音絶ゑて灯はほそし思は長し文机のもと

同　東京　丸木久眞子

法の聲細うきこゑて風なきに小萩かつ散る尼寺の庭

露　福岡　浜月

秋されば草木のみかは人知れぬわが袂にも露ぞおきける

萩　東京　安井とみ子

やむ母の枕邊近くをさな子が置きし萩に草雲雀啼く

秋　東京　森春月

思ひ出を硯にうけて歌かゝむ月もやどれる秋萩の露

渡衛　金澤　森川敏子

舟喚べどよべどこたへぬ夕暮のむかへの岸に千鳥鳴くなり

名所鹿　和歌山　山村みゆき

すみ渡る月に嵐はしづまりて嵯峨野の奥に牡鹿鳴くなり

虫　大和　森本かめの子

移る世のさだめに泣くかこほろぎの聲たゑ〴〵に秋ふけて行く

雪　秋田　佐藤一子

あなうたて八甲田山の麓原今年の冬も雪つもるなり

紅葉の歌の中に　越後　吉田梅子

あしとめて暖もながむる岡の上のぬるでの紅葉夕日さすなり

砧　大坂　堀川靜子

月は今雲にかくれてきぬたうつ音の絶間を雁金の鳴く

秋　美濃　なでし子

奥の院の五百阿羅漢苔むして秋海棠に白き蝶飛ぶ

雁知らず　駿河　菊池武子

大刀賀へる武夫一人先に立ちて御かご馳せ行く闇の徑路

冬　東京　瀞なばな

山のはに月傾きて霜寒き夜半の裏原狐鳴くなり

女郎花　山口　野村淑子

秋の野に七草千草おほかれどまづはやさしき女郎花かな

秋田　明石　栗飯原米子

あら田うち早苗とりにし賤の男がみみてかりほの秋やたのしき

月前鹿　千葉　平田すゞ子

さびしさを何にたとへん小倉山鹿の音遠く月かたぶきぬ

海上月　滋賀　福永憲子

さやかなる大海原の月影にほの〴〵見ゆる淡路しま山

萩　松江　小泉芳野

糸萩の弱き思ひをただに語らでやみぬ秋の夕ぐれ

遠山紅葉　小田原　白つゆ子

遠山の木々の梢は色づきぬ時雨せぬ間に秋ふけぬらし

野霧　武州　中島慰子

草も木もうつらふ秋をとぢ込てかなしさ見せぬ野邊の夕ぎり

秋夕　四日市　久米藏子

草の葉におく白露のかずそひて虫の音しげき秋の夜半かな

折にふれて　伊勢　加藤時子

秋の日を病みふす友のよやいかに夕のからすなく音悲しも

秋時雨　伊賀　かつ子

狩に行きし我が背やいづこ日は落ちて外山のあたり時雨ふるなり

秋の歌の中に　越後　棕子

しめの野行く島田の人の影やせて新月凄く山寒げなり

折にふれて　芝　みどり

君がのる車のかげは見ゑずなりてかはばた小道夕ぐれ寒し

柞　備前　駒井友子

あしびきのやま田のおくてかりはてゝすゝすそ野のはゝそうすもみぢせり

河邊秋景　滋賀　朝比奈己之

靈のゐるみきはの柳かつ枯れて夕日さびしき秋の川づら

---

秋雨　福岡　松岡喜寧子

さらぬだにかなしきものを草枕あはれを添ふる秋の夜の雨

秋　廣島　和知廣子

いにしへの城跡とへばあゐの花あたりにあかくきり〴〵すなく

秋の歌　京橋　松井とみね子

靈のやけやせし我がかげ柳かげ思ひ出多したそがれの川

秋きり　前橋　王井瀬子

ひくさげて利根の川邊を行背子のけぶれるきりにみゑつかくれつ

秋雨　山城　獨雨

夫を呼ぶ狂女の聲に夢さめて身ふるふ夜半を秋の雨降る

白萩　出雲　杉本糸子

白萩の花ほの白き背やみをこの野この岡ただ秋の風

秋　近江　辻とみ

白萩のみたるゝ上をとぶ蝶のつばさもたわに秋風ぞふく

秋興　下野　飯島光子

秋くればきのふは紅葉今日は月とうかれ心のいそがしき哉

暮秋夕　岡山　鵜上定子

小倉山紅葉かつちる夕まぐれ鹿の音さむし秋ふけぬらむ

夜半の雁　越後　平野すい

幼な子にゆめやぶられし時しもよそらに聞ゆる雁のひとこゑ

秋草　播磨　木村しゆん

咲きまじる野邊の千草の色々に秋のあはれをあつめてぞ見る

朝顔　石見　宮内登美子

をく露のかはくも知らで出る日をゑみてむかふる朝顔の花

枯野　山梨　小林ことめ

山犬のすまんばかりの一里塚夕照斜に新塔婆の影

冬　月　德島　宮　久子

屍燒く烟立つ見ゆ山の端に殘るもすごし冬の夜の月

秋　福岡　はぎの子

風寒く殘月宵く霜白し遼東の野邊に秋暮んとす

白ばら　岡山　橋本芳子

詩集手にさまよう少女が黑髪になりゆらゆらぐ白ばらの花

秋月　近江　森島小冬

哨兵の誰何の聲のさゆ渡りふけ行く秋の月影白し

菊　茨城　牧野糸子

むしの音も千ぐさもかれし庭のべにひとりあきなる白きくの花

秋　武藏　吉田智惠子

もろ共に一夜かたらん望月の影にもにたる胸の思ひを

秋　神田　大畑豐子

見のよろしきゝのよろしも高殿の月に調ふる夜半の玉琴

紅葉　和歌山　森重子

夕日さす稻荷の山のみやしろの鳥居のあたり紅葉散るなり

社頭　秋田　浦井まつ子

神さびし黑木の鳥居かたぶきて社にそゝぐ秋の村雨

菊　京都　中村はる

たく露の玉より白く咲きいでゝ匂ひこぼるゝ園の初きく

鹿　大阪　武田こと葉

紅葉ちる夜半のあらしのたゆまゆ妻戀ふ鹿のこゑを聞くかな

須磨　播磨　山口田鶴

あつもりが名殘をとめし須磨寺の紅葉ゆかしく秋の雨ふる

---

霧　上野　三木たま子

霧はるゝ里のあぜ道畔の男が煙草くゆらし二人三人ゆく

秋　信州　北原けた子

衣うつきれのひゞきのみにしみておもひたくだく秋の夜なく

時雨　入舟の里　あきか

おくて刈る田の面の賤が袖の上にかはく隙なく時雨ふるなり

菊　前橋　王井潮子

かこを背に飯をたり行乙女子のかしらに床し白菊のはな

秋　麹町　淺井美濟子

美の神のこもりますよと錦なす紅葉ドゆ小庭なくなり

寄菊祝　上野　矢島さと子

千代かけて老てふ事をしらぎくの花にこもれり君がよはひは

萩　駿河　大川さち子

我が父も母もれぶれる松かげの古りし一もと萩の花さく

草庵月　信濃　小岩井しづ子

なかなかにあるゝもよしや草の庵はつゆの玉しく庭の月かげ

折にふれて　下總　石渡武津子

そよそよと紅葉葉さそう風よりも寒きは人の心なりけり

秋のわかれ　小石川　しら雪

朝なく花咲きかねし朝顏のかれ葉淋しく冬は來にけり

擣衣稀　信濃　小岩井しづ子

君が代は安寐する夜や多からむ賤のきぬたの音ぞ稀なる

秋霧　岩代　菅野和子

里の子がおち栗拾ふ聲すなり朝霧こむる森のあなたに

秋旅　丹波　堀内つゆ子

故郷に家守る母をなだめむとふでとりながら亡き父思ふ

秋　大阪　ますみ

木枯のすさぶ曠野を只一人二十日の月は今さし出でぬ

秋　北海道　よし代

空冴えて月高き夜はかの森に木の葉染めます御神見まほしき

菊　藤原春子

故郷にわれうゑおきし白菊の今をさかりと妹の玉章

失題　山口　ゝ村田きゝ

文机に散りこむ桐の一片にわが名君が名かきてみるかな

深山紅葉　近江　紹月よし

きりふかき谷の水音峯にひゞきましらの聲にもみぢ葉の散る

折にふれて　伊勢　岸田ちゑ子

友病むと聞きて悲しむ夕ぐれをにはの糸萩雨に亂るゝ

秋風　山口　有吉ます子

我がかどのたりほの花の打ちなびき秋にかよふ秋の夕風

秋風　福岡　とも子

すゝき原いそぐ行者のうしろかげ三ヶ月さむく秋の風ふく

紅葉　高岡　岡本乙女

きのふ今日時雨晴れたりいざ行きて霜まだ知らぬ紅葉訪はまし

秋山　越後　堀田たづ

栗ひろふ子等もかへりて夕日さす山の林にましらなくなり

秋月　秋田　野口榮子

小夜更て千草にすだく虫の音にあはれをそふる秋の夜の月

秋。風　岩手　野々村よし子

そと出でゝ戀よむ妻のきび畑ふみがら卷いて秋の風吹く

---

紅葉　福岡　とも子

まぐさかる賤の男の子が馬の背に結びそへにけりもみじ一枝

秋月夜　氷見町　高澤外代以

世のちりに汚し身をもこゝろをも洗ふばかりのあきの夜の月

失題　下野　横山與志子

萩ちりしその花片にうつもれて靜かにねむる蝶のなきがら

失題　岡山　ゆき子

色あせしかきの桔梗になくあぶは戀をさゝやく亡者の聲か

秋雨　大阪　堀川靜子

更ぐるまゝに降る秋雨もはれそめて月影すゞし菊月廿日

里の夕暮　弘前　三宅亮子

小松原打ちつれ歸る馬子の歌の遠くに消えて日は暮れんとす

秋旅　四ッ谷　島田美子

なく鹿のこゑこそいとゞかなしけれあきのたびねの夜ごと〳〵は

曉鹿　岡山　長谷川波子

夜を寒み曉ちかくなるまゝにとふさかり行小男鹿のこゑ

冬　神奈川　川井あさ子

入日さす岸の枯蘆風あれて施餓鬼の塔婆に烏なくなり

寄露述懐　大阪　みどり子

露よりももろきいのちと人はいへどおきどころさへなき身なるかな

稲妻　越後　小島茂子

ゆたかなる秋のみのりを見せんとや田の面をてらす宵の稲妻

月　芝　吉田松枝

月かげに雲のかゝれる其ひまにおもひうかべる歌かきつけぬ

秋　長門　山野靜枝

夕くれにふくあき風のとりどりにあはれをそへて身にしみにけり

秋　　　芝　石井せい子

桐の葉の落ちしひびきか白露も花もこぼれぬ庭の萩むら

亡友を思ひて　　　小石川　鈴木まさ子

残されし人の袖のみ秋ならで君が旅路も露けかりなん

秋風　　　吳　すみれ

おとずれてすだれ動す秋風に桐の葉落ちてものぞかなしき

山里雪　　　紀伊　島津秋子

風すさみ木の葉さわぎし跡絶ぬて雪静かなる小野の山里

江上月　　　岡山　原田たかゑ

水の上におちてくだくる月影は秋ゆく人の心なるらむ

秋夕　　　羽前　高橋彌生子

袖の浦昔しながらに千鳥啼きておもふ事多し秋の夕ぐれ

秋の田　　　伯耆　稻賀おりの

賤の男が苅る手おもげに見ゆるかなみのりゆたけき小山田の稲

秋雨　　　伊豆　河島靜江

袖がきをかざして行かむ村雨やふりみ降らすみ定めなければ

暮野　　　茨城　菊地峯子

野邊のいろはいよいよあわく月ほそく行くての地藏今ぞけんとす

秋　　　長崎　谷すみれ

あした夕めでにし人はかげもなしひとりつゆけく匂ふ白菊

芦の花　　　長崎　米田園子

ちぎれ雲水にうつりて渡場の船に人なし芦の花ちる

秋　　　和歌山　てる子

落葉より外に音のふものぞなき夕邊淋びしき山里のいほ

秋風　　　河内　大矢たれ子

朝霧の中にわらやのほの見ねて鷺か音さむし秋の川風

秋風　　　新潟　小林靜枝子

夕日影淋しく照らす岡邊の一本松に秋の風ふく

紅葉　　　横濱　山上愛子

淺間根のゆく手はろかにもゆる火と見しは薄日の紅葉なりけり

菊　　　熊本　大重ゆわ子

世の中に花てふ花は多かれと菊の花こそめでたかりけれ

秋　　　上野　桑原信

月清く淺芽生の宿はださむしすだく虫の音あなたこなたに

秋　　　河内　桂君枝子

秋の夜はれざめて物を思ふかな哀れ虫の音哀れ雁の音

折にふれて　　　岩代　齋藤とま子

さゝ栗に芋につどひて山が家は團爐裏したしくなりもゆくかな

もみぢ　　　志摩　濱口しづ

石壇を下へ下へとひろがへる紅葉一葉に夕日がぎろふ

折にふれて　　　神奈川　吉田喜代子

行く船はれふれる島にかくろひて百里の波間月うすう見ゆ

秋　　　小石川　春海潮子

薄月に木犀かほる紀三井寺聖き秋の夜は靜かなり

秋　　　岡山　淺沼琴水

髑髏のすけかさすてし森かけのほこらさひしく秋の雨ふる

擣衣　　　和歌山　今村なみ

吹く風も身にしむ夜半の月ふけて衣うつなり川つらのさと

菊　　　京都　三の宮つゆ子

今日もまた瓶にさしても見つるかなせこがかたみの白ぎくの花

夕　鐘　　下野　神山美代子

ほろ／＼と桐の一葉のこぼれきて沈む夕日にかれのれ細き

月前萩　　越前　みさを女

風吹は庭の萩か枝月宿す露もこぼれつ花もみだれつ

雪の夜　　石見　宮内登美子

雪折れの音に寝さめて夜もすがらロシアにいます背子思ふかな

菊　　牛込　小山つぎ子

諒闇の院の燈火都もれて黄菊に細し夕ぐれの雨

秋　　栃木　田波秀子

おばしまに思ひ出多きこの夕友呼ぶ雁の聲ほのかなり

雑感　　長崎　しづの女

うつれゆくさぎりをもれてそちこちに匂ひそめけりみれのもみぢば

冬　　静岡　佐藤かつ子

紅葉散る片山かげの細道を若人二人かたりつゝ行く

秋夜　　大坂　田中しゆん

讀經の聲打たゐて雨になりてみ寺のやふに狐なくなり

暮秋夢　　越後　高橋雅子

わびくしもさがのゝ奥にかりれしてくれゆく秋を夢に見るかな

暮秋　　播磨　横田春枝

花薄まれく秋もうらかれて心細くも秋はゆくらむ

天長節　　奈良　奥田良子

家毎に赤き心の日の御旗かゝげて祝ふ今日のたのしさ

菊　　京都　四辻済子

我庭の菊はことしも咲にけりされとめてます君は居まさす

秋　　熊本　宮川千代子

松ばかり青き鎮守の落葉しき詩集ひもとく人うらわかき

暮秋　　京橋　松井こう

虫うりの籠とりまきて里の子等つどひのゝしる秋の暮かな

冬　　芝　川井喜久子

脊の君の歸り遲しと待つ門にあられたばしり風寒く吹く

秋　　熊本　藤本友子

朝ごとの露にしほれて女郎花誰が誘ひ来る風や待つらん

菊　　大阪　武田こと葉

山里にしばしかりれの宿ながら菊さく庭の思ひ出らるゝ

秋の夜　　山口　平野梅子

ひとりぬる床は野山にあられども袖に露おく秋の夜な／＼

惜秋暮　　紀伊　田中きみ子

秋もはやひと日ふた日となりにけり庭のもみぢのいろうすきまに

秋風　　和泉　種子島初子

打ち靡く尾花が末に月落ちて夕べ淋しき秋風ぞ吹く

秋暮虫　　和泉　種子島初子

時雨して暮れ行く秋の眞萩原虫のこゑより枯れ初めにけり

雁　　紀州　田中すみ子

ふるさとの母と語りて夢さめて旅の枕に雁のこゑきく

秋草　　滋賀　山木久江

いつれをか手折りてゆかん花ことに今をさかりの野邊の秋草

秋山寺　　和歌山　西口峯子

山里の御寺さびしく秋ふけてもみぢの奥に佛陀羅尼よむ

旅宿虫　　岡山　稲垣延子

旅まくらあはれにすだく虫の音に我ふるさとの忍ばるゝかな

霜 赤坂 鐵倉留子

夢の如落葉おきし餘蔭の徑に鳥の足あと小さき

秋風 伊勢 鈴木ふさ

白露も月もやどれるいものはにつよくなふきぞ秋の夕風

鴉 丹波 前田久子

鴉なく聲もほのかに聞ゆなり立つ夕ぎりの深草の里

時雨 本郷 野村みつ子

おさなきを再び里にいだしやりてわび居の七日雨のつめたき

秋曉 本郷 中村八千子

わたし舟そこともわかず立迷ふ朝霧の中に船歌の聲

秋雨 駿河 岡田すて

ふる雨にいとゞ淋しさまさりけりやむ形見見をみとろまくらべ

冬野 前橋 入澤芳子

打見ればそこともしらず冬枯れて野守の庵もあらはれにけり

冬曉 前橋 風崎德子

朝かぜに尾花が袖もしも枯れて霧げにくもる有明の月

秋夕 信濃 山岸ふみ子

夕ぐれを妹と二たりの影長がし秋風さむく烏まゐゆく

秋旅 和歌子

ゆく〳〵もかへりみすればふる里の山はさきりの立こめてけり

夜秋雨 横濱 米原孝

ふるさとの母にあひたる夢さめて軒はさびしき雨のおときく

秋のまつり 新潟 小林靜枝子

神さびし鎮守の森に夜はふけて淋しくひゞくかしはでのおと

散る紅葉 下野 田中はな子

庭の面に錦もつ身を忘れけりちりしく紅葉はてしなければ

暮秋 石見 西山かつ子

山がせのさそはずもかなくれて行くあきのかたみの峰のもみぢ葉

秋夜 淡島 船津恒子

ちぎりをきし友を待つ夜はいつか更けていやまさりゆく虫のこゑ〳〵

蟲聲 肥前 姉野釜子

月淸くねられぬ窓にこほろぎの聲あはれにも鳴く今宵かな

秋の夕 長門 伊津見ふさ子

からすうり赤らみ初めて籔かげのもろゝ夕日に雀むれなく

秋の暮 伊豫 高橋茂子

みちのべの千草の花も色あせて虫の音細し秋ふけぬらん

冬 麹町 福島安子

父母と昔し語りのゆめつぶれてのきの芭蕉葉あられうつなり

題しらず 前橋 木下無津

秋の野のまねく尾花にさそはれて思はずきつる深草の里

砧 武州 中島きみ子

打ちつゝも胸の思ひやみだるらん砧の音のと絶えがちなる

秋夕 岡山 小山まつ枝

やみませる君をばみとるこの夕べ桐の葉ちりて梟のなく

霧 岐阜 白つゆ

行く人のかげは見ねれど鄙歌の聲のみたかし朝霧のうち

紅葉 岡山 時岡まさ子

おそろしき瀧のひゞきにひら〳〵と一葉の紅葉あはれ散りゆく

秋 紀州 山本美子

霧をばよそにみ山の里なれど峰の紅葉をにしきとぞ見る

雁　大坂　愛子

親と子の浮世を語る窓の火の更けし霜夜に雁なき渡る

露　大坂　平岩しよう子

わけゆかばちりや亂れむ八千草の葉末にやどる露のしら玉

柿　津市　寺井露子

うら庭の柿のこずゑに百舌鳥なきて障子にさせる秋の日よわし

箏　靜岡　渡邊靜江

迫り來るつま琴の音ににほひあり籬の木犀闇にこぼるゝ

秋日旅行　宮城　宮崎春子

追分の歌の數々きゝ暮れて愈々寒むし松前の旅

秋の月　茨城　櫻井こう子

葉におくつゆも玉かとまがふまでひかりさやけき秋の夜の月

鹿　近江　青山せい子

さよふけて小雨そぼふる秋の野に哀れを添ふるさをじかの聲

古寺　周防　中谷音羽

哀れさを松吹く風と入相の鐘につたふる峯の古寺

紅葉　前橋　小林ゆき

今の世に折りてかざするみやびをもあるや立田の川のもみぢ葉

秋　神戸　山下とめ

友訪ひてかへさの野邊に虫なきて月影出でゝ秋の夜すめり

日前鹿　奈良　鈴木溪孫

妻や戀ふはた伏戸にや迷ふらん月に男鹿の鳴く音悲しき

擣衣　信濃　牛山さと子

衣擣つ力いかにと思ひしにまたおとろへぬ老のうれしさ

夕潮時に佇みて　弘前　三宅房子

潮の波おだやかに風すぎて雲又雲の寫り行く見ゆ

寢顔　京都　竹下季子

色赤きリンゴ片手に眠る子の笑みよ可愛しリンゴよ美し

秋　佐世保　坂本みつを

秋風におどろかされて古里の庭の白菊思ふ夜半かな

吹雪　信濃　竹鼻はる子

ふところに泣く子すかしつ枯野はらふゞきにまよふたび人あはれ

秋の山　肥前　うめ

少女子のもすその紛にやかゝまほし淺霧こめたる山のおもかげ

晩秋　長門　杉山きくの子

あたりつゝむさぎりの中にとりなきてわが家わがさと秋靜かなり

秋　佐賀　木下なみ子

きぬたうつこゑのをり〳〵たえぬるはこよひの月やしつゝも見るらむ

秋旅　秋田　浦井まつ子

春日路や旅のつかれの夢さめて枕に通ふさをしかの聲

秋夕　大阪　今木繁子

峯の時雨ふりやそめけむ路さむき片山里の夕霧の秋

初冬水　岩代　菅野廣子

朝さむみ凍る蘆の根柳かげ緋鯉に交る柿の葉赤き

初雁　和歌山　中谷蕊滿

秋風にさそはれきぬる初雁は空のいづこかとまりなるらむ

秋　うた子

淋しさをさゝやきおつる桐の葉のそれさへうきを入相のかね

## ◎音信なき友に

秋も漸くふけ行きて、空の氣色村雲迷ひ、折々は時雨うちし紅葉の、かづ〳〵散りそむる昨日今日、物もさびしく吹く風雁の鳴音などに驚かされてはひたすらに夕の雲のなつかしく、親しき君は今如何に、
さるにてもあはれ、空行く雁の無情さよ、懐しき君が情の露の今はわが手にむすばずなりぬ、あなくしや、そも花を看んとては梢の嵐をうらみ月を愛るとては尾上の雲を厭ふためしのいまはしき世にしあなれば、星うつり人去るにつれ、親しき疎きゆきかひて、温きも冷やかに、去者は




來者にうちかはるも理りなれや、
あゝされどこは心せまきわれの言ひがひなき邪推にてはべるよな、情あつき君に如何でさる事のあるべしやさらばよ君、月ほの白き夕、雨そぼふる夜半、花ちる頃虫なく時、さては木枯きつら吹きすさむ晨とあらば思ひ出で給ひてよ、優なき姿の君を思ふてやつれ行くらむを、
庭の松が枝に琴はかけれど、そよ吹く風の來て吹けば、妙なる調わが身に通ひ、面影の君はうつりて、淡く朧るにわが胸をわたる、あななつかしや、（立神まさ子）

雜纂

# 紅葉の話

青山女學校名譽講師 寺崎留吉

時節柄紅葉の事に就て少々御話致しませう、先達も畫伯野村文學君の畫塾で此の話を致した折、色々其邊の人が質問を發せられたことがある、其れを聞纏めて見ると大抵世間の美術家又は普通の植木好の人が如何に紅葉を誤て居るかが分りましたにより、其れを基として話の筋路を定めました。

秋に成ると我邦では一般に空中の水蒸氣が漸次減じて參る九月の雨期を通り越すと著しく空中がさい渡りて、大空を高く渡る鳥までが明かに見へて、天が一段高くなるかと思はるゝ位である、此の水蒸氣の減少と共に寒冷が次第々々に加はりて、蟲の聲さへ鳴く力が衰へて聞えなくなる、此の空氣中の變化に伴ふて草木の葉が赤くなるのが卽ち紅葉である、丁度寒冷のため霜が置く頃になるから霜葉とも稱へて居る。




右の次第で紅葉するのであるから、空中が不絶濕つて居る、所では紅葉はしないのです。一般に日本の西南では 氣候が年中温和であるし、且つ海の潮の加減で不絶水分が空中に滿ちて居る、のみならず常綠木が段々繁茂りて來ますから紅葉は概して少いのです。

之れに反して我邦の東北部は秋には寒冷の來り方が早い、空中が早く乾き初める、よし空中に水分が霧となりて來ても直ぐに 雨や露となりて降りてしまう故、地面に近き草の葉に露を散らす割合には氣中には水分が少ないのです其處で紅葉が立派に染まる、其れのみならず常綠木が段々北に赴く程減じますから紅葉が目に立つのです、其れですから紅葉を見んと思へば、どうしても東北地方へ出懸けるに限ります。

然らば關西地方の紅葉は如何といふに京、大阪の人の眼に映じて居る紅葉は東北地方の紅葉と全く趣が異つて居るのです、關西地方では一体に松が多い、山には女松卽ち赤松、平地には男松卽ち黑松が繁つて居る其蒼々たる翠綠の間に挾つて赤い葉がちら〳〵見ゆるのを貴ぶです、否な其れが彼の地方の自然の有樣です、紅葉が少くて松が多いのです、しかも其紅葉は楓の木ばかりです、手を擴げた樣な葉の楓許りです、そうして其木の數が

至て少い割合に少いです。京都の嵐山、高雄、栂尾でも満山女松で其間に數へられる程紅葉が交つて居る、勿論緑に赤の配合ですから最も色の配合が宜しい、一段赤が赤く見ゆる、併し見ゆる範圍が狭くて規模が小さい。攝津の箕面山も同様である、瀧や急流があるから彼の邊の秋の山景は優美である。有名なる通天とか、眞如堂とか永觀堂とか、又若王子、新高雄、東福寺何々何々と申しても結局皆庭園である、人が植へたのが成長して繁つて居るのであるから、盛なる森をなすといふ譯ではありませぬ、東京の瀧之川、品川海安寺、下總の弘法寺も皆な同一の筆法で栽培の紅葉で庭園的であります。大和の龍田は今日は實に案外な所です昔時の歌に讀んであるところを記臆して居りますから、誰も非常な盛なるものと想像しますが、彼の關西鐵道の王寺驛で降りて半里歩むと龍田川といふ細い淺い流に出遭ひますが楓は一向に少い、岸の堤に小さな樹が此處に一本彼處に二三株といふ風で到底紅葉其物を見に行く價はありませぬ、古昔の名殘りと云ふて風韻を呼び起すのです。之れに反して關東奥州の紅葉と聞へば其れは盛んなものです、満山皆な紅葉といふ計りです、東京近くでは平地では紅葉は少ないが奥州地へ行くと汽車の通る路の兩側が皆な紅葉です、山として名高いのは勿論、日光で下野鹽原、上野榛名、妙義、信州境の碓氷嶺 孰れも紅葉に富んで居ります、筑波山、箱根、富士、などは海岸に近くありますから紅葉は宜しくありせまん。女子に山野跋渉は不適當であるが、併し信州の碓氷嶺、福島米澤間の板谷峠抔では汽車の窓から座し乍ら紅葉が見られるのです。日光や鹽原となると道中が餘程面倒であります 日光も日光町の停車場附近では紅葉の味は知られませぬ是非三里踏み出して中禪寺の湖水邊から其先きの龍頭の瀧、又は湯元の温泉まで行くと實に眞の紅葉の天地で錦の世界です、上野の妙義山も宜しい、それも妙義町即ち松井田といふ停車場から一里半位の所では未だ駄目です是非金洞山といふ方面に踏み込まれればなりません、金洞山一名中の嶽といふのは實に紅葉の虎穴で、之れに入られば虎兒を得ることは出來ません仰ぎ見れば今にも崩れんとする計りの峻しき石門屹立、塔の如き奇巖何れとなしに登り路があつて其鋭き鉾の様な尖頭に攀ぢ登れるのです、併し其上に座して四面を眺める時は實に此の世の慾情は何も無くなつてしまふのです大切なる杖でも瓢でも 植物の採集器でも皆な途中で捨て置いて、唯我軀一つ命を手に托して 昇るといふ位で、君子の近く處ではありませぬが此の峰頭に立て四顧を望 みますと左右前後上下悉く紅葉で全く錦の世界に産れたる赤子と謂ふ氣 持が致



すのです。

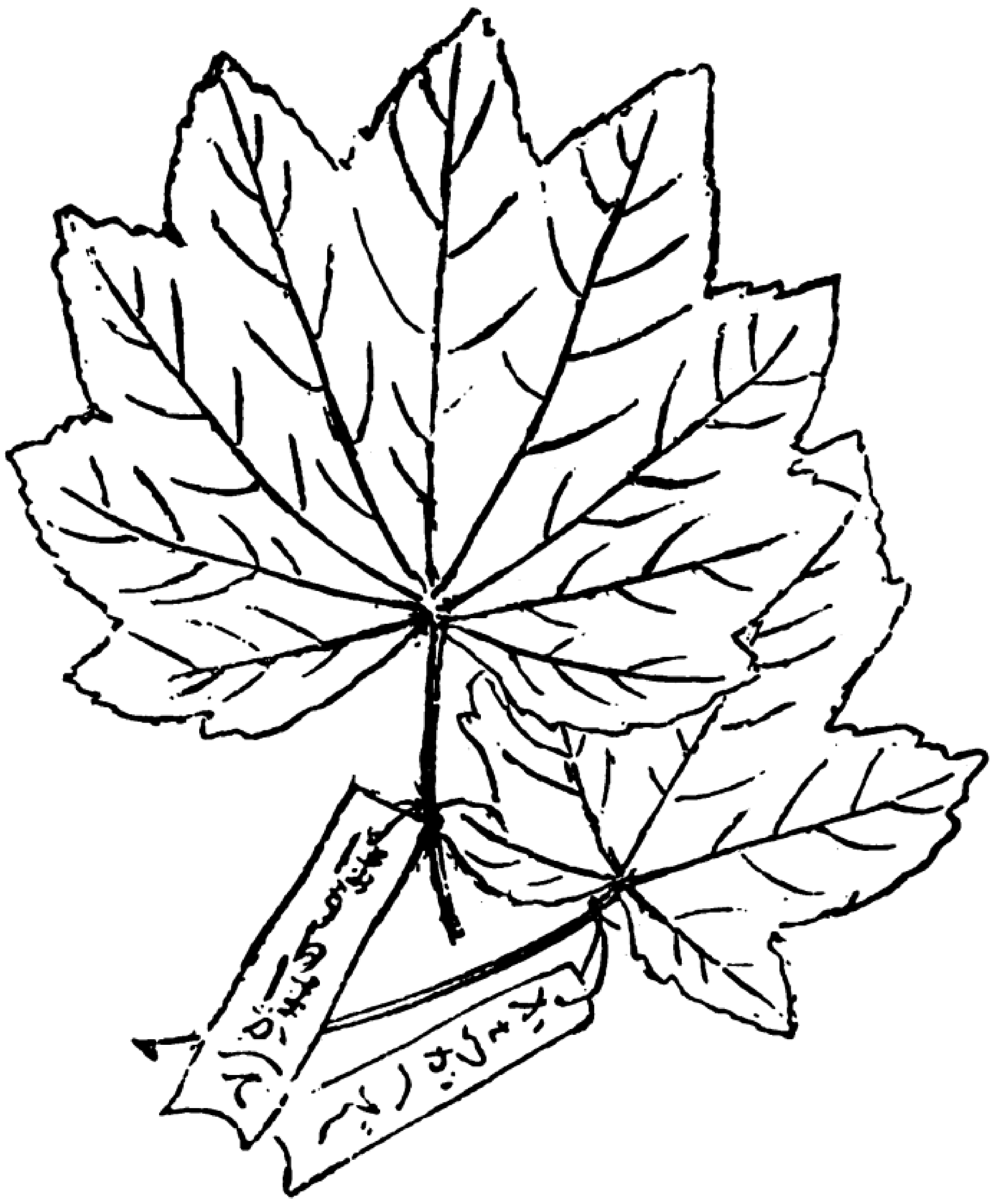
東北地方の紅葉は、關西と違ふて總ての草木が 赤くなるのです松柏類の外は何でも霜に遭ふて染まるのです、其れも決して 赤い許りでなく黄も、柑色も、樺色もある赤の中でも緋と紅、紫掛つた濃紅、海老茶等もあるのです、固より種類は楓ばかりではありませぬ、楓の中にも種々の種類があり、皆な／＼自然の勢に任せて大きな老幹になつて居ります岩根の峻しき所に僅かに罅隙に根を打ち込んで横に梢を差出して居るのがあり、湖の濱に半ば倒れて水中に色を染めて居るのがあり樵夫炭燒人は惜氣もなく枝を破き截つて束にして負ふて行く林間酒を温む所ではなく飯でも何でも焚ける位です。

楓の種類と紅葉する草木の種類は大約三十五六もあります。

如此澤山な種類の樹が一時に色を出すのですから東北の高山秋の景色は實に觀物です。

尙ほ最後に植物生理學者の謂ふ所を少しく紹介して說きませう。

凡そ木の葉は之れを薄く切りて顯微鏡で觀ると葉綠粒といふ て綠色の細かい粒が見はる秋になると之の物質が枯れて彼の樣に赤くなる 可きものであらうと一寸考へますが植物生理學者の研究で は左樣でなくして全く別に赤い色の物質が出來るといふことです、此の物質を「アントシアン」と稱してあります此の「アントシアン」は春芽の出るときに一度は色々の植物にも現はれるのです其れが一旦無くなつて再び 秋になると現はれて來るとの說です、勿論葉が黄色になるのは全く葉綠粒の枯れるからです、葉綠粒に染まりて居る綠色の物質は黄と青と二色の別の物質の混合であるといふことと今日では確かに知れて居るのみならず其れを別々に取出して藥品の如くに瓶に入れて置くことも出來るのです其內で青い方の色は早く腐れて黄色は其まゝ乾いてしまうて色が變じないのです。春の嫩芽の赤いのは前に申した「アントシアン」色素のためであるです。



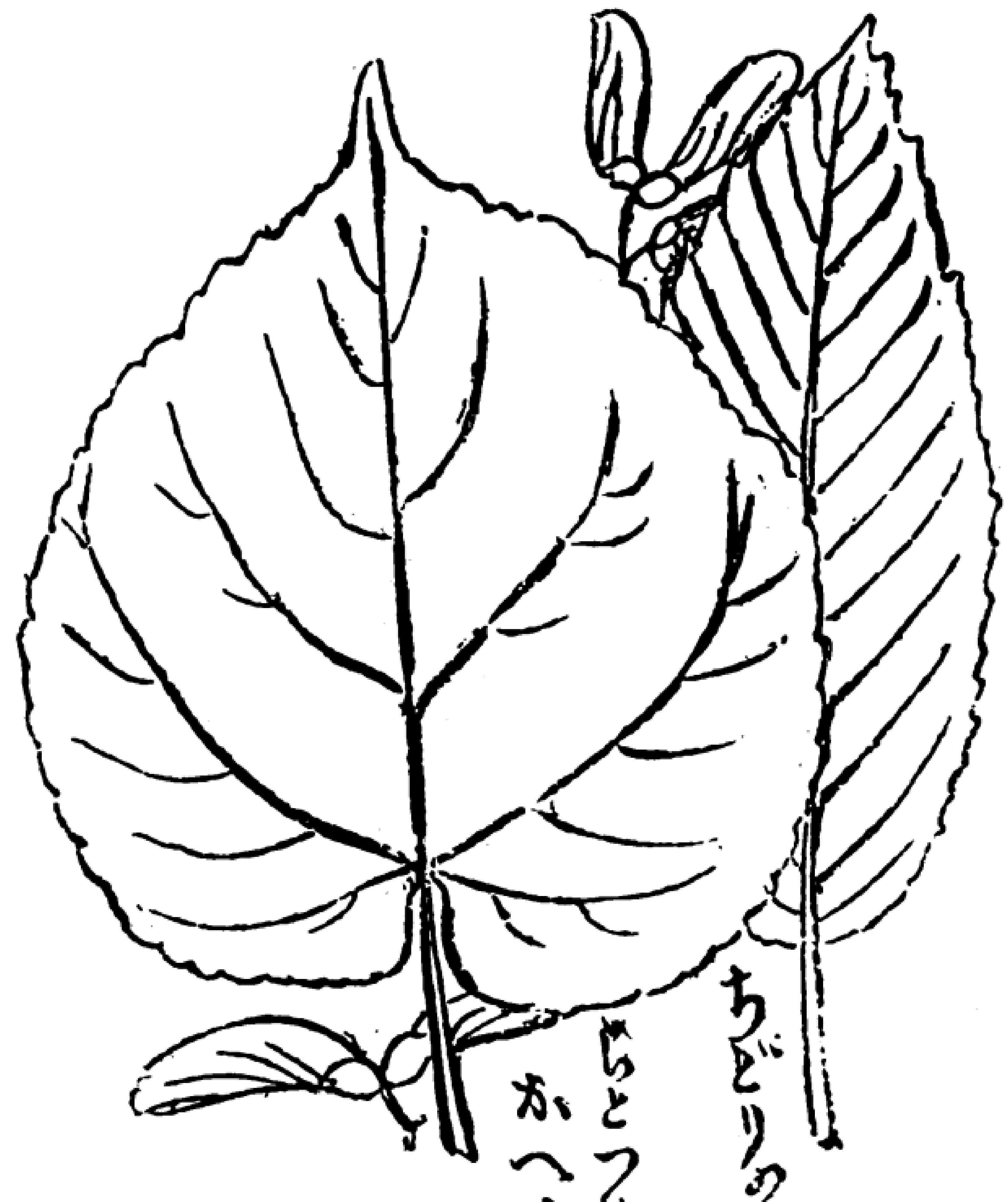
尙ほ前々に申す可きのを忘れましたが楓は園藝のために色々葉形の變化のあるのは皆元と一種類から分れたので山野に 自生の は元ともと別種ですが庭植りの分は悖な變種であります血潮(ちしほ)、淡雪(あはゆき)、錦繡等は皆變種です。

又今一言申す可きは東北程紅葉が宜しいが北海道は實に美い のださうです殊に九月下旬に札幌では最早や紅葉錦をなすのです。

西洋では氣候が烈に變るため紅葉は見れんさうです。叉楓といふ字は誤り否な別の植物で「ふう」と讀ませる「かへで」は槭の字が適當です併し通用が少いから致し方がありません。京都の高雄山では烘の葉を「ハンケチーフ」や白色の帛に挾みて上から槌で打ちて摸樣を附けて鬻いで居りますが餘り風流でありませぬ、日光では二三種の紅葉を紙に貼り付けて額になる樣にして賣ります是れも亦餘り雅とも感じられませぬ。

## ▲紅葉の名所

世に高尾、栂尾、槇尾三山を總括して三尾山と稱し紅葉第一の名所とす山中一帶清瀧川の碧流あり。流に臨みて叢林の楓樹到る處ろに繁茂し秋霜樹梢を染むるの時に至れば黄葉、紅樹、碧溪と相映じ風景紙の盡す所にあらず、三尾の内栂尾は其最北に立ち山下に一橋を架す、名づけて白雲橋といふ、橋を渡りて高山寺あり古明惠上人の住する處たり、又高尾は清瀧川の溪に沿ふて稍西南に下れば高雄山下に達す全山最も楓樹多き地にして 兩崖悉く楓樹殆んど他木を交へず、是より右方に登れば神護寺にして左方に轉れば紅葉茶屋の割烹店に到る、神護寺は和氣清麿の草創にして其の奥の院は實に紅葉第一の地にして瞰下すれば清瀧の溪流遙かに 眼下に横はり老樹兩岸を擁して俠骨白鶴を臘見し 巣錦を以て蜀錦を綴ふに似たり又槇尾は平等心王院と號す白雲橋より溪に沿ふて下ること 數町對岸の山腹に在り弘法大師の徒弟智泉法師の 開基にして中興を正忍律師とし律宗にして眞言宗を兼ね三尾の内此山最も楓樹に乏しと雖も 樹木蓊鬱として深邃の佳趣に富み大に人目を新ならしむ蓋し三尾の栂尾は明媚高雄は宏壯、而して槇尾獨り幽雅を專らにす排置共に妙を得たるものといふべし。




右は京都の紅葉名所なるが攝津箕面山も又畿内紅葉名所の一たり大阪より凡六里、山中の寺を龍安寺と稱す、白雉年間役行者の草創たり紅葉の觀所は寺の北凡十七町箕面の瀑布あり高さ十一丈幅三間飛瀑雪を飛ばし賸素紙に盡きず、而して滿山の楓樹、新緑、霜紅二季の如きは點映最も宜しきを得、佳趣を添ふ一層のみならず就中紅葉の名は瀑聲と共に四方に轟けり。

（日本名勝地誌）

# 陶磁器の繪摸樣

石井研堂

客間の飾付、及び器具類は、幾らか主人の好みを代表してゐるものですから、その飾付の工合と、額面・掛物・置物・茶器・煙草盆・盆栽等を見るときは、主人の趣の邪正にあるやを、推測することが出來まする。全で中らずとも幾分かは。

中に就て、客に茶を惠むるに、直のお安い數物なる、銅版繪の土瓶茶碗を用ひる人、或は伊萬里燒・京燒の清楚なるを用ひる人、薩摩燒の綺麗なるを用ひる人、種々ありませうが、客たるもの、先づ一碗の茶を喫り終りし後、その茶碗の繪を觀、糸底を觀て、「これは結構なお茶碗ですが、伊萬里でせうか。」とか、「この お菓子鉢は、どちらの出來でございませう。」とか尋ねてごらんなさい。主人は、笑を含んて、「肥前に參りました者から、土產に貰ひましたのです。十人前のでしたが子供や下女が亂暴なので、半分ばかりにしてしまひました」とか、「一向詰りませんものです。博覧會の節に、取つておきましたのです。」など答へながらも、心中は、大に客の陶磁器の趣味を有てゐるを 喜ぶでせう。

器具の價の高下は兎もあれ、客ある時に使はんとて、毎日物に非ざる器具を、蒐め居る人は、平日、器具といふことに付て、多少心を勞して居るです。で、たゞ一言、その用器を賞讃するは、主人平素の心勞に對する、客人の義務で、世の所謂お世辭といふものゝやうに、輕薄な類ではありますまい。又これ交際上の一法で、この一言より、陶磁器上の談話を產み出す機會を得ば、口を緘默して、たゞに盃の塵をひれるに優りませう。

されども、他人の茶器を目利するなとは、茶人の爲すことにして、多くの熟練を要し、容易に實行さるべきことでないと、言ふ人もありませう。が、予の謂ふ所は、茶人風の目利では無くて、日用普通の、即ち誰にても知らで叶はぬ普通器の目利を言ふのです。普通器の 目利などは、平日の注意さへあれば、自ら習得する機會多く、智識は知らず〱膨大し、友人の交際術上、弟妹の家庭教育上、少からぬ益を爲すに相違ありません。よりて、今こゝに、予の平日、家庭にて子女に語る所の、陶磁器の摸樣についての、お話を述べませう。手近に在る お茶碗等に合せながら、讀んで頂きたいのです。實物に就きませんと、文章ばかりでは分りにくいですから。

一口に言へば燒物、關西では伊萬里物、關東では 瀨戸物といふてゐる窯器類は、何れも、土(石を碎いたものも同し)をこれて形作り、窯といふ一種の釜のやうなものに入れて燒いたものですが、その燒け加減で、土器・陶器・石器、磁器の四つに別けておきます。

土器とは、樂燒ともいひ、神棚に供へるかわらけ、今戸燒の諸物の類で、其素地嘗め試みると、舌の吸ひ付く、即ち水を吸ふ燒物、陶器とは粟田燒・薩摩燒・淡路燒(殊に燒の足りない淡路燒)等で、其素地は水を吸ひますが、土器よりは燒の堅いもので、この二類を土燒ともいひます。

石器とは、備前の伊部燒、伊賀の萬古燒、磐城の相馬燒等で、其素地は水を吸はず、雅器類に多いです。磁器とは、燒物の中、最も進歩した精美のもので、肥前の有田に產する伊萬里物、美濃尾張に出づる瀨戸物多くはこれで、日にかざして見れば、半透明質に燒けてます。石器磁器は、本燒とも石燒ともいひまして、打てば金石の響を發します。

以上の四類は、何れも、陶土と火力の釣合により、質の燒き締りて、最も緻密になつたものと、それに及ばぬものと、其程度によつて、大別するに過ぎませんで、科學上から、劃然と分類することは六ケしいです、只、最も强熱で燒かれたのが磁器、最も低熱で熱かれたのが土器と記臆すれば、大なる差ないです。

人間は贅澤のもので、智識の進むにつれ、衣食住の上に、實用以外、更に裝飾といふものを好んで來ます。衣服地に中形・縞・友染の模樣あり、衣服に振袖ある如く、陶磁器も、繪摸樣等をつけて、人の神目を怡ばすことになつてます。

陶磁器の裝飾は、其實體の恰好にも、重きをおきますが、器面に、彫刻又は異る顏料で繪畫等の摸樣を傅けるが、著るしい裝飾になつてますが、こゝには、色彩で成れる、繪畫裝飾のとだけを述ぶることにいたします。

- **陶磁器の裝飾**
  - 形狀的
    - 實体の形狀
    - 彫刻摸樣
      - 手ぼり彫刻
      - 型細工
  - 色彩的
    - 本窯裝飾
      - 繪畫摸樣
        - 肉筆
        - 印刷
      - 地色
    - 錦窯裝飾—繪畫摸樣

陶磁器の裝飾を、ざつと分類しますと、こんなことになりませうか前にも述べました通り、燒物類は、先つ陶土で其素地を作り、その外面に、釉藥といふ酸化金屬を塗り、窯に入れて燒き上げるのですが、繪畫的裝飾は、その釉藥の、窯燒せらるゝによりて色を發し、始めて器面に見ゆるやうになるのです。たゞ其窯燒に、本窯と錦窯との二種あつて、少しく方法が異つてるだけなのです。

先つ、手近なる、白地の磁器に青繪のある、二三の土瓶茶碗を出して觀て頂きませう。この白地青繪の磁器は、青華磁器とも、染付ともいふてます。その繪摸樣をよく觀ますと、一は畫の筆畫、細い太いなく、線の處々に切れ目あり、可なり緻密に出來てなり、一は、一線一點筆力あり、又色彩に濃い淡いなとあり、二者の相違する所を發見するでせう。前者は、形紙又は銅版畫で、複寫した畫摸樣で、直の安い物に多く後者は、肉筆の畫摸樣で、直の高い物に多いのです。或は又、一器の中に、魚の鱗や鰭の線なとを、銅版で寫し、隈どりだけを、筆で塗つたのなともありますが、要は、成るべく肉筆と見えるやうに、やつてます。

この青繪の原料は何でせう。舊來、呉洲といふてますが、化學上の名は、酸化コバルトなのです。同しい青繪でも、舊い作のは、黑みを含んで、沈んでをりますが、此節のは、色が冴々して、ほんの水色のが多いです。これは、近年は、一躰に舶來呉洲を使ひますためなのです。呉洲の青繪は、黑ずんで紫みを含んだのを良いとしてますが、緣日向の安物のは、皆この冴々した方のだけです。

其外、紅色を出すに黃金、又は酸化銅、碧色を出すに酸化鐵、なとございます。これらの顏料で、器面に繪を書き、或は、器面全躰を染め、そして燒き上げるのです。この顏料を釉藥といふてます。素地の上層にかける藥なのです。佛國のパリッシイが、家具まて焚ものにして、發明に苦しみましたのは、この釉藥類でした。

又一種、無色透明の硝子の如く出す釉藥があります。その原料は、硝子と同類で、硅酸と石灰が大部分を占めてます。即ち天草石の紛に、草木の灰を調合したものなと、これです。白磁のお茶碗類を、手に取つてごらんになれば、摸樣の有無に拘らず、器面に、この無色透明の硝子質の掛つてない物の無いことが直に知れませう。

又、ひゞのある硝子質を被つてるのもございます。これは、前の硝子的釉薬を調合法によりて、やゝ其質を緻密にしただけなのです。其外皮が緻密で、素地と一致しませんから、焼かれて後冷める時に、收縮度を異にし、ひゞの紋を現はすことになつたのです。

其他、酸化亜鉛又は石灰などで、結晶形の紋を現はすこともあり、工人の永年研究した結果、種々の奇巧をやります。



繪畫模様を、書きつけず、器面全體を、ある色にし地色を裝飾とするとでございます。中ン就く昔から最も名高いのが青磁です。雨後の青天の色を、本色としましたもので香爐、火入、茶入杯に多くある色です。只今は、攝州の三田から澤山焼出しますから、貴らも見られます。藤原時代の物語日記類に、藤色と書いておくが即ちこれで、釉薬は酸化鐵なのです。この他、酸化銅で辰砂色を出したり、酸化コバルトで瑠璃を出したりします。

地色の釉薬をかけるには、其薬液を、筆又は刷毛で塗つたり、其薬液中に浸したりするです。すべて、釉薬は極細に粉にし、水をまぜて使ひますが、其色の何たるに論なく、窯に入れぬ内は、鼠色、黒色などに見ゆるが多いです。焼き上げて始めて望む所の色に出るです。

陶畫を書く職人は、實に器械的であつて、同一の仕事を、毎〻くり返して居りますから、すてきに熟練して居るです。會津の本鄕の陶山工は、二三本の繪筆を手にし、一度に二三の畫を書き、又九谷焼など、深い湯呑の内部に、細かい字を多く書く時なとは、鍵の手に曲つた様な使つてかくさうです網目のお茶碗なとを見ますと、その網目の大小、驚くべき手練のが識らもあります。これらも、陶畫工の熟練の一斑ですから氣を付けて、観て頂きませう。

本焼の磁器は、窯の内にあつて、攝氏の千六七百度位の熱で、一晝夜以上焼かれて、始めて成るものですから、黄金で描いた繪が、紅色に出るといふ風に、色は意外の變化をするです。その爲めに、本焼の方の顔

料(釉薬)は、僅々數品の外なく、黄色・緋色なども、近年の發見に過ぎぬ程なのです。併し、化學の進歩につれて、今後追々新色釉が發見さるるでせう。

こゝに又、九谷焼・薩摩焼など、紅と金で、細密妍麗の繪をつけた焼物を見て頂きませう。又同時にお安い小盃か、珈琲茶碗の、金模様の付いてゐるのを、見て頂きませう。其繪は、染付の青繪のやうに、硝子質の下層に隱れて居ませんで、その上層に高く顯はれ居るので、一見直に知れます。これ等は「焼付」「錦付」などいふて、本窯の繪とは、異る方法で付けるのです。即ち、普通の陶磁器を焼く方法で焼き上げた素地の硝子質の上層に、錦窯的顔料で繪を書き、もう一度、錦窯といふ窯に入れて焼くのです。

紅と金などで、細かな人物畫など書きましたのを「錦手」「錦襴手」などいひますので、その畫を焼き付ける窯を「錦窯」といふてます。東京で「繪付」といふてゐるのも、同しいことなのです。

この錦窯は、本窯から見ると、低い熱度で數時間焼くだけですから、本窯と違つて、何色でも出すこと出來るのです。で、この法でやれば、西洋の水彩畫風のでも、又わが四條圓山風のでも、各種の色を使つて、濃淡心のまゝにやれます。本窯の方のは、色數が少いですから、どうしても畫に不自然を免れません。



錦窯工は、纖巧妍麗を主としてますので、多く都會でやります。海外に輸出する九谷焼などいふものは、美濃邊で焼いた白磁に、横濱で錦付するが多く、今日、横濱の陶畫工の數は、素敵な大數だと聞きました。酒屋のお景物に出す小盃に、金で屋號など書きましたのが、澤山ございます。この方の金色は、わるく光りが強くて、厚さがありません。これは、昔から「錦手」に使つた金とは違つて、「水金」といふワニス的の新藥なのです。仕事も易く、價もお安いですが、追々に剝げてしまひます。お安い珈琲茶碗などは、大抵これですから、氣をつけて見て頂きませう。

又、本窯と錦窯と、兩方にかけて、一つの繪を仕上げる法もあるです。たとへば、山水摸様と人物を、青繪の染付にし、その衣服の色を錦窯で付けるなどのやり方で、これは都會では出來ず、山元(窯場地)でやるのです。

また、形紙、銅版の方法、耐火性釉薬で、花鳥摸様を高く現はす方法など、お話したい題目は澤山ございますが、餘り長くなりますから、切上げておきませうが、せめては、前に述べましただけをも認めおき、他を訪れた時など、一つためしてごらんなさい。定めて、思ひ當ることもございませうから。

(完)

# 亡國的遊技

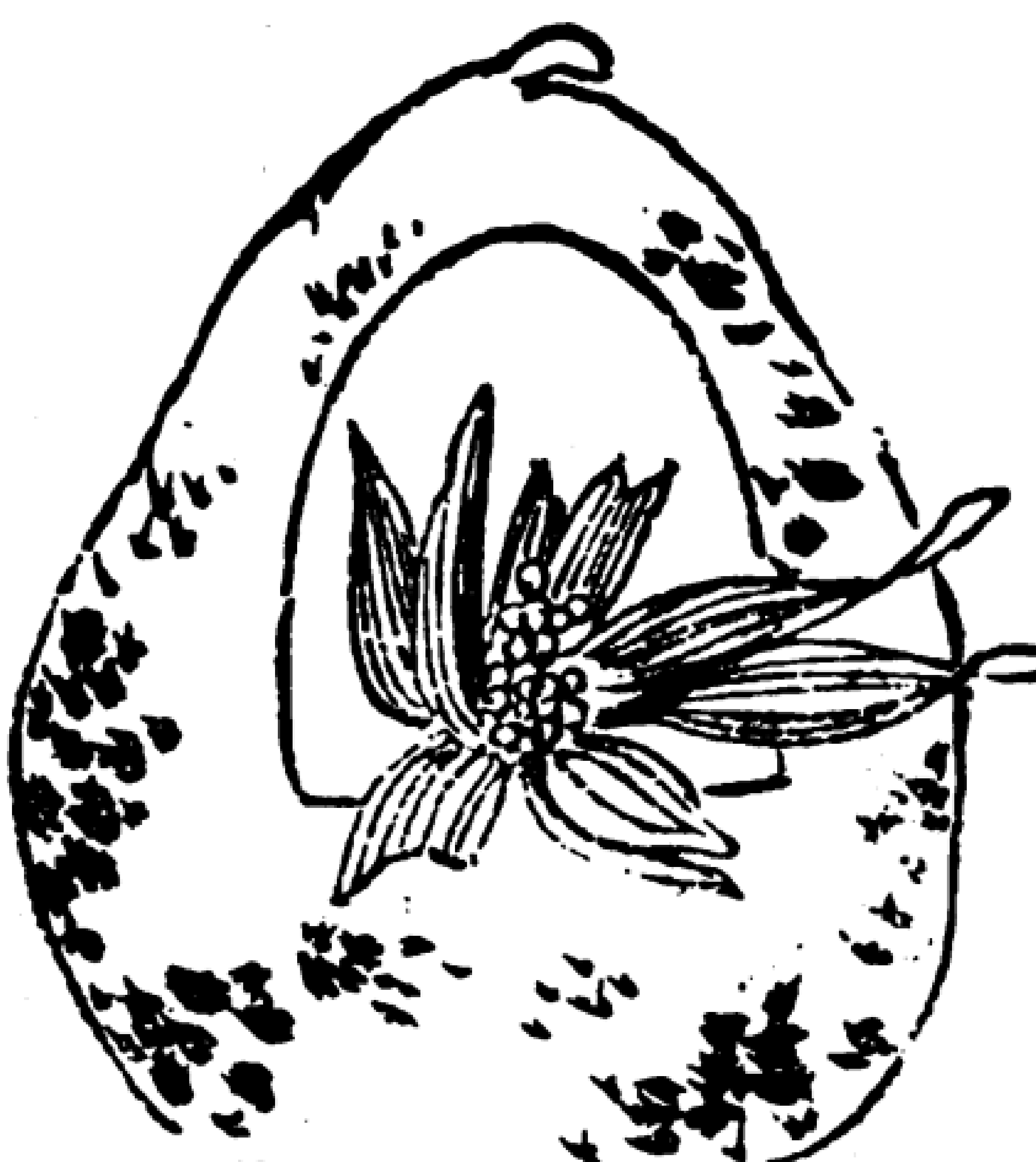
▲茶の湯▲挿花▲彈琴

近藤正一

挿花、茶の湯、琴、踊躍など、實 之を遊藝と稱へて民國の富豪か、然なくば遊女とか幇間などの輩が主に習ふたもので、安居逸樂の民の消閑の遊技としては或は此上もなき道具であろふ。

維新の改變と同時に、これらの遊技は殆んど跡を社會に絕ちて一時は顧みるものも無かつた。然るに近來世の小康に及んで、彼の遊技は亦段々芽を出して参つて、殊に此二三年來は實に非常の流行で、妙齡の兒女にして之を學ばぬものは殆んと無いと申しても好い位、それから又女學校などゝへも點茶科とか挿花科と稱へて此等の遊技を教ふる、そして此の挿花や茶の湯が美術の一種だとか何だとかと云ふ大層立派な名義の下に奨勵されて居るが然し此の遊技の流行は祝憂かは知らぬが、私などは、この流行を見て實は密かに懼を抱て居る。

勿論世間の事は一から十まで實利實用主義計りで押し 通されるもので無い娛樂も風流も無論必要である、しかしこの娛樂の種類が、驕奢や贅澤に渉るものは何所までも戒めなければならぬ、驕る平氏久しからずと云ふ諺は何も覇者や執政者計を戒むるのでは無い、家政を主る婦人に在ては殊に服膺すべき金言である。



▲奢侈的遊戯

この驕奢の恐るべきことは今更事新しく云ふまでも無い、昔から經世者は國の興亡盛衰の重なる原因を以て殆んとこの驕奢に歸せぬものは無い。

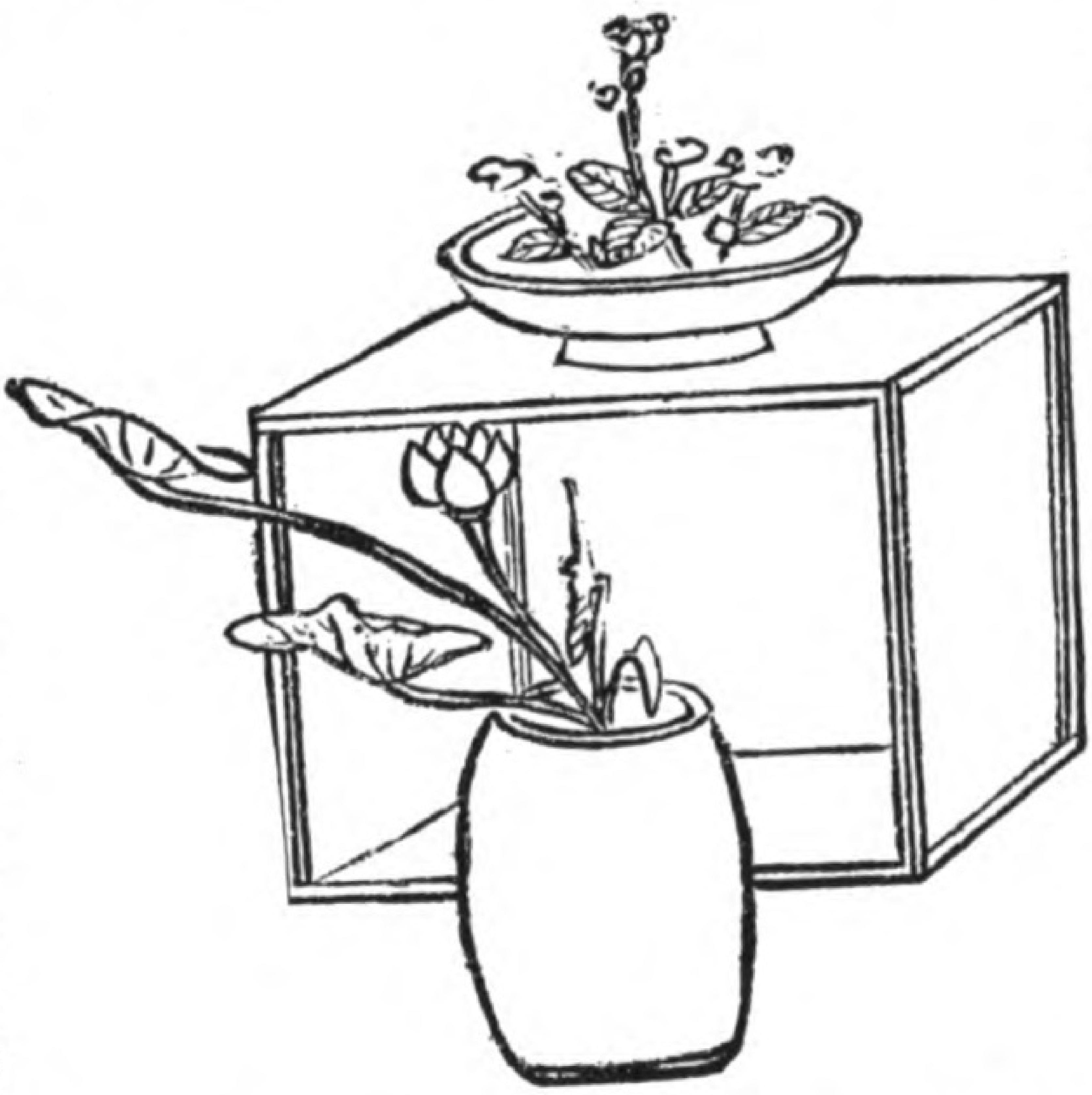
私は茶の湯や挿花や琴など云ふ遊藝それ自身が家を亡ぼしたり産を傾けさするとは申さぬが、然しこれ等の遊技が家を亡し產を破る先兆又は前驅症たるといふに躊躇せぬ、此等は丁度肺病患者が嫌な 咳拂ひなしたり氣が鬱くなどと同樣で、氣分が鬱いだり咳が出るから肺病が起ると云ふでは無いが肺病患者は斯樣な症兆を示すものである、引例が餘り可笑いかは知らぬが先つ斯樣なものであろふ茶の湯や、活け花や、彈琴などの遊藝、私は總てこれ等を亡國病破產病の患者の咳の聲や唸り聲であろふと思ふ。これは西洋でも東洋でもその例は幾許もある。が、外國の事は暫く措て日本の事について見てもわかる。

▲驕奢で亡びし昔の貴族

彼の藤原氏は驕奢を極め華奢風流果を族の仕事 のやうに 致して いろいろの遊技に耽つたがその醉態に爛れた結果は、とう〳〵政權を武家に奪はれて徒らに立派な虚名を擁する傑に終つた、それを學んだ平氏はどうであるか榮華驕奢は眞に春水の一夢に過ぎなかつた、それから金閣や銀閣を建てゝ和漢の骨董物や美術品を集めて、香だの茶の湯だのと云つてつまらぬ事を仕事の樣にして居た足利は終にその家臣の 驕暴を制

# 玉あられ

することが出來なくて諸國を流浪せればならぬ身の上に成り、聚樂や桃山で亂舞や抹茶に華奢風流を盡した豐臣氏は儉約な思慮深き德川翁の爲めに哀れな末路を見る樣に成つた。然し勤儉を以て唯一の訓戒として居た北條は九代も家名を續けた、覇者や大名でさへ斯の通りである。況して社會の水平線に出るか出ぬ位の我々の家で、茶の湯だの挿花だのゝ樣な奢侈な遊技に耽る樣では到底その家の榮へ樣譯は無い、茶の湯や挿花や彈琴………一寸考ふると、何程の費用を費やすではなし誠になんでも無い樣に思はるゝが、然し私共は決して然樣は考へぬ、それは茶の湯にせよ挿花にせよ、又諸禮と稱ふる一種の貴族的諸禮でも、その費用の多少に拘らすこれ等は凡て奢侈の副産物であろふと思ふ、何も驕奢は費す所の黄金の多少計りに由るものでなくその事柄の性質に依るのである。それで斯樣な驕奢の遊技……人心を遊惰に導き浮華虚榮の心を馴致する、加之も尤も時間を徒費することの多い遊技は、彼の一家興隆の眞髓となるべき勤主主義とは決して兩立するものでない、時間の濫費は奢侈中の尤も奢侈であるて ふことを忘れては成らぬ。



## ▲時間の騰貴を知れ

昔から時間の貴いことは誰も申す所であるが、今日では時間の價値は非常に騰貴して居る。それのみならず我々が世に處する爲せになければ成らぬ仕事は山の樣にある、決して昔の大名の奥向や遊び專門の逸民が消閑的にした慰みなどを悠々とやつて居る暇はない。それ計りでなく昔の婦人は最終の目的が良妻賢母となるに止つたものである、……勿論良妻と爲り賢母と成るにはいろ〳〵と立派な婦人として立派な仕事も含まれて居るに相違ないが、然し先つ人間が一番大切に思ひ且つ一番の雜事たる生活を擧けて良人の負擔に任せて置て、婦人は只その内助に就ての仕事たに出來れば婦人の能事は畢ると云ふ樣な有樣であつた、然るに今日では良妻賢母たる上に生活と云ふ事に就ても夫や親にのみ任せ置くことをせずして婦人も一人前の人間として自ら生活の道を求めなければならぬ樣な困しい世の中に成つた、之は中々の大仕事である、それを考ふるとどうして悠々と茶の湯や挿花や三つ指、摺足の禮式などをやつて居ることは出來ぬ、それて以上の仕事が出來て始めて良妻賢母と云ふ名稱が下さるゝので、昔しの樣に内助計りが出來たとてそれで良妻賢母と云はれ無く成つた。

## ▲女學生と三つ指禮式

然るに女學校大抵の女學校ではこの遊技を恰も必修の學科か何かの樣に生徒に修業さする勿論表面は隨意科ではあるが、然しそれは眞に表

圖計りで事實は裁縫科も同様である。私は出來る事なれば斯る奢侈の性質を含んで居る無用の課目は斷然女學校から驅逐し度く思ふ、假令全然驅逐することは出來ぬ迄も、せめては卒業の一年前の生徒に限り隨意科として教習さする位の事に留めたく思ふ、すべて禮式作法は精神であつて形式ではない。

### ▲亡國的遊藝の流行

この亡國的遊藝――少し極端な申し樣かも知らぬが昔は大名とか幇間とか云ふ類の小局部に限りて行はれて居たものであるから、隨てその害毒も輕くて濟んだものである、然るに今日の樣に上下一般如何なる僻村の學校でも之を教科に加へ、府下の如きは學校許りでなく、その以外にも斯種の遊藝を敎ふる塲所は實に非常の多數で大抵の町には裏店でも小路でも何流挿花指南とか何派茶道指南などの看板の一ケ所や二ケ所掛つて居ぬ所は無い、實にその流行の甚しいのは驚くの外は無い。私はこの奢侈的遊技が斯樣に世に歡迎さるゝを見て如何に亡國病破産病の病毒が日本の上下に瀰漫するかと云ふことを思ひ遣りては實に寒心に堪へぬ。然し斯樣は申すものゝそれは奢侈の産物として流行するを悪むのであつて一概に花を挿すことが悪い、茶を喫ることが悪いと申すのでは無い。露が朝露にぬれて睡の醒めぬ佳人を見る樣な草花など、之を手折るに優美の感に打たれる、自分はこの精神を取つて形式を排するのである。



## 婦人と競走

佐竹郭公

現今日本に於ける各女學校等に於て、春秋の候、大運動會を催し、數多の姫達が一蹴一閧、韋駄天と其脚の駿さを爭ふことは珍らしからぬ事實にして、又極めて奨勵すべき事なり。抑々女性は其腕力の點に於て男性を壓倒する能はざるは悲い哉爭ふ可らざる事實なり。尤も伊豆などの或漁村にては、米俵の二俵や三俵やすく〱とかつげざるは婦女子の名譽に關し頗る恥辱にして、夫れ大學の荒くれ男も、腕力の點に於ては彼に一籌を輸せしは殘念なりと戸田に滯留せし學生は語りぬ。之れと同じ話なれ共、友なる保科文學士の伊豆七島に付ての紀行談こそ面白けれ。該島に於ける男子は唯遠洋を放漂して魚を漁し、島岸に達し、櫂をおろせば其天職足るものにして、船中に滿載する魚介の類を、陸上に積載し家路へ之を運送するは總て婦女子の任なり。故に島内の婦人は筋骨魁偉にして優に男子を凌ぐと。併かし是れ皆境遇の然らしむる所にして、幾分か讀者の好奇心を充たすだけ例外の部ならん。腕力既に女子男子を凌ぐ能はず。止むなくんば競走か。蓋女子は男子に比して、其躰格輕捷にして筋骨撓軟、其動くや飛燕の柳枝に舞ふが如く、春風の南枝に訪づるゝが如し。其筋肉の所謂エラスチックなる、其擧動の輕妙なる若し此點を巧に利用して練習する所あらば、優に男子を壓倒するに足らん。若し女子社會が運動術を以て男子と輸贏を決せんとせば、宜しく競走を擇ふべし。但し我儕は此勸告を直ちに現日本の令孃貴夫人諸氏に望むものに非ず。乍失敬我國近時の婦人は此の野心を試みる以前に須り、先づ西洋婦人の如き活潑なる氣力と、適宜なる戸外運動に依り、充分其躰格を改造せんことを希望するものなり。此の先決問題が婦人諸會

を通過するの晩は、始めて我營を動むべきなり、

日耳曼の各地方には女子の競走頗る流行す。就中其最も有名なる競走はセイント、バーソロミユーデイを期してヴユルテンブルグのマルクトグレニンゲンに於て行はる。昔は其日に繁華なる市たりしも、今は其事なく、唯滿村擧て爰に盛大なる遊戯を試み、希臘のオリンピアングームも斯くやと憶はるゝ程の賑かさ、まして万綠叢中紅一點とも稱すべきは記者の説かんとする田舍娘の競走なり。情弱盡の婦人は、我國の婦女が土曜の晩翌日の芝居遊山を憶ひて夢を結ぶ能はざるが如く、其前日より狂氣の如く、準備おさ／＼怠りなく、愈々其當日となりぬれば、蟻群の田舍娘は東より西より蹟集し來り、其着裝といへば、皆乳のあたりを包める摺胸の短きに、其裳さへ寛かに、公園の運動場に記せる出發線へとつめかけぬる一群の婦人はスタートの號令を俟てり。天外擊あるや一躍數間裳を蹴て電火遍しと駈け行く後姿雄々しきとも、勇ましきとも、謂はん方なし。殊に不思議なるは此の疾風の如く駈け行く婦女群の後へに接しつゝ汗馬を御して行く市の書記なり。彼れ果して如何なる職務を帶ぶるか。何故に、殆んど婦人の後脚に躡かんとする程に、馬を走らすが蓋し彼の目的とする所は競走の秩序を維持し、婦女に多く例を見る競戯上の掻み合ひを調停する任に當るにあり。尤も彼等は賞品の燦爛たるが既に其眼睛に入れるを以て競走の途中にありては、如何なる非常手段を採るも苦しからず。或婦人は他のものを顚倒せしめんとて、頻りに之を推しのけ、果ては兩人共に仆れて、哀れ鷸蚌の爭漁父の利に歸するあり。或は其側に跪れる仲間を擊ち倒し、計らず絶息せしむることあり抑々以上述べしが如き粗暴は古代人種の厭棄する所にして、假令競走者の一人が會々權暴手段を用ゐ、他を排して勝利を博すと雖ども、之を勝負中より除きて賞品に代ふるに[illegible]の汚名を冠せり。但し現今グレニンゲンの今競走には斯くの如き規約なし。

當日男子は「ホプリトドロモイ」と稱ふる武裝競走を爲せども、此田舍娘の競走には一の武器を裝ふこともなく、一の兜を冠することもなく、唯水を滿々と容れたる甕を頭上高く隻手に持ち上げ平均を保ちつゝ走る恰も我國の學校に於ける運動會の提燈競走に髣髴たり。只一は風の爲めに燈火の消ゆるを恐れ、一は急奔の結果、手の權衡を失し、甕中の水を溢すの憂あるのみ。此際假令相手の嫉妬を受けて突當てられざるも、若し少しなり共其脚の駈け方を不自然ならしむれば、忽ち甕は振ひ、水は波立つべし。此時に當り、甕を固定せんが爲めに其手を高く擧ぐると雖ども、時既に遲し、可憐の小娘は滿身頭上より水を浴せられて終る。

此遊戯に列するグレニンゲン市の婦人は古代に於ける アトランタの苗裔なりと自ら信じぬ。アトランタ其人の何ものなるかゞ判然せば、此田舍娘の勇ましき競走の由來も明かにならん。古代の神話に依れば アトランタの父は元來男兒の生るを熱望せしを以て、アトランタの誕生を見て大に憤り、殘酷なるかな、彼女をセイント、パルセニユース山の凄涼たる麓下流れ行く溪川に沿ふて巖穴の傍に捨てぬ。傳に依れば此兒は熊の哺育を受け、稍々長じて弓を牽き、操槍を學び、特にカリドンの野猪を狩り盡し、獸類の毛皮を剥ぎて外套を製し晩年まで之を着たりと。凡そ斯くの如き風は確かに男性的なり。故に父と調和を爲し、可及的速かに結婚すると云ふことを條件とせり。於是アトランタが其夫の 選擇に付き自ら面白き條件を揭げて曰く、妾と共に競走を試み、妾を捕へし男こそ、將來妾が偕老同穴を契る君なれ、勝負に敗れたる郎達は將來妾の奴隸となるべしと、時にミラノンなる青年、衆に先んじて試合場裏に進み出で、イザ一走りと競へ共、到底彼女の後塵を拜するに過ぎず、哀れ鹽子の嘆を爲さんとするや、天外よりヴーナス女神の贈りし三個の 林

檎こそ今は深き裏なれ、彼は早速某林檎を道の邊りに捨てぬ。かく露はしき果實の姿を未だ曾て看ざりしアトランタの眼にはイカに珍らしとや感じけん、之を拾ひ上げんとして躰を屈せしが最期、ミラノンは跡より最先に追着き彼女の手を握れり。此の兩人の間に生れたるパルセノ、ポイスは絶世の走者として名世界に赫灼たり、併かし結婚後暫らくして兩人は悖くべし歟に變じぬ。是れ抑々如何なる神の罰ぞや。神話の道德は曰く。苟くも汝利益を享けたることあらば、必ず其恩人に謝することを忘るゝ勿れと。蓋し三個の林檎實に燦々たる望物のみ。併かし此林檎より得たる利益や頗る大なり。嗚呼彼等が神の逆鱗に觸るゝの 素より偶然に非るを識る

（完）

# 婦人の行商

山田春塘

◎女子の職業程度と云つたら、恐らくは内職に過ぬであるが、爰に紹介する畑のおばと稱する行商は、一家の生活を女子の手でなしつゝあるから、男子をして殆ど顏色なからしめ、自然女尊男卑と云ふ傾向である、

◎畑のおばとは京都の近郊高雄の山麓で、梅ヶ畑と呼ぶところである、元來梅ヶ畑の事を昔は畑村と云つたので、都の者は此所から來る女の行商人を指し、單に畑のおばと云ふではあるが、實際おばどころではない、新造も年增も混つて居る、

◎其の風俗は例の大原女と同じ筆法で、物品を頭へ載せ京都の市中を行商するのだが、畑のおばは大原女のやうに柴專門でない、營業品が頗る雜して居る、先づ割木（薪木の事）楷子、簑掛（蕨箒の事）打木（槌の事）通木（すりこぎ）臺（腰掛の）（枯枝）等であるが、割木と柴は途中得意が極つて居るから、目下は電に荷車で運搬するが、

◎昔は孰れも頭へ載て京都の町中まで往たものださうな、其の關者と來たら二十四五貫目迄は、頭に載き二里餘の道を休憩もしない、之が女子だから驚くより外なしであらう、併しながら他の賣物は仍り頭へ載て、京都へ行商に出掛る、

◎其の賣聲は梯掛買しやせんかい……楷子いらんかいな……と、東京に於る草餅賣の婆さんのやうに、市中を軒別に觸て歩くのである、が、大原女より見たら總てが野鄙だ、夫に畑のおばには特兆があるので、大原女と間違ゐやうな事はない、

◎所謂特光と云ふのは煙草入と長羅宇の煙管である、畑のおばと稱する梅ヶ畑の女子は、十二三位ゐの年齡より煙草を喫習ひ、此喫煙を卒業したら、徐々と行商に出掛るのだから、誰彼となく長羅宇の煙管を腰へ挿み、男持の煙草入を前にぶら吊て居る、之が畑のおばの風習であると云ふ事だ、夫を畫工が大原女を描くと必ずしも、煙管を持つて居る所を寫生であるが、大原女と畑のおばを混じたのであらう、

◎此畑のおばの所在地則ち梅ヶ畑の習慣として、嫁入、聟取ともに村内のみで配合させ、他へ嫁さないと云ふ事になつて居るから、村民は繁殖し目下では三百餘戸に達し、村落ながら劉々に繁昌であるが、孰れも早婚で女子は十五歳位ゐで、良夫を定める事になつて居る、

◎恁う云ふ按排で早婚者が多いから、妻女と娘の區別が附ない、乃で良夫を定めたら直ぐと鐵漿を含むのだ、鐵漿を附て居たら妻女で白齒の者が娘と區別してある、夫に髮形と云ふ裝飾の風※が一定して居る、島田崩を草束れにしたやうな格好で、葛引の元結を横にかけ、舊習を依然と保存して他の髷を見ない、

◎夫に老若に拘はらず、行商に出る前には毎朝髮を結ばせるのだ、之が女

髪結の手を煩すと云ふ譯ではなく、自身結揚るのだから別に費用はかゝらぬが、俗に鬢出しとか稱す油を附け、髪飾を小綺麗にして置のと、行商に出るのが女子の業務になつて居る、

◎また男子の所業と云つたら、朝は疾く起き出で炊事をなし、夫から近傍の山へ登つて割木を伐るか、柴を苅かして居るのだが、男子は恐らく懶惰であつて、其の妻女が日々賣歩く材料だけの物品を、採集したら跡は木小屋などへ集り、賭博などで日を暮して居る方が多い、

◎梯子、鞍掛、連木、打木などを製造する手合は、別に勉強して工作するではなし、仍り妻女や娘が賣歩くだけの、物品を製造したら跡はブラ〳〵と遊んで居るから、長唄黒木賣の文句に、餘所の手業とみなうらはらよ、とゝが米かす風呂も焚く云々の如く、實際男子は斯う云ふ境界である、

◎傍から見たら隨分阿呆らしいが、習慣となつたら男子も之に甘んじ自分等が採集した柴や割木、偖は製造した物品などを籠近い木小屋へ取纏へて置くする、と行商から歸つて來た女達は、直ぐ其の足で翌日の賣物を、木小屋まで運搬に往くのだ、

◎其所から歸つて來る頃には、山から男子が戻つて來て居て夕飯の調度がしてある、雖てか男子と女子と反對に往から、行商の歸途に錢が餘分にでもあつたら煮賣屋で飲食し、歸宅と同時に亘夫を捉へて管を卷く女もあるさうな、

◎以上は余が先頃高雄詣の歸途、梅ケ畑の者より聞得たる實話である、京都の近郊には之に類似たる、「中鄕ゑびす」「おいれ女など」云ふ、女子の勞働者もあるさうだが、孰れ稿を改めて記すとしやう、



# 小萩はら

## 上

佐藤露英

情なき小夜の嵐に、明日は破れ衣とならんとも知らで、春の粧ひをその儘の翼美しう、流れに添へる野菊の蔭よりひら〳〵と舞ひ出でし胡蝶の、女郎花、紫苑の色もなく打ち臥せる寂び果てたる野邊を、心なきさまに打ち廻りて、高く低く、右へ左へ、と狂ひ行く。

開き切つたる紅菊白菊の幾輪、取り交せて絹半巾に包みたる幹を片手に、片手は葡萄色の袴をや丶高く掻い繰りて、裏付の草履輕う、藤色甲斐絹の袱を返して一と足前に落葉を踏みつ丶、窶れの見ゆる頰を淋し氣に、涼しき眼光を上げて蝶を追ひしがやがて、何を求めてか、花なき草の中に半ば姿を隠したる行方に目を注めて、哀れ氣に打守りつ。油氣なき洗ひ髪の、白き面に散りたる後れ毛の風情惱まし氣に、何結びか、束髪に白きリボンの風に、いで此處にも秋の蝶は潜めり。

紋緞子の洋傘に紅葉の枝を添へたるを間に、後へと少し隔たりて、濃淡なく染めし薄墨色の空の面の、水底に映りて沈みたる色に流る丶小川を右手に、大方花の散り失せたる一ト叢の小萩が許に身を埋めて、黒ずみたる海老茶色の袴の裾を打ち亂しつ丶、靴穿きたる兩の足を前に左右へと交はして同じう蝶の行方を眺めながら、

「果敢ないものねえ、秋の蝶なんて」

と爽やかに云ひて、立ち盡せる友をば後より仰ぐ。濃き生際の亂れ毛もなき前髪大きう、頭髪には飾りもなくて、締りたる面ざし、間狹き一の字眉の男めきて、際立ちて凛々し氣なり。

「果敢ないはねえ」と彼方は優しき物の云ひ振り、後方は見返らで、其儘茫然と夢見るさまに、小川を隔てたる彼方の、いさゝか刈り殘されたる田の面を望みて、何か獨り思ひを辿れるに、

「三重さん」と呼びながら訝し氣に見守りしが、耽る思ひを其れと推して、搆ひ氣もなく、

「兄さんの事を思ひ出したの？」と輕き調子に聞く、

親しき間柄ながら、あまりに明らさまなる問ひにさすが羞恥さを覺えて、

「いゝえ」と胸の思ひを掩ふつもりの、然り氣なくは答へたれど、端なくも色に出でたる面麗しう、思はず伏目になりて、

「秋の所爲なのね、悲しい事ばかり考へて」と手にせる花を空に眺めつ。

「ぢや、矢張り兄さんの事も考へて居たのえ」と笑みながら、『お墓の中で、何樣に兄さんは喜んで居るか分らないわ」

首傾げて、恥らふ人の面を差し覗くに、つい見返りて、合はせたる目許に懷しげなる笑みを交せしが、沈みたる顏色の浮いて見えしもこれ一時、何時か眼光さへ曇りて、

「何う考へても、既うこの世にはいらつしやらないのね」と、熟と俯向きて、胸に近く溜息の聲細し。

「仕方がないわ、いくら云つたつて返へる事ぢや無いんですもの、其樣ことは妾もう諦めてしまつたの」

崩折るゝ心を見せまじとて、殊更調子强うは云ひながら、

「だけれとと打萎れて、『存命ていらしつた時分、せめて其の半分だけでも兄さんを思つて下されば好かつたのに」と力なき聲に怨みを含んで云ふ。

合點ゆかぬさまに、

『兄さんを思ふつて？』と問ひ返へせば、
『思ふと云つては悪るくて？』と稍々言葉荒く、
『妾のやうに、兄さんとも仲好くして下されば好かつたと云ふの、あなたは亡くなつた兄さんが嫌ひだつたわ。』
歓聲の終りの一と言、その胸を刳りしか、唇を堅く結んで、切なげに見えしが、堪へ得ぬさまに其處に腰を屈めて、
『あなた、知つていらつしやるの？』
と安からぬ面色、袴の裾は草の上に波を打つて、後の方に長く曳いたり。
『今まで默つて居たけれども、すつかり聞いたわ、亡くなる前に兄さんから』
熟々と友の面を打守つて
『あなたは平常優しいやうで、隨分無情なのねえ』
言葉付冷やかに、摘むとにもあらず、汚れし花の僅末に殘れる一と本の萩に指を絡ませて、首垂れつゝ弄ぶ。
思ひに思ひて焦れし人の、優しき笑みを一と度も見る事叶はで曉寒き病院の床に、この世を去りゆきし兄が臨終の物語り、妹の玉江は唯哀れと思ひ泌みて、不治の肺の病ひとは云ひながら、一時に重らせしも友の三重子が大方は原因なり、況して、玉の緒の絶ゆるに猶時の早かりしも、その人の心の暖からぬより、兄の身には廿五年の短き浮世を、樂しみと云ふ事は更に覺えで、身は病に、心は戀に、悶え苦しみて果敢なくも終りたる恨みのさぞや深からんを、其れも、此れも、情無き友が心の唯一つより、と口惜しさは極まりて、昨日まで校舍の門を潜るも、出づるも手を携へし人の上をば、今は仇敵のやうにも思ひ做して、人の情を嚙み分けぬ幼き心に一向憎み初めたりしに、思ひの外なりき、鬼の心を持つやうにも思ひし人の、兄失せたりと傳へし日より、我れへの笑顔さへ稀になりゆきて、病める身にもあらぬを此の頃の面窶れ、胸に惱みの絶えぬ狀態に、家に在りては書も讀まず、筆も取らず、言葉は少なう涙のみ多き其の風情の痛ましうて、兄あらずなりし爲とばかり

も思ひ取れねど、憂きに閉されて日を送れる人のさすが哀れに、解けぬ心は其の儘、何事も胸に秘めて今日まで打ち過ごしつ。

明日は兄が命日、二人連れ立つて此處に手向の花をば摘みつゝ、秋の物悲しさに失せにし人の一層戀しう、言葉の端よりつい恨みは冴え返りて、友を責めしが、思ひに悩めると知りつゝ、心強くも云ひ過ごしたりと、今更に悔ひて氣遣はし氣に眺むれば、屈めたる膝の上に頰杖支きて、凝然と見入りたる草の面の、露はあらぬ方に宿りて、

『無情だと云はれても辛いとは思はないの、みんな自分が惡るいんですもの』

はらりと落ちたるを袖に拭ひつゝ、

『兄さんからお話を聞いていらつしやりながら、よく交際つて居て下すつたわ、でも心の中では何樣に恨んでいらつしやるでせう、爾後はあなたにまで妾は隔てられなければ成らないわ』

遣る瀨無げなる吐息漏らして、默せるを見上ぐれば、

『隔てやしないけれど』と言葉澁りて、

『兄さんですもの、可哀想で仕方がないわ』

雨を含む風、冷々と兩人が面を吹きて、云ひ合はさねど心密かに、亡き人の魂魄かと懷しかりし彼の蝶の、何れへか姿を忍ばせて、再び野邊に影も見せず。

## 中

端艇競漕の歸り途、散り布く花をば踏んで、三重子と二人長き堤を辿りし時、兄の、後より共にと追ひ來しに、其れを厭ふてか忽ち事に托けて上野へ迂曲る約束も外に、車を雇ふて周章だしう歸り去りしが、云ひ敢へず果敢なげなりし兄の氣色の、其の日より我が目にも怪しと思ふ擧動の幾度か見えたれど、兄の眞情の其れ程とも知らず、友の無情の其れ程とも思はざりき。

面には似ぬ華やかなる兄の文章の、まして燃ゆるやうなる思ひを染め出だしていかばかり艶麗なりしか、重ねて、又重ねて、十幾通の書狀、間斷なきまでに送りたれと、暖かき心を交し合ふ人の、他にあるにも有らぬを、遂に彼の人の心は動かず、我が思ふ人に限りて、一入厭はるゝとは幸もなき我身なり。と打ち歎きつゝ、今日明日の命と迫りし其の宵に、我れを招きて殘らずを兄は明しつ。

飽くまでも嫌はるゝ我身を悲しみて、嫌ふ人は怨まず、猶思ひ絶えんともせで、せめてはと、君が手に成りし書き捨ての田家の油畫、紛れて我が紙挾みの中にありしを、妹に恥ぢつゝ幾度か躊躇つて、漸く其れを望みたる兄が心の、其時は心なく過ごしたれど、今にして思へば如何ばかり味氣なき朝夕を送りしにか、と哀れに悲しう、悼ましき死は運命と斷念ても、是れのみは口惜しう心に殘りて、甲斐もなき事と知りながら、兄に冷やかなりし友が心の唯恨めしき心地ぞする。

「何うして兄さんが其樣に嫌だつたの、妾の兄さんぢやありませんか」

艷美しかりし頬の窶れて、眼に淚持ちたる面を見上げしが、

「優しい人だつたわと打沈んで、眼に面影を描きつゝ、果敢なき昔を繰り返して限りもなし。

實にも優しき人なりき、姿優しう、言葉優しう、心さま優しう、分けてもこの身に優しかりしものを、何故なれば彼のやうにまで嫌ひ通せしなるべき、一週に一度の日曜日を、隔たりては悲しかりし親しき友のその、兄なる人をば、何故なればあのやうにまで心強う待遇せしなるべき。

送られて文は初めの一通を讀みしばかり、譯もなく厭はしう思ひ捨てゝ、何れの文も大方は其れと、皆封の儘手文庫に納め置きしを、嫌ひてこそしたれ、憎うは思はざりし其人果てたりと聞きて、そゞろ惱ましかりし雨の夜半ふ、と悉皆を打ち開いて一句一と文字、籠りたる眞情の優しかりしを今更に染々と身に覺えつゝ、三日三夜を泣き明し泣き暮して、返らぬ人を慕ひしが、唯昔の我が心怪しう、芙蓉の造花、見惚るゝばかりの美しかりし挿花を、彼の人より贈られて、用捨もなく投げぬばかりにして、押返したる驕慢、梨子を剝くとて小刀に指を傷つけし時、親切に細き紙もて卷きくれしを、澁つと打捨てし我儘など、犇と身をば責めて、詫びて、手を

把られ度き人は既わらぬに悲しさの深く、際涯なき物思ひに日毎打沈んでやがて、胸の冴ゆるは何時？、我が身永へに眠らむ時にもあるべきか。

何時か菊を放したる片手を其の儘、苦しき胸を抱いて、

『何れ程濟まないと思つても……』と云ひさしたれど、聲音震えて後は續かず。

『何と云つたつて、今に成つて仕方がないわ、兄さんも妾にみんな打明けてから、一言もわなたの事は云はなかつたの、三重さんを呼びませうかつて聞いた時、厭がつて居るものを、此樣所へまで呼ぶのは可哀想だつて』

曉に淡き電燈の許に、死を待つ人の靜かなりし姿を思ひ浮べてか、淚含みて、

『短命な自分のやうな者に、動かされないで三重さんは幸福だつたと云つたわ、兄さんの身になつたら何樣に逢ひ度かつたかも知れないのに、其れ切り妾には何にも云はないの』

當時を語りて、悲しさは今更に迫りつゝ、思はず音に立てゝ泣けば、其處に膝を支きし三重子の、吹き惱まさる、女郎花、仆れ臥して咽び入りつ。

小荷駄、車の響き幽に、雨を告ぐるか夕烏哀れに鳴き過ぎて、根方の萩の花はろりと散りたり。

## 下

思ひ返せしやうに、面を拭ふて、

『つまらない事云ひ出したわ』と立上つて、袴の塵を拂ひながら、

『泣かせて濟まかつてねえ』

答へもなく、泣き沈みしまゝ、微かに慄ふ痛々しき姿を凝然と眺めて、

『今更もう何うしたつて仕方がないわ、嫌がるものわ好く思はせやうとする方が無理なんですもの、あなたに嫌がられた兄さんが不幸な人だつたんだわ』

言葉穩和に、立ち寄つて抱き起せば、

「勿體なくてと」腕に凭れて、袖は顏より離さず。
「すつかり兄さんは斷念て亡くなつたんですもの、其樣事を氣に爲る事はありやしないわ、此の事はもう話さない積りで居たのに、惡るい事してねえ、つい云ひ出して餘計あなたを苦しませたわ。』と摺り寄つて、
「勘忍して、ね」と肩に頰を當て丶、友の身を搔い抱けば、
「取り返しがつかないんですもの」と悶えて又一としきり泣く。
「其樣事ばかり考へて、身體を惡るくしてしまつたら何うして？」と心もそゞろに、
「亡くなつた後であなたがそんなに思つて下さるんですもの、兄さんは必然喜んで居てよ、だけれど、あなたの身が一生幸福なやうにつて兄さんは何處かで祈つて居るのに、其の爲に病氣にでも成つたら、何んなに歎くか知れないわ、却つて濟まないとは思はないの』
あはれの友を思ふ餘りに、今迄胸になかりし事のさま〲と浮び來て、柔和しう云ひ慰むれば、
「いつそ病氣になつて死ぬ事が出來たら、兄さんのお傍へも行かれるわ」
腫れて赤らみし瞼を重げに上げて、友の面を恍惚と見入りつ丶、
「何處にいらつしやるのでせう、お詫びをしたら……………
涙は亦溢れて、はら〱と落つるを我が袖に拭ひやりながら、
「兄さんは最う神樣だわ、優しい上にも優しくなつて、あなたを一生庇護つて下すつてよ。」
起つて、亂れ落ちたる菊の花を拾ひ上げしが『あなたの其の涙がかゝつたのねえ、此花を捧げたら兄さんは何んなに喜ぶでせう』
淋しく笑んで、在はしますは御空の何方と打仰げば、何時降り出でしか輕き村雨横に頰を打ちて、田の面、畑の面、見ゆる限り朧にかすみ渡りつ。
「雨が……」と詫びし氣に頭を返して、崩折る丶友の手を無言に取るを、其れに縋りて危ふくも立てば、薄紅ゐの扱き、袴の明きより外に飜れ出で丶、襞積失せし裾の邊り亂次なし。

力なく姿繕ふ間を、甲斐々々しう小さき靴の先き踏み占めて、菊に楓の枝を合はせつゝ細き柄の洋傘すつと開きしが、友に添ふて、

『心細くはなくつて？』

點頭きながら花を受け取りて、矢飛白の紫の袂と、琉珠飛白の袂と、絡みたるその下に、堅く取り交せし兩人の手の、何とはなく胸の暖かう燃えて、我れにもあらずしかと握り締むるに、懷しげに其の手を抱へつゝ、友の方へと深う翳して、歩調しづかに、言葉は無くて唯進みしが、二人が今日の宿なりし小萩が許の戀しう、名殘の惜まれて見返れば、細き雨其花にかゝりて、風一陣、今宵は過ごされまじき花の姿の、濡れて、亂れて、惱まされて、打萎るゝ。



# 玉あられ

## （上）

あつふすま罪を重れし思ひ寝の夢おどろかす玉あられかな

伊勢　河原芳子

「さわ、早く歸れ!、もう一寸の間も用は無い、よし如何程、用が有つた迚、此都築泰三の耳は、那麽汚らはしい音を聞く事は出來ね、うるさいッたら………。」

「もう二度と私はお目に掛りませぬ………、もうこれが最終のお話なのですから、今日の所は是非とも堪忍して、打つなり、毆くなり、貴方の存分にして、然して些ッとでも機嫌を直して、私のお詫びに來た譯を聞いて下さい。」

「え丶、煩いッ!!、聞く耳持たぬ!!。」

「でもどうか、此度ばかしは、よし打たれても、毆かれても………。」

泰さんは飽迄無情の極を示して、あはれなる子の訴へを聞うともせず、立ちはだかつたま丶、空嘯いて、侮蔑の息を荒立て居る。

身悶えして、私の縋るを、

「那麽事で俺の胸が霽れると想つて居るか、殺しても慊らない!!。」

「え丶ッ!、殺しても………、あの、泰さん、どうか殺して下さいな、私は殺されても本望です、私は殺されたい、寧貴方の手にか丶つて死んで了つた方が滿足ですわ、どうか、泰さん殺して下さい!!。」

「那麽に死にたけりや、自分で勝手に死ぬが可い!!。」

泰さんは一層聲に力を入れて、

「死ね、死ね、お前も一旦棄てた男なら、なせ生涯を棄て通さぬのだ、今更見ッとも無い態を、厭な男の前に曝さすともだ………。」

「何で、私が……、私が、何で貴方を思ひ棄てるやうな……、片時忘れた事は無いに……私は始めから貴方を棄てる氣なぞは毛一筋程も無いンだけど、繼母と、利慾と、さもしい社會の制裁とに束縛されて、あもう、私は疾うから死を決して居ります、私の身體は死んで居るのです、けれども、貴方に篤とお話を爲なければ……。」

「呆れるッ！、棄てる氣が無い、繼母と、利慾と、さもしい社會の制裁と、ヘン、那麼事を講釋されてたまるものか、さあ、もう題だけで解つた、疾疾と歸れ、歸れと言つたら、歸らぬか!!。」

「否、私は歸りませぬ、私は甚麼事をしたつて、此儘じや……。」

泰さんは蹴放して行かうとする、私は放さじとする、縋つた手をば益々强め、はふり落つる涙を玉あられと散らして、いよ〳〵激する胸の中には、親もなければ、夫もない、無論社會も忘れて了つて、只一命に易へて迄もと。

折しも、老婢が來て客ある事を告げた、ふと弛めし手を、泰さんは用捨なく振放し、捻倒して、跫音荒く出て行つた、後は落花狼籍の、くやし涙は冷たい淵。

はッと思ふと、今迄の事は夢で、病に重い枕元に、しだらなう散つて居るのは、「金色夜叉」の續篇、丁度、六章の百九頁から讀みかゝつて百三十頁に至つて悲慘の妙文、其結搆から、其景容迄が、今の私の身の上に酷似してゐるので、くりかへし〳〵讀むでは泣き、泣いては讀み、果は涙に咽むで巻を蔽ふのであつた。

夫れが其まゝ夢に入つたに違ひない。

## （中）

うたゝねの夢にもだねて冬の夜の長きうらみをくりかへす哉

宵の時雨は夜半の嵐となつて、軒にたばしる玉霰の、一つ〳〵身に泌みる心細さ、寒燈小暗き病の床にうづもれて、あたゝかき光をも享け得ぬ薄命者、思へば懷かし、狂ひ花咲く小春日の夕ぐれ、泰さんの下宿に偶の逢瀬を渡りて、湧き立つ胸の思ひを、思ふまゝに語りつ、語られつ、忍べ、忍ばん、行末を樂しみなど、しみ〴〵

懐しい誓ひの數々をくりかへして、夫れよ、其時、紫縮緬の帛紗に包みし一振の短刀と、更にとりかはした寫眞とを懐に抱しめて、暫時の別れを惜むだのであつたが、遂に再び親しい言葉を言ひ交す事の出來なくならうとは思はなかつた、泰さんが、三年間、獨逸留學を命せられて、名譽ある讃辭と、盛大なる祖道の宴とに送られてからは、朝な夕なに、天帝を禮拜して、禱るは君の健全、願ふは君の榮達、盟の花の實を結ぶ時を、指折り數へて待つて居る身の、どんなに嬉しく、又どんなに切ないであつたらう、君より送らるゝ折々の玉章、私より送る時々の封書、山海萬里の空に互の心を通はして、忘られぬ思ひを汲み交はしたは夢か、戀ひ焦るゝ君の消息の、しばし途絶えし霜月の二十五日、言ふに言はれぬ苦痛を忍びて某省書記官に嫁かなければならなくなつた口惜しさ、如何に書記官が豐富なる紳士なれば迚、榮譽ある人なれば迚、腹を痛めぬ繼母の、思ひ遣りの無い、唯、利慾の爲、奸策の爲、亡き父君の許し給はりし夫を棄てさせて迄、親の我意を立て通すのである、親と子、子と親、繼母と繼子、世間の義理、いづれにしても淚を呑んで盲從しなければならなくなつた、命惟從ふ可く餘儀なくされた、が私は不孝を省みるの遑がなく、いかにしても、と其議を拒むだ、親も許し、私も許した夫あることを明言して、飽迄決心を飜さなかつた、けれども家の爲と口說かれ、威を以て壓せられ、あらゆる口實と、溫言と、罵詈と、右から、左から、手を替へ、品を替へて攻めつゝけられると、如何程剛情を張通さうとしても其處は脆い人情の、遂には詮術盡きて自棄半分に爲すまゝに任せた、繼母は喜むで結婚の約を定めた、書記官も喜むで早速華燭の典を擧げた、新婚旅行に人の目を欹てしめた、夫は得意に高襟風を吹かして、溫かい愛を私に捧げた、が私は不貞と知りつゝ始終冷たい愛を以て夫を遇した、して、結婚以來病氣勝ちの、悒鬱として顔色を失なう程だから、家庭の樂を覺える筈はない、美しい光明を認める道理がない、厭な物は何處迄も厭、戀しい物は何處迄も戀しいので、妻と言ふはほんの名ばかり、唯もう器械的に働き、形式的に身を處して、不愉快づくめに日を送つて居る、丁度當家へ嫁てから滿半年、泰さんの御歸朝も一年足らずとなつた……、あゝ、泰さんは夢にも此樣事を御存知有るまい、唯從來の花と思つて居らッしやるだらう打私の寫眞を矚めては、彼の秀でた眉を顰かして居らッしやるだらう、あゝ、この熱誠の人に此千秋の恨事を、

ち明けたなら、甚麽に〳〵、私がさもしい心を笑はるゝであらうか憤らるゝであらうか、薄情者、お轉婆、賣淫者、犬畜生、夜叉、惡魔、膺、それより以上の嘲罵を極めて、必然この花をお怨みなさるに違ひない、お前の外に妻と思ふ者は無い、一命に換ても此緣は切られんから、俺の此の胸中を可憐と思つて、十分決心して呉れと迄、泰さんは、「貫一」と同じ樣に、男を捨てゝお盟ひなすッたではないか、其時、私は何と答へた、私の生命は泰さんに捧げてある、と云つたではないか、それを今更……、もう私は、錆腐れた鋸で首から足の先迄寸々に斬り刻まれても、更に泰さんを怨めしいとは思はれないのだ、まだ〳〵夫れでは償へぬ罪を犯して居るのだ、泰さんに捧げた生命、泰さんの心を預かつた短刀、何で私は汚れない內に決行せなかつたのだ、何で生命を惜むだのだ、既に汚れた身は元の花に歸らない、詫びられない、「宮」ならぬ私、汚れた私、「貫一」ならぬ泰さん、情の正しい泰さん、何で汚れた私の悔悟を許されるものか。

私は結婚の當時に、書を泰さんに送つて、決心しやうとしたが、何となう心弱うなつて、不義を知りつゝ夫れも果さなかつた、既に汚れた半年の後に、遲くとも私の心事を打明して了はねば、神に對しても罪怖ろしい、泰さんに對しても申譯が立たぬ、いづれ一度は……、是非語らねばならぬ事だ、あゝ、此悔悟を赦して下さるだらうか。

くだけてはあとなくならむ玉あられせめてはかなき音をのこしつゝ

## （下）

せめての悔悟を文に爲むものと、夫の留守を幸ひに、更けし夜の臥床を這ひ出でゝ、机に向ふ思ひの丈、涙傳ふる洋筆の運びも、亂れ心の先後を失して、轟く胸のひゞきは洋筆より紙に、細くされ〳〵なる書樣の見苦しいのも何のその、やう〳〵思ひの半ばを認めて、ほッと太息を洩した時、明日の夕刻歸る可き夫の、事務の都合にて一日早く成つたとの事で、微醺を帶んだ足元しどろに、「何をして居るのだ、病の身を、又例の歌でも考へてか、「金色夜叉」に惚れ込むだのか。」と疊みかけて、枕元へどっかり、さしもにフロックコートの裝ひ正しく、捲烟草の烟の內から、机に凭かゝつて

る私を瞶て居られるので、私は餘儀なく書状を秘して了つてさりげなく、妻の心に戻る苦しさ、切なさ、

「些病氣は快いか。」との慰籍に、「快くはなくッて………。」とすげない答。

「今日歸りがけに、お前の實家へ寄つてきたが、親展書が來て居たから預つてきたのだ、何か面白い消息でも有るだらうから、病體に關らないやうに、緩くり讀むが可い、差出人は慥、一昨年文部省から留學を命せられた、法學士の都築泰三君ださうな、彼は我輩より五六歲若い、學士中でも餘程の腕利きで、餘程の名望家で、又、餘程、美術思想にも富むで居る、そして氣品が高くッて、世才に長けて居る、實に未來の大臣、學士の模範たる可き人だと聞て居る、夫れとお前は親しくして居たのは、少なからぬ幸福だと、我輩は思つてる、とうじや、花。」

呆れて、さしうつむいて居る私の膝の上に、叮嚀に置れた、一封の書狀は、紛ふ方なき、泰さんの筆跡、私はさすがに躊躇つて、胸の皷動をのみ數へて居る。「まあ、都築君から……。」と言つたぎり、窃かに夫の息を覗ふのであつた。

椽にたばしる玉霰の音、一しきり。「あゝ、亦甚く降つて來た。」と呟くやうに言つて、

「もう暖かう寢むが可いね、冷ちや惡いから……。」

夫は、壁一重隣の間に入つて寢まれた、私は窃かに、封押切つて書狀を披いた、讀み行く、一字、一行、あゝ、

はい……。」

血の淚。

意外!!。

泰さんは既に結婚を知悉せられた、して其幸福を祝された、温かい言葉、柔かい口調、しかも、祝ひの印に迚、貴重品をさへ贈つたとある、是は、是は、泰さんの赤心から出た所爲ではあるまい、常識を有するもの、敢て爲す可き意地ではない、夫れを、しかも戀の仇の……、憎い〳〵不貞腐阿魔に……、是は、赤心とは受取れないのである、泰さんは何で人いぢらしな、眞綿で首を絞めるやうな、何故明白に詰責して下さらぬ、生命

王あられ

を捨てよと仰しやらぬ、決心を爲いと仰しやらぬ、私は、私は、決して、泰さんに、罵しられるこそ快よけれ。祝儀を享けるやうな、そんな、慰籍を求めないのである、實に人生最大の苦痛を求めたのである、生涯消すことの出來ぬ穢はしい傷を負ふたのだ、解ぬ、解ぬ、何で、泰さんの心はこの樣に……。夫ある身をも忘れて、恥辱をも忘れて、思へば思ふ程、私は切なくッて〳〵、胸には鉛湯を注ぎ込まれたやう、匣底深く取出したは、泰さんの寫眞、短刀。え丶、悔悟も後れた、泰さんに言ひ解く面目がなくなつた、よし如何樣に詫びた迚、赦して下さる氣遣ひはない、汚れた此身を祝はれて迄も、此世に不愉快を忍ぶ氣力は持たないのだ、泰さんの手だと思つて、寧、一思ひに、此短刀で!!。認めた文は引裂て、寫眞と共に火の中へ。我夫に永の暇を!!。泰さん、赦して……。後は、人事不省!!!

（完）

（特　賞）

結構巧みなりといふべからざるも文辭豐富にして筆意縱橫婦人の作としては割合によく出來たり唯結末の一節今しもほと思はる

# 夜半の嵐

米澤　大芝信子

夜は深々と更け渡つて月は天井に澄んで居る唯さへ淋しき秋の夜に木の間より不意に顯れしは女の姿、髮は亂れ衣は裂けて何やら尋常の樣子でない、すき通る程靑白き顏色にさへ切つたる目は輝いて居る、下駄さへ被すに跣足のま丶何處へか馳けて行く〳〵、背に負ひし乳呑兒は憐れ氣に泣いて居る、折柄來か丶つた查公、

コレ・其方は誰だ此眞夜中に何者だ、
と云はれて感付いた樣子、女は丁寧に立止つて、
ハイ、私で御座りますか、私は笠松勇と申者で只今警察署へ馳け込む處で、何卒此場を見逃して下さりませ、」
何やら急き立つて居る樣子、巡査は不審さに後を付き添ふて行つた、
警察の門には電氣がアリ〳〵と晝をもあざむく樣だが、世間はひつそりとして物音もしない、お勇は當直の巡査に導かれて警察の門をくゞつた。

＊　＊　＊

雲井より猶殘る竹の露の世の果敢なき縁にしてありながら子を思ふ心の暗は消へ難く今宵限りと知りつゝも恩愛の懐に抱きつゝほろり〳〵と泣く樣は側で見てさへ腸がちぎれる樣だ、
しよんぼりと白洲の椅子に腰をかけて一々お勇は自訴して居る、
ハイ、私は代議士笠松九郎太と申者の妻で御座りまする、
其方有り體に申立てよ、
申お役人樣、最初よりお話し申さねば分かりませぬ事で、私が只今の笠松家へ嫁しましたのは今より丁度十年前、私が十九の春で御座りました、其時分夫の九郎太は小學校の教師を勤めて居りました傍ら法律とやらを學んで居りました、其結婚いたした翌年上京いたして法律學校へ入りました、元より貯へとてもない身代でありました、……ハイ其頃は姑も存命で御座りましたから、私と二人で夜の目も寢ずに一心不亂に働いて夫が學資の代にいたした其甲斐あつてか夫は三年目に首尾よく法律學校を卒業されまして其年又運よくも辯護士試驗に及第されましたが、そうすると物事は善い事計り續かぬと見へまして漸々安心したと云ふ處で姑が死んで仕舞ました、折角育てた一粒種の出世さへ見ずに死んで仕舞れました、其年辛くも今の所に事務所を開きましたので御座りまする、其當時の有樣と申したら隨分お話しにもならぬ程困難いたしましたが、別段家庭に苦情と云ふもなく夫婦の中も睦しう暮して居りました、

とさながら當年の戀を思ひ出した樣にお勇は茫然として考へて居つた、

何を申も私が惡う御座ります、人殺し夫殺しと云ふ恐しい大罪を犯した女、其場で死なうかと思ひましたけれど……犬死、……犬死をしてあの畜生の小花には笑はれてそして死人に口なしとよい樣に云ひ觸らさるゝが殘念で寧そ御官の公明なる御判斷を仰ぐに如くはないと思ひまして……どうせ私が生きて居る覺悟では御座りませぬ、何なりとも善い樣に早く御所置を願ひ上げまする、

死を迫つて居るお勇が心根の可憐さ、

掛り官はキットお勇を見詰めて、

其方何事も明細に申立てよ、さなくば事實の如何は分らぬ、

お勇は止むを得ず

あまり夫の惡事をあばく樣でありますが、……ハイ正直に申上ましやう、一體家内に風波を起した原因と申は旦那が本年の春代議士となりました時分、妾の小花が入り込んだので御座りまする、其れからと云ふものは隨分酷く虐められまして……ほんに意地の汚いお話しですが、三度の食事さへ、後は云はずに泣いて居る、

倘ほも警察官は事實を問はんとして

ムウ其れからどうしたのだ、

お勇は暫くして

座敷牢へ入れ置かれて、一日に握飯一ツ……ほんに空腹御座りまして、此兒に呑ませる乳さへろく〳〵出ぬ樣になりました、そして旦那と小花が奥の座敷で笑ひ戯れて毎夜のお酒盛りをなさつて下女でも書生でも小花の指圖で私へは一言の言葉さへかけぬ樣になつて仕舞ました、此兒が空腹のあまり泣き出しますと大きな聲で八ヶ釜しい餓兒奴殺うとも何なりともして仕舞とお睨みなさるお顔のすさまじい事、漸くの事で此兒が泣き寢入りを致した後で私は獨り忍び泣きに泣いて居る計り、其れ程私への愛がさめ切つて私を憎うていらしやるのに

死なれぬは何の因果でありましやう、此樣な辛さを見るならば寧そ舌でも食ひ切つてと思ひ込んだは幾度か知れませぬ、此兒があるゆゑに今日までの生命が繋つたのも神樣のお指圖でありましやう、抱きし兒の寢顏を見てはづく〴〵と泣いて居る、掛り官は腕をこまぬき無言であつた、稍々ありて咳拂ひの後、

そして子供と云ふは其兒一人か他に無き乎、

お勇は顏をふり上げて、

ハイ二人が中に子供と云ふは此兒の外に八歲になる女の子があります、其兒は夫の書生時分に生れた兒で只今は小學校の二年級で少しの分別が出來ましたゆゑ、私が旦那に打擲さるゝ時は馳け付いて來て父樣堪忍して下さいお隣りの初ちやんに聞こへて學校へ云ひ觸らされると皆さんが私の顏を見て笑ふと私は耻かしくて何時でも泣くんですもの、父樣どうぞ母樣の替り私を打つて下さいと小さな紅葉の樣な手を合せて拜みまするると、一時の納りが付く事もありました、あの樣な惡魔でさへ子と云ふものは可愛ものでありしまやうか、ほんに恩愛と申はふしぎなもので御座ります。今頃はあの小花に責められてと云ひかけて……

置き殘したる長女を思ひ出したかの樣に悲し相に淚をこぼしたが、ハット袂で拭いて、

アノお役人樣私は決して氣が狂つたのではありませぬ、嫉妬の炎が燃へ上つたのでもありませぬ、私だとて人間の皮を被つた女、別けて物固い双た親から貞操の二字を吹き込まれた者ゆゑ何處迄も堪忍が第一と心得て隨分非道な仕向けの時でも一時の御癇癪のつのつたものと耐へて居つたけれど、今日此頃のアノ面當て、苦情の種を持ち出す爲めに書生の木村を引張り出して私と姦通したとの御難題、僞せ證據さへ拵へての御談判上げ句の果ては私に離緣せよとの詰句、私が無實の理由を答ふれば、イヤ法律だとか民法だとか、のがれられぬわなに掛けらるゝ辛さ、そうすれば私は生涯濡れ衣を着て終らねばならぬ、あの世の父母に何んと申譯けをいたしましやう、私だとて人ですものエゝ忌々しい事その事と、ほとばしる感情が押へ切れられず恨みの白刄を報ひんものと斯く迄の大膽なる事をいたしました、寢て居る夫の首を斬りました、見事咽を貫きました、早や三寸

の息は絶へ果て、仕舞ました、嘸恐しい女と思召ましやう、自分ながら能く仕遂げたと思ひまする位ゐ、是れ此品が證據で御座りまする、と傍にある色さめたる紫紺の複紗を取り上げた、未だ乾かぬ血まみれの九寸五分、左手には小兒を抱いて右の手で役人に出しながら、

是を御覧被下ませ、私が嫁に來る時分父が私に送れた物で、武士の娘は何ぞの用意にとは申しましたけれど、マサカ夫を殺せとは敎へませんでした、亡き双親が此仕業を聞いたなら草葉の蔭でどんなにか驚いて居りませう、アヽ恐しい夫殺しの大罪人寸時も此世に永らへ居る事は出來ませぬ、人を咀ひば穴二つと云ひまする通り私は毛頭生きて居る覺悟ではありませぬ、斷頭臺に上うとも、よしや牢屋の煙と消へまするともさう〳〵恨みはいたしませぬ、是程正直に申たら天道樣も憐んで下さつて後の世には明るき場所へも出られませう、エデンの園の彼方にて可愛兒にも逢はれましやう、唯心にかゝるは此兒が身の上假令乞食にならうともあの妾の小花の手には渡して下さりますな

斯く迄思ふ親心あはれや三界の首枷、賴む我兒にも生き別れかと思ふとお勇が胸は沸き返へる樣だ、

* * * * * *

東雲の空に淺芽の露ふみ分けて行く姿、袖も朽ちなん秋の霜、やがては冷たき牢屋の人とはなつた。

（甲　賞）　今日の家庭往々此恨事あり作者が着眼點は頗るよきも、惜むらくは手腕に任せて匆卒に書きたりし爲めに情寫らず折角の材料を徒爾たらしめ可惜天物暴殄の謗なき能はず

# 玉章　一

落葉女史

沈まんとしてもいざよふ夕日の光も力なく、晩鴉樹間に騒ぐ彼方、峯を離れし雲の、薔薇色に變移ふよと見しも暫時、四隣はやう〳〵闇の手に被はれぬ。さと吹く風に木の葉のはら〳〵と散り行くも、實に空蟬の世の習ひかとあはれなり。

誘はゞ共よと念せしものを、片手落なる峯の嵐や。我は浮世にのこされて、蜘蛛の糸より果敢き玉の緒の、いつ迄引き續けらるゝことよと、思へば、文書く手も自からしほれ勝ちに、いつか思ひは先にのみ走せて…………

彌生の花は風必ず誘ひ、十五夜の月雲かゝらぬは、稀なりとかや、飛鳥川の淵瀬定めぬ世の習ひ。今更驚く可きにあらねどもかくも早やう我身の上に思ひ知らんとは……かゝることゝ知らましかば深くも人は戀はざりしものを……いつまでも母上の膝下に過すべかりしに………あゝされど樂しかりしよ。長閑けき風に袂も輕う爛熳たる花を愛でにしも君と共なりしよ。寂しき窻に玲瓏たる月を賞せしも君と共なりき。螢を追ひしも雪踏みにしも皆君と共なりしよ。かくて秋は再び立ち復へりぬ。あはれ今は誰と共にか淋しき思ひを語らん。有りし樂しみは花と散り雲と消えて殘るはたゞ煩悶あるのみ。懊惱あるのみ。いづこにか一片の慰藉を求め得べき、强て求めんとすれば、たゞ紅涙あるのみ。熱涙あるのみ。

立つさ霧は、やう〳〵濃く庭の木立をこめぬ、夕を送る鐘の絕へては續くに驚きて我に復りたる少女、やつれし頰に亂るゝ黑髮うるさげに搔きあげつ。またさら〳〵と筆を走らしぬ。

げに〳〵果敢なき緣にいひしよ今は何をか恨みいはん癒へ難き病に犯されしが身の不運にいへは……比翼連理の夢覺めいては衣かたしくさむしろに朝には木傳ふ猿の聲、夕には梢に騒ぐ烏の塒の顯然なるを喞つを

聞くにつけても我身の上に思ひ比べられてすゞろ熱き涙も堰きあへず候花も紅葉もたゞ一炊の夢と思ひ候へばかゝる歎きも候まじきをよろづ去年のまゝなる庭に君も踏みにし秋萩のいつか哀れに色あせて君と分けにし垣根の薄露深く白妙の袂連ねたるなど朝な夕な眺むる身のなどてか忘るゝことの候べき雁の鳴く音鹿の聲にいよ〳〵わりし時のなつかしう思ひ出でられて……

暮れ行く森の梢より、淋しくもほろ〳〵と聞ゆる山鳥の聲、大原山の麓ならねど、父か母かと疑はれてか、涙の顔をふと上ぐれば、遠近に葉ずれの音さやかに立てゝは心をこめたる玉章吹きかへす風のをりふしは、妻とふ鹿の忍びかねたる鳴く音さへ通はせたるに叢かくれ咽せかへる虫の聲絶へ〳〵なり。

かくなり果て候てもなほ思ひ絶へせぬ心あさましやと御蔑視も候はめど夕を待たぬ露の命せめては心安う散らまほしさに身のほども顧みずあつかましとも書き連ね參らせ候

ほっと太息つきつゝ暫時筆を休めぬ

折から入り來りし乳母のおその、莞爾と如何にも快活なる樣子にて

「お孃樣、またおいやなお藥ですよオホ………」生れ落ちてより我子の如く育てし露子二十と數ふる年になりてもなほ我が懐に紅葉の如き手をあげて乳ゝ〳〵とねだりし時の心地せらるゝなり。

「またですか?! こまりますね、いつも〳〵お部屋にばかりいらしてさう考へこんで入らしちや、しやうがありませんねー、……さ、おいやでもお藥召上って………御飯がすみましたらまた散歩に參らうぢや御座いませんか、朝の風できっと栗が澤山落ちて居りますよ、……今日は道を換へて谷の方へ參って見やうぢやございませんか。

此方の快活にひき換へて「あゝそれもよからうね」と力無げなり、おそのも何となう手持無沙汰なるに

「まア日の短いこととれお燈火でも持て參りましやうか」と獨言ちつゝ起ちぬ。

## 二

月はやう〳〵高く病と憂とに憔悴〳〵し露子が半身凄きまで白く〳〵照らしぬ。さと吹く風に、また一しきり落つる木の葉は、さら〳〵と音立てゝ窓を打ちぬ。折から、

「奥様もそれは〳〵御心配遊ばして……それもさうでございましやうよ、たった一人のお嬢様でございますもの」

「でもお嫂様の身になりや………」

ひそ〳〵語る聲はやう〳〵近く、絹ずれの音ははたと止みぬ、と思へばさと襖を開きて入り來りし處女、年は露子と同じとも見ん、やゝ下膨れの、愛くるしき眼に笑は含めど包みかねたる憂は眉間にあり〳〵と讀まれぬ。

燈火持て來しおそのは側にありし蒲團進めて出で行きぬ、「まア光ちやんよく入らして……でも夜になってからどうして………」先づうれしさに言葉もしどろ。此方も嬉しげに投げるが如く座り、露子が膝に己が膝突付け、

「お嫂様しばらく………」後は言ひ得で固く手を握ってなつかしげに見上げぬ。

さても變りし面影よ昨日の紅顏色あせて、月の眉はわれと今も愁の雲深く雨に悩る女郎花のそれにも似て、人の心の思はれてすゞろにさしぐまるゝ涙見せじと側を向けば風に波うつ玉章、

誰が爲めに書く玉章か。お兄様の處へではあるまいか？お兄様!!………あゝ今夜はどうしてもお話せねば……

…お話したらどんなにおなげきなさるだらう、たゞでさへ此樣に………此上に悲しみを増させる爲めに繼母上を偽ってまでもわざ〳〵來たのであらうか、あゝよさう。!!

お體にさわったら。いや〳〵お兄様は何と仰しやった、必ず此事を露さんに傳へてとあれ程お頼みなったのではないか。あゝつらい私の口から………お兄様何故逝去ておしまいになったの!?

語るに先づ涙に張り裂けん胸の思ひさとられじと

「お手紙書いて入らしたの？お邪魔してね、………おゆっくりお書き遊ばせな、私其間お庭でも歩いて來ま

すわ、」
「いゝえもうすんだのよ。ほんとによく入らしてね」
またくりかへしぬ、「でもよくこんなに晩く」「實はね今日朝川へ宿りに行つて宅へはさう云つて來たのよ、そうでないと例の……でしやう。お嫂さんがお離縁になつてからは、猶ひどいのよ、ですから、それ位なこと云はなけりや、とてもお目にかゝれないのですもの、それから一寸お宅へあがつてそして來たのよ」「でもこんな山の中よく一人でいらしてね」「山の中つては山の中、立派な道がついて居るのですものそれに此樣ないゝお月夜ですもの」「今夜はほんとにいゝ月ね、」
仰げば誰が爲めにかけて行く玉章か、續かぬ文字の二つ三つ。

## 三

睦ましげに手を握りたる姉妹心は愛の焔に燃ゆれども身は悲哀の淵に沈みて頬を傳ひし涙の跡、照る月影にあり／＼と、
燒野の雉子夜の鶴つて鳥でさへ其樣ですもの一日も長がれと思ふは親の心でしよう母樣がいろ／＼御心配遊ばすも無理はないわ、何かと云ふとあなたが、すぐにもう世に無い者と思つてくれの何のつて仰るつてね。今日もそう仰つてよ。今はもうあの別莊に閑居たなり人を厭ふて誰れにも會ひませんの……親がこれ程に思ふ心の萬分の一も察してくれたらと思ひますよつて彼の氣強い母樣が涙をこぼして入らしてよ。露さんすねるのもいゝかげんになさらないと、罰が當りますよ。」
絶へず落ちくる涙指先きで拂ひ／＼て、
「そりやね、もう親の心はよく／＼察して居ります、ほんとに、すまない。不孝だとは、重々承知なのです。恐るいと知りつゝこうして世に遠ざかつた此家に閑居たく成つた心のつらさも少しは察して頂戴」忍べと涙は泉と湧きぬ。

「あゝこれが私の運命かしら」

露さん、あなたきっと操とか何とか固くるしい事思って入らっしやるのでしやう？それはもう昔のことよ、今の方御覽遊ばせな、どん〲平氣で再緣なさるぢやありませんか、義理もへちまも入るもんですか、但し、いつまでも私はお嫂さんの妹よ。お兄樣だってあなたが幸福に暮して入らっしやると聞けば、どんなに喜ぶでしやう」口には快活と云へど胸は張り裂けん思ひ、果敢なき兄が最後知らせんとて來りしものを。さらぬだに病と愁とに、斯くまで憔悴れしおも影、まのあたり見ては、なほ其上に歎き加へんことの、いたはしくて、今言ん〱と幾度か思へども胸せまりて話は常に傍へとそれぬ。

「操の何のって云ふのぢやないの。世に捨てられ人に捨てられた身ですもの、今さら世の中へ出やうとも思ひません、夢の中にはいつもなつかしい面影が、などさめてくれたのですもの、もう私どこへも嫁きませんの、あきらめられると云っても。あきらめられないと、云っても、もうこうなってしまってからはしかたが無いのですもの私が不運なのだから。　でもせめては光ちやんとこうして、いつまでも一所に居たいわ。」二人は手を握りてよゝと泣きぬ。

「嫂さん浮き世ね……お嫂さんがお離緣になってからもお兄樣と二人で先のお母樣が生きていらしたらって幾度泣いたでしやう、其度にいつも、せめてお姉さんがいらしたらって……」またも頰を傳ふ淚そと拭ひ「お兄樣がもう云ってくれるなって淚ぐんで入らっしやるの」月は今松の枝を離れて光は室內に滿ちたり。固く眼を閉ぢて。うなだれたる露子、肉落ちたり頰は憔悴れたれど氣高き姿は月光にいよ〱白う思はずホロリと置きたる露の哀れも身にしむ秋風の梢を拂ふて落葉の窓より入るよと見れば露子が書きかけたる玉章は大蛇と狂ふて二人を圍みぬ。

心なくもまた嫂を泣かしむること語りしよと俄に話をかへて

「お手紙どちらへ？お朋友？お宅？」「いゝえ……お兄樣へ」「えゝ？お兄樣？」兄、此世に亡き人へとは己がひが耳なりしかと問ひ返へしぬ、されど思へばあゝ未だ語らざりしなり。とてもかくても云はでかなはぬ時と

なりぬ。

「お兄様はもう宅には居ませんの」語尾は怪しう震へたり、「え丶？ それぢやどちらへ？」何と答へん、白地に云はゞ如何に歎くらん、新に湧き出る涙止めも敢へず露子が膝に泣き伏しぬ「え丶？ 光ちやん何お泣きになるの？え丶？どうなすったの？」何故と知るよしもなく靜かに脊を撫でつ丶、「なせお返事して下さらないの？ 光ちやん」「お兄様は今……今はもう……色も香もなき苔の下に……」「え丶？ほんとに？」あまりのことに狂せん許り、斯くとは露はとも知らで認めし玉章、誰が爲めぞ、聲なき墓前に供へんとには非らざりしを……如何なれば君のみ一人先ち給ひぬるぞ……我身も共に……と空しき文を抱きて悶へに悶へぬ、心臓の鼓動もいよ〳〵高くいよ〳〵急に、苦しげに二つ三つ、咳嗽せしよと見れば全身を搾りて鮮血淋漓、

細谷川は落ちつもる木の葉に埋もれてむせぶか暫時音も低し。

幽妙の筆、深刻の想、されどかゝる事は事實に遠し佳作とは言い難し

# 殘菊

水橋康子

老店の紺のれん太物問屋の店附かたき、大傳馬町を右にまがれば、猪口屋煙草屋、間が荷藏と仕舞たやの五軒ならびのぢゞり、しきしまつた店藏の庇深ければ、日差はほんの朝の間、がらす戸棚の中には、何々童子童女居士信士信女大姉、手鍋さげて御釜とよばれし車夫の女房でもこう成ては位のつく金ひか作り。蓮のうてなに家々の定紋無紋のもあり、臺附の御茶とう加古帳、白蓮紅蓮銀蓮金蓮花、青蓮の葉に浮びて奥深くはあみだ如來の御影。輪おけそく燈明器燭臺の類、くらき中に眩然としてちりの浮世地獄のちまた、こゝの佛具屋の店前

をかりに、欲にくらみ色に迷ふ凡夫凡婦に、有難き極樂の樣を示し給かと見れば尊しや。店の半を領するは田舍者の多い東京人の眼につく大御輿、神佛混合とやわなむづかし商業はこれでもつたもの、去と廿年來の据てし、女の長座をおみこしすへるとのたとへはわれ之は又隨分と重し。江戸生粹明神樣のにもまけぬ代物、かつぎてむ好物廣い江戸も無と見えたり、奥への通口の上には叡山の太郎坊鞍馬の増正坊愛宕次郎坊、青き赤き黑き異形の大面黑髮白髮ふりみだして爛々たる眼光之は又恐しやの恐しやの、その中に生々とした女菩薩佛具屋の二人娘、お菊お君とて姉が天女なら妹は辨天。百人娘にあれがないとはとちな新聞社と、店持の床屋が何にも噂の取次。新道が出で入口の格子作り板塀に見越の松二階の手すりにとゞきて掛てある簾も古い古い草わけ。交際ぎらゐと近所の陰口も其筈、萬事質素な店は通ひの老番頭一人まかせ、下女一人使つて姉妹二人に七十に近き祖母との女世帶。

菊紅葉は團子坂瀧の川。目黑は栗飯に客をよび、向島は枯野上野は繪の會、小春日和の今日此頃を今年の秋のかき入。商家は追々に暮の早手廻し、蛭子講の献立新聞にのせてある頂戴。魚河岸の鯛は不漁の高價同じ段に歌舞伎座は顏見世の女暫。今年は日照の大根は好出來淺漬は景氣よしと勇立、今日が暮の市始のべつたら市、八百屋は漬物桶目ざましく積上て高張提灯に景氣をつけ紅屋村田の花瓦斯今はなけれと大丸は昔の面影留めて、昨日迄がゑびす切の大賣出し梅花亭は人よけの青竹に人波うつて賣切の札下るはまたゝく間なり。所柄佛具屋の前は三四町つゞきて植木店、蜀紅の錦篝火初霜なと紙札むすびし菊の鉢植置ならべ、朝から地わりのでた〳〵。見る眼よかれとひまなくふきくるきりの露の玉、葉も生々したる商ぶり。さあ負ましたまけましたは時節柄緣起でなし、かつたかつたと呼ぶいなせな掛聲。おかみさん此處にまあわきやべつとかばけつとかが鉢植になつてをり升よと、正實に小女の頓きよ聲、何だねお前これはシャボテンだわね寢惚ちやいけ無よと笑て行過を。とうだい飛だ三枚目じやないかと通がる若旦那、焦茶の中折眞深に青白いのを役者と見違へられ度不量見、かんてらの油煙に鼻の下まつ黑とは知らぬが佛、行違た娘達のはらはらと袖よりもらす笑を早合點の自惚、おはんと題でのの字、鳥屋しるこや位を取まきの連中もたまらず笑とよめば、そらべつたら〳〵と

後からも前からも押つ押れつの夜の賑ひ。此家だ〳〵好娘の居家は、うむ評判のあれかと立寄て、今晩はと聲迄掛る厚かましさ、宵からたちきるも變な物格子を入て落戸の下ばかり、お君は半身出して己が姿をはてるとはなく外の賑を見ていた。『君ちやん引込でお出なねえ、そんな所に出て居てさ』と奥から聲を掛て姉のお菊が出て來たのでちらと振返りながら『姉さんまあ一寸、一寸さあまあ來て御覧なさいよ、賑かだつたッちやないわ、貴女去年よりも餘程人が出てよそら宅の門の所に巡査が二三人立て居るんですよ、あら〳〵増ばかしだわ段々に』面白氣なるにつれられて、何時かお菊も同様に戸に寄掛ながら『そらね大層な人な事。何だつてまあ苦しんで面白がつて居のでしやうね。嫌だわねへ』『だつて……面白いのでしやうよ何だか見て居ても面白想だわ』と言つて居たがひよつくり前に立た男の顔を見て。『おほゝうほ』と笑出した『姉さん姉さん早くさ早く御覧なさいよ、あの顔つたらおほゝゝゝあゝをかしいおほほゝゝ』『まあ何だね君ちやん、失禮じや有ませんか人様の顔を見て笑なんて』『だつてまあどうでしよ、頭がひか〳〵光つてさ眼が下つてさ眉毛からこうべつたが流れて、それで私達見てにや〳〵笑んです者、あの顔おほゝゝあの顔つたら無つた』『仕方の無人だね聲を出してさ、惡じや無か聞へたら』『大丈夫よ、よつぱらひだけれど嬉想な顔をしたわ』『大丈夫つて若か怒られたら私がお祖母さんに叱れるは』とお菊は植木屋の方を見ながら『君ちやん宅の前の人のに好菊が有つて?』『はあ有升る薄紅色でちり〳〵したのお買なさいな』『何でも時色が好ね』『はあ好色だわ、姉さん嫌なの?』『嫌じや無けれど菊は矢張白か黄色が好と思の』『そう、じや白をお買なさいなね、後生よ私にあれを買つて頂載な。ね、ねよくつて?え好事』お菊がだまつてにつこりしたので。もうそれと安心したらしく『花やの後事屹度と人込でたわ、たしか御祖母さん遣てくだすたらうに』『何?』『えゝ梅花亭へね買にやつたの』「切山椒なの」お君はにつこりとうなづいた。

二人共湯上りの夕化粧、お菊は廿一の髪はやゝ薄い、色はくつきり白く頰や指の前などは血の通ふも見へすく程、心地面長の星の様な張の有一重まぶち、沈だやうではあるが氣がさの美し過て凄程。洗張らしい一樂の赤まん筋大島の羽織を細そりと着て、引つめのいてふ返し。お君は三ッ下の姉よりは力んだ愛嬌のある若衆立、

お作ばへのする質に一番似合と祖母が自慢する結綿に取上てぴんに荒き櫛の歯の跡、毛自慢の鬘のやうな好恰好、紬の染じまに流手な紫紺地の友禪縮緬の片側帶荒いお召の前掛、店柄には過た姉妹の着類持物。商は有ても無ても好養子のある迄と、おち附て居らるゝ內福・御祖母樣が强者だとは誰の口も同じなりとかや。お君は突然に、私が居なくなつたら姉さんが淋しかろうと言てはつと氣附、あわてゝ言けそうとする間もなく、今買た鉢植の燈の下に淡紅色とならべし白菊と、じつと眺めて居たお菊の『どこへ行のもう晩じや有ませんか。花はお使にやつたのでせう』『今晩の事ぢやなくつてよ』『え、今夜ぢやないのだつて、まあ何時？とこへなの、ちつとも知らなかつたは』『定まつてるんぢや無つてよ、たゞね淋敷だろうと相思つたので聞たばかりよ、それ丈よ』『何だつて又那樣こと今聞の』すんだ瞳で何處迄も心の底を、顏色で讀氣らしいお君はまばゆ氣に『私這麼事を何だつて言だしたのでせう、馬鹿ね、姉さんがそうしてのが橫顏から肩へ掛て其まゝなのよ。御免なさいよつい お母さんの事を思出して、勘忍してよ姉さん、よくつて』見つめられてまじ〳〵しつゝ言わけするを『お前迄もお母さんの樣に私を捨て行つもり？お前さんもあの……情無ぢや無かね。君ちやん餘りですよ』ばら〳〵と淚をこぼすに。いとゞ實なげに『氣に障つたら御免なさいよ、姉樣御免なさいよ。氣分の勝れ無のを知つて居ながら、飛でも無事仕て仕まつた、馬鹿だもんだからうつかりあんな事言出して・姉さん心もちを惡くなさたでしよう戲談なのよ本當は』『いゝへねまるつきり知ら無事は無のよ。いゝへ戲談ぢや有ませんよ、お片づきなのでしよ、 知つて居升知つて居升、ちやんと承知して居るのよ』と白菊を一輪むしり取て、はらりはらりとくづしながら『君ちやんぢやなかつた藤林の奧樣』はつとしながらお君は『まあ姉さん奧樣だなんて………姉さん藤林さんとどうして定たの、を可笑は、貴女ぢやないの是は、彼方は乾度私の兄樣になる方よ。否な姉さんだ事』眼のふちをさつと染て、いよ〳〵むしる花は雪かとばかり散中に『ぢや無かと思つたばかしさ、でなければだけれと、お祖母さんか那樣風にも被仰つたから』『姉さんお祖母さんはどうしてあゝなのでせう、同じ孫ぢや有ませんか、私貴女に氣の毒で御氣の毒でなら無ですよ……居づらいは』『否ですよ、居づらいなんて、那樣事言ちや否だわよ君ちやんにも似合無姉妹ぢや有ませんか。そりや年も少無し夫にあゝいふ所でお生

だし、まわね日陰で育つたのだから一ばし御不愍なのだろうはね。私何共思つては仕ませんよ、那樣な事はもう言つてなし、餘りだはよ私未これつばかりも言た事無じや有ませんか』二人の外に誰も居ず、祖母は奥の間に看勤の鐘の音聞ゆれど、四方を見返りつゝ二人は顏を見逢してはつと吐息『君ちやん次でだから言ておくがね、於母さんの恥を、どうぞ人に知られ無ように爲て下さいよ。よう御坐んすかきつとですよ。そうさへなれば私なんぞ甚麼になつてもいゝのよ』『すみません！』と力なげに『那麼に私の事やお母さんの事を思つて下さるのにね。お祖母さんは僻んでばかり居るのです者、本當にすまないわ、貴女つて人か有のに此度だつてそうよ、養子をするつて、え私になの返事も何も出來るものですかねえ』『那樣な事被仰つたの』と暫くして『心細のねえ、お祖母さんだつてお可哀想に私しはこうやつて今だにぶら〲病でゐるし、宅の始末もさぞ御心掛だろう共さ』『姉さんはさばけて被仰けれ共・現在貴女が正敷此家の』『お止なさい君ちやん、なぜ那樣な事をいふのです』嚴かな妹の言葉抑て聲の高かつたのを若やと奥の方に聞耳を立た。淚と共に聲をも忍ばせてお君の『貴女がそうやつてるのがお母樣そつくりでお懷敷わ』『私しが……那樣に似て居升か？』半襟に顏を埋めておぢづと思に沈む姿を懷しげに寄添て『藤林さんかねわのお父樣がお殘しになつた、貴女が大切になさつてるわの半身像とね、姉さんそつくりだと被仰のよ、私は姉さんにも似て居るけれどお母さんのお顏其儘たと思の、姉さんはどうお思なの』ばら〱と落るが急なる淚の顏を上て『君ちやん私のね、私のお父さんは是程迄、二人のお母さんを思つて居らつしやつたのですよ』ひしと袖を顏にあつるに、お君は聞も愁く恥かしく共泣の『是はもうそうでせう共。たけれどお母さんも可哀想な方よ、這麼事いつてお心地を惡くなさるでせうが、常に

●お祖母さんにも伺つてる事なのよ。お父さんもお母さんも貴女のねお父さんには誠に申わけも無つて、本當なのよ始終言つてましたは』すゝり泣お菊の袖を引うごかして『姉さん決してお辨茶羅じや無のよ聞て頂戴是はね、實の事よ。元から思合つて心で定て居たのを、……是非つてお言のだし』『えッ』とお菊は膝をすり寄すれば、是非つてお言だし夫に奈良へ』『お待――』とさへぎつて急込ながら『紫川さんと母さんは許から約束が……夫を父樣が？……事實なのでせうねそれはお祖母さんがお噺なの？』言葉はなくて頷づいた。お菊は立て外

の人聲をなやまし氣に、上の戸をも引落した、再び坐るのも待兼たやうにお君の『繪の修行に奈良とかへいつて居内に、否といふを無理に養子を入たつて、皆なお祖母さんが惡いのだつてね其時は咄しながらお泣だつたは。お前達がふびんだつて。夫で姉さん承知で逃したんですと。お母さんはね姉さん、菊や菊やがつて貴女の名ばかり言ては泣て居た想ですよ、どうかお願ですから堪忍して上て頂戴よ惡い心じや無のですよ、お父さんが死なつたらねさわ菊ちやんと菊ちやんのお父樣にお謝をするつて、忘も仕無雨の降夕方初て宅の前へ來て、此宅にお前の姉さんがお出だからつてね、私を抱てのぞかせたの、お母さんものぞいたのよ。見えなかつたは……、聲も仕なかつたの――』聲がつまつて泣上た『緣が薄のだはね』漸々神經が昂じたか涙もかはきて。お菊は凄き瞳で奧の間にうすれゆく讀經の聲を追た『こうやつてぴたんと土の上に坐つて――濟ません――て手を合したの。お母さんも泣から私も泣たのつい聲を出して、すると戸ががらりと明て人が飛出て來たのでせうあつてお母さんは逃出すから一所に泣ながら追かけると、いきなりつきとばされて丁度追掛て來る男の人の前にころがつたら。其方〳〵が姉さん此間お去のお父樣だつたは、私を抱てぶる〳〵と顫へて居らつしやつたは忘もしない私が九ッの時『雨の降寒い晩だつたはね』とお菊は怨し氣に『私は物心を覺てからお母さんに逢たのはあの晩はじめて、抱ても頂かず菊やとも被仰ら無、冷たい冷たいお躰に抱附たのが覺てはじめての終ひ……君ちやんとうぞ後生だから菊やと呼でおくれよう』とすり寄て手をしつかりと組合せ、ほろ〳〵泣ながら『菊さん!!『君ちやん!』。

切山椒が來たと祖母によばれ。二人は立上て涙の顏を取つくろひつゝ。島田の市のはつれ毛をそつと附てくれるお菊の優しさ今迄に無事と、嬉しさの身にしみてお君は又も袖の時雨の。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

彫刻に名ある藤林がお君を望て逹したるは其白菊うつろふ頃なりき。あくる年の春は櫻のやよひ、忍ぶが岡に

開かれし或會に、諸人のたゞへしは其人の手になりて、病美人と題せるお君が最愛の姉の姿。あはれさながら霜になやめる白菊の面かげ、　（おわり）

作者は純粋の東京育ち東京も東京江戸の古式の今に殘れる日本橋育ち也、この篇小説としては何の得る處なけれど。作中對話の婉約爽颯にして江戸的の面影を殘せる又その文も精致にして用筆凡ならず但し文字の粗漏は注意されたし

# 木がらし

名古屋　福鎌恒子

花なれば朝に萎む夕顔のそれともたとへつべきか其つくろはぬ顔面わざとならぬ束ね髪のことにその丈たかく品よき姿に一層の氣高さを　添えて居る見るからにすが〳〵しいそうして優しい愛子は夫文雄が日々の書齋にあてゝある和洋折衷とでもいふべきこの八疊の間の案樂椅子に輕く身を投げて物思はしげに空を仰ぐのであるちぎれ〳〵の雲は飛んで居るが吹く風も寒いがさし入る日影暖かに冬枯れの庭に唯一輪白薔薇の霜にもめげず咲きのこつて居るのさへ快く着て居る紋織の袷から更紗縮緬の羽織まで今更美しい樣で何となくうれしく自らもほゝえまれるが…………

かく心地よくうれしければうれしい程束の間も胸を離れぬのは花さんの事である、今朝の出來事である、文雄の立腹した事である……幼な馴染のしかも三年間も同棲して互に秘密もなければ疑もない文雄と自分との中を自分は決して疑ふ心はさら〳〵ないが……そうして親切な愛に富んだ優しいそれで居て又磊落な文雄樣の性格もしつて居るが……凡て何事も論理的な清冷な頭腦で解決して行く人とも信じて居るが……何故今日に限つて夫の心が解せないのか、どうしてこう信念がうすいのか兄とも思ふな妹でもないとまで斷言されて居る夫と花さんの中も知つて居るそれは決して花さんは完全な婦人ではない敎育もない德義心もなければ義理もしらぬ自

分が文雄へ嫁した當座などはどれほど彼の人に苦しめられたか隨分思はぬ濡衣を着られた覺もある今朝だつてあの振舞が女として人として出來やうかおのれひとりの幸を得やうがため近頃盲目になつたといふ其憐れな夫を捨てゝ闇にまぎれて百里の道を逃げ歸るとは、それが女の道にはづれまいか路銀を與へ懇々と不心得を示して戻る樣にと勸めても少しも用ゐないで却つて自分達を恨むやうな捨てた盲目の夫の許へは再び歸らないとつよく決心して動かない薄情さ、あゝ貧すればあゝもなるものか其心根の腐つたさもしい氣にどうしたらなれるのだらう、いくら愛してゐる夫の妹だといつても自分はそれを決して嬉しくは思はない、深く同情もよせられない然し心の奧の奧の方ですまぬ樣な氣がしてなんだかこう文雄樣と花さんの間に不言不語の中に或意味がある樣で……此寒さに單衣に半纏を僅かにまとつて居た今朝の花さんに對して「其樣な不心得のものは片時も家に置くことはならん、愛も決して花に對して姑息の愛をほどこしてはならんぞといつた文雄……それが眞の兄の情兄弟の愛といふものであらふか自分は決してそうとは信じない、あの時の文雄はどういふ心持であつたか、もしや自分が花さんの過去を面白からず思つて居るのを知つて居られて自分の爲自由意志を殺してまで斯くまでいはれたのではないか、でも文雄は自分が花さんの過去に屬した事はとがめないで何處〳〵迄も計つてわけたい、盲目の夫ともに家もひろいし引きとつてあげたらとうてすと迄願つたのを、まさか知つて居られるわけだ然し花さんは乾度自分を怨むだろー親戚も自分の傍視して居るのを誘るだろー、何故此度に限つて文雄は自分のいふ事をとりあげてくれぬのか、……矢張自分を信じて下さらぬ遠慮がある、疑がある……と思ふとどうしてか全身にじむように汗になつてわけもなく涙がわくのである

空はいつかどんよりと時雨てきて身に浸みて寒い風は一しきり強くふき込んだ

夫の職分から交際上！心なくもとはいへ此通り榮華にありあまる人も使つて美しい衣をつけ何不自由なくくらして居るのを此家に生れた花さんは如何であるかたとへ心からとはいへ、あゝ自分はどうしてもすまぬ、道義の心にせめられて、…………

「愛！何を考へて居る」

いつか歸つた文雄は滿面に笑をたゝえて最愛なる吾妻が握手を得んと椅子の後にたつて居たのである、



## 下

「……僕の歸りの遲いのでも心配して居たのかと思つたら馬鹿な、花の事か、何も愛さんの心配する程の事ではないさ」

勤着を一樂の袷と大島の羽織とに着かえて安樂椅子に横つて居る文雄は目鏡の曇を拭ひながら近眼の目を細くしてうつむき勝のその美しい愛子が襟元をほれ〴〵と見て、

「そう愛さんの樣に神經質ぢやわ萬事やり難くつて困つちまふよ、それは僕だつて唯一人のしかも故い兩親の愛された花だものどうとかしてやりたいのはこれは情だがね然し人が相當の地位を得ると皆わゝやつてたよつて來るものが多い、ひとり花ばかりぢやわない、僕の親戚の中でも二人や三人は乾度わるそれを情實にせめられて救つてやつた日にや實に限りはない事だとても〳〵限りある財を以て限りない、人の慾望を滿す事は出來んからなァ實際そうだろー一寸考へて見てももと〳〵慾望ていふ奴わ依賴心に基くのたからそれに應して居ちやわます〳〵依賴心の度を高めるに過ぎない、愚の極だたから僕は薄情といはれようか謗られようかむしろはとめからそれを覺悟して妹でござい姉でござい一切かまはん主義なんだから、

「でも何だか花さんに對しては誠に御氣の毒で、それは貴郎のおつしやるのは御尤では御座居ますが現在獨立の出來ない生活に困つて居る人にまでむかつてそれを主張遊ばしては餘り酷な樣に……それでは私が……

いつか愛子の聲は慄えて居る

「いや愛さんは餘り理想家で僕は閉口するよ、今の花の境遇を他人として考へて御覧伏して憐れむべきでないから第一盲目であるとはいへ夫に從ふ實意さへあらば決してわゝして僕の處へ來られもせず、さ困りもしないで貧しい中にも溫かな家庭は作られるのを逃げて、走つて、ひとり暖かに安く暮さうとする心根公平の眼から見て決してそれが人道を踏んで行く普通の人間とは思はれまい僕はたとへ社會の人に酷と罵られようが、それ

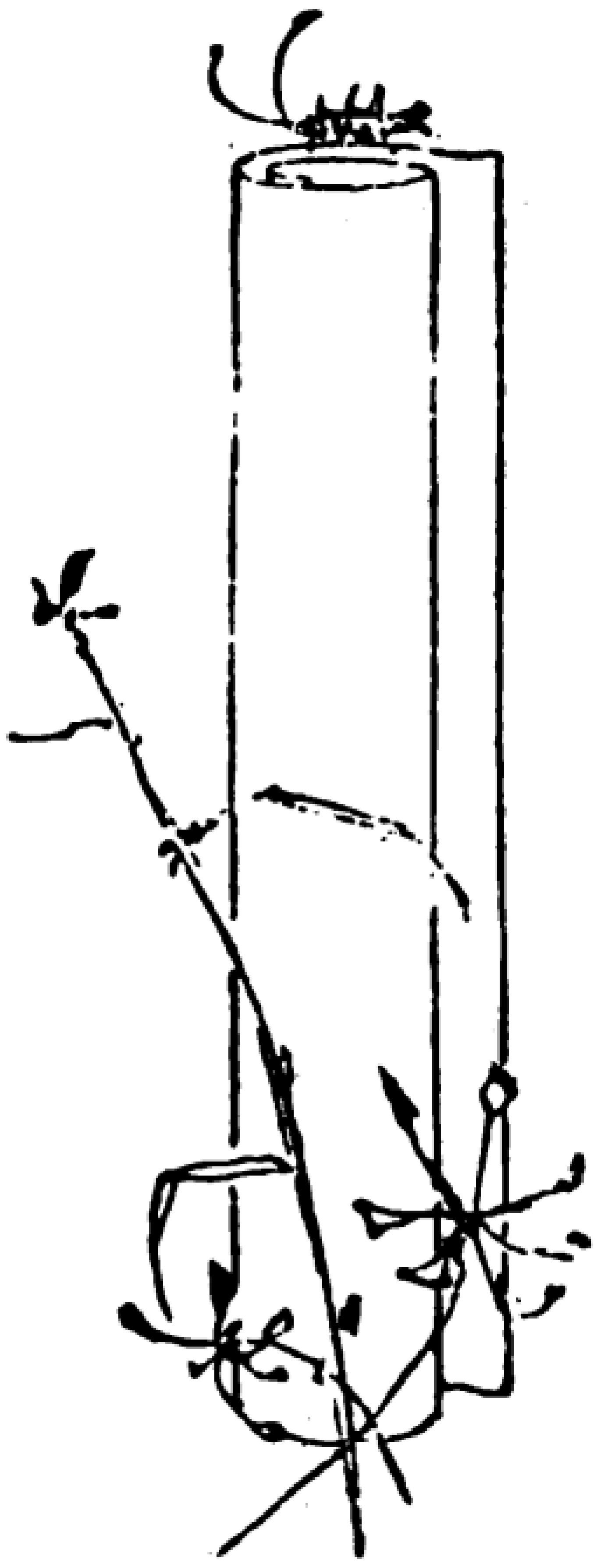
は一時の事である妹にわれ世の所謂破廉耻ものは社會の荒波にもまれ〳〵て自づと矯正されるまでかまはんつもりである、又それが眞の情といふものにもなろーかと信じて居るのだ、ことに女といふものにはよくある奴だがその身勝手といふ事だ然しそれは極々卑しむべきことで僕は妹だから、親であるからなどといふ事は大嫌ひだたとへ僕は愛さんの姉さんにした處が花の様なものなら一切かまはんつもりなのだからそれは愛さんも承知して居てくれんと實に困るからなあ愛さん、博愛慈善、人情などは用ふ處がまだいろ〳〵ある、破廉耻ものやなぞを救へとは神も仰られはすまいよく考へて御覧！子愛さん」夫の優しき語に感激した愛子はいつか卓の上に身を投げかけて花の面を覆ふ袂よりもるゝは涙か愛の雫か

「ハイ………」

と微に答へるのみであるのを文雄はなほも

「僕は凡そ天下に僕と愛さんとの外には何もないと思つて居る社會は如何誇らふが人は何と呼ばうが其様な事を氣に懸けたら決して平和は得られんことだ其位の事は覺悟して居てくれなければ決して此の酷薄な社會は渡れんのだから……これは實際二人の主義として永久に誓ふよ、燃ゆるが如き熱情を以ていとし吾妻を諭す文雄の情あつき唇はいつか愛子が紅の色湧くその花の頰にあてられて…………

衰弱つた秋の蝶は二人の中をめぐり〳〵つて居る、外にはふきまさる木枯の風強く落葉の音しげき中にさきの白薔薇のみえめるが如く舞ふが如く………



（完）

# 淀橋の旋風

玉あられ
琴聲女史

「お村、已はもふ可厭になつちまつた。」

寂れた張のない聲で私語く如く呟んだ。淀橋警察の屬官で、浮世の紳士紳商が、一時の戯を買ふにも足らぬ、僅の給料を得んがため、日毎破れ洋服に腰辨當の紛髮で煎付さうな夏の日も肌をさし徹ほす雪の夜も、一年三百六十余日、廿町許の道を覺束なき足元でく／＼と怠らず朝は必ず人に先き立ち夕は小一時も人に遲れて、上官同僚の無駄口云ふ間も已一人は別物の飽く樣もなく事務に熱中する風情、「樒椰子貝」「達磨さん」なぞ綽號（あだな）して、笑はろゝも聞て聞かぬふり、同僚の誰彼は借家ながらも兎に角一間だちの家に住むを、已一人は裏長屋の下駄の齒入れ屑拾と伍を同うじて愧ぢぬ變物、何が面白くて一日机に齧り付て居のか分別盛と云ふ四十面を下げて氣の知れぬ奴と笑へば、氣の知れぬのは木下よりは妻君だ、何でも一時は北で鳴らした全盛の果だと云ふが、今でも仲々捨てた者ぢやない、如何諦めて金佛さんと添つてるのか、似たもの夫婦の變物さよ、我知り顔に說く者あれば、道理こそ分に過ぎた妻君を持つて半分發狂して居ろんだ、一日仕事に捉まりぎりで一向に埒の明ない鈍加減は本氣の沙汰ぢやないと、嫉妬半分罵ろさへあつた。

呼ばれて立つて行くまでもない、直ぐ目の先に、形許りの流元で夕餐の仕度に急がしき妻のお村、夫の木下とは二つ許も上かと見ゆる年配、油氣のない洗ひ髮を無雜作な櫛卷にしたのか、爭はれぬ白粉燒の跡小皺も見へろが、流石凜とした眼元愛嬌のある双の笑窪、昔忍ばろゝ捨て難い面影によく映つて、云ふ許りなく意氣に見へろ。夫の歎息を又かと許り、一寸振り向たがさして氣にも留ぬらしく燗て調へた膳部を手にして急急と傍に進んだ。「お前さん又何か癪に障つた事でもあろの、そりや お前さんの氣性ぢや無理はないけれど、今日は長坊の誕生日だからと思つて、何にもないけれど一本つけたんだから機嫌よく飮でやつて下さいな。」例の笑窪を惜氣なく一層深くして見せつゝ、緣の缺けた德利を取り上げた。夫はグッタリと力なげな身を起して、膳を見た眼に薄淋しい笑を漏らしながら、「ヤー今日は御馳走だな、では一杯頂戴するか……、そこで肝腎な長太郎は未だ歸へつて來ないのか？」「アゝ未だよ、先生に可愛がられて居から一日置にはあとに遺つて特別に敎へて貰うのだつて、今日だけは早くお歸りと云ひつけたんだけれども、そんな我儘を云つては濟まないと思つてれ……、もふ直に歸りませうよ。さあお酌ホ、、、、サッパリ元氣がないのね綺麗にお乾なさいよ。」夫は一口飮で下に置き、「お村、已は實に殘念で眞から嫌になつちまつたよ、大川署長奴、靑二才の分際で專門學校を卒業したつてのを鼻に掛けて、二言目には、學校に居た時分には如何であつたとか、イヤ若ひながらも署長である以上はとか、齒の浮く樣な事を云やあがる、假病をつかつて欠勤しやうが一日のらくら懶けて居うが、署長々つて阿諛さへつかかつて居りやあ增給する、いくら働ても已の樣なのは氣にいらんのだ。それも仕方がないと諦めも仕やうが、今日なんぞ皆の前で老耄れて役に立たんと云はん許に罵詈しやがつて、さうすりや又外の奴等まで御機嫌取にばつを合せて笑やあがる、此年になつてから辱められて……。」無念の淚と共に殘りの酒をグットト飮み乾し、其の儘要にさして自らなみ／＼と酌でやつた。

巳が一擧一笑に前途を誤まつた青年の數知れずと、そゞろ恐ろしく思ひ知つた時、我故見る影もたく零落した木下の正直一途な厚い情に脆くも許されて、年の明いた身を寄せて以來、甘甲斐のない苦勞艱難も犯した罪の報と諦め、不思儀にも授かつた一子長太郎の可愛さに、忽ち一念發起しては滋許の惡意も留めず、骨身厭はず働て、我子の生長をたのしみに、二ツも年下の意氣地なき夫さへ侮どる氣色なく大切に劬われば、親子三人か水入らずの云ふに云はれぬ樂あり。されど元來勝氣な感情の烈しい女とて、夫の愚痴な聞く度に、其の口惜さ齒痒さは人一倍、折に觸れると、何のもぶ一度昔の氣にさへなれば、子供一人に失位ひたて妾の出來ぬ事はなぞと、ふら〳〵と迷ひ出し氣がついて身震する事もある。今も受けた盃を下に置と、ソット氣付かれぬ樣に涙を拭て去氣なく、「署長さんてそんな方なんですか。お前さんの胸の中は私よく察して居ます、口惜いは最でさ、聞てる私でさへお腹の内は掻挘られる樣ですもの……、お前さんの身になつたらどんなだか……。」「ム察してくれ、巳にはもふとても我慢しきれん、お前には氣の毒だが愈よ辭職と決心した。」お村は無言で盃をかへし躊躇しながら、「辭職……さう思ひなさるのも無理はない、無理はないけれども最ふ二三年辛抱して下さいな、あとは私が如何とでもしますから、お願だから最少し我慢して務めて下さいな。」「そりやー如何で巳の樣なもの何所だつて高く買つてくれるぢやなし、あとで困るのはみす〳〵目に見へてるが、如何もその……。」「そこですよ其所をよく考へて口惜とお思なら、何卒最一度思ひ直して見て下さいよ、大川が何者です、署長だなつて意張つた所がたかが知れた法律學校の卒業生お前さんの我慢一ツで家の長太郎は今に立派な學士になつて、腕次第でどんな出世も望の儘になれようてんぢやありませんか、其の時分には今意張てる署長なんか老込で仕まうんでされ、さ其所を思つて末を樂みに、辛抱して居て下さい、生れつき怜悧な學問好なあの長坊學費さへ續けば必ず立派なものになります、イーエ屹度出世させずにや置ませんよ、それだのに今お前さんが辭職してしまうとなるとさし當り諸甲斐ない女の手一ツでは、大學は愚か小學校さへ覺束ない話、あつたら露の子に憖と云われる者たこの儘捨てにしてしまつて、又お前さん同樣人中で口惜ひ思をさせるなんて、何が何でも餘り情い無慈悲な話です、お前さん一人に働てとは賴みません、私だつて一生懸命です、育ち柄の悲しさに針持つ術さへ知らないけれど、自然と覺へた女髮結で押通します、あの子の學資の溜るまで眼を瞑つて辛抱して下さい一生のお願です。」「巳だつて其を思はぬ事は只の片時だつてないんだ、大抵の事は其のために忍んで居たのだ、坊も可愛想だし又一ツには御先祖へ對して相濟ん、若い時馬鹿な眞似をした許で讓り渡された家屋もなくしてしまい、今このざまでは死んだつて面目なくて行く所へも行かれん譯、と云つて今更巳にはもふ如何する事も出來んから責めて長太郎を一人前に育てあげ、彼に立派になつて貰わんぢやお詫の仕樣がないのだからな。」「ですからさ最少し眼を瞑つて居て下さい、お前さんの放蕩も元を質せば私故なんだから、身を切られる程辛くつて……堪忍して下さい堪忍して……。」袖を噛み締めて咽び入つた。「何貴樣の知つた事ぢやない、あの番頭奴に欺されて……。」「もふそんな昔の事後生だからよして下さいよ、思ひ出す程涙の種ですから、其よりか先を樂みにして……もふ氣をかへて冷めたろうけれど飲んで下さいな。」外は暮れ易き秋の日のいつか夜氣に充された、蒸暑い重苦しい空氣は頭から被せ掛られる樣で、何とも云へぬ不快な晩である、折から愛らしい冴へた然も勇しい調子で、「日本の海を船出して、西に向へば支那の國、亞細亞の字を保てども、吊ふ古蹟の跡ばかり、」唱ひながら十一二の活潑さうな好少年が勢よく戸を明て「只今」と挨拶し

た、其を見ると夫婦は嬉しさうに相好崩した、中にもお村はホク〳〵して、「長坊や、まわ大變に遲かつだちやないか、お腹が減たろうに早く御膳になし、今日はお前のお祝だから、好なものを拵らへて待つてたのだよ。」長「本當に、だけれど母さん僕はもふ先生の所で御馳走になつて來たの。」お村「オヤお宅へ參つて、まわお氣の毒樣な。」長「だつて母さん、今まで學校にいられるもんか、もふ八時だよ。」夫婦はハツト顏見合せたが、無邪氣な少年は嬉しさうに、「母さん今日はれ算術がよく出來たつて先生に褒められたよ、今日のは六かしかつたので誰にも出來なかつたのを僕一人當つたの。」木下「ム、それは偉かつたな」長「あゝそれにれ、先生の所でもお祝だつて赤のお飯だから食べて行けつて連れて行かれたの、先生の奥さんも大川君と僕とは大違だつて褒めてくれたよ。」お村「大川さんて署長さんの弟さんかい?。」長「アゝさう、ちつとも出來ない癖に意張散らす濫な人なの、今年は屹度落第だつて評判だよ、僕はあんな人達にやいくら意張れたつてちつとも恐くはない、今に見ろと思つてら、一生懸命に勉強さへすりやー、必ず立派な人になれるつて先生も云つて居たよ。」少年は今や前途の希望に充たされて活き活きとした鈴なりの眼を見張つて兩親を見あげて居たが、俄に思ひ出した如く「父さん明日は嵐だつてれ。」と突然投げ出した樣な言葉に驚かされて「なんだ嵐だつて、如何して?」長「今日先生の所で新聞を見て、習つて來たの、低氣壓て奴が出來ると荒るんだつて、警戒が出て居たよ、ドシ〳〵吹といゝや、大川君なんぞの弱虫達は學校を休むにきまつてる、僕は行つてやる、父さんも行くれ、僕と父さんは休むなんて懶ものぢやないから。」木下「ム、さうだ〳〵だ、父さんも行から坊も行がいゝ、よく勉強して早く立派になつてくれよ、其が何よりの孝行だ、父さんも母さんも其れ許が樂みなんだから、宜かい。」長「あゝいゝとも安心しておくれ、屹度立派な者になるから、そして父さんや母さんには面白ものも見せてあげるし、何でも好にさせてあげるよ。」親心には如何に賴母敷思はるゝか、二人の顏には最早一點憂愁の影も留めず、陶然とした醉心地の寶の中の寶と愛づる長太郎を中にして、其夜は安けき夢に入つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

前日の警報空しからず、九月廿三日朝からの暴風雨、最も烈しく荒れ盛る正午、無慘にも押潰された、淀橋尋常小學校の庭前に、眼血走り色蒼めて、「長坊は死んだ、死んでしまつた。」と死骸を抱へて狂氣の如く走り廻る木下、遲くれて馳け付けた妻のお村は、其と見るより縋り付て「私の卵、私の卵の……。」とあとは云ひ切らぬ中に悶絕して倒れた、死者七人、負傷何人と算せられた。木下夫婦の姿は、其後永く淀橋附近には見られなくなつたとのことである。

（をはり）

# 木がらし（上）

明石　池田きん子

白砂青松のほとり、舞子に近い垂水の海邊に、數月前板圍のとれた計りの新建の別莊がある。

衆議院議員の椅子を領して、然も若手の敏腕の聞え高い、大阪の豪商、落合滋郎の別莊で、天王寺の別莊よりは、層一層金をかけて、立派に、高尚に、間毎の配置、裝飾、建具から、前栽の樹木、何一つ滋郎の嗜好に、適切しないといふのは無いのである。盛大なる落成の式を、擧行してから間もなく、この別莊に病を養ふ、妹の蕭。

兄の滋郎は、商用やら、何や彼やと、閑暇のない身の上であるが、月に一度は、必らず妹の病床を見舞つてやるのであつたが、この三月程は、如何したのであらうか、自分は勿論、人を以て見舞によこさない計りか、手紙の一本も送つてこないと云ふ樣になつた。

時折、乳母やが歸阪つて、姉さんの樣子やら、女中に聞いた事項をきくと、兄さんは此頃、放蕩をなさるさうな、あんなに姉さんにも、優しく、可愛がつていらつしやつたが、眞實だらうか、知ら、まさか乳母も虛僞はつくまいし、眞實とすれば姉さんはお可哀想な、嗟、今頃は泣いていらつしやるだらう、恨んでいらつしやるだらう、私も姉さんの傍にゐて、慰さめて上げたいが、私が兄さんの事を聞きにあげた手紙の返事も、たゞ無事で居ると計りで、ちつとも姉さんはいつて下さらないのだもの、あんな者の妹だからと、思つてらつしやるのだらうか、あゝ口惜しい、私は兄さんの樣な薄情な、あゝ私が姉さんであつたら、兄さんの足許へかじり附いて、泣いて泣いて、諫言をするのであるが、姉さんはあんな柔順な方であるから、ぢつとこらへていらつしやるのだらう、眞實に姉さんがお可哀想だわ」。とこなん事を寢ても起きても、考へて一圖に、姉の境遇に、同情を寄せるのであつた。

日は早、淡路島の一角に殘つて、さつと亂れて、寄せては返す浪頭の銀の潮も薄い光となつて、見る〳〵內に、岩屋のあたりから、東の鳥角にかけて、一面に濃き夕靄の幕に鎖されて了つた。今宵沖釣に出掛けてゆく、漁舟二艘三艘、ギー〳〵と艫の音高く、

「可愛妻おき、我家を出てゝ、行かにやならぬか、船乘に」勇ましく、船歌をそろへて、片帆を汐風に孕ませつゝ、沖へ沖へと漕ぎ去るのである。

嗚呼、この短句に含まるゝ、無限の愛情を、彼等は何と思ふのだらうか、面白さうに歌ふのは、意味が分らないのだらうか、假令それであつても、歌ふ丈が殊勝である。姉さんが之を聞かれたら、嗟兄さんの妻となつたのを、後悔なさるだらう。と突差の間にも、蕭はこんな想像を畫いて、寢臺の上から、靜かな波の面を、見つめるのであつた。

「お孃さん、只今歸りましたよ」と乳母のお由は手を附いた。「オヤ最早歸つたの……あの兄さんは、如何だつたね、お家にいらしつて……」蕭は寢臺の上から、急いで問ふた。「まアお孃さん、大分お話が永くなりますので、緩くりオホヽヽヽヽヽ奥さんにも私が聞くやうにして、悉皆聞いて參ましたよ。」

「其様、今もれ、姉さんの事を思つてた所なの」といつて薫は此方へ向き直つた。

「奥さんが、是は少しでも、薫さんの耳へ入れて呉れるなとの奥々の仰ですから、お嬢さんも其お積で、きいて下さらなくつちや困りますよ、私が歸りますと、恰度お客さんで、誰方だと聞きますと、今橋の御隱居様で、奥さんのおへやで長話だとの事ですから、平常ちつとも、お越しなさらないのに、何か急な御用でもあつて、いらしつたのか、若しや旦那様の事がお耳に這入つてと、此様思ひました者ですから、そつと、お庭先へ回りまして、お話を伺ふと、案の條、旦那様の事で、離緣だとか、道樂者だとか、馬鹿にするとかいふ、お話聲が聞ねました。何れこう成ろうとは存じましたが、旦那様の無情のには、つくづく感心しました、ほんとに、奥さんはおいとしい、お可哀想な、まだそれ計りではない、お嬢さんがこんなに病氣でいらつしやるのに、唯の一度も、お見舞にいらつしやらないで、おまけに朝から晩まで、藝者の屋方へ這入り込んで、口先計りのお追從な、可愛とか、何とかいつて、何百といふお金を、皆取られて お了ひなさるんですもの、たまつた者ぢや有ませんわれ、奥様も貴女、乳母や如何したら、旦那の放蕩が直るだろうといつて、お泣きなさるのですよ、眞實に、お悼はしい事ぢやありませんか」といつて、お由はほろりとした、薫も話半ばから、顔を背けて、微かに啜り泣くのであつた。

月は出た、磯馴松の枝が、瓔絡のやうに、障子に寫つて、沖の方の漁火が、忽ち消ねたかと思ふと、サツと夕風が、松の梢を傳ふて、冷やかに身に染みた。

「オヽ寒ヽヽヽヽヽヽ」

薫は思はず叫んだ、お由はハツと氣が附いて「オヤ最早お床へお這入なさいませ、寒い風に當るといけませんから。」といつて立ち上つた、同時に下女はランプを運んで來た。

（中）

正枝は滋郎を天にも地にも、唯一人の夫として侍いてから、最早三年の春秋を送つた。一夫一婦論の美くしいのに、贊成して、自分も主張者の一人とでも成るべく、頻りに彼をとなへて、蓄妾の家庭の平和を破り、一家の經濟を紊亂し延いてはこの社會に、男子が不正の淫慾を貪る事の、繁きに及ぼす害、多きを悟りて、自分も實施すべく、亦他人にも進むべく、確たる意志を抱いた、彼滋郎の始めて、正枝を娶りし當時の熱心には、反對の現象をあらはして、今や不正の淫慾を貪りつゝある、滋郎の身は、女といふ、何よりも恐ろべき惡魔が、襲ふて居るのであつた。でなければ、この可憐な優しい、罪もない正枝を、淋しい空閨に號哭させる事もなかつたであろうに。不幸にも、この惡魔が燃ゆるが如き、滋郎の滿身の愛を奪い去つたのである。何といふ悲慘の極だろう。すべて浮世は運命の神に委任するより外は無いのであろうか。

「奥さんあのお嬢さんがお歸阪遊ばしました。」

正枝は、奥の四疊の間で、悄然と考込んでゐた。今迄は一夜も外泊した事のない良人が、今日でもう十六日、少しも歸宅ないので、恨みに恨み

過しみに親しんだ上旬、何だか茫然と、精神に異状でもあるやうな、氣遣はしい顔附を、誰一人、慰さめて呉れる者もない内に、小間使のお芳許りは、島家へ嫁付いた時、生家から連れて來た丈あつて、一言一句、正枝を慰籍させて居つた。

「エヽ薫さんが歸阪たつて……」

乳母の話に聞けば、未だ歸宅する事も出來ない容體であるといふに昨日乳母が歸つた許りの今日、この消息をきくのは、意外であつた。驚いて居る間に、青白い艷のない顔に、微笑を含んだ、束髮姿の薫が、這入つて來た。「オヤ薫さん……」

「姉さん、私逢ひたかつたわ」といつて、正枝の手頸を確と握りしめた。正枝は無言で、二人は手を取交にして、暫時泣き入つた。感情が一時に込み上げて、思ふ樣に鮮明かでないので、吐切れ〳〵に「姉さん……兄さんがねー、此頃あの……大變放蕩を成さるつてね」

「いゝね、其樣事は、無くつてよ、ちつとも……正枝は俯目になつた。「そんな事より、薫さん容體はどんなですの、昨日乳母が、まだ中々お歸阪には成れないと、いつてたのに、如何してそう早く歸つたのですよ、ねー薫さん又此地へ來て、病勢がひどく成るやうですと、大變ですわ。」

だつて姉さん、がお可哀想ですし、それにちつとは快方ですから、歸りたくなつて、急に歸宅たのですわ……あの恐いの—歸つたら……。」

「そうぢや無いのですが、病氣がひどくなると、悪いから……。」

「姉さん、貴女兄さんの事を、いくらお蔽しなすつても、悉皆聞いてよ、……乳母やに……」正枝は突然顔を上げた。

「エー乳母に……もう仕方が無いわー」と太息を附た。

鬼千疋の諺も、古めかしいが、嫁と小姑とは、兎角意見が、衝突して、一家の平和を破る事が、多い内に、正枝と薫との間は眞の姉妹も及ばぬ位、二人の間に愛情が充ちて居るのである。

運命の神から授けられた、得難いこの幸福、この眞誠を、滋郎は打消して、虚僞多く、罪深い美人の膝に、假睡の夢を結んでゐるのであろうか。

（下）

汽車や腕車にゆられた薫は少なからず、病氣に障つて歸に還つて嬉しき日の翌日、又もや床に就いた。

* * * * * *

御召の縞入に、更紗小紋の縮緬の羽織、髮は今流行の8巻青白い丸顔に、好く似合ふた大きな前髮が、夕風に二本三本、亂れて半古の畫にあるやうな、當世姿をした十八九の娘が、一足〳〵覺束なく、京町橋を渡つて、四話に辻待の人力に乘ろうとした「難波新地の三番丁、嬢やん、そら貴女、お女郎屋だつせ、……貴女、其所へ來なはるんだつか」とけゞんな顔附。「あゝ、其處へ早く……お大急ぎで…。」

「あの兄さん、私がこんな病氣をおかして、來る位ですから、其處は察して……ねー此所で、委しい話は出來ませんから、どうぞ〳〵一度歸宅て下さい、大暴が今いふ樣な理由ですから、どうかねー、兄さん歸つて頂戴よ、兄さん、兄さん、ねー私の心中も察して……、いゝね私と一所

に歸りませう、腕車が待つてますから、一所に………。」

滋郎の放蕩を懸念して可愛の娘を、この慘酷な者に、添はして何時迄氣苦勞をさせる事は、出來ない、今の内、子の出來ない内、離縁して了つたらと、正枝の母が、再三のすゝめも、本人が不承知で、亦其内には、夫も夢のさめる時があろう、私は一生、この良人に捧げた身であるからといつて、斷固として、動かないが、母の有難い赤心、姉の固い意志、共に薫の身には、染み／＼可憐に感じて、病ある身の、苦悶も忘れて、兄を此處に尋れて來たのである。

無理やりに、腕車に乘せて、歸した後で、突然驚かしたのを謝すると、さすが稼業柄お世辭好く、何やかやと、口先計りのお愛想を半ば聞いて薫は歸途に就いた。

「オイ、何であんな大病人を、戸外へ出した、薫の事は呉々もお前に賴んでいつた筈だ、俺が外泊を口惜がつて、妹にまで仇をするんだな、薫を苦しめたんだな、俺の留守を幸ひにして、妹まで虐待する者は、己の妻には出來ないんだ、コラ正枝、貴樣は、妹が病人だとは思はんのか、エゝ年若の病人を、然もこの寒空に、一人で戸外へ出して、すまないとは思はんのか、俺に對してすまないぢやないか、申譯がないぢやないかッ

「だつて貴君、ちつとも知らない間に………」

此時、次の間の敷居の上で、「アッ」といつて倒れた、薫の聲を聞いて、思はず二人は、走り寄つた。

「あの……れ姉さん……み　水を……」

水よ、藥よ、醫師よと、家内中は大騷ぎ、脚氣衝心で、明日迄は持つまいとの醫者の診斷。

兄夫婦が、寢臺の横に居るのを、薫は微かに見て「あの、兄さん……私は……もうとても、……助かり……ませんから…どうか、姉さんを可愛がつて……末永う……暮して…頂！」といつて口をとぢた。姉は冷たい氷のやうな、薫の手を握つて泣いた。兄も泣きながら、手を握つた。

「薫ッ、安心しろ」と滋郎は力を入れて、言ひ放つたまゝ、顏を脊けた、この言葉が耳に入つたのか、薫は微かに目を開いた。次第にこわばる唇に、力を入れて、

「兄イさん！姉さん！乳母や！さよ……。」

聽て、目を閉ぢたかと思ふと、消ゆるが如く、刻一刻、呼吸はせまつて行く。正枝は胸も張裂けん計り、聲も枯れん計りに泣き入つた。

戸外には、吹荒ぶ木枯しの聲が、敢なく去つた、佳人に吊慰の意を表するが如く、颯々と南窓を音づれて居る。

＊　＊　＊　＊　＊

滋郎が改心して、一年前のやうに嚴正に一夫一婦を唱へたのは、蓋し薫の賜物とでも、名付けてよい位。

而して、落合一家に於ける、總べての悲慘は、可憐や薫の頭上に、集中したが、恐らく、彼世に永眠せる彼は、愉悅の笑を顏面に漂はして居るだろう。

（なはり）

# 袖の露

## 上

周防 中谷鳥羽子

木々の梢は落葉してうら淋しき夕まぐれ紫野の片ほとり、松の木かげに佇で折からの吹雪を物ともせず、しみじみと語りあふて居る男女がある。

「それでは靜子さんいよいよ明日お母樣のお里の方へ入らつしやるのですか」とさも名殘惜しそうにこう云ッたのは年頃廿三四とも思しき青年の身には田舍名物の綿入に黑の五ッ紋の米生羽織を引かけ吹き來る風に、トンビの裏をひろがへしながら。凜とした眼に口元の引締れる勇ましげなる顔を稍伏目にして嘆息らしく肩をひてめ靜子の樣子を打守て居る、「はいお父樣があんな始末でご座いますから止むを得ません一應お母樣のお里の方へ參る事になりましたのですよ」とさも口惜しそうに聲をうるませてこう云たのは靜子である、緋縮緬の長襦袢に糸織の綿入を重ね琉球紬の長羽織を端折り藤色のショールを無造作にかけて居る靜子は雪よりも白き面を折柄の山をろしに吹き曝されて亂るゝ髮のほつれ毛を撫で上げ樣ともしない。愛らしき眼には一ぱいの露を溜して居る、「だッて靜子さん僕は貴女と今身体は此處で別れますけれとも心はいつも貴女の傍を離るゝ事は出來ないのです、僕は眞の心と心の愛を靜んで居るのですから、貴女より他に愛する人は决してありませんよですから何處に居ッたつて心はいつも一處に居るのですからねー靜さん併しお母樣が眞個のなら好いけれども義理のお母樣の事たから彼地方でも又貴女がどんなに心配の事だろーと僕はそれが何より氣にかゝるのさー」と沈んだ調子でこふ云つた、靜子は思ひ迫たらしく俯頭いて了つたが稍あつて、

「はい只今の貴君の御親切なお優しい御言葉は妾永久に忘れません、いつ迄も忘るゝ事は出來ません」と別るゝ事の悲しき中にも嬉し涙をほろりとこぼしぬ、

「エゝ靜子さん泣く事はありませんよ、僕もれ　明年の春は學校を卒業しますから其時には、吃度貴女を表面的お迎へしますからそれ迄はたとへどんな事があろーとも辛抱して頂戴よ、」「アノそれでは吃度其時には」「エゝ吃度ですとも」「あら眞個ですか」「うそをついて堪るもんですか貴女の樣な可愛い人に」と靜子の腕をしつかりと握た、靜子は嬉しさに思はずにつこと笑みを浮べた、「ですから別れても折々手紙で樣子を聞せて頂戴よ僕からもたへず手紙は上げますから」とこう云た時靜子は何を思出したか急にはらはらと涙をこぼした「西田樣貴君の御親切は誠に有がたう存じますけれども」と口をつぐんだが又思定めたらしく。「貴君からお手紙を送て下さいましたのを若しお母樣に見付けられでもしたらそれこそ大變ですから」と悲しそうに聲を曇らせてあとは言葉も無かつた。「あゝそうでしたねーじやー僕からは何にも上げますまい併し靜さんからは折々手紙を送て頂戴よ僕はそれを何よりの樂しみに一生懸命勉強するからねー又靜さんが戀しくなつたらいつぞや貰つた貴女の寫眞に折々キッスでもしませうよはゝゝゝゝ」と微笑した、「あらあんな事仰しやいますわ」と青白き頰に紅葉を散らしたのである「じやいつ迄話してもつ

さないから是でお別しませう靜さんどーかからだを大事にれ」「はい貴君も御機嫌よう御勉強遊ばして」

中

靜子が父は某學校の教授であつたが今回教科書事件の爲嫌疑者として一應東京へ拘引せられたのである

後妻のお房は京都より二三里へだゝつて居る片田舍の深艮の娘であつた、そこで其兄の山下勇吉と云へるが親子共に引取ツて世話する事にしたのである

西田春雄は當時府立醫學校の學生である

去んぬるやよひの頃祇園の夜櫻に遊びし時友人の影山の紹介にてはからずも靜子と親しく交際を結んだので其後は度々靜子の家を音づれ。いつしか互に愛情を通じたのである。けれどもまだ一片の汚れには染まないのであつた。影山武夫と云へるは靜子が實母の甥なので靜子とは眞の從弟の間がらである。

そよ吹く風も何となく春の陽氣の暖く。心のどけき折柄をそしらぬ顔に障子しめ切り明暮れ父の様子やいかにと日毎の新聞にのみ眼をさらし居る乙女心のわりなさよ。あゝ思廻せば住みもなれぬ片田舍此村に來てからもー三月あまりを過せしにまだお父様のご様子は何とも譯がわからない、あゝおいたわしや嘸御不自由の事ならんと今しも靜子は新聞ひろげて父の様子やいかにとそこかしこに眼を配つて居たが急に何やら嬉しそうに、につこりと笑みを浮べた、それは西田春雄が無事に學校を卒業したとの事であつた、

「靜さん今夜はとつくりとお話がありますよ話と云ふのは先日から此處の叔父様が仰しやるのですがどうです、あなたは京都に居時はいつも百性はいやの田舍は嫌いのと我儘ばかり云ておいでゝしたがあんな氣儘な事はもー云へますまいねーお父様があんな事におなんなすツたものですから今ではほんにあなたも私も皆此處の伯父様のお世話、

田舍でこそあれ村での物持、百姓だつて信さんは男まへは好し氣まへはよし、そして優しくつて親切で眞個にマー何にも不足は有ますまいがれ、ー靜さん都會の人は口先ばかりうまくても其實薄情な方が多いのですよ、田舍の人はおしやべりは下手でも眞實優しくて深切でれー」と母お房はいかにも恩ぎせがましくこふ云ツたのである靜子は思懸ない母の言葉に小さき胸をおどらせながら愛らしき眼を瞠視たが稍あつて「アノお母様折角のお話ではございますが何卒これはお斷り遊ばして」とはつきりとした聲で言た、「エヽ其は又何故です」と母のお房は鋭どき眼を閃かせながら靜子が擧動に眼を注ぎ「又例の氣儘を言て妾を困らせるのでせうあなたもまんざら子共では有まいし少しは考へてもごらんなさいこふして今では何も彼も皆此處の伯父様のお世話それに何の彼のと自分の我まゝばかり云つてすむと思ておいでゝすかね」といやおゝ云はせぬ母の言葉に靜子は悲しさやる瀬なく玉なす涙かみしめながらエヽ妾には春雄様と深き約束のあるものをと思へど流石に病氣の口へ出しては云ひかれて暫しいらへもなさざりしがやう〳〵に口を開き「アノお母様それでは妾も少し考へとうございますから何卒明日迄お待遊ばして」と頼むが

知き靜子がさまを流石のお房も少しは憐れと思ひしか「ジヤさうなさい」と其まゝツツと立去てしまツた

「車屋さん大にご苦勞でしたれ、」いゝエどうしましてと車やはかろく會釋して其まゝから車を引て立去てしまつた、此所は西田の裏門の外なのである折しも月はをぼろに霞み、櫻の花は今を盛と咲き亂れて居るあゝなつかしの櫻花姿が此土地をはなれて田舍に行時はまだつぼみどころでもなく漸う〳〵に枯葉が二ツ三ツ殘て居て吹雪の花がちら〳〵と散て居たに、早マーこんなに美くしく咲ていゐ事と靜子は櫻の木の傍に立寄り暫しの間花に心をうつして居たが、忽に何やら眼にとまつたらしく愛らしき眼をまろくして垣の外より内の樣子をうかゞつて居る、

## 下

障子にうつる二ツの影一人は懷しき春雄樣、今一人は女の影なるがいぶかしや丸髷姿なり、靜子が胸は恰も早鐘を撞くが如くなり稍暫しとうかがへば、やがて優しき女の聲にて「旦那樣明日は何の列車で參るのでございますか」とこう云ツたのは靜子が同窓の友なりし杉浦芳子であつた「さうじやれ、一番汽車が好いだろーよ、此度の博覽會は隨分見ものだろーれーあゝどうも愉快だ明日は先づ新婚旅行かはゝゝゝと高笑ひしたのは正しく春雄なのである、此睦まじき新家庭の樣を聞き得し靜子やいかに。エーとばかり驚きしもあはれ今は早賴みのつな切れ果てぬ。

「エー扨ては春雄樣はあの芳子樣と御結婚遊ばしたのかそうとも知らで何處迄も此身を愛して下さるものと信じて居たのが口惜しいあゝ怨めしや春雄樣、去年の冬お別れ申其時に何と仰しやりました、僕は眞の心と心の愛を尊で居ます、貴女より他に愛する人は決してありません、たとへ別ても心はいつも貴女の傍を離るゝ事は出來ないと仰しやつたあのお優しいお言葉を妾、杖にも柱にも賴んで居たにゐるましや、苦しき思ひを堪ね忍び、樂しき末來にあこがれて三月あまりを過せしにエーあのお言葉は何事で、よも忘れはなさるまじ、あゝ遠から性根はくさつて居たのか。○ 罰とも知らず我のみ戀しと思ひし愚さよあな怨めしあな悔し、あゝ思廻せば去年の夏戀しき母は重き病の床にふし遂に果敢なくかへらぬ旅路の人となりぬあはれ戀しさつらさいかばかりぞ、日每に母のみ墓に詣で心の限り泣きになきたる袖の露かはく間もなく迎へられしは今の母繼子憎むは世の習ひ、それは今更いとはれど、又も戀しや父は教科書事件のため不幸にも嫌疑者として拘引されぬ、重れ〳〵の不運命、戀しさ辛さいかばかり憂にはたへぬ妾をば朝な夕な優しき言葉もて慰め給ひし春雄樣、賴みなき世にたのまるゝ人と思て居た物をエー情なや此後何をたよりに浮世にながらふべきと、靜子は戀しさくやしさやる瀨なく齒を食ひしばり我を忘れて其まゝばたりと身を投げ伏しよゝとばかりむせび入りぬ、

折しもさつと吹き來る夜嵐に咲きみたれたる櫻の花は露のしづくともろともにはら〳〵〳〵と落ち散りぬ、折しも彼方の竹籔をもれて程遠からぬあたりに銀笛の音が聞ゆるのがしつとりとした物憐な音色で響て來た、と見て夢はさめたり

窓より吹き入る曉の風冷かに床に活けたる白桃のちらちら〳〵とみだれ散りぬ、折しも靜さん〳〵とけはしき母の呼聲のさめたる枕に通ふぞ悲しき

さめてうれしき夢のあとくりかへす節子が身には今なほ、かはくひまなき袖の露

# しら露

赤坂　山村くら子

（壹）

うら若き嫁女の身に、伴侶もなく附添ふ人もなく唯一人、此松輪村に來て最早一月あまり、織物、呉服、荒物、菓子砂糖の類を鬻ぐ此家の奥の一室に、病氣保養の爲めとか、身分は華族様のお姫様とやら、さりとは身裝も質素なれど、何處となく品格の具はりたる、擧動の閑雅なる、道芝の露未だ干やらぬ曉方、馴れぬ露草履いたいたしげに、磯を漫歩し玉ふ姿、誰が眼にも神々しく、此村開けて以來都の人も多く來りしが、斯る高貴の方の來たまひしはこれが嚆矢なりとは、石花菜採りて戻る婦人達が物語。今の主人三次郎が妹お花といふは、東京の藤園伯爵が邸に御奉公に上りて仲働を勤めけるが、姫様の出養生に付々家なお勤め申して、斯くはお世話をするなりとぞ、お花はお姫様が第一のお氣に入りと聞えし。

お姫様の名は八重子、實の母君は三年前みまかり玉ひて、其後は世の冷たき風、薄き紙にも似たる人の情、そゞろ身に染むばかり感じ玉ひ朝に夕につゝむ涙のつらき思ひ、そが爲めに名も知らぬふら〱病に罹りて一時は枕をば離さゞりしと。父の伯爵が、某侯爵の叔母君に當る、自分より歳二つ程長けたる人を、二度目の夫人として迎へ玉ひし後は、八重子の君に對する父君の愛といふもの全く失せて、別に嗣子として迎へ玉へる、繼の母上が縁續きの華族の君のみ二なきものと愛しみ玉ひぬ、繼の母上が辛かるべきはさる事ながら、父上まで斯くては女の身の心細さも一入、庇の下を狭くお側までお姫様お可哀想と、語り合ひては鼻うちかむ事も度々、お花は固より姫様と共に泣かぬ日はなかりしとぞ。

八重子此濱への出養生も、自らすゝみてにはあられど、醫師の勸めもあり、母君の常にも似ず、大切の身よ、嫁入前の人よ、いやが上にも注意けでは、早からば今年の中、晩くも來年の春には、彼の樫村家へ輿入せではならず、身體を大切になど、それはそれは度々の仰。さりとは思ひ掛けなき事、縁談の事は父君よりお話もなし、樫村とはかれて知れる人、金貸を業とせるよし聞きたれど、其家へ嫁に行かんとは思ひもかけぬ事、さる金貸など人の卑きにつけ入りて殘忍の仕打を何とも思はぬ人非人の家に、縱令財產は有らうとも立派な家に住うとも、何とて自分が嫁ぐべき筈があらうぞ、母上の御合點行かずと思へど、其日が迫れるにもあらず、深く問ひまつらん要なしと、唯何事もハイハイと應へて、九月の末つ方父君は國許より未だ歸へり玉はぬ中、八重子は此家に來つるなり

（貳）

夕陽は彼方の山陰に入りて、濤は喧啦々と、漁舟の二つ三つ四つ濱邊を指して歸へり來る、濱には魚を運ぶ聲、舟を曳き上ぐる聲、草原に放ちて置いたる牛は新らしき塒に飼はるべく家に曳き入れられぬ、ちよろ〳〵とした流れを右に、坂少し登つた崖の上、地藏尊の石像三躰、雨に曝され風に黑みて、奉納の幟算を亂しぬ、其側なる小さき茅葺の家は、弘法寺といふ寺なりとぞ、鉦の音時々聞ゆ、尼一人住めりとぞ。

八重子は裏の柴折戸を出で、畑の中の細道を過ぎてぐるりと一週り、前なる磯に出でゝ、とある岩の上に立てば、裾を拂ふ風涼しく、寄せてはかへす女波男波の珠と碎けて、飛沫は帶にまで及ばんばかり、顔はいたく燒れたれども、凜としたる眼元、殊更眼立ちて通りたる鼻筋、きりりとひき締りたる口元、色は濱風にやゝ暴うなりたれども、頭は束ね髪の儘數日を經たれども、さすがに賢し麗き容姿、魚籃觀音の此島に出現ましませしかと怪まるゝばかり。

お姫様、貝進げませう

十一二歳と見ゆる、いづれ漁人の子なるべし、色飽くまで黑く、身には膝きりの筒袖を纏ひて、跣足の儘なり。

八重子は僅かに笑を漏らして、彼の方を見ぬ。

子、お姫様お前様、此貝好所だらう、ホーラ何時か子、新田の濱で多量採つて進げたらう、今日子横手の島へ行つたら道度に在つたよ。

籠の内部に衣蔵が設けられてあると見ゐて、双の手に溢るゝばかり貝殻を取り出した。

オホヽヽ、ヤツよく多量採つておくれだ子。

お姫様に進げやうと思つてよ。ア、お姫様また今夜行て可いか子。

今夜?、アヽ可いとも子、昨日のお話の續きをしようから。

アー行きますよ。

眞砂地を驅せ去る源太が姿、闇にかくれて彼の弘法寺より響き來る鉦の音、水を渡りて遠く聞ゆ。

（参）

オヽお泣きでないよ、痛さう子、然うして置けば明日までには癒るよ、オヽお泣きでないよ。

八重子は、垢だらけの源太が腕の、まだ新らしい傷の、血潮のにじみたる邊に藥など塗け、白布を引き裂きて繃帶を施しやりぬ。

源太は同じ村の漁夫の子、繼母のお波が邪見の擧動に、自然背う事もませて、誰も十一二歳と見れど實は九歳なりとぞ。

子、お姫様、己ア何も言やあしれいんだよ、酒買ひにけて、何時も早く歸られいと喧ましく言うから、今日も急いで歸ると、己ア知られい他家の小父さんが來て居るのさ、己ア、母ア、サア酒買てきたよと言つて徳利を出すと、母ア怖い顔して睨めるでれいか、己ア、又何か叱言でも聞く事かと思つて小さくなつて居ると、突然頭を毆つた。

傷なき方の腕にて、ソツと眼の邊を擦るいぢらしさ。

お姫樣、母ア無理じやないか。何も己ア知りやしないのによ、突然叱りやがつて母ア隨分酷いや。
源太の語る所に依れば、彼は今日例の如く、父が晩酌の料にとて、母より吩付られたる酒買うべく、山ひとつ越へて隣村に行きぬ、日の暮れ方とて馴れたる道なれども淋しく、ひた走りに走りて間もなく歸り來りしに、早かりしと褒めてもゝらひたき所を、さりとは意外なる、繼母は折から若き男と睦ましげに語れるが、突如源太が顔をひとつ、破れよとばかりに毆りつけぬ、其途端、徳利は地に落ちて粉微塵、「此野郎、故と徳利な破したな」、鐵拳は霰と源太が頭上に落ちぬ、温順なる源太は斯くても爭はず、繼母が爲すに任せて唯其怒を緩うせんと思へり「マア可い加減にしねい」、若き男の口な添ゆるも聽かず「ナーニ、運座强情な、生意氣な餓鬼は、思うざま懲さないじや癖にならア」、其所へ押し倒して散々毆つた上、引き起して見れば、小さき腕は徳利の破片に傷けられて、滴る血潮は唐紅。それには眼もくれず「ヤイ源太、今夜父が歸つても、な此小父さんの來た事を話すじや無いぞ、可いか」、源太は唯諾くばかり「サア外へ行て遊むで來い」瀬戸口から外へ押し出して戸をピッシヤリ。源太は泣きながら濱に行きて父の歸るを待ちしが、日和の都合で夜に入りて歸漁を續けるものか、何時までも其影見えず、心細さに日頃優しきお姫樣を訪づれたるなりとぞ。

（四）

或る夜八重子の室は見えずなりぬ、室をお貸し申した花が家の驚きは一方ならず、人を賴む駐在所へ訴へる、主人は殆んど狂氣の如くなりぬ、源太も昨夜家出して歸り來らずとなり。村長なる何兵衛とかいへる老人の注意によりて、若しやと八重子が手文庫改めしに、其前の日父伯爵より來つる書狀一通、引き裂きてぐる／＼と圓めたる、何か手掛りもと繼ぎ合して讀み得しは。

經村より急に婚式を擧げくるゝ樣、中舘の次第も有之、就ては來る十一月三日愈々擧式の事に決定、其旨先方へ通知及び候間、其心組にて至急歸京なさるべく、明日迎への者遣はすべく候。

此喜びを眼の前に控へてと、口惜しげに言ふもあり、ナーニ姫樣は此縁談が嫌さに逃げたるなるべしと穿つもあり、そんな突飛な事を、彼の樣弱い身でと不審がるもあり、されど此手紙にて八重子の行方を知るべき術もなく、とやかく評議の中に其日も空しくなりぬ。八重子と源太との行方は更に不明なりき、村の人々は怪しき噂を立てゝ、此兩人の事を語り草になしけるとぞ。（おはり）

# かへて林

大阪　落葉女史

「何と御意遊ばす」と乳母の篠やは側耳立てゝ膝乘り出す。姫樣は美しき御面わに微笑湛えさせ給ひ「何とでも可いでは無いかね篠や私何ても無いのよ」と事もなげに宣いて傍なる御文机の上横文字の書物開き給へば乳母は氣もそゞろ「何でも無いでは御座いませぬ只今何と仰せられま

した姫様篠は年を取りまして時々には御意か伺ひかれます恐れ入りますか今一度仰せ聞けられて下さりませ、 承りませう」と堅くろしき乳母か言葉に姫様は何やらむ恐ろしき様にも思し又煩けに矢絣の御振袖にそと御はゝ押ね給へは朱鷺色の御襦袢の袖のはら〳〵と零こぼるゝ御美しさ譬かさ御十七の今日迄日々に見奉り手塩にかけ参らせし姫君の斯くも いみじく美しく生い立たせ給ひしかとも思へは篠も心嬉しく今更に思はす見惚れ参らせて暫し有りしかちらと今仰せられし清野の道夫様、 よもやとは思へとも扨御油断ならぬ御仲なれはよく〳〵正し参らせて万か一にもさる御不量見の事あらは身に替ても思止らし参らせては斯く育て上奉りし今迄の苦労も全く水の泡… のみかは第一姫君御身の破滅大きくならは御家の恥その罪は皆我身一つさなりさなり何所迄も

首肯きつゝ有る間に姫様はすらりと立上り給ひてしとやかに 「篠や何たか氣かくさ〳〵して來たから庭へ出て來ます春やは何所へ行きました」止め參らせむとする間に早や御姿は御椽の外關下駄召して靜々と步を運はせ給ふ。 篠やは年甲斐もなく氣の脫けたらむ樣の心地にて思はす目をみはりて御跡見送りつゝ有れは姫樣附の侍女春と云へる實體者 「オヤ乳母やさん姫樣は」「オ、春さんか姫樣は只今お庭へ御散步」急き御跡追ひ行かむとせし春を呼止めて姫樣か御素振りに變りし事は有らさるやと綿に尋ねぬ暫くは小首傾けて考へしか乳母の貌沈つと打眺め 「誰にも申すなと堅くお口止め遊しなのですか外ならない乳母やさんの事ですから申ませうお素振りに就ては 一向私は變つた事を伺ひませんか只一つ其れはこの夏の初頃から日曜毎に彼の清野の若樣かいらせられませう」「アヽ」「いらせられると何時も定つた樣にお庭の楓林の中の彼のお小亭へ入らせられますそして私にも用事か有れは呼ふから退つて居よと仰せられて父樣にも母樣にも誰にも決して云つてくれるなと堅く御意遊して」「さゝゝそんならそれに違いは無いその樣な事か有れは何故私に丈けは知らせて下さらない 若しひよんなお間違ても出來て御覽なさい私は殿樣やお上樣にお申開きのいたし樣か有りませぬそそして今ても」「ヘイ只今てもお日曜毎には必す」「口惜惡ない外の女中達に知れぬ中早く御諫言を申上れは……はてまあ困つた事に成りましたれね」 乳もほつと息つき「私かお傍放れす お附添申て居なからこの樣な事に成りまして申譯か有りませぬ

靜やかなる池に添いて一叢の若楓の木立繁れる小山秋も漸く老けて冬の初め一時雨每にもろきは皆散りて殘れるは美しう色づき黄に紅に此所に又一際清き池にさかしまに映れる樣の趣深う畫も及はぬ眺床しうそ見られけろ。 數奇をこらせる小亭の庭園少さなる紫檀棚テーブルに純白の襟物の懸掛けたる上に銀の灰皿薔薇のマッチ箱白燒のコーヒ茶碗二つ美しき錦手の菓子皿には杉なりにビスケット盛られて順序よく並へられたり丸き籐製の椅子には此家の令嬢美保子姫ふくやかに鬢髮とりて濡色の御ぐし美しう鳩羽色のリボンさらりと結はせ給ひ紫紺紋綸子の御被布に白の胸黄八丈の御召着の見ゆる下には白羽二重の御襪二つ櫻色の御はゝに照りて一層氣高う見參らす、 まつ毛の長き優しき御目にうつとりと池の面眺め入り給ひま白の御指に紅の綾の手巾をまさくり給ひつゝ 少しへたゝりて躊躇りつゝ物申上くる乳母の言葉聞くとも無く御耳に入れたまふ樣御後に控へし春が思はず頭かたむけしも無理ならず、 篠やは老の目に淚たゝへつ 「今更私か申上ますろ迄も無く姫樣にはよく御承知遊していらせられます通りこの羽田山樣の御血統は一通の御華族方とは異りまして恐れ多い御わたりの お覺ねも格別の御家柄正しい御家風その第一の姫

君て渡らせられながら有ろましい御所爲それはもう若樣と御二人つきりて此所に御座遊したからだうの斯うの　申まするは少しけ早り過ぎた私か苦勞ても御座いませうか何分にもお若い方樣同志若も之か外の御家扶方や女中達に知れましては　なれこそ大變上御二方の御間にても遠しませうなら私は生きては居られませぬ姫樣何そ乳母が一生の御願事御聞屆け下さりませ篠を助けると思し召してこの事計りは御思止りを……」　さりけ無き樣裝ひたまへる姫君は折々聞捨てならぬ言葉の端々に柳の如く優しう聳ける如き御眉ひりゝと動し給ひ花の如き御唇きつと嚙みしめて恐ろしく篠か下けたる頭を見やり給ふと見る間に　又空色の翠玉鏤めたる金のリングのかゞやく御手をそとテーブルの上に載せ片手を被布の間に差入れて思案にくれたまふ樣春は氣もそゝろ。　恐ろ／＼見上げ參らせし乳母は打驚きぬ「オゝ姫樣お隠れ遊しませぬか御免遊せ篠か申上すこしました所に御用敎を」　と恭々しく辭儀して扨「春さんあなた御寢所に御床なさ姫樣いらせられませすお手をお取り申ませう」　小腰かゞめて手差伸ふれは徐に頭振り給ひ「いゝゑそれには及ばない篠やも春やも暫くの間退つて居て下さい」「ハッ」　と乳母は當惑貌思はす春と見合せは姫樣はつと立上り給ひて「オゝ此所はいけないのたつてれそれては部屋へ歸ります　お前方は此所に御出て」　だら／＼と坂を下りたまふに春は急ぎ御跡に從へは靜に「來なくても可い」　と凜とせし御聲に恐れてたゞ／＼と二歩三歩退りぬ

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

「私は彼の縁談を御斷り申ます道夫樣お一人に御賴み遊して……」　すゝり泣き給へは父侯爵の君は突然に姫君の御言葉とていたく驚きたまひぬ「何ぢやと美保彼の縁談か厭ぢやと彼れ程私か始に賴んだに汝は氣儘を申な」「イゝエ父樣私は決して厭などゝは存しませぬので御座います」「それぢや何故道夫一人爲せと申た一人ては迎くなるぢや無いかの」「ハイそれはもう能つく存じて居りますか私の名譽も大切に御座いますから」侯爵は眉ひそめ給ひ　「名譽に關するとは申て見い何の樣な事ぢや」乳母が諫めし一什始終を語り給ひぬ「ハゝゝその樣な事か可い可い私かよく取計らつて遣ろぢや心配すな泣かんでも可いぢや汝も氣が小さいのう、　然しもう半分は出來たらうの」「ハイ三分の二程はだうか斯うか道夫樣か層な御勉强で御座いまして」「ムゝ思わくより早く出來たの有難いそ禮は屹度二人にするハゝゝ」「それよりは父樣この汚名を早く」「ムゝよし／＼心配するな」

十二疊の座敷床を後にゆつたりと樺色紋絹の御褥に座りたまへる殿樣と跡論に菊のほり模樣有る御手あぶりを中に夫人定子の方小紋の御召に黑ちりめん五つ紋の御羽織やさ方のくつきりと御色の白さか云ひ知らす氣高く少しへだゝりて淸野の若樣大學の制服きうくつげに見ね給ふ御傍には姫君の面はゆけに差うつむき給ひて風通織の御召に濃海老茶の御帶恰好よく春が結び上しまゝ御手に菫色の半巾持ち給ふ。　御前に召されし乳母の篠と侍女の春何事ならむとなづ／＼お次の間に三指つけば御機嫌美しく夫人は　「二人とも其所では談か仕憎いからさすづと近う寄つておくれ」「ハッ」　とひとしく辭儀なしつゝにぢり出つれは殿樣はにこやかに笑ませ給ひて　「更めて私等親子は汝等二人に禮を申ぞ外でも無いか姫の身に就てはよく心配してくれたそうなくてはならぬ所然し二人共安心してくれ若と姫とが楓林の小亭て人を寄せつけなかつたのは私が申つけたのぢや譯は今云ふ可き時て無いから申さぬか后日自然と分る時か有らう然し乳母の申通り若い者二人つきりにして置いたのは如何にも私か不覺ぢ

やつたこの二人は信して居たか成程人の口が煩いからのう」夫人も笑をふくみ給ひて「私もちつとも知らなかつたの昨日初めて殿様から斯つと承つてびつくりしたの殿様は無頓着ていらつしやるからよくまあ外の者に見つからなかつたとひいやりしましたよ」殿様はシガーの灰を落し給ひながら「それて更めて申すがこの道夫と美保子とは此度結婚さす事にいたしたのぢや」「エッそれは……」と乳母は嬉し泣に面も得上げす姫様はさつと紅葉を散らし給ひぬ



某國の軍事政治其他樞要なる國事の秘密を落ちなく記されたる得難き珍書如何にして御手に入られしか御義弟なる清野伯爵の令息道夫君と御邸の姫君とにそが飜譯を委任したまひぬ夏のはじめより着手されて漸く年の暮十二月十三日と云ふに完成せしかはそを期として二方か結婚は世の人が迎新に忙しき三十日に於て擧げられ羽田山侯爵同夫人美保子の二方はたのしき新春を娯しきホネムーンの滊車の中に迎ゐたまひぬ

# 若き人（上）

玉あられ　京都　桐原紫都子　（一七六）

黒々と漆の如き光澤ある頭髪を、初々しう丸髷に結つた美しさ。南向きの肘懸窓に凭れて、秋の日の光を斜に受け作ら、敷石の上の斑犬の蹲踞したる可憐らしさや、銀杏樹の葉の風も無きにはら〳〵と散れるのや、苔結せる石の此方に、名も知らぬ草花の寂しく咲けるに、痩せたる胡蝶の危く留つて、離れともせぬいじらしいのや、唐紅の美しき紅葉も早やうら枯れて、過半凋落たるなど、漫に暮秋の淋しさを思はしむる、庭前の光景を、無心に眺めて居る花嫁の綾子は、芳紀も二九の花盛り。愛しき母は顔さへ覺えず。懐しき父にも振分髪の昔に死別れて、誰一人頼るべき縁も無く、叔父の許に引取られてよりは、朝に夕に雑種の事に齷齪して、去年の夏叔父に連れられて、箱根の温泉に湯治し他には、親友の家にだに、泊りし事の無かりし身の、愈に他人の家に嫁いでは、何と無う小さき胸の、心細く淋しさを覺ゆるなりき。

お嫁に行つた時は、姑御が這麼甘たるい事で置くものかとは、叔母様の常々操返されし言葉にて、嫁入は地獄とやらん憂き所に行くかの如く、思ひ居たりし事や。叔母様よりこの縁談のありし時、嬉しきが如く、希望のあるが如く、又何と無う悲しきが如く、憾めしきが如く、何とも彼とも言ひ知らぬ感想の、浮びし事や。嫁入仕度の思ふ千が一も整はぬに、若し父君の在世したらんには、少くとも簞笥三竿位は新調へて、それに相應はしき仕度ば爲て下されしならんに、孤兒とは云へ、餘りに叔父様も殘酷に過ぎたりと恨みし事や、輿入の當夜、お化粧も濟まして、晴着着飾りしとき、大變好く似合ふよ、餘り美くしいから綾ちやんとは思はれない程よと、叔母様に調戯はれて、燃ゆるが如く顔に紅を漲らせし折、眞個に義姉さんは別嬪さんよ、全然花魁のやうよ、ほほつと、義妹にまで嘲弄らるゝ辛さ。生の母の在世したならば、慰めも爲、誡めも爲、娘の門出を祝ふて下されしならんに、と思ひたりし事や。恰度糸を手繰が如くに、あれからこれへと思ひ偲ばれ、續いては現在の身の上に就ても、所夫は嫁がぬ以前より、氣心も熟知り居たりしなれば、平素妾の叔父叔母に虐待めらるゝに同情して、此家へ嫁ぎたるも、起因を質せば、それよりなりと聞きつれど、姑御は一昨夜輿入の時より、離房にのみ在して、一度も母家へはお出なく、什麼に爲しならん、妾のお氣に召さゞるにや……、と、又も深き物思ひに惱むなりき。

「姉ちやん、お母さんが姉ちやんを呼んで來いつて仰有つてよ。」

と、何氣無き聲に、呼はりし者ありたるに、はつと思ひて顧向けば、其處には、所夫の妹にて、今歳十一歳なる可愛盛りの、名は露子と云ふが。

黒目勝の愛苦しい、鈴を張つたるが如き眼を瞬つて、猶も此方を凝視めながら、

「お母さんが姉ちやんを呼んでらつしてよ。」と、反覆して、莞爾々々と笑む。

「はつ、お母さんが妾を……。」と、優しく言へる聲も、自ら顫ひを帶びて、穩かならぬ感の湧き起りたるなりしが、眞逆にお叱りなどのあるにてはなかるべし、自分にも親く會ひて、家事向きの事など聞かんものと、思ひ居る折柄なれば、

「爾んなら、一緒に行きませうれね。」と、楓葉の如き手に引かれて、廊下傳ひの歩調靜に、離房へとは伴はれつ。

（中）

「眞個に邪樣遠慮は爲無いが宜いよ。最う斯うなれば眞實の親子も同じだからられ、互に打解けて談さうじやないか、ずつと此方へお寄り、今お茶でも入れるからられ。」

頻りに沸る鐵瓶の湯を急須に移して、綾子の方に向き直りし、小丸髷の品宜く、温雅さうなる、五十ばかりの、何處となく氣高き女は、姑の政子なり。

綾子は唯最う畏つて、座敷の入口に額を疊に着けんばかりに、平伏して居たりしが、優しき言葉に飛び立つ嬉しさ。されど世間慣れざる故か、兎心の退きやらで、又しても壁に寄つて身を小さう。

「邪樣に他人行儀に爲られると、談さうと思つて居た事も、急に口へ出なくなるからられ、妾は這麼性質なんだから、姑、嫁と階級をつけて、儀式張るのが、大の嫌で、お互に睦う暮したら、それが何より結構だから、妾のやうな者でも、母親だと思つて打解けて貰つたら、妾も嬉しいかられ、慣れない間は何だか變だらうけれど、誰も居や爲無いのだし、何も爾う遠慮する事はありませんよ。」

眞の母に、胸騒ぎ爲る今日此頃、言葉の端にも情を籠めて、慰籍めらるゝに、亡き母君に邂逅ひたる如き思ひのして、恐ろしきやうなる念は何處へか失せ、面白き思ひも自と穰ぎ、况して姑御の意に順はんとのみ願ひ居るなれば、綾子は躊躇はず、

「では、御免遊ばして……。」と、輕く會釋して、漸と身を起して躙り寄れり。

露ちやんは、端然と座つた儘、默然として二人の顔を見較べて居たりしが、又莞爾々々と笑顔になり、綾子の膝に寄懸つて、

「妾、嬉しい事があつてよ。」と、袂の間より竊と覗いて、又俯向き、「這麼お優激しい姉ちやんが出來たんだもの、誰だつて嬉しいわ。」と、口の中に囁く。

油氣の無き振下髪の、漸く扇はしきを、綾子は少時恍惚として、瞳め居るなりき。

政子は急須の茶を三等分して、先づ一碗を綾子の前に置き、

「まア、一碗お飲りよ、これでも玉露なんだけど、久しう捉つて置いたもんだから、駄目だらうけれど——さア、露ちやんもお飲りよ。」と、露ちやんに薦めて、自分も一口啜れり。

續いて傍のビスケットの罐を取り、蓋を開けて盆に移し、三人の間に置きて、

「家事のお談もあるんだが、爾う急かなくつたつて、悠然で宜いのだから、まア今日は三人で茶話會よ、ほほつ、所が生憎、お菓子が這麼ものしか無いから、此菓子でも食べて談さうよ、不味いのだけど、遠慮爲無いでお撮みよ。——露ちやんは、姉さんが出來て、大層温順しくお爲だから、一番に上げませうよ。」

「だつて、學校で先生が爾う仰有つてよ、何を頂戴する時分でも、兄さんや姉ちやんより先に戴いては不可ませんて、この人は妾の姉ちやんだ

から、姉ちやんのお食りなさらない間は、妾可厭。」と、眞面目で云ふ。

「露ちやんは、眞個に宜い子で御座いますわね。」

「あら、姉ちやんは……。」と。鳥渡白眼んで微笑む。

折しものつそりと這入り來れるは、所天の岡野謙太郎なり。

「謙さんかね。」「兄さん。」と、二人は笑ふて迎へり。

綾子は無言で、慇懃に辭儀を爲る。

「馬鹿に靜かですな。」と、言葉少なに言ひつ、空座蒲團に啖乎と座を占めて、四顧を見廻し、「然と、默ふては什麼です、露ちやんも長つて居るれ、渡兄さんの尺八を取つて來て呉れないか、はゝ否？、姉さんを私が奪るちゆうのか、此奴は一番困つた、はつはゝゝゝ。」と、輕く笑ふ。

「妾が取つて參じませう、何處に……。」

口籠つて皆は言ひ得ず、所天の氣色を覗ひ乍ら、綾子は起たんとせり。

「いや宜し〳〵、それよりか一つ、尺八と箏の合奏を遣らうじや無いか、去年松島の宅で二人が奏つた時は、實に壯快だつたが、爾後は私も機會が無いので一度も聞かなかつた。今日は久振だし、隨分面白いだらう、幸お母さんも聞き度いつて、仰有て居た所だし、丁度宜い時だから是非奏らう。」

頗る快闊に言放つて、謙太郎は尺八を持ち來るべく起てり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日も日は、彼方の土藏の軒を掠めて、名殘の餘光眩しきまでに、離房の障子を射る頃。瀏喨たる笛の音は、嚠々たる箏の音と相和して起れり天地は寂として、この美妙の音樂に醉ひたる如し。

（下）

樂するより慮むが安しとは、古あかしき諺なれど、實に恐ろしき物の一つ數へたりし姑御の、眞實の親も及ばぬ程に、懇切に慰め給ひて、是まで悲しき月日の下に、泣き明し泣き暮し、美はしき花に、さやけき月に、折に觸れては、自が身の幸薄きを託ち、天を仰いでは運命の神を怨みつ。學友の雙親に愛でらるゝを見るにつけ、妾も父君の在さば、物見遊山にも連れられしならんに、母君の在さば、麗はしき衣服も纏ひたるならんになどゝ、時ならぬ時雨に、袖を濕せし身の、什麼に嬉しく樂しき事よ。昔て夢破られて睡り得ざりし夜半、未來の空想を胸に描いて、假令學は淺く、財寶はなくとも、情てふ涙裕に、熱き血の循環りて、我が此の果敢なき身にも同情し、已が天職に安んじて、浮世の狀態は日々に移り行くとも、眞の愛情は何時の世までも變らじと、誓ふべき程の人を、所天と賴み、理想の家庭を作りたらんには、甚麼に樂しき事なるらんと、思ひし事も幾度なりしか、さるをかゝる儚き思ひの空事ならで、いにし空想にも優りつる、所天に侍づき、情ある姑御に事へ、賢しき妹

命さへ得て、陥穽なる径路を辿りつゝありしが、俄に希望の光輝く坦道に導かれし如く、際涯なき砂濱に彷徨ひし胡蝶の、蜜多き花に有付きたらんが如き思ひして、軈ては玉と紛ふ愛しき子をも産けてなどゝ、最早豐頰なる小兒の顔の、寫眞を見るが如く眼前に顯はれて、未だ秋ながら、綾子の胸には、春風の吹き渡りて、心も自ら浮立つなりき。

熱睡せる所天の顔にも、希望の色見ゆて、如何に愉快き夢路に入り給ふらん。又しても思ひ出さるゝは、亡き父君よ、母君よ、妾が今の幸福を、草葉の陰に什麼に喜び給ふらん。あゝ、今も生永らへて、世に在したらんには……

綾子は、有繋に年少き女氣の、萬感交々、湧き起つて、明日に旅立つ、新婚旅行の事までも思ひ浮べつ。夜は更けたるらし、木の葉の落つる音も、今夜は樂しき私語かとぞ聞かるゝ。

（完）

# 船うつ浪

東京　菊野花子

## 上

「貴郎、今度がその土々呂港なんですか」

今し方大分縣は佐伯灣を拔錨した富士川丸の上等室の客は、新婚旅行とも見ゆる男女の二人、女は斯う言つて男の顔を見上げた

十七、八、九でもあらうか、目鼻立の凛然とした、色白の面長、多い黒髪を大形の丸髷にして、髮のほつれが三五本頰に搦れて居る、撫で肩の高いスラリとした身體に糸織の小袖、繻珍の丸帶、上から羽被つた黄八丈の寄生羽織、まだ何處やらに小供氣の失せぬ樣な

男は彼れ是れ廿二三、奇麗に髮を掻き別けた高襟流、川獺襟の外套に包まれて、寒さうに暖爐近く寄り添うて居る、が、何か思案に餘つて居るのか、首傾けたまゝ答がなかつた。

「れ—貴郎、土々呂は今度でせう」

稍高い聲だつたので、男はハッと氣付いたらしく忙てゝ女を見やつたが、能言葉は聞き取れなかつたかして

「濱さん、何とか言つたのか」

濱子と呼ばれたのは、ホヽと笑つて

「いやですよ貴郎、私もう二度聞きましたのですわ、今度が土々呂でせうつて…………でも貴郎、何か一心に考へて居らつしやつたのですもの、何かお氣にかゝることでもあるのですか。」

濱子は何氣なしに、こう言つたが、何を感じたのか、ぶる〳〵と慄うて、いとゞ不安の色を示した。

「サア………醉うだつたのか、僕は些とも知らなかつたのだ、どうも失敬した。左樣さ今度が土々呂さ、もう四五時間の内だ、入港するのだ土々呂………」「さう嬉しがられ、すると皆なお迎ひに入らしつてよせうか」濱子の手はいつかホツレを掻き上げて居る、

「あゝ多分來てゝ呉れるだらうとは思ふのだが、併し田舍の者は氣が利かぬものだからな、或は來て居れないかも知れぬが………でも濱さん氣を惡くして呉れては困まるよ」濱子は急に改まつて

「氣を惡くするなんて私………平原さん、私其樣女ではありませんよ」

怨むかの樣に、濱子の眼は男を射たが、男―平原は思案に沈んで居て一向に氣付かぬ樣子である。

　濱子は、又もや不安さうに、つツと寄つて平原の膝に手をついて「貴郎、貴郎どうかなすつて」

男は、又しても　ハツと驚いて「いや、如何もしはせぬのさ。な―に一寸考へることがあつたものだから」

濱子は猶更不安さうに「考へることつて何んですか、貴郎聞かして頂戴な、」

平原は、迷惑さうである「いや濱さんに話すのが、どうも………」

「なぜ………さうでせう、私などにはどうせ」濱子は一寸拗れて見せた。

「さう怒りつぽくては困まるね、しかし、どうせ一度は話さればならぬことだし、話さう………斷然話さう、話たら濱さんは屹度怒るだらうな、屹度僕を怨むだらうな、どんなにか」

「何をですか、私決して怨んだり、怒つたりなんぞ………い―へ眞正ですよ、どんなことでも貴郎のことですもの」

船は、いつしか日向灘にかゝつて居る、濱音高く船體を打つて、船の揺ぐ毎に身も共に揺ぐ、平原は固く濱子の身體を抱ひて

「そんなら濱さんは、僕の身の上に就てだれ、どんなことがあつても、決して愛想を盡かすなんて言ふやうなことはないですな」

「ありませんとも、どんなことがありませうとも私の身體は最早貴郎に委かしたのではありませんか………が………貴郎もですか？」

今度は濱子も同じ樣なことを繰り返した、

「無論です、では、そこで僕は今迄濱さんに隱して居た僕の身の上………どうせ、もう後二三時間で知れることだから話すが、實は僕は濱さん、僕は普通の人から卑しめられて居る、所謂新平民の身分なのですよ、」「エ、ツ」

風さへ、いつか募れて來て、濱の音益々高く、二人の聲もいつしか濱に消れたのである。

下

「濱さんが、さう泣いて悔むのは尤もだ、併し僕が今迄身分を隱して居て、途に濱さんを斯う言ふことにしたのは大ひに譯があるのです、濱さん僕は新平民だからと言つて同じ人間、決して自分に愧づる所はないものと思つては居ますけれど、現に角社會！所謂普通の人から擯斥されて居る吾々、什麼かして一度此弊を破らなければならぬ、それには什麼しても其普通の人です、それと交際もし結婚もして、次第々々に進む樣にし

なければならぬ、さうしたならば、何時かは知らず吾々社會も總ての社會と相往來することが出來る樣になるであらうと、手始めに僕が上京したのです、で、遂に涙さん、貴女と結婚する樣になつたのです、併し此、涙さんと僕との間の結婚は決して啻に、其爲許りではなかつた、能んば涙さんがだ、吾々と同じ身分……まあ同じ身分としてもだ、到底離るべからざる愛からの戀であるのだ、それはそれとして、併し正當の婚禮では身の上を知らるゝ憂があると思うて、教會に出入りして居るのを幸ひ、神の御前に契を立てやうと、涙さんに申込んだのです、所が涙さんも直に夫を御承知して下すつたので滯りなく式も終へたのです、僕は幾度かそれを打明けて〳〵とは思つたのですが、もし其場合直に見捨てらるゝ樣なことがあつてはと思ひ返して、遂に今日まで苦しい思ひに煩へて居たのです、ねー涙さん、斯う打明けて見ますると、貴女は餘程僕を汚はしい奴だ酷い奴だとお思ひなさるかはしれませぬが、人は決して身分によつて、兎や角う論ずべき者ではないかと思ひますれ、新平民だからと言つて左程擯斥すべきものではなからうかと思ひますれ、御覽なさい、世の中には隨分立派の肩書を持つて居てさへ、裏面には言はれぬ程汚らはしい罪惡を持つて居る人もあるではありませんか、僕が貴女を僞り、僕自身を詐つて此樣とにしたのも、罪は罪かも知れませぬが併し、涙さんがあの時の言葉、あの言葉の樣に實際僕を愛して居て下さつたとならば、僕も涙さんを愛してる相互の愛は決して身分の如何に因て動くものではなからうかと思ひますれ、涙さん僕は斷言する、僕は其事の他に於ては決して天に恥ぢる樣な行爲はないのです、僕は僕の出來得る限り涙さんを愛します、ねー涙さん、貴女容して下さるですか、エ涙さん………」

宥める樣に、すかす樣に、訴ふる樣に、熱心に說ひて涙子の手を固く取つたが、面はゆげに俯首むいて仕舞つたのである。

女は、はふり落る涙を湧く程に落つる程に中巾に拭いて居たが、やう〳〵に面を上げた

「平原さん、惡いとは出來ぬものですれ、天の神樣は僞には矢張僞を以て報いなさるものでせうか？」

「或は左樣でせう、併し僕の僞………其僞を涙さんが若し容してさへ下されば、或は否と言ふことも出來ますれ、僕は飽まで謝します、けれども涙さん、新平民と言つたつて同じ人です、僕はさうまで擯斥すべきものではないかと思ひますれ」

「私もさう思ひますの、けれども平原さん、神樣は全く僞には僞を以て報いなさるものでせうよ、と申すのは實は私の身の上に就てゞ厶います」

「貴女がどうかしましたか」平原は不審さう

「ハイ私も全く僞の………」「貴女が僞言、涙さん貴女が………貴女にも僞がありますとは………」涙子は決心の色を示して、今は却々わるびれない

「ハイ、私、全く僞の子でございました、何を隱しませう、私も實は其の、新平民なのでございます」「エーッ」

「さあ、私も貴郎と略同じ樣な主義は持つて居ましたが、詰り私は私一人でも社會の人と交際したいと考へまして上京したのでございます、偶然して品性の高い貴郎と遂は此樣とになりまして、私は實に心に誇つて居たのでございました、教會の婚禮、智貴郎と同じ思ひで………平原さん、して見ますると吾々社會は、矢張りそれ丈に出來て居るのでございませうか？」

第參卷 第拾五號

玉 お ち わ

狂ひに狂ふ日向灘の怒濤は、今しも凄まじき勢をもて、富士川丸の脇腹に砕けよとばかり打つけた、船に付着たる汚？を洗ひ清むべく公であらうか？それとも汚れならぬ汚に煩ゆる人々を天國に誘ふべく神の教の御使ではあろまいか？（終）

（一八四）

## 未掲載秀逸の部

麴町 木内せい子
靜岡 山下親子
茨城 八千代子
神奈川 吉田喜代
河内 秋山つゆ
濱松 新泉子
渡島 二葉女史
なみ子
横濱 岩田佐保
弘野 恩田玉圖
大阪 ひさかた
足尾 山口すみ
山口 渡邊千代子
但馬 阿岐の舍
芝 小川狂花
理子女史
前橋 岩田ふみ子
白ゆり

▲愛の紀念 ▲うりの花 ▲奇遇 ▲かた庇 ▲跡乙女 ▲浮世の旅 ▲薄命の花 ▲蘇生 ▲ちる花 ▲秋ぐもり ▲自ばら ▲車の撤 ▲一葉の寫兵 ▲夢の間 ▲華殿の瀧 ▲繼母 ▲花子 ▲埋木

麻布 よし子
島田マス
京都 愛濱女史
尾張 水谷とし子
德島 雙池園
丹波 立花女史
滋賀 至谷靜子
兵庫 福岡よね
みづ子
下野 神山美代子
[illegible]攝 川島隆子
寺本濱子
小石川 岡みち子
大阪 横山紅涙
水戸 高橋茂子
畑玉女史
秋田 浦井まつ子
鹽江 福意笹舟

▲濡衣 ▲村娘 ▲燈籠山 ▲嘶原の月 ▲蔦かづら ▲夕時雨 ▲若夫婦 ▲五年間の忍耐 ▲涙 ▲女の道 ▲寫眞狂 ▲玉の緒 ▲ほとゝぎす ▲かたみの小袖 ▲うらみ ▲みだれ菊 ▲夜の雪 ▲纖村の敎師

# 家庭日記

上總 田中睦子

九月六日火曜日、工場の笛音に驚き起床す、空はくまなく晴れ渡り吹く涼風もいと心地よし父上は珍しくも、はだしとなり給ひて菊の手入に餘念もなし、朝げ終りて妾は解物す、姉上は、まれなる天氣なればとて、張物なさる、折から東京なる伯父上来ろ、お土産にとて利一には靴を給はろ、妾と姉上には、食道樂の本を給はろ、いとも嬉く、午後二時と云ふに、利一は學校より歸り來ろやいなや、勢ひよくも伯父さん今日は、母上のお土產に靴を給はりしよといへば早くゝ出して嬉さに座敷の内も厭ひなく穿ちて僕は此度の天長節には、洋服にこの靴をはくのだ嬉ひなと一人喜びおれり、夜は皆々伯父上をかこみて都の水害のお話しいつも早寢なる利一の此夜に限り靴を出し見たり、父上の膝によりたり目を圓し居ぬ、十二時と云ふに一同寢に就く、本日の來信二　發信一

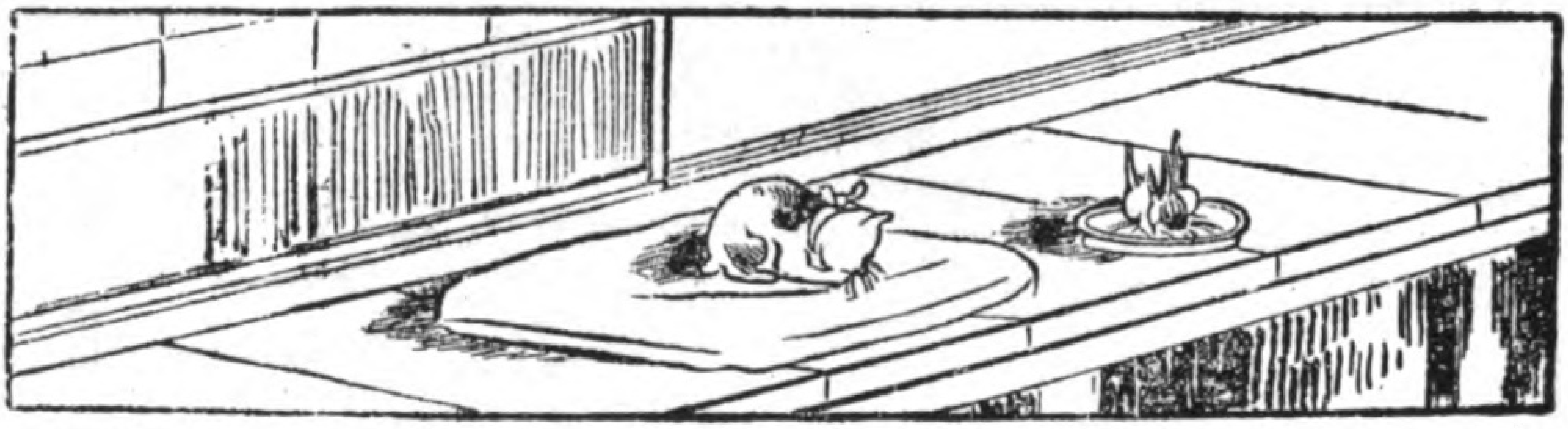
買ひ物　魚四十二錢、豆腐三錢、半紙十帖三十八錢、しやぼん十八錢　合計一圓〇一錢也

朝　茄子と菌汁　香物

晝　玉子燒ねびの　煮付香の物

夜　豆腐汁鰹の刺身　昆布煮付

九月七日水曜日晴五時起床、朝げすまして、下女と共に後の畑に甘藷を堀に行く、本年は無難故か例年に比較しいと大きくて澤山なりぬ、下女は己が植へし爲めならんなどはこり面



なり、歸りて母上の胴着裁縫す折から母上の年とりつれば綿ふくらやかに入れて給へと申さるゝに今更母上の妾等兄弟のために種々御心配あらせられて、かくも老せ給ひしかと思へば、日頃の不孝思ひ出されてやる瀨なく、裁ち縫ひするも打ちわすれ、しばし涙にくれぬ、

午後兄上は、利一を連れ給ひて菌とりにと行き給ふ、一時といふにまちに、待ちたろ、女學世界來ろ、先づ第一に婦女雜誌貴婦人の嗜好と中々に面白く時のうつろも知らで讀入ぬ、日暮頃かひくしくも二十餘を小笹に通して持ち歸りぬ、つたなくも妾料理す、兄上のお賞遊さろ本日の來信三　發信二

買物、雞七百目三十八錢五厘、細筆二本六錢、このしろ十魚二十錢、天竺五尺四十錢　合計一圓〇四錢五厘也

朝　すまし汁　小玉子　香の物

晝　このしろの鹽燒　福神漬

夜　藤豆の汁　雞肉　松茵

美濃　たみ子

十一六日晴五時起床顔を清め例の如く　太廟皇都祖先神佛を拜し座敷を掃除し佛前の花を供へかへ六時朝げしたゝめ布團を干し湯を使ひ髮をなでつけて後弟の袷に縫ひ上げをなす倉へ行き弟の外套を出し來り又ヅボン下足袋等取り揃へ大分寒むくなりし故明日にも大垣へ送らばやと其用意をなす十一時午飯を食し國雄と遊び居しに待ちいし女學世界來れり國雄は走りて姉さん御本が來ましたよ早う學校生

徒見せてよと云ひて持ち來ることたびは女學生の口繪はなきかと聞けば女生は無くて驪馬の智惠の女神の立像にていとよく貴とし國雄の敬ひて佛樣じや〳〵と云ひて拜むもをかし其他室內裝飾泰西風景等いと奇麗に見受たり記事は夜の樂とし文函へ納め置き國雄の綿入を縫ふ三時仕事を片付け布團を取り込みて後箏曲を温へ六時一同夕げしたゝめ下女共と內の寫眞を見る八時風呂に入り上りてより今日來し女學世界取り出し第一に才媛詞藻を見るにうれしや御情を以て秀逸の部に出し下されたり其れより婦女雜觀貴夫人の嗜好人を遣ふ秘訣家政二十四時季節料理家政要訣等いつも〳〵うれしく時の過ぐるも知らで讀む中に時計は早や十一時を報じたれば日記を認め急ぎて床に入る今日の料理は

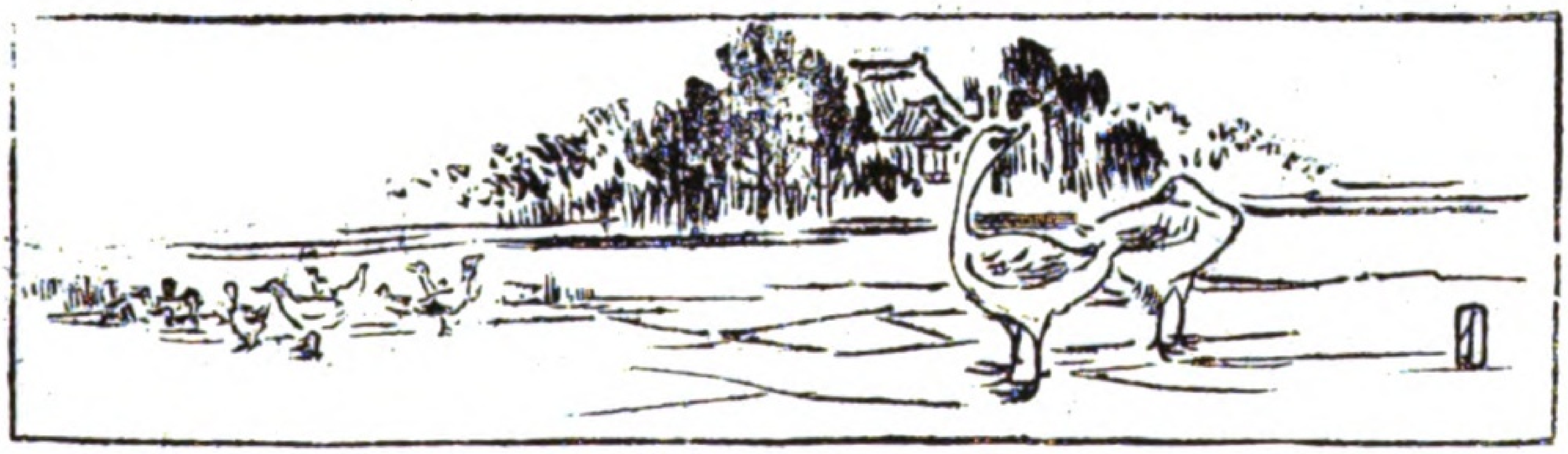
朝　蒟蒻　香の物

晝　香魚の田樂　豆腐のくず煮　香の物

夕　いんげんと芋の煮付、玉子燒、椎茸と干海老の菓干

## 陸軍中尉の妻

先づ朝は四時半五時に起き(但し外外演習などにて早き時は二時三時に起る事もあり)洗面の後飯をたき其間に勝手許の掃除をなし良人を起す二時過ぎ朝食(夫の起床前從卒來りて今日の軍服靴等をそろへ彼是用事をなすし直にさゝろ)朝食大概(牛乳味噌汁煮豆香の物)等なり食事後夫は登營あとはぬぎすてし衣服など片付座敷を掃除し机上、床の間、などを整頓し食器を洗ひあけてのち洗濯物あれば洗濯をなし萬事片



付てのち新聞を見る(每朝新聞を見るが一ばん樂みなり爲らず日を通すなり)それよりは手紙を認め或は手袋靴下等編む十時半頁魚屋來りて大低每日八九錢位の者を買ふなり又一週に二度牛肉又は鳥肉を買ふ事あり夫の晝食は隊內にて料理の辨當を取る故別に世話はなし十一時半頃自分一人淋しく食事をなし后後は友人の宅へ參りいろ〳〵話をなすか又は宅にて縫物裁縫をなす事もあり三時前はゞ夕食の仕度をなし置きて入浴に行き歸りてよりは責たりやいたりごてごてなし居る內に半時半か五時頃になり良人歸宅直に夕食をなす夫は(酒はあまりたしまず煙草は五十本入白牡丹が大丹一月に十五六箱入るなり酒保にて取れば市中よりは少し安く一箱八錢なり)食後は洗ひ片付をなし翌朝の米をとき置き之にて全く今日の仕事もすみ安心なり(夕方又從卒來り服をたゝみ靴をみがき一時間ばかり書物などよみて歸る)夜は本をよむが樂みなれど女學世界の外に少年世界、なんな等とるばかりにて中々每夜はよみたらず熟練は大抵九時半か十時頃なり

女學世界は此節大層賑やかになりいつも面白く厘に婦女雜觀貴婦人の嗜好一日醫者、など其他人を遣ふ秘訣を見ては成程を思ひ科學にては今迄知らざりし草木の性質知り史傳文藝家事要訣家庭科學など自分如き無學者には別けて爲になる事多く每月の發行の待ち遠きふり秋期增刊花すゝたは殊に面白かりし(私の鄕里は田舍にて自分等の出る時分にはまだ女學校などはなく高等小學を卒業すれば直に裁縫を習ひかたわら活花など致せしばかり故誠に無學にておはづかし)

# 日本橋　志ら澤登代子

十月六日火曜日、五時起床す秋の空さわやかに晴れ渡りて風もなう小春日和のそれにゝていと長閑なり定まりし用おわりて昨日縫にぬひのこりし袷朝の内に仕立上り火のしなして仕舞ふ晝餉後京橋なる伯母様には近き内に御產なさるとの御事そ御が子の頭巾あみて御目にかけばやとあみ初むやかて出來上りしも久しうせざりし故いと不出來にて差し上ぐるも如何と思ひしに母上にはしたしき事とて寒さゝへしのぎ得れば結構なりとの事仰せに從ひて何れ妾の伺ふ折りに持參せんと仕舞ひ置く三時頃にや出入の物より栗あまたもらひければさき頃より讀賣新聞掲載の簡便料理事にありし栗羊羹を作る手なれぬ事とて思ふやうにゆかず母上にすゝめ參らせしにいと風味よく出來たりとほめ給ふにこよなううれしかりし折りから日頃より我が家へ來る本屋の女學世界もち來しかばまちもうけし事とていそぎ見る折りしも夕ぐれにてせわしければ夜よみて樂まんと其まゝ書棚の上に置き夕餉後入浴してすぐさま取り出してよみもてゆく程に一つとして心をなぐさめざるはなく才媛簡簿一しほおもしろう相見ししらぬ間に時すぎて最早十一時うちたりと母上の御心づけにおどろきて臥戸に入る折りから今しも月蝕ありとの事にふと心づきまて打ちあくれば時しも鏡の如くすめる十六夜の月は左の方僅に圓滿をかき初むしばし見てあらんとせしも夜ふくるにつれいとねむさまさりければまどゝざして夢路に入る

十月十二日朝五時床を出づ朝より雨天例の如く手飼の鴨に餌をあたへ朝飯の仕度にいそがはしそれより二三の室を掃除すそ〱こ朝飯をすまし一寸買物に行く歸れは時計は早や十時なりいそぎ晝の食事の仕度にかゝるやり〱十一時半に仕あぐ皆々打ちそろひ晝飯を食すそれより自分の裁縫にかゝる四時半夕餉の仕度す六時夕飯後入湯すいつも好みの手風琴一時間余り稽古すそれより女學世界など開き貴婦人の嗜好家政二十四時などよみ上くれば時計は早や十時なうついそぎ日記つけて床に付く



| | | |
|---|---|---|
| 朝 | 晝 | 夕 |
| 味噌汁<br>梅ぼし | さしみ<br>やきもの<br>茄子づけ | 甘鯛汁<br>香のもの |

## 高知　竹村よし子

九月廿七日、晴、塒を出づる百鳥よりも早く起きんと心に期して、夜べ床に入しが、今朝夜鶏りの四時告ぐるにやはくも目さめたり、祖母君に知られぬ樣ひそかに衣かねて、床の下にしきありし「花すゝき」取出し燈火かきたてゝ讀み出しぬ、我はいつしか書中の人となりしなり、小西雅山の君の文しなくりかへし〱よむ中に障子漸く白みそめたり、我硯引寄せて短歌十首を新思潮に投じぬ、折しも窓ほそめに開けばあなた美しの東の空、日出んとするにやあらん、山の端一帶に黄金色となり漸く遠ざかるあたりはうすく、それより少女の裾摸樣なり、折しも下女の起き出しか臺所いとにぎわし、なりから巫埼ふ雀の鳴きしきるは我早起を賞するか否おのが塒出る事のおそかりしをくやむなるべし今日も例の通り殺板の前に座しぬ、祖母君の袷を始む夜にいれば父上の御酒召上る前にて、ねむたげなる樣の見ゆけるにや母上のとくやすめとの給ふに常よりも早ふふしどに入りぬ。

## 周防　中谷鳥羽子

廿二日、曇る、ふられよばいいが、お彼岸だから御佛だんをきれいに掃除する、後お母樣の髮を結で、自分は束髮になす、朝から待て居るに例の肴屋がこないので お母さまが心配なさるお氣の毒だけれども仕方がない、午後格さんをたいて

妹は花と水を持つて一處に祖母樣のお墓へ參る、路のそばにいろ〳〵な草花がたく山咲いて居る美くしい事、歸りに中村のおばさんに出逢て、格さんはお菓子をたく山貰た、喜んでたび〳〵おじぎをしたり「コレゴラン」をしたりいろ〳〵藝をするのが可愛らしいといはれた。

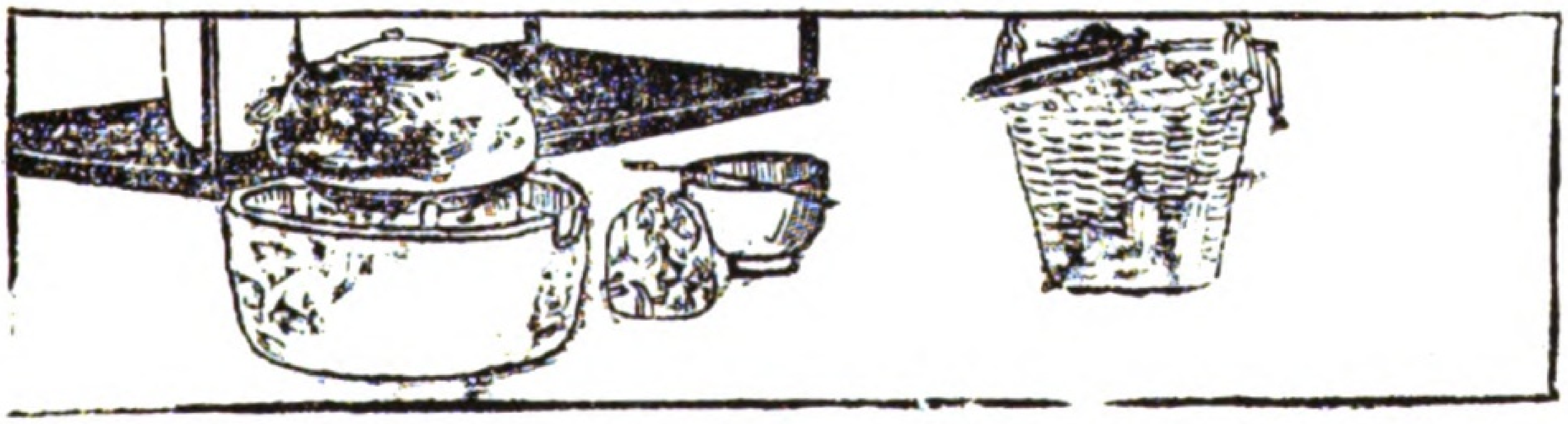
例の如く六時にお夕飯をすまし、夜は格さんの守をなす。案外に早くやすんだのでよろこんで花すゝきを讀む　河原芳子さんの後の撫子にはいよ〳〵愛服して再三よみかへす、後博文館から賞品に貰つた作文寶典を見る、散文の作例を二十四頁ほど十時四十分日記つけてやすむ　今日の調理

朝　茄子のからし漬　煮豆　こんにやくの煮〆
晝　牛肉にねぎ　豆腐と玉子のへらやき　白瓜卯籠漬
晩　香のもの　蓮根といんげんとの白和　めうが生酢

## 岡山　小山松枝

二十九日、園に咲き出でし白萩瓶にさゝまほしうて立出でたれど、盛りなる花のわづか二三枝ばかりなるを手折るも惜しき心地して藤袴にかふ風のまに〳〵　打ちなびく尾花誰を招くらむ、少し涼しくならばといひ給ひし叔父君のいまだ來まさぬに、如何なる御都合にかと今朝葉書出せしは後れたり、君は夕方音づれたまひぬ。既に夕食時なれば有合の鹽魚葱ゆば等にて間に合せつ、皆々樣御壯健にて殊に政子樣みつの樣御姙しんと承り、何よりうれし。久々の御物語に時をうつしあとをかたづけ終れば十時なり、日記をつけて寢につく。

三十日、ふと時計の音に夢破られて火を點し見れば四時なり、直に手水をつかひ釜の下を焚きつけ椎茸こんぶねぎなど調理す、已に五時なれど空曇りたれば眞暗なり。暫くして叔父君も起き出給ひ朝げを召し出立の用意をなし給ふ、其間に御辨當をしたゝむ、これよりわが方の用向にて瀨戸まで御迎し下さるなり、やう〳〵そともは明るくなりぬ。例のことゞもなしをへて裁縫にかゝる八時頃より雨降り出し一時はほどふる叔父君は今いづこ迄赴きたまふらん滊車の中なればよきになど打ちよりてうはさす、あまりの鬱陶しさに仕事もならず尤もこの頃は眼力少し衰へたれば書見も廢し攝養をなす、わびしさいはんかたなし、折から婦人界より賞品屆く。午後は雨さへ止みたるにうれしく晩を待つ、五時歸りましぬ、御迎に出づるや御氣の毒の樣なりあまりに延引せし故、と仰せられしには皆々失望しぬ、かがて御湯を參らせ夕食もすみたる頃又々一しきり雨ふる。



## 四ッ谷　島田美子

十月十二日、四時半起床七時前主人出勤後かたづけ終り八時頃白菊の花生け他に二重生一瓶都合二瓶生終り外に前日生け置きしゑにしたと粟だちの根しめ生け直さんと思ひし折から米屋のきにければいざとて米をあけ拂ひ渡し十時前日よりの編物つゝけ十一時半晝餉十二時頃家主西の都より歸りきませしとか留守などの禮きこゑいとめづらかなる土産物玉わろ一時過ぎ是れも前々よりの兄上の袷仕立三時過ぎゆろ〳〵とそこはかとなくかたづけをなし　四時室を掃除なし雜巾をかけなどし五時夕餉の支度をなす六時半過ぎ主人歸宅七時夕餉をなす主人風邪の心地すとてはやくいねぬ八時家庭日記をものし　九時過ぎかき終りあとかたづけをなし本日の日記ものし十時過寢に就きぬ扨本日の献立出費左の通り

出費　牛肉五錢　ねぎ二錢　富貴豆二錢　松竹三錢　豆腐一錢五厘　柿一錢　米屋拂一圓　〆金一圓十四錢五厘也

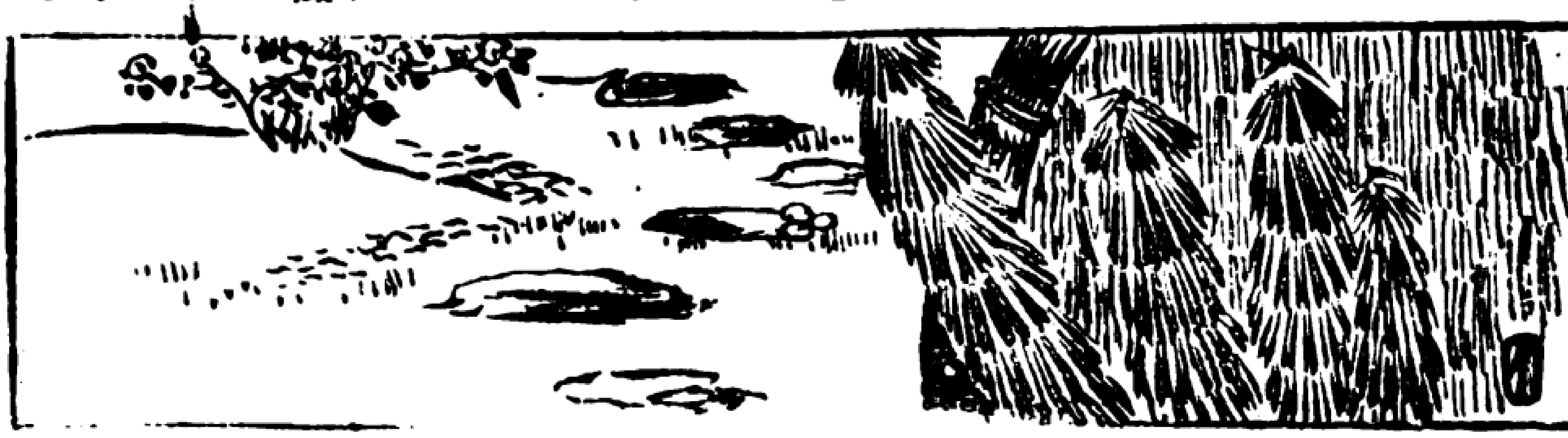
朝　味噌汁ねぎ　牛肉ねぎの煮付　香物なづけ
晝　富貴豆　香物

# 夕

枝竹栗豆腐のつゆ　香物　茄子
入なかべ
酢の物　柿の三杯　酒一合

## 奈 夏 そ れ が し

待ち詫し先きの日曜日はあやにく朝まだきより降り出でし小雨のいつ晴るべうも覺へず外出も物うくて徒然のあまり己が部屋にとぢ籠り物の本など繙きてよう〳〵半日を暮しつ、やがて晝餉したゝめし折り柄日頃親しき友垣の訪ひ來ませしにぞこよなう嬉しうて何くれとなくもてなしつ四方山の物語りする内友の云へるには何々山の麓に此の頃燃へ初めし紅葉の捨こがたき風情ありと人傳てに聞き待りぬ幸ひ空も晴れたれば田家の秋の景色を愛でつゝ見に行き給はずや妾が道しるべすべければとすゝめらるゝまゝに日頃の鬱氣はらさばやと四つの袂繕へしつゝ家を出でやがて町を離るれば見渡す限り田の面にはいと豊かに實りたる稻穂に朝より降りし雨の雫の宿りて重たげにうなだれたるに時々さと吹きくる風にさは〳〵と音して雫を落し伏し靡く樣輝く日の光りに照りあひてさながら黄金の波の漲るが如く田の畔には今を盛りと咲きほこれる野菊彼岸花などをのがじゝ影を下の小溝の水に映せるが折り〳〵吹きくる風になぶられて奇しくゆらめく影のいとおかしう。露しげき畔道を衣の裾濕しつゝやがて村の片はづれに來りぬ。只見れば賤が家に半ば花散りにし萩の露重たげなるなか〳〵に捨てがたき風趣あり、道の邊に朱のやうなる手して招ける薄に迎へられつゝ尚も半道餘り行く程に友なる人は立ち止まりつ、あれよとばかり彼方の山の麓を指し示すにぞ己れも其の方を打ち見やれば雜木交りにをちこち燃へ染めし紅葉のいみじう見事なるにさらば山の麓まで行きて見まさずやと云へば友は首を打ち振りつ否とよさらぬも道悪しきが上に今朝よりの雨にて我れ等のかよはき足にてはいと覺束ない間近くて見んよりも此處よりの眺め亦ひとしをならずやと云はるゝに實にもとうなづきつ草の露を拂ひて腰下し目の前の紅葉を眼に拙なき歌など咏み打ち興じつゝ我れを忘れて居ける程に秋の日足のいと短うて早や山の端に傾きけるにどなごりは盡きれど長居して家の人を煩はすも心元なし、さらばとばかり立ち上りつ元來し道に引きかへせば折り柄畑よりの歸りなるらん腰をあらはに裾からげたる少女あるはたくましげなる男の怪しげに頰かむりせるが聲高らかにひな歌うたひつゝ行き過ぐる樣さては夕餉や炊くらんおちこちの賤が伏せ家の棟に烟の低うたなびける、あるは光りまばゆき夕日の黄金色なす四方の田の面に照りあひて目もあやなる、實に一幅の繪にしても見まほしき美はしく靜けき田家の秋の景色に、己れも塵深き都よりは斯ばかり靜けき田舎に住ひて見ばやなど語らひつゝ畔道の千草を踏みしだきつゝやがて町のはずれにさしかゝれば彼の山の紅葉も次の日曜日には定めしひとしほの見頃なれば」と亦の日を契りつとある町角にて惜しき袂を別ち、靜けき田舎の樣に引きかへていとかしましき町中を獨り家路さして急ぎつゝやがて家に着きしは戸毎のともし火やう〳〵きらめきそめつ家の人々は早や夕餉したゝめし後なるにど餘り遊びの面白うて我れ知らず遲くなりし由人々に言ひ譯してひとり取り殘されし夕餉そこ〳〵に終へて、半日の散歩も又後々の思ひ出草にもとともし火の下だとく〳〵もかくなんかいしるしつ



# 窓外千里の記

鈴木げん

## はしがき

牢名主、角の隠居曰く何曰く何と内に幾多の階級あり賄賂秘密に公行せられ差入れ心附けの行届く親戚故舊あるもの又は所持金數多ある囚人は手を拱いて安然刑期を終へ、さらぬは所謂地獄の苦痛を身に占めて生きて世に出るを得ざるも稀ならざりしと傳ふる昔の獄舎に比ぶれば難有御代の大御光くまなくおよぶ今の世の監倉わけて未決監の有樣の事々しういひ立るにも足らざるべけれど目のあたり憂きにはよそに思ひかへ難かる人情のいとう脆きに況して四期折々のうつろひに付けつゝ歎きの色も數そひゆけば一度此淵に沈める幸なき人の袂に置く露のかはく間なきはたゞに世の常の秋の夕暮のみのたぐひならじ。

## 玉あられ



塀一重の彼方には追羽子の音紙鳶のひゞき新玉の春を壽ぐ人々の嬉しげなる聲も生憎にもれ聞えて、天地の氣はひも何となうをかしく、鳴く鳥の木傳ひ交す足付もそこはかと長閑に見ゆる元旦の朝明け、見聞く事々に付けつゝ今更の樣に世に殘せし、子等の成行、親の有樣、夫の上改りぬる年と共に、おのがじゝ新たに胸にせまり中にも犯せる罪ありて、兎ても角ても容易くは離れ難き此苦みに永くなやむべきは猶更、況してさり難き嫌疑の雲に鎖られ、干し敢ぬ濡衣いとゞしく涙にぬれて涸く間なきは、左なくも細き女心に、こゝ如何計りの、歎きなるらん、久し振にて家に歸れば、うから擧りて我無事を喜び珍らかに嬉しき年とりの箸とる間もなく、六時の撃柝に見はてぬ夢あやなく醒れば、今日もまた同じ獄屋のわび住居、世をあげて屠蘇汲みかはし雜煮祝ひて睦びあふ、此朝げに、二切の生餅を山海の珍味と受けて、膳にかへたる切れ〴〵の葦菰に向へと、思ひにとづる咽喉に何物か通せん、日頃は格子一重を鐵の、百重の栅と思ひ諦め堪えてこそ渡れ、一目浮世の春の光りに逢はまくほしきに、事ならば推破りても出ましを氷吹とく春風も、規則嚴しき看

守者の、戒護の眼耳ときも敢ぬに、濕りて送る二日三日、年の始のおほん祝ひに、雲の上の御睦びも思ひやり奉らる丶樂隊のひゞき、大内山の松風に吹送られて、又一入の物思ひぞかし、松の内はもだへくらして扨も猶夢の間に日數そひつゝ、漸く寒さも薄らぎ行く如月彌生の空晴れて、軒の若草萌えそめぬれど、處がら時に後れて咲出る庭もせの梅櫻、同じ草木も九重の御園生に生し立ちて、普き御惠みの露にぬる丶さへあるをと、そゞろ哀れに見やらる丶ぞかし、去年の春友よびかはし、上野向島の櫻狩、とり分けて趣深しと聞きはやせし、夕暮の花に分る丶入相の鐘も、こゝには唯、無常を悟るよすがとのみなりて、目に耳に悲しからぬかは。

四六の麥飯は三度とも口に暖かなれども、朝げの味噌汁夕の胡麻鹽、晝は塗はげ缺けはげたる、あはれ幾年をか經ぬらんと、思ひやらる丶古椀に、形計り盛れる野菜もの丶千篇一律、日曜毎の豚の汁を塲處なれたるは待ち焦るめれど、一道の臭氣は何物の上にもそひ來て、異樣の不快たとへ方なきに、なつかしき故舊の差入の衣類さへ、冬春の間は綿入二つ襦袢二つ他の何呉も之に準じて制限嚴しく暑さの程は僅かに膚おほふに足るの外は、心のまゝの許可なければ、ほと〳〵衣食住の望全く絶へて、ひたぶるに唯待たる丶は知人が外よりの面會と、裁判所より呼出しの前途のみにこそ。

荒々敷錠の音監の内外に響かせつゝ、看守者が引開る五寸格子の扉、善か惡か我か人かと、同房のものども冷汗握りて命を待てば、某といふ人來りて面會求め居るとなり、とく出で來よと應揚に、呼出され、たまさかに外面に出でゝ、日の御光にあひ奉る嬉しさのみもなみ〳〵ならぬに、絶て久敷知人の對面、あれもいひ是も聞えてと心に期しつゝ、竹の子笠に外目を忍びつ、導るゝまゝに行々て見れば、狹き箱樣の室の内に待間程なく、隔ての小まどを、係りの人が嚴かに、引明くる彼方に、思ひ寐の夢ならで、逢ひ見難かりしなつかしの人の面影、ハッと計りに轟く胸、先立ち出る

は千萬無量の思ひに溢るゝ涙の時雨、靑ざめし顔に散りかゝるは、入監以來油一滴注がず、櫛の齒だにたびたびは通さぬを、卒都婆の形に造りなせる、木片に、所謂牢屋卷に卷付けたる艶なき鬢髮、替ればかはる我樣に、彼方もとみに言の葉も出ず、湧返る胸の思ひをかくて、如何通じなんや、とくせずや時間移ると情しらぬ看守者の詞にいとゞ敷、氣遅れして、漸う一言辛く溢るゝは、明暮思ひ惱む被告事件に關する事、扨は規則に觸れたり、面會中止と引下ろさるゝ鐵の戶、いまは幽明處を隔てゝ又見るべからず、歸るさは屠所の羊のそれにも增して夜もすがら夢幻に、ありし俤を畫き盡して明けくるゝぞかし、身一つなるは扨もてそれ、こゝに先の頃時の司に執拗なる疑を被りし最愛の夫が奇禍に坐せられ輦轂の下なる監獄の未決室に三才の稚子を抱いて同じ歎きに沈みにしまゝ滿二年の年月なみ罪になやめる某の君が當時の樣を忍びつゝものせし記錄の一節にぞ、實に正直己れを欺かざる心より、其筋に奉れる血に泣く聲は籠りけらし、

此日面會のもの來れりとの事に、幼子を脊に例のごと立出れば、當番所の前に六七名の男子佇立めるがあり、何事にやあらんとすゞろ人懷かしき折からまして同じ苦しみに呻吟する夫の上に心置かれて、嚴重なる規則も打忘れつゝ、不圖其方を詠めしに夙夜忘れんとして得がたき、なつかしの後ろ姿に胸まづつぶるゝ同じ刹那

アレお父チャマが彼處にいらッちやるお父チャマ〳〵と脊にある幼子は發言しぬ、彼方にも此一聲や如何計り、腸を斷つ思ひありけん、否此聲をかかる場所にて、耳にせんとは、道に思ひもよらざるべき、昔物語りにもありげなる、大々慘事に英雄の心腸如何に亂れつらんかし、後ふり向かれし頃は急げ〳〵と、附そひの看守者が、嚴しき命に萬斛の淚を呑んで、數間あなたへ我行去りし後なりけん、人知れぬ此間の無限の消息、溢るゝ思ひを忍びつゝ、面會もそこ〳〵にて、再び先の場所に近きし我眼中、今は司獄官なく制則あらず、一

意唯此奇遇に感動の餘り、足も空に傍近く進みよりしに、大喝一聲

ナゼそこへ行くかナラヌゾ、との看守者の苛叱、千古萬古の感慨を胸にたゝへて立歸る脊には頑是なき幼子が、

おとうチャマが〳〵と兒心に傍り憚る涙聲に、獨りごちつゝ訴ふる、哀れさ悲しさ聞く此身よりも果てしなく彼處に立ちて責めらるゝ、夫の思ひや何とありけん。

## 其二

形計りの蚊帳の中に、一片の疊に人二人と定めて、夏冬分かぬ一枚の夜のもの、左なきだに換氣の法完全ならず、衛生の手當行屆かぬ、天井低き舊式の牢屋、鍛冶橋監獄未決女監の夏の夜は、あはれ海苔卷の鮓もじに荒布かけて、から蒸しに蒸し立てらるゝ氣色其儘まして夕立雲雨にもならで、中空に滯り、風は天の一隅にひそみはてゝ、露さへ置かぬ暑くるしさ、さり迚窓近くすべり出でゝ、涼むべき自由を得ず、とりて風よふ扇さへなきに、汗にそぼちて曉には達すなり、長き日盛りは、西南の窓より、室を通してさし入る燃る計りの日影の堪難きにも、心のまゝに身動きだに叶はねば、讀む書も中々心には入らず、看守者の烈しき目褄忍び〳〵に、慰め交す同房者は是や謀殺、故殺、放火、强盜拐は詐欺竊盜、もし世にありて聞かば身の毛も彌立つ程恐ろしく、淺間しき罪の重荷に、さらでも身の置處に打なやむ女達、思ひ餘りてやる瀬なき、其の苦しみを紛ればやと、官に請ひてならはぬ乍ら鼻緒の下縫ひ、なれしは柿色の獄衣の裁縫、利用して破獄の企なしたるものありとて、針は唯二本の外に渡されず、くり返し引しごく、手業に高き塵烟り、狹き室内にひた咽びにむせぶぞかし、夕暮に看守者が、逍がに憐れと一人前、二杓餘りの使ひ水給さるゝに、公けには、いといたく忍びて、打積る挨と瀧なす汗の香に、我身とも覺えぬ迄、汚れ果たる身の內を拭ひ去る嬉しさは、世にある頃の何事にかたとへん。

## 其三

風の音、虫の聲、いづれ断腸のたねならぬはなき、秋の小春の日和時、たま〳〵運動にとて引出され、二三間の塀側を、同室の人々列をなして、無意味にトポトポと打歩行く程は勿論、看守者の厳めしげに、見張り居て、一言だに無用の詞出されず、或は親子或は同胞室を隔てゝ籠めらるゝ、身のたま〳〵一歩外に出てゝは一目見たさの情欲抑へ難く、さしのぞく窓の破間に見交す顔の電光石火、かくとしも看守者の覺るあれば忽ち罰せられて、互に憂き目は遁れざりけり、夏は一週に二度、春冬は一度の外に入り難き、方三尺の湯桶の中に、三人の體をもみ合ひ押し合ふ、五分間の沐浴、石鹸なく洗粉なきに、或ものは堪へやらで、規則犯すと知りつゝ、麥飯の殘りを小布に包み、風呂番の看守の眼をくろめて、かつ〳〵洗ふ忙しさ之も又見付からば、厳しき處罰に逢ふが常なり。涼風の立つに付けつゝ、日頃の心遣ひもそひもて行きて、とり〴〵病にかゝるぞかし、朝毎に看守者に請へば、晝少し前に、監獄醫の訪ひ來て、役目計りの診察與ふれども、なげなしの情けに、様々の嘲罵いひそへて、悪々敷げに見捨つるもあり、裁判の道はか行かず永さは一年二年に渉る程に、あはれ不治の病にかゝり、身寃をも雪がで、幽囚の中に歸らぬ人となるもあり、身重うして、こゝに來り、月滿ち日足りて淺間敷中に安安と、玉の様なる男の子をさへ產み落すも少からず、或は一時の心得違ひに、犯せる罪にせめられつゝ、念念刻々良心の制裁に壓抑せられ、身を恨み世をはかなみし、果は深更人靜まり、看守が不寐の番のすきに、細帶を梁に投かけ、我と我身を殺すものもなからず、法の中には一時の無分別に、末遂に遁れ果つまじき、法の網をかひくゞり、破獄を思ひ立つものは、多くは皆、不淨の場所の板をはぎ、塀を破りて去るを例とす、かかるしれ業は多く、皆秋の夜永に起るぞかし。

### 其四

窓はくまなくさしつれど、軒の板戸の隙を多み、枕に散り入る吹雪の花、曉に見れば夜具の一端は、夜すがら吐きし我息のさ乍ら氷りて眞白にぞ、寐られぬ事の

幾夜經ぬべし、朝夕毎の點檢に看守長の訪れ來て、室内の人數を檢めらるゝに、身は床の上に頭を下げて、恭しく蹲るべし、圍爐裡の邊り埋火かきほぐしつゝ、樂しき昔語りにも、すきもる風の厭はるゝ、嚴寒三冬の朝ぼらけ雪霜は如何に深きもけふ日曜といはん限り、疊戸障子とり外して、くまなく床下の塵までも拂ひ清め、はては一人〳〵衣類のはし〴〵、足袋の底まで、殆んど裸體となさぬ計りに、係りの人の面前にて、看守者の取調ぶるぞかし、まして入監出監の當時は少しく疑はしと見らるれば、生の親の前さへ憚りし女の謹みも打破られて、辱しき憂目を被ることありとかや、蓋し中には、金錢は勿論、時計指環などの價貴きを盗みとりしを、今更に出し後れて、やる方なさと刑期の間隱しおほせて、出獄の後其儲ひに糊口せばやと、敢果なき事を空頼みに、如何はしき邊りに押し隱して、入監するものなからずとは、幾度もかゝるもの實地に扱ひし當路の人の物語りにてこそ、聞くだに忌はしき限ならずや。

數々の憂きになれつゝ、月日經る程に、けふか明日かと待わたる、被告人が胸の思ひの消ゆる間なしと知るやあらずや司人は心長閑に夏休み歳暮休暇ととり〴〵に、美人を擁し佳酒に醉ひて、納涼に、温泉に、月花をしたふて、あさり歩行く判官の双の手の中に運命を一任して、鬱々窮陰、送る日は、實に千秋の思ひなりけり。

裁判の日も漸うにして明日と定りぬれば、唯黑白を糺さるゝにすぎねど、何やらん嬉しさに堪へず、夜一夜寐もやらず待明して、所謂科人馬車に打乘せられてぞ裁判所へは送らるゝ也、窓のすきより詠むれば、仰ぐもかしこき大御城の、おほん梢のありしに増して、いやけ高く、御濠の松は千代の緑ます〳〵榮へて、げに難有き此大御世に、いつ迄かくはと道すがら幾入思ひ染まるゝなりけり、裁判所に於ける審問の前後の現狀を、目に見る樣にものしたる某の記錄の一節を左に掲げなん、

前畧　幼子の物心漸う辨ふる頃より、いたく物の

本昔物語見聞く事を喜び、分けて彼の釋迦八相倭文庫を特に愛し、悉達太子の夫人耶輸陀羅女、羅睺羅太子を推して下獄の處說き聞かするを、日比涙含みて聞居たりしが、今や其身直ちに其境遇に沈むに至りし哀れさ、いぢらしさ、一塲の慘憺語らんに人もなき心細さに、我か人かと泣沈むを、幼心に慰めて、

お母チヤヽ、何を御心配なさるの、御心配なさるとお父チヤマがお困りですよ、

今更ならねと賢しき詞に胸塞がるまゝに、

アヽ母が惡う御座いました、母が行屆かないものですから、アナタをこんな處へお入れ申して、召上る物も、おもちやも本もありません、どうかアナタ丈け先へお出でなすつて、余處の叔母さんの處へいつてお待下さい、といへば、

イヽエ參りません、アタシはどんな眞暗な處でもあなたと一所に參ります、ナゼお母さまこうなつたのでせうネへ、お父さまのいふ事をよくきいて

---

天子樣の御用に精出さなかつたからでチヨウか、お母チヤマ泣いてはいけません、耶輸陀羅姫の樣になりましたねへ、噫お母さま、早く夢になればいゝ、どうちて夢にならないのでちようねへ、

と果ては我膝にひし〳〵ととりすがりて、控處の一隅に、血に泣く親子の心も知らず、荒々敷廷丁の呼出しに、豫審廷に出でゝ見れば、一段高き處に机控へて、豫審判事は、眼をみ張り肩怒らせて、扇子片手に待構へし、傍へには書記にやわらん、料紙とり寄せ、嚴めしう立ならべり。

（中畧） 極端は極端と相近く、かつ爲めにする處ありし、警察の上告に、豫審判事の黑き眼鏡越しに、僞惡醜の最なるものと認定されて、一切の審問受る事なれば、有のまゝ答ふれば怒にふれ、答へずんば憂き目見せんとの恐喝に、身は如何なる責苦受るも夢更厭ふ處ならねど、大切なる我子が判官の一語一句に、過敏なる其知覺を刺擊さるゝ事の憐れさに、偏に心を配りしと、極端ても〳〵今更筆にも盡し難

き、恥しき事の數々、苟も職權あり、責任ある、豫審判事の言の葉として、いひ得べからざる、可驚、可厭、惡むべき質問に接して、答辯の限りならずと思ひ乍ら、餘りの事に唯一言、おのか面目保得る限りを答へしに、判官の心に如何に劇敷響きやしけん脊にある幼子指しつゝ、

アンナものは死んでもよし、放り出してしまへ、廷丁〳〵

と、左も悔しげに大聲にて、係りの若者呼出し、泣入る我子無理やりに、我脊より引離しつゝ、何處とも知らず、連れ行かれし後は、何と答へ、何と應對したりけん、自らも覺えずかし、實に目前の愛情に打覆はれし樣にて、今となりてはいひしらず耻しけれと、此間の懊惱こを無理なりといふ人あらば、我は甘んじて其誹りを受けまし。

夢心地にて調べ處を出で、足も空に彼處に立てる、廷丁のほとりに進みより、我子の行衞尋れば、遙かあなたの腰掛の下を指示しぬ、狂せん計り心亂れ人目も恥ず宙を飛んで、走りよりて見れば、痛ましや三才の幼子が、塵にまみれし机の下に蹲りて、泣寐入りに寐たる有樣、あるにもあられず、懷き上ぐゝれば、幼子が兩眼李の樣に腫れ塞りて、眼も當てられず、可愛や母の身を案じ渡りて、泣き盡したる涙は伏したる板敷の上に三寸四方計りも盛れ溜りて、流れもやらず、疲れ果てゝは中々に、母チャマの聲も出でばこそ、ひし〳〵とすがり付て、我顏しげしげと打守る樣、見る我はまして身もよもあられず、何の因果か、はたいつの世に、如何なる縄を結び置きて、此憂き歎きに母と子が、弄ばるゝものならんと、生ける空なく思ひわびてしが、云々

天地の間に活きとし活ける人心、誰かは我子可愛いと思はざらん、蝶よ花よと育てずもがな、五本の指のいづれを問はず、同じ情けにいつくましるゝそが中にも、末の子は分けて可愛しと昔よりいひ傳ふるに滿三才を限り監内に携帶をゆるさるゝ、官の制則は其以外に一日とて留め置くべからず、親戚故舊の誰彼、扨は

若し引取るべき人なければ、生木を無理に引裂く思ひ忍びても、あはれや區役所の手に托して、養育院に送らるべし、此泣別れのある毎に、監内唯泣きに泣くぞかし。

### 其五

生れ落るより、一切の事、常の嬰兒と異り、物心知り初ひるより、我筆にものさん事は如何はしけれど、一種の靈識を備へてければ、見る人毎に凡ならず、末頼母しきものゝよしいひはやしけるに、さなきも子に甘きは親の常、況して樫の實の一粒種とて、父の寵愛なみ〳〵ならず、荒き風にも當てざりしを、果報拙く、かゝる人世の極處に伴はれつるものよ、入監以來、事大小となく我爲めの指南車となり、よく訓めよく慰め起居ふるまひなみ〳〵ならぬに宛ら常の幼兒の樣には似るべくもあらず、:看守取締は勿論、同房の人々も、侮り難くいたはりて、他の人の子が、あるかなきかに、悲しく送る獄屋住居を、己が光りにあたりも離け、心靜かに二月の日數を、ここに暮しつる間、別けて其いふ處毎に讖言となりぬる平生に照らし、若し此確言の適中しなば、殘る我身を如何せんと、思ひ渡れど氣を取直し、

アナタがそう思召せば、仕方がありません、とうか早く外へお出になつて、お願ひですから一度丈け、面會にお出で下さいまし、といへば、

イヽエ面會には參りません、折角來てもお顏見る計りで、負ぶも抱ても出來ないんぢや、悲しくなつてしまうは、だから面會には來ないの、その替りお辨當はキット上げますよ、栗のきんとんと海老のお魚を上げますよ、アヽお母さまに別れるのか知らん、お母さまはなせ御用が早く濟まないのでせう、夢になればいゝのに、早く濟まして來て頂載よ、柿の實や梨の實をたんと取つて待〳〵ちてまちゆよ、嗚呼なんだか悲ちくなつた、

と斷然決心はし乍らも、別離の情に迫りつゝ、我胸にすがり寄り、其儘忍び音に泣寢入りし悲しきものの有樣に、返す〳〵も無情の世を歎きわび、如何に

成行我等の上と、心一つにまとひつゝ、只管救を天に希ふ心の中、かい付くるも涙の種ぞかし、其後折にふれ物によせて、在監中の事語り出るも、此時の有様のみはけふが日迄、我と我心くらまし、思ひ出ぬ樣語らぬ樣と、紛らし來りし一くだりを、けふ思はへず、筆染めてなん。

かくては果てじとやがて我心勵まし、氣を取直せど恩愛の情禁じ難く、今別れては何時かまた、逢ひ見ん事のあるべきと思へば、身を千々に裂かるゝつらさ、さりとてかゝる敏き子をかゝる處に一日も長く置くべきにあらず、とはいひ乍ら此末誰か手にか身丈伸ばされ教養されん、覺束なさと心細さに、せめて一時も多く手許に置かばやと燃る心をかつ靜めて日比好める、楠公の唱歌、又は何呉の物語し出れどけふのみは中々に喜ばず、

お母さま、永い夢ダチへ、何故早く覺ないんでチヨーチへ、夢になればお父さまもお母さまも、皆んな一所になられるのに、チへ、仕方がないなわと、サメ〲と打歎き、やがて特に好みて、中將姫が實母に死別の有樣を我に語らせて、聞入りしが、常にもまして其悲しみに同情し、かゝる事に夜を徹して、朝げの箸も手にとらず、とかくする程に果然面會の呼出しあり、けふを限りと思へば、一しほヒシと脊に負ひつゝ、行て見れば田舍に居ます、夫の兄上、扱は故舊の誰彼二人計り、迎へにとて來りてあり、何處に行くやと尋ねれば、

わたしは伯父さんの處へ參ります、

と神妙なる詞に夫と決して、一先づ監房に歸り來にけり、今更の樣に悲しさつらさ、別れともなき身にしみて、涙にくるゝ我に引かへ、幼心に決したる意志は金鐵の最早一滴の涙も落さず、手づから衣類手拭の、何呉を小さき風呂敷に押包み、迎への人を待つ有樣、前と異り更に悲哀の色にだに顯はさず、男耻かしき健氣のもの、行ひに、いとゞ張り裂く胸をし撫でつゝ、

左樣なら御機嫌よう、お祖母樣やお伯父さんのお

側で、大きくおなり下さいよ、母も御用をチヤッと済し、追付け後から参り升程に、安心して待まちして下さいよ、夫から、どうかお父さまに、一度御面會下さいませんか、

と涙を飲んでいひ出しに、可愛き顔に莞爾と笑みて、

アヽいやですよ、お顔計り見たとて詰まらないから、お父さまにもお母さまにも、決ちて御面會は致しません、

と話の内に女看守が、

サア坊やはいゝ事ねへ、表の伯父さんの處へ行くんだよと、促され、

ハイ今行きますよ、お母さま左様なら、

今は返す詞の如何わるべき、生れて以來とり分けて入監此方片時も、傍離さぬいとし子を、我より劃きて、内と外に、隔て果てにし獄屋の扉、怨めしや悲しやと、伸び上り、取すがりて、溢すは熱き血の涙鐵の錠解けもせば、懐き上げて今一度、顔見たや話したやと、狂氣の如く身をもがく、未練の母を返り見もせず、忘れもやらぬ白妙の牡丹の花のすり衣せまき袂を愛らしき顔に推し當て看守者に一々禮して負はれ行く、健氣の振舞、雄々敷姿、わはれ兩刀廢れて、武士道衰へ、御國の精氣とみに失せて、前途思ひやらるゝ世の樣に、歎き渡り、身を忘れ世を棄てゝ、一念靈途に上りしより、世の疑ひ其筋の誤解夫の一身の上に集り、此度の疑獄は起りつれ、年頃そひ參らせて、暮ると明くとの事々に訓戒されし身にわり乍ら、三才の稚子にも、劣りて取亂したる耻しさ、座に歸りて見回はせば、片手片足失ひたらん樣に、淋しさ悲しさやる瀬なく、とり直せし氣も更に亂れて、わはれ今よりは又誰と共に語り、誰によりてか大道を歩まん、孤獨の感こゝに始めて味ひそめて見渡せばわたりは皆恐ろしき罪の器の女子共中には名たゝる惡婆毒婦も交れゝと、人情の自然に動かされて、皆ひた泣きに聲をそろへてなきてわり中には九犯十犯の前科わる、世に恐ろしきしれもの

まで、人の上とも思はぬ迄、涙にくれて見ゆるにつけ、王侯種なしといひつる、一方には、世に毒婦必ずしも種あらし、導くに至善至眞の敎へを以てし、說くに人情の極秘を以てせば、大惡人も化しつべし今よりは心を勵まし、かゝる輩を一人だに、眞の悔悟の境には導かなんかな、さはいへ又一面には、世に恐ろしき此輩と、明暮伍する身と迄、成果し口惜しさ、淺間しさ御國に盡す丹誠の其道行とはかつ知り乍ら、先にはかつて九重の雲井にまでと思ひ上りし、昔の我いまや何處、觀し來れば、實に夢の世や、云々、

其六

例せば如此様々の歎きの中に幾多か呼び出され、且つ訓め且つ怒り、叱りつすかしつ、審査の曉、いよゝ公判となりぬれば、此度は判官一人陪席判官二人撿察官、一人花の様に押しならびて、豫審の調書口供書に照り合せつゝ、裁判あり、或は無罪の宣告の下に飛立歸るものもあり、思ひ設けぬ禍に、重き處刑を身に負ひつゝ、なく〳〵歸るも多けれども、家貧しうして控訴豫納金納め足らず、みす〳〵なき名に一生を穢すさへ少からず、今は此豫納金の制廢されしと聞けば、被告人の便思ひやるべし、

さるに付けても自ら己れを欺き、世をくらまし、黑きも白く飾り包む、假裝の社會に於て得る處は、同じく之れ假裝の智識、皮相の觀察の外ならず、一旦こゝに來りて見れば、一として露骨心髓の現れざるなく、いふ處爲す業一々皆眞に迫れる、浮世の落武者假裝舞臺の失脚者が遂に世の裝ひ盡すましきを悟れる懺悔ならねば、誤つてなまじ、人と世を、愚視せんとし、眞の悔悟のくり言のみ、何となれば、互に競ひ交も〳〵欺く盤渦の中にまじりてこそ、懺悔悛悔は容易の事ならね、上には上ある罪の集合處には、犯せる罪の大なるを耻づるよりも、勢ひ却て少なるを笑はるゝの傾きあるにぞ、なせる惡事にかさかけて、物語る迄も、露隱し紛らす處なければなり、されば若し戒護者、敎戒師に其人を得、監獄をして眞に、勸善懲惡の場所たらし

め且つや裁官精を抽んで、、審判に時月を費する、、はた眞正公平の決を與ふを得ば、罪囚は皆未決監に於て、太だ猛惡なる此種先輩の汚毒に感染せざる前に、本性の至美に歸り、二審三審の無用の手數なく、はた一旦犯されて惡に陷りしものも、良心の發奮するまにまに、直ちに以て、善道に歸着し既決檻倉は遂に無用に屬すべきを、三者未だ完全の域に達せず、復雜又忙殺、幼稚未發達の幾多の生靈、徒らに死せる法律の弄びものとなりて、出ては入り、去つては來り、反覆、往來して、はてしを知らず、中にも彼の下層社流の間には、終日夜を籠めて、奔勞に經營し、猶且つ妻子の口を糊すべからず、嬬子の上猶可なり、身一つの活き行くすべもとりかねて、見渡せば、一片の布一夜の宿り、一般の食すらも、凡そ報酬が勞働に伴はざる今の世に、金ならずして得べからざる一方には、よし口にこそ味ひなけれ、手下まで三度の食に外づるゝ事なく足繁き家主が耳に苦敷催促に心傷むる憂なくして、優に雨露を凌ぎ、身に着けて入り來しつゞれの衣は、其

筋に送られて清らかに洗ひなされし上に、猶も寒さ知らずの布子の恩借、なくて叶はぬ何一つにも、居ながら事かゝぬ樂天地、意志身體の自由を縛らるゝ外には、汗水絞る浮世の苦しみに似たる勞役なし、扨こそ監獄は彼等が郷關にも勝りてなつかしかるべく、二犯三犯其度毎に引上げらるゝを、自ら稱して里歸りとし甘ずるに至る、淺間しさよ而も凡そ律法に定められたる罪を犯すもの、數ある中に、區々の小科はおのづから刑に服するの期日も短く、隨て改悛の機を得る能はず一生を如上の無賴者となり終るなり、こゝに最も憐むべく悲しむべきは、彼の堂々たる審理の法廷に机を敲き足踏ならして、いはゞ威喝以て凡百の罪源を審判し、之を死せる一定の法文におし箝めて、其間多少の情と汲み狀と察せらるゝなきにしもあらねと、先に捕はれて牢獄の暗の底に沈みて以來つら〳〵思へば、一時の心得違ひに事平生の意志にそむき、自らも自らの處行に驚くの外なき、いはゞ一場の夢に似たる動作の爲めに、貴重なる人生の九年十年、甚しきは終生また

光明に逢ふべからさる彼の謀殺故殺の罪に至つては、身を諸共に沈めて、朝夕起臥を共にするもの丶外に、認むましき一道の罪源と眞個導善の機會あるを知るものあらし、而も之を認めて猶且如何ともし難きそいふ甲斐なけれ、

其七

凡そ罪惡の極は人を殺すにあり、勿論此れに伴ふの天の應報は之れなかるべからず、さりながら苟くも人か人を殺すといふに至る迄にはいふべからず止を得ざるよく〳〵の事情なくてやは、將た一塲無形の靈理なからんや、就中其天性幼うして自然と背き、惡なるものを以て其畢生の行爲の模型となる極奸邪曲のしれものもありといへば、彼等が自家の欲望を滿さん爲めに、他をあやめ人を害ふの類は此限りならぬと、まづ以て一般婦人、殺人罪の如きに至つては十中の八九は情に劇し、迫害に餘儀なくせられて、勢ひ遂に身を忘れ世を忘れ、我ならぬ我に化しはてたる見下の結果ならぬはなく、さらぬは天地の間に彷徨して長く其處と得るに苦しむ無形の惡氣逆靈に誘化せられて、不知不識其暴を代表するもの丶み、故に日常其實際に就きて委細に之を觀察すれば、此種大罪を犯せるもの程、其平生、行爲意志の上に絶對的反對の現象を見る之を要するに人をして如何にして此ものか丶る恐ろしき行爲に出しやに驚かしむるもの多し、故に一旦懲戒の街に入れば飜然として其自然に歸り、悔悟百出刻秒の間も心安きを得る能はず、苟くも其償ひをなさんが爲めには骨肉を削るも辭せざらんとす、若し其れ此機に乘し之を用ゐて國家に善用せば匹婦と雖とも世を益し時に利する少からじ、而も法は用捨なく彼等を一厨の極地に沈めて其自暴自棄の結果却て幾の惡をも繰返すに躊躇せざるに至らしむべし悲しい哉。其他彼の北越信甲の諸州に至つて、具さに其風俗を察するに有福圓滿の家庭といへども苟くも其家に要する數子の外は生る丶に從つて壓殺し或は身貧にして哺育に苦しみ、或は野合密交の曉になる、私生兒の如きは猶更、虫けらよりも容易げに、花の如き嬰兒の顏に濡紙をおし當

て、あるは現在生みの親の衣の袖に息の根とめて、屍は水口の流しの下に埋むを例とし、我も耻ぢず人も怪むことなく法令も之を禁するなかりしといふ、此恐ろしき古來の習俗になれたるものが、今や即ち事態苟くも疑はしと告げられんか、官は此山間の僻村無文無法の民を拘いて、たゞすに一定の專門語を以てす、昔て地頭村役人の面前に、叩頭しなれる、彼れ等の心中恐怖の餘り耳聾し眼昏めるの餘り、唯々盲從自ら穴を穿ちて、故殺の罪に陷り、資なきものは泣く〳〵其刑に服し、さらぬは控訴して見も知らぬ帝都の監倉に憂きを重ね二度審問に逢ふと雖とも、所謂難波の葦は伊勢の濱荻、方言は國によりて各異り時あつては辨疏尤も力むれとも、十分意志通せさるまに〳〵法は例によりて用捨なく其効力を斷行し、中には前裁判に受けたる刑にも増りて長き刑期に處せられ、家に幾多の煩惱の絆を止めつゝ、老は苦役の中に餘命を沒し、若きは盛りの時すぎて、一生を不幸に送るべし、慘もまた極らずや。

翻つて、此他幾多種類の在監者を日夕監督戒護する女看守稱して女監取締といふもの、果して眞に戒護者たるの名にそむくなきものあり得るか請ふ見よ地方の各監獄に至つては、女被告人の數も少きにより、既決女囚と合せ戒護するもの往々にしてこれありと雖とも、いま例を鍛冶橋監獄未決女監に於て專門に未決囚のみの事務に鞅掌する、取締の狀態にとり、委細に之を觀察し來れば寧ろ驚くべきものなからず、初め其筋の女監取締を募集するには、小學校卒業の資格ありて品行方正年齢三十歳以上のものといふにあり、而して其とる處の事務は、男監看守が或は搜撿係り或は食事係り自他一切の方面に各專門のものあり、苟くも直接戒護の任に當るものは、被告人十數人に對する一人の割合をもて、專心に一晝一夜の交代を以て勤務し、監內個個の性情、動作に付きつぶさに注目警誡して、其名の實を擧げるに足るべき一方には、女監は常に少くも五十、甚た多き時は百乃至百三四十の被告人に對し、制規は四人と定むれとも、病氣若くはおのづから、複雜

なる事故多かり勝なる婦人の常とて、平均常に一人の缺員なきは稀なり、此少數の取締りは、一日なべて三四人の出入檻者の衣服所持品の周密なる捜撿、在監者の食事、工作、入浴、晒掃の世話より始めて差入れ取捨て、監下げ、とて在監者の所持品の他の課に領收され居るを監内に取下げ願ひ、辨當、紙類の買物の世話病人あれば醫師に診察願ひの手續き、藥餌一切の注意に至るまで盡く自らするの傍ら、瞬間も彼等の動作に眼離すべからず、さらずは苟くも自家の意志身體の自由を得んが爲めに取締りの眼をぬすみ、隙を窺ふの外晝夜些の他意あるなき彼等は、乘じて何事を仕出すやも知るべからず、朝は八時より出でゝ終日此劇務に寸の息ふ間もあらず、夜は二時間の交代を以て不寢の番に非常を警めて曉に達せさるべからず、たとへ強壯なる男子の身と雖ども、長く堪えよく盡し得べきの限りならじ、ましてや男看守に勝る數等の心身の勞役に疲れはてゝ、うと〳〵とまどろむ隙に反則者分けて彼の破獄逃走等の事故起れは當直の取締は直に被告人として裁判所に召喚され職務懈怠のかどを以て相當の處罰を被るべし、且つや僅かに一身を支ゆるに過ぎざるの薄給を以て此任に當る、彼等の多くは不幸早く夫に別れし妻若くは失戀の極世を棄てはてし人ならずは頼るべき力の子に後れて、糊口の道も手一つにせさるべからさるものゝみ、已に人世の逆流に弄ばれて、心ひがみ氣欝す至高の信仰あるものならでいかで人を導き他を化するの餘裕を存せん、況んや日常生計の内の煩ひあるをや、更に況んや非尋常の劇務に齷齪汲々して、目前の事務に上官の非難を是れ恐るゝに於てをや心性の救護及ばざるのみかは忙はしさの紛れにはさらぬ事にも、所謂手の下の罪人に腹立ちの餘沫も飛ぶべく、自らの手數省かん爲めには取扱ひ自ら嚴酷に失する事もなからず、扨てこそ一度此處に沈むものは此懲戒の場所を寧ろ惡に進み不良を増すの處、一度びまがりし本性をいや横さまに走せて畢生浮ぶ瀬しらぬ不幸の淵となし果てなん、歸着する處果して誰か責ぞや。



今や監獄改良の道日に進み女監の制則は勿論取締の執務取扱ひ隨つてよろしきを得たりと雖ども猶且以上の憾なからず、誰か彼の道の爲め世の爲めに亡び行く靈の救濟に、惠の諸手さしのべつゝ身を共に朝暮其淵に投して、至高至大の働きを全ふせしと聞く、異邦の尊き婦人を學ぶ人ぞ思ふ世に慈善の事業多しと雖ども此れに勝るの美擧夫れ幾干かある、餓えたる幾多の生靈は實に其人を渴望して止まざるなり。

（完）

## 彙報

### ▲第三高等女學校落成式

空高く氣澄みたる麻布材木町の高臺を相し、昨春工を起したる東京府立第三高等女學校は、此程に至り工事の全部落成したるを以て、去十月三十日の吉辰即ち教育勅語御下賜の當月當日をトして、落成開校式を擧行せり、來賓には久保田文部大臣、千家東京府知事、東京府第三課長府會議員、視學官、市學務委員、及麻布、芝、赤阪の名譽職、學校長等の諸氏あり、此日朝來の雨天なりしにも拘らず、式は豫定の午前十時に始り、一同階上の講堂に集まるや、校長小林盈氏の開校式擧行の告旨あり、次で生徒一同の唱歌（君ヶ代）、校長の勅語奉讀、次で第三課長の同校建築に關する報告、千家府知事の式辭、形の如く終りて文部大臣の女子體育に關する一場の演說及び、祝辭朗讀あり、次に府會議長齋藤孝治氏の祝辭、校長の答辭、生徒總代の祝辭、開校式の唱歌等ありて式全く終了し、一同退場、夫より來賓に校舍敎室及成績品陳列物を遊覽せしめ、再び講堂に導き入れて、三四年生の唱歌、樂友社寄贈の音樂（ピアノ獨奏、連奏バイオリン合奏）等を聽かしめ、了つて別室に於て立食の饗應あり、頗ろ盛會なりし。

### ▲音樂遊戲協會附屬講習所

今夏八月音　遊戲の普及獎勵を計ろの目的にて設立せられたる音樂遊戲協會にては、附帶事業として先頃より音樂遊戲講習所を神田區錦町三丁目九番地に設置し、授業を開始したろが、顧ろ時勢の要求に適ひたると見へ、開設後幾ならずして八十餘名の講習生を收容するに至り、頓に校舍の狹隘を告ぐろの盛況を呈せしかば、神田區淡路町二丁目四番地に移轉し、同時に規模を擴張して、各科に講習生の補員募集をなし、斯道の敎養に盡すといへば、音樂遊戲科敎員志望者は勿論、一般研究志望者は此際入學を申込で可なり、尙ほ同會は名譽會長に伊澤修二氏を戴き、理事長は東京音樂學校敎授山田源一郎氏にして、其他の講師は孰も斯界に知名の人々なり、因に同講習所規則を摘記すれば左の如し。

一、學科　本會の學科を分ちて普通科高等科及び專修科の三科とし修業年限を各一ヶ年とす（但し專修科は此限にあらず）
普通科は小學校唱歌科遊戲科敎員高等科は中學程度の各學校音樂科遊戲科敎員養成の爲め專修科は特に志望の科目を專攻せんとする者の爲に設け、受驗科は東京音樂學校入學志望者の爲めに之を設く

一、課目　唱歌　樂器（オルガン　ヴアイオリン又はピアノ等）
樂理　和聲學（高等科生に限り之を課す）敎授法　遊戲舞踏
專修科生には唱歌樂器又は遊戲舞踏の內一科目若しくは數科目を任意撰擇せしむ

一、講習時間　每日午後三時半より五時半まで（土曜日は午後二時半より四時半まで）日曜日及び大祭日は休業のこと

一、講習料　普通科高等科及び受驗科は一ヶ月金壹圓五拾錢專修科は金壹圓以上金五圓以內にて之を定む、講習料は每月五日迄に前納のこと

## 新刊紹介

### ▲實用裁縫書

飯田吳服店裁縫部著
博文館發行

裁縫は裁ち方と積り方とが肝要ですが之は重に數理上の智識を要するものですから中々むづかしい併し普通の物は其法が一定してありますけれども複雜なものに至りましては中々工夫がいるのであツて其の巧拙によつて經濟上に關係する處が多いのです、此書は京都で有名な飯田吳服店の裁縫部主任小岩井鹽田の兩氏が實際に就て多年研究した處ろを蒐集して一書としたものであります、勿論裁縫に關する著述は世間に隨分多くあるが本書の主とする處は實用を旨とし文章の說明を省き一切の手續すべて圖解を以て說明がしてあるから如何なる初步の人でも一見して直ちに裁縫の要領を得る樣に恰も熟練な師匠が手を執つて敎へる如く極めて親切丁寧誠に裁縫上の好手引と謂ふべきであります。

### ▲女學生の理想

大阪岡崎書店發行
定價二十五錢

著者は警拔する筆法を以て屢々女性を諷刺するに長じたる正岡藝陽氏なり、此の篇果して現代の女學生をしてよく其平生を反省せしむるの力あるや否やを知らずと雖も兎に角誇榮心に飽ける女性刺激物として恰好の書なり。

### ▲明治御伽噺第七篇 新イソプ物語

博文館發行

豐富なる想像力も變化縱橫自在なる意匠とを以て各種の比喩談を尤も面白く說きなされたり滾々として水の流るゝが如く話料の無盡新にして竭くる處なきする日本の漣山人には西洋のイソツプの翁も跣足で逃げるべし。

# 次號記事豫告

（第參卷第拾六號十二月五日發行）



**每月五日發行**

**定價表**

| | |
|---|---|
| 一冊（紙數二百八頁）… | 金二十錢 |
| 四冊（三ヶ月分）……… | 前金七十五錢 |
| 八冊（半ヶ年分）……… | 前金一圓四十五錢 |
| 十六冊（一ヶ年分）……… | 前金二圓八十錢 |

內〔定刊數……十二冊 增刊四回……三、六、九、十一月價格同一

郵稅　一冊　二錢

**廣告料**

| | 二十四字詰一行 | 半頁（卅二行） | 一頁（六十四行） |
|---|---|---|---|
| 特等 | …… | …… | 割引三十三圓 |
| 一等 | 四十四錢 | 十四圓〇八錢 | 割引二十七圓 |
| 二等 | 三十六錢 | 十一圓五十二錢 | 割引二十二圓 |
| 三等 | 二十九錢 | 九圓二十八錢 | 割引十八圓 |

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

**注文規畧**

㋑本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
㋺御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
㋩郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
㋥總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ



明治卅六年十一月十五日發行（第參卷第拾五號）

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　合資會社博進社工場（東京市小石川區久堅町百〇八番地）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

# 發兌元　圖書再版

**第四版**
文學士久保天隨君著
四書新釋 **中庸**
全壹冊　正價四十錢　郵稅八錢

**第三版**
林學士奥田貞興君著
**森林學**
上製五十錢郵稅十錢　並製卅五錢郵稅八錢

**第十五版**
野崎左文君著
日本名勝地誌 **東海道**（上）
正價三十錢　郵稅六錢

**第十六版**
內藤耻叟君述
支那文學全書 **四書講義**（下）
正價二十五錢　郵稅八錢

**第三版**
橋本奇策君著
**合成金製造法**
全壹冊　正價四拾錢　郵稅六錢

---

平田勝馬君編　**黄海大海戰**　博文館藏版

（全壹冊正價九十錢郵稅二十錢）

征清の一役、陸軍に於ける平壤包圍攻擊と對峙して、最も壯快の觀を極めたるは、黄海大海戰とす。篇中記する處、一として當時戰に臨みし將校の直話に出でざるなく、其雷轟電激の狀、雲湧瀾翻の態、眞に讀者をして汗を握らしむ。今や時運は日露問題に朝野喧囂を極むるに當り本書を繙くは頗る快なるものあり戰史を愛讀せらるゝ諸君はまた一本を備へざるべからず。

---

**第六版**
大和田建樹君著
**新文林**
全壹冊　正價廿四錢　郵稅六錢

**第十二版**
佐々木信綱君校註
**土佐日記**
全壹冊　正價十錢　郵稅二錢

**第六版**
博文館編輯局校訂
**通俗三國誌**（上卷）
正價六十錢郵稅十六錢

**第九版**
理學士佐藤傳藏君著
中等教育 **日本地圖**
全冊壹　正價四十五錢郵稅八錢

萩野、落合、池邊三先生校註
日本文學全書（三） **源氏物語**
正價二十五錢　郵稅三錢

# 出來廣告　博文館

| 第四版 | 第三版 | 再版 | 再版 | 第十二版 |
|---|---|---|---|---|
| 博文館編輯局校訂 | 文學士幸田成友君著 | 足立栗園君著 | 大野酒竹君著 | 下田歌子女史著 |
| **馬琴傑作集** | **東洋歷史** | **通俗倫理學** | **元祿名家句集** | **家政學** |
| 全一册　正價六十錢　郵稅十六錢 | 上製五十錢　郵稅十錢　並製卅五錢郵稅八錢 | 全一册　正價二十五錢　郵稅八錢 | 全三册　正價三十錢　郵稅八錢 | （上卷）　正價三十錢　郵稅六錢 |

越山玉坡君譯　**ナイル海戰史**　博文館藏版

（全壹册賣價十錢郵稅六錢）

英國海軍大將子爵ネルソンは古今獨歩天下唯一の大海將なり大小百二十餘回の戰爭を經て前後四回の最大苦戰に會せり夫の歐洲海戰史上に於て至大至重の地歩を領せるトラファルガー、ナイル、コーペンセント、ヴインセントの四海戰げ即ち其經歷せる最大苦戰にして世上之を稱してネルソンの四大海戰と云ふ此四大海戰たる啻に英國の存亡に關係せるのみならず全歐の安危亦實に爲に繫れり不世出の才略を抱きて氣宇六合を并呑せる絶代の英雄ナポレオンも僅に一葦水を隔て、海上に孤立せる一島國を如何ともする能はざりし本者此四大海戰中のナイル海戰を叙して詳せり讀まん哉讀まん哉

| 第三版 | 第十二版 | | | |
|---|---|---|---|---|
| 竹村秋香君編 | 大和田建樹君著 | 大和田建樹君著巖谷一六君書 | 石川鴻齋君著 | 石川鴻齋君編 |
| **明治俳句** | **雪月花** | **明治女子書翰文** | **書法詳論** | **詩法詳論** |
| 全壹册　正價三十五錢　郵稅六錢 | 全壹册　正價三十五錢　郵稅六錢 | 全壹册　正價三十錢　郵稅四錢 | 全二册　正價四十錢　郵稅六錢 | 全二册　正價四十錢　郵稅六錢 |

# 出來廣告　博文館

關 徳君編
## 十八史畧字引大全
全二冊　正價三十錢　郵税六錢

鹽見文準君編
## 日本外史獨學講義
全四冊　正價五十錢　郵税八錢

森 昌作君編輯
## 文章軌範獨學講義
全四冊　正價五十錢　郵税十錢

第六版
井上敏夫君著
## 作文錦囊
全壹冊　正價三十五錢郵税六錢

第三版
國學院編纂
## 名文評釋
全壹冊　正價五十錢　郵税十錢

松井廣吉君著
## 伊太利獨立戰史
博文館藏版

（全壹冊價十錢郵税六錢）

歐洲第一の舊國も、末路振はず、久しくオットマン帝國の桎梏を受けしも、燦たる古史の精彩は絶滅人民を刺戟し、竟に英主ヴヰクトルエマニユエル帝、名相マツヂニー、カブール、猛將ガルバルヂー等を下して、伊太利の統一再興を成就せしめたり、是れ近世史上第一の快事として名君賢相の遭遇風雲蛟龍の會逢等、變化錯綜の妙を極め、實に人生の一大觀たり、啻だに戰史外交として無限の趣味あるのみに非ず、此の番之を一編の中に纏めて詳す所なし、讀むもの機運の妙、人力の大を悟りて識量至境に至るに庶幾らん。

市河清流君高井思明君校訂
## 字貫
全五冊（入帙）正價五圓卅錢小包八百匁

石川鴻齋君編
## 大玉篇
全二冊正價二圓六十錢小包四百匁

木村品太郎君編輯
## 會玉篇大全
全三冊正價二圓五十錢小包四百匁

第六版
佐々木弘綱君佐々木信綱君校註
## 日本歌學全書
（第八編）　正價二十五錢郵税六錢

第五版
森一兵君著
## 致富要訣
全壹冊　正價二十五錢郵税八錢

# 發兌元　圖書再版

| 第六版 | 第九版 | 第十版 | 第三版 | 第四版 |
|---|---|---|---|---|
| 下田歌子女史著<br>**母親の心得**<br>全壹册　正價三十錢　郵税八錢 | 橋本奇策君著<br>**寫眞術**<br>全壹册　正價十錢　郵税二錢 | 三浦暉信君著<br>**數學一萬題**<br>全壹册　正價四十錢　郵税八錢 | 工學士鳥居武君著<br>**電氣鍍金術**<br>全壹册　正價廿五錢　郵税四錢 | 石井研堂君著<br>**鐵道の卷**<br>全壹册　正價十五錢　郵税四錢 |

澁江保君著

## 波蘭衰亡戰史

博文館藏版

（全壹册　賣價拾錢　郵税六錢）

波蘭の衰亡は世界の一大慘劇なり。歐洲の文豪多く筆を茲に着け、美人の薄命、國士の慷慨を描きて讀者を消魂酸鼻せしむ。本書は之を正面より觀察して事實を直書したる正史にして、露帝ピートル、女帝カタリナの大望、普帝フレデリックの才略を首め、露、普、墺三國の詭謀權變を詳說し、志士コスシウスコが恢復の義兵を擧げしも、竟に擧國滅亡する迄の顛末を詳述せり。列國外交術の奇變、國家盛衰の因緣、歷々として掌上に指すべし、當今志士必讀の好歷史なり

| 第四版 | 第三版 | 再版 | | 第六版 |
|---|---|---|---|---|
| 醫學士近藤常次郎君著<br>**仰臥三年**<br>全壹册　正價卅五錢　郵税八錢 | 文學士大町桂月君著<br>**處世訓**<br>全壹册　正價廿五錢　郵税四錢 | 依緑軒主人著<br>**文明の大破壞**<br>全壹册　正價四十錢　郵税八錢 | 萩野、落合、池邊三先生校註<br>日本文學全書<br>**平家物語**<br>正價二十五錢　郵税三錢 | 農學士恩田鐵彌君著<br>**農學汎論**<br>上製五十錢郵税十錢並製卅五錢郵税八錢 |

# 出來廣告　博文館

**再版**
永機、柳涯兩宗匠校訂
**蕉門十哲集**
全壹冊　正價參拾錢　郵稅八錢

**第九版**
野口勝一君著
**書法自在**
全壹冊　正價貳拾五錢郵稅八錢

**第十一版**
樋口一葉女史著
**一葉全集**
全壹冊　正價四拾錢　郵稅八錢

**第十二版**
文學士大町桂月君著
**日露戰爭未來記**
全壹冊　正價拾八錢　郵稅四錢

**第三版**
內田不知庵君著
**社會百面相**
全壹冊　正價五拾五錢郵稅拾錢

---

文學士幸田成友君譯
## 十九世紀史
博文館藏版

（全壹冊正價五十錢郵稅十二錢）

學問の進步自由主義の發達學問應用の器械船舶鐵道等の發明實行を始め列國政體の變更社會の進度に至る迄僅々一百年間に於て至大の變化進步をなし世界を擧げて殆んど全く舊態を一換したるは實に十九世紀にあり故に十九世紀の歷史は最も趣味あり又最も利器あり最も變化ある好歷史にして人を啓發せしむべきもの甚だ多し

---

荻野、落合、池邊三先生校註
日本文學全書（五）**源氏物語**
正價貳拾五錢　郵稅參錢

**第十一版**
文學博士高山林次郎君著
**釋迦**
全壹冊　正價拾參錢　郵稅四錢

**第五版**
法學士笹川潔君著
**ビスマーク**
全壹冊　正價拾參錢　郵稅四錢

**第三版**
文學士大町桂月君著
**ハンニバル**
全壹冊　正價拾參錢　郵稅四錢

**再版**
法學士島田文之助君著
**ネルソン**
全壹冊　正價拾參錢　郵稅四錢

# 中學世界定期增刊

# 蘆風雁聲

十一月二十日發行

## 内容

中學世界の冬季增刊蘆風雁聲は來る二十日を以て出てんとす是れ本誌本年の最終增刊にして大に棹尾の活動を示し其資料の秀拔なる春季以來の增刊に比して數等の上にあり種目は懸賞の論文抒情文敍事文小説新体詩漢詩和歌俳句英獨文にして撰評は大町桂月巖谷小波外諸名士の手に成り入撰の作品百數十篇に上れり又全誌二百四十頁内約八十頁を割きて名流雜俎欄に宛て左の諸篇を收む

## 表口

**紙** 武内桂舟畫伯の斬新なる意匠に成るもの

**繪** 及篇中の挿畫は最も新奇なる資料を含む

正價金貳拾錢

郵稅金貳錢

## 附録

▲貴き血……巖谷小波

▲日本の名山……大町桂月

▲支那民族の特質……德谷豐之助

▲亡國の恨……田山花袋

▲銀斧……上村左川

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

女學世界定期增刊

# 玉あられ

每月一回五日發行

（明治卅參年拾貮月廿五日第三種郵便物認可）　第參卷第拾五號　（明治三十六年十一月十五日發行）



（定價金貮拾錢）

Vol. III.　（東京市小石川區久堅町百八番地　博進社工場印行）　No. XV.